

学戦都市アスタリスク 悲願花を越えて

8674

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無数の隕石が降り注ぐ大災害《インベルティア落星雨》。かつてない天変地異により国家は衰退、また技術力を持つ幾多もの企業が結集したことにより《統合企業財体》が形成される。

落星雨によってもたらされた未知の元素である《マ万応素》。それが結晶化した鉱石《マナダイト》。そしてその影響で誕生した新人類《ジュエネステラ星脈世代》。これらを活用し、財体はいつしか世界を統括する組織となっていた。

そんな財体が管理する水上学園都市《フエスタ六花》。ここでは星脈世代たちが己の願いを叶えるため、自らの全てをぶつけ合うエンターテイメント《フエスタ星武祭》が開かれていた。

期待、嘲笑、憧憬、嫉妬、尊敬、軽蔑、あらゆる欲望が渦巻くこの都市に、とある少年は惹かれた。いつかは自分も画面の奥のようになりたいと。これは、そんな少年が燃え尽きた後の物語。

前：灰燼の灯火 現：悲願花を越えて

目次

第零幕 彼岸喪失

終わりの始まり

役目

聖騎士たち

治りかけ

第一幕 紫獅邂逅

出会い

舞台の裏側

戦力外通告

掃き溜め

人形と公主と叢雲

事件

落差

始動

なぜなに!?アスタリスク 外伝 壱

第二幕 志怖反発

相方

理性と本能

表と裏

大会前夜

初戦

決起

理性による抑圧

どんでん返し

221 210 199 188 177 166 155 143 140 129 119 107 95 84 73 63 50 38 25 13 1

見え方	437
呼応	425
獣たち	414
反発	402
思索	390
孤児院	380
街並み	369
考え事	358
秋季休暇	346
第四幕 雪花枯朽	343
人物紹介：壺	331
前夜祭	319
閉幕	319
迷走	307
事件発生	295
届かぬ手	283
適応	270
失敗	258
抜け殻	246
第三幕 闘志欠落	242
なぜなに!?アスタリスク 外伝 弐	232
最後の一撃	232

第零幕 彼岸喪失

終わりの始まり

何も失いたくない。その一心で戦い続けてきた。

『僕が、君にチャンスをあげよう』

だが、身を削って自分を育ててくれた母はもういない。アスタリスクに行つたきり、最期を看取することも出来ぬまま、存在すらこの世から抹消されていた。

『その対価は、人生を滅茶苦茶にした者の正体……どうですか？』

とても信じられなかった。運命に裏切られた末に唯一残つた家族が、また何の意味もなく殺されるなんて。

『キミはそうしたいなら、わたしはそれに付き従うよ』

ああ、何故なんだ。一度でいい、たった一度でいいから、せめてもう一度だけ、俺を抱き締めてほしい。

『私が教えるのは銃の扱い方、使い方を決めるのは君だよ』

五年たった今でも忘れられない。華奢で、真っ白で、熱なんて無縁だと思える腕が、体の後ろに回って自分を優しく包んでくれる、あの感覚が。

『オメエ、ロクな人生送らねえだろうな』

弟がこんな姿を見たら、なんて言うだろう。あの頃はまだ無邪気

だったが、今であればその反動で邪気丸出しな牙を向けていたのだろうか。

『俺は……お前らが羨ましかったよ』

父は、俺が死んだら家族を守れるのはお前だけだと言っていた。だからこそ、くだらないことで死んだら許さないと、何度も何度も耳が痛くなるくらい聞かされた。

『……さようなら、お別れよ』

……家族がいなくなった今、俺は死ぬことも許されるのだろうか。

『——なあ……置いてかないでくれよ……俺を、一人にしないでくれよ……！』

それから数年。胸の内は、破裂することを許してくれなかった。

『オーフェリアアアアアアツツ！』

それなりの広さを誇る会場にて、青い光弾、万応素と星辰力の煌めき、そして年端もいかぬ十人の少年少女たちが交錯する。

『さて、膠着が続く《獅鷲星武祭》予選Aブロック決勝、チーム・エンフィールド対チーム・ですが、やはり《幽鬼の魔術師》の力は圧倒

的！ ダークホースと言われてきたチーム・エンフィールドも流石に万事休すか!?!』

ワイルドハント。伝承の繋がりを知らなければ、ガラードワースの掲げる高貴な精神とは掛け離れた十体ほどの亡霊騎士たちが、それぞれのメンバーに護衛の如く付き纏っている。

集団戦において、数の力というのはそれだけで驚異だ。人が多ければ単純に手数が増えるし、捨て駒も戦術に組み込める。

今回は守りを固めて追い詰める堅実な戦い方をされているが、一人を囲んでタコ殴りにすることだって出来るだろう。

ともかく、それくらい数というのは重要だ。このチームと当たるとわかって対策は考えたが、これまたやりにくい。

「ああめんどくせえなあ！ 《フェスタ星武祭》はお化け屋敷じゃねえだろうがクソツッ！ 高潔とやらはどうしたよガラードワース！」

……ああ、やかましくて敵わない。拳銃や狙撃銃の音も聞こえてくるが、この人の声はそれよりもうるさいんじゃないだろうか。

「叫んでないで、こいつら抑えるのに意識向けろよ。俺人のカバーとか、苦手だからな？ 泣き付いてくんなよ」

「うっせえな、こいつら無駄に、かてえんだよ！ 骸骨みてえな見た目のくせによおー！」

「別に一人で突っ込みたいなら……、私たちもそれでいいですよ。ただ、もう少しの、辛抱です」

前衛中衛共に総動員で、じわじわと迫り来る前線を食い止めるが、それが崩れるのも時間の問題だ。

「はあー！」

ガードワースの生徒が振り下ろしてきた片手剣を逸らし、こちらも右手に持っていた槍を横風に校章を狙う。

しかしこれもまた幽鬼たちによって遮られ、決定打とはなり得ない。試合開始からずっとこんな調子なら、叫び散らかすのもまあ無理はないだろう。

いつそそのままやられてくれると嬉しいのだが……残念なことにそんな暇もない。何故なら、もうすぐ決着が着くからだ。

「今です！」

「りょーかいッ！」

その少女の合図と共に、盤面の風向きは変わり始めた。

「ッ、なんだ!？」

まず、こちらを追い詰めていた四人の騎士たちの動きが、見えない糸に縫い付けられたような不自然な形で止まる。

一歩ずつでも前へ進もうとしているが、それも虚しく全員その場に釘付けた。

それでもまだ亡霊騎士たちは残っているが、狙いはそこにこそある。

今、相手チームの後ろはガラ空き。例の魔術師ダナンテがチームリーダーである以上、ここで攻め込む他に勝ち筋はない。

さて、問題の攻め込み方だが、相手チーム四人が行動不能とはいえこちらも陣形を崩すのはまずい。何せ数の差はまだ倍もある。

四人の抑え役はその場ほとんどから動けないため、ここでやられてもしたら四人対十五人だ。冗談抜きでリンチにされてしまう。

乗り込むなら一人で、そんな晴れやかな役目を自分は請け負った。下準備は出来ている。

「準備はいいな？　いくぞ！」

その声と共に、直前に投げたハンマーに自分の身体が引き寄せられる。いつか見た《グラザインシーズ覇潰の血鎌》の重力操作とも違う、磁石のような引き寄せられる力。

そして自分がハンマーのほぼ真上に到達すると、その力はぷつりと切れて身体を放り投げられる。

これが、チーム・エンフィールドの魔術師の能力。それはすなわち、引力だ。

対象を二つ選び、それらを引き寄せ合う力で縫い付ける。地面結べば足止めに、武器と結べば必中の投擲物に、そして使い方によってはこのように人を飛ばすことだって出来る。

「…………クソツ、ルシャード！」

未だ行動不能な騎士たちの声が後ろから聞こえてくるが、どちらにせよもう間に合わない。ハンマーとは違う煌式武装の発動体を取り出し、いつでも起動出来るよう前方に構える。

しかし手の内を隠していたのは、相手側も同じだった。

「……ナメるな」

そう聞こえた言葉には、こちらを怯ませるほどの強い意志を感じた。単純な星辰力の量にも対抗出来るくらいに、そのイメージが自らを守る亡霊たちに現れているようで……

(……足りない)

だがそれだけだ。対抗出来るだけで、勝てるわけじゃない。今まで戦ってきたどんな魔女や魔術師にも劣らないが、勝るわけでもない。

だから何体で守ろうが、たかが一人の攻撃で隙が出来る。

「ルシヤード・ノイマン、バッジブローケン校章破損」

自チームの後衛が対角線から放った狙撃銃の光弾が、ガラードワースの秩序を表す光輪を模した校章を穿ち、破壊する。

骸骨騎士たちを統率する首魁、《ワイルドハント幽鬼の魔術師》。その粹に達するまでにどんな道筋を辿ってきたのか、それを知る由はない。

ただ一つだけ言えるのは、これではあの《エレンシユキーガル孤独の魔女》に拮抗することすら出来ないということ。

「どうだった永見、自慢の武器にぶん投げられんのは」

「控えめに言って、最悪です。……帰りますよ」

その事実には、何故か俺は安堵していた。

「ふうー……よく勝てたよなあさっきの。特に最後、てめえがしくじったらって思うと集中出来ねえたらありやしねえ」

「へえ、そりや心配か？ ツンギレマシマシの恭也がそんなこと言い始めるとは、ついにデレ期ってやつなのかねえ」

「……まずその減らず口から黙らせてやろうか？ ああ？」

試合の後で疲れきっているにも関わらず、いつものように言い争いをする二人の男の声が室内には響き渡っていた。

「はいはい、二人とも落ち着いてね。そんなピリピリしてたら、可愛い後輩が可哀想でしょ？」

そしてそれは、とある女性の鶴の一声で決まって鳴りを潜める。ここまでがこのチームメイト間のテンプレだ。

今は一応、試合が終わった後の反省会のようなものだが、食事中だろうと作戦会議中だろうと毎回この流れだ。よくもまあ、飽きずに続けられるなど感心しそうになる。

「気にしないでください、これくらいなら別に大丈夫です」

「これくらいってなんだよ、おい」

「ほら、恭也も一々突っ掛からない」

毎度毎度ご苦労なことだ。自分より二つも年上なのに、何にでも噛み付いてきて全然落ち着きがない。雰囲気もあるから言わないが、正直黙ってて欲しい。

「——みなさん、ただいま戻りました」

どうにもならないので天井でも仰いでようと思ったが、タイミングを図っていたように扉が開く。入ってきたのは、記者会見を終えてきたクローディアだ。

「お帰り、クローディアちゃん。どうだった？」

「まあ、いつも通りといった感じです。マスコミの方々も同じような質問ばかりで、それでも数ばかりは増えますから、受け流すのも大変です」

「やっぱり？ でも安心してね、次の大勝負の時は私が前に表に立つから、クローディアちゃんは休んでて」

メディア連中の相手を受け持っているのは、比較的大人な対応が出来るこの二人が基本だ。

どのチームも情報はばらしたくないものだが、たまに強引な手で迫ってくる者もいるわけで、そうなる焦って話してしまうなんて事

例も出てくる。今大会だとルサールクがやらかしかけたとか。

このチームもなんというか……男子メンバーはそういった対応にはあまり向かない。というわけで、会見の経験もある二人にメディアは一任している。

「……次の相手誰か忘れてませんか？ 相手はあのチーム・ランスロットですよ？」

「まさか、そんなわけないよ」

「なんだ、お前ビビってんのか？ 負ける前提で話すなんてよお」

「どうやら勇氣と無謀は違うって知らないらしいな。そんなだから序列二十位のままなんだよ」

「あ？ まず序列入りしてから言えよてめえ」

「序列マウントなら俺に勝ち越してから言え」

「ぐぬう……」

——はあ……。

「あれ、行人くんはもう行っちゃうのかな？」

また始まった痴話喧嘩（笑）から逃げるように扉へ向かったが、結局気付かれてしまった。戦闘ならともかく、こんなときまで視野が広いのも考え所だ。

「今日は特にやることもないでしょう？ ……まだ気持ち悪いん

で、俺は先に帰らせてもらいます」

「……なあ、おめえそんな胃が弱いやつだっけ？」

「煽りなら明日でお願いします。それでは」

夜の再開発エリアにて、雲がかかりながらも尚光を放つ満月が空には浮かび上がっている。今の時期日本であれば、団子を用意してお月見とでも洒落込むのだろう。

最後にそんな行事を楽しんだのはいつのことだったか……

(まあ、どうでもいいか)

余計なことは捨て置き、周囲に意識を巡らせる。一応ここは無法地帯のようなもの。いつ後ろから襲われても可笑しくない。

「——よくこんなところに、何度も足を運ぼうと思うわね」

ならこんなところに、しかも酔い気味で寄るなという声も聞こえてきそうだが、それとこれとは別問題だ。なぜなら、

「そういう日課なんだ。そしてそうなるのがお前の言う運命ってやつじゃないか？」

これは俺が望んだことだからだ。

「……オーフェリア」

レイラ・マーティン

身長：174cm

血液型：B型

誕生日：不明

所属：星導館学園大学部2年

序列：星導館学園10位

武装：狙撃銃型煌式武装、突撃銃型煌式武装、短剣型煌式武装

二つ名：月蝕の狩人（アルテミス）

好きなもの：パフエ、ココア

嫌いなもの：歓楽街、パン

風本恭也

身長：170cm

血液型：A型

誕生日：8月31日

所属：星導館学園高等部3年

序列：星導館学園20位

武装：長剣型煌式武装、短銃型煌式武装

二つ名：阿修羅

好きなもの：レイラ、序列上げ

嫌いなもの：コーヒー、ナンパ師

コール・ロベス

身長：176cm

血液型：AB型

誕生日：2月5日

所属：星導館学園高等部2年（単位が足りず留年）

序列：序列外

武装：長剣型煌式武装、投剣型煌式武装

二つ名：なし

好きなもの：学食、煌式武装特集

嫌いなもの：特になし

役目

「……それで？ そのチームとやらはいいのかしら」

お互い背中合わせになりながら、月明かりすら届かない暗闇に二人だけ。

漫画にありそうな恋人繋ぎとやらをするわけでもなく、暗がりでも見えるほど近くで見つめ合うわけでもなく、ただ夜風に吹かれながら、他愛ない話で時間を浪費する。

こんなとてつもない時間の無駄遣いが、自分にとっては待ち遠しいのだ。

「ああ、今日はもう話すこともないから」

オーフェリアの問い掛けに答えるが、半分は嘘だ。あの空気だと、すぐにはいかなくても早めに話したいことがあったはず。

だがチームのみんなには申し訳ないが、今日とはとにかく、早くオーフェリアに会いたかった。それが本当のところだ。

こんな理由を知られれば、誰もが脳味噌スイーツのトラブルメーカーと蔑むだろう。正直、自分でもそう思う。それは否定しない。

だがこれは、巷で言う恋愛感情とは多分違うものだと思う。

なぜならば、感情が彼女とこうしたいのではなく、こうでなくてはならないと叫んでいるからだ。

「……………」

呼び掛けすらないままに後ろから抱き締める自分を、彼女は声一つ出さずに受け入れてくれる。少しばかり肌がピリピリしようが、そんなことは関係ない。

こうしている時が何よりも安心出来て、そして何よりも懐かしかった。

——しかし最近では、一つだけ疑問が浮かんできていた。

彼女は……オーフェリアは自分を受け入れてくれている。だがそれは、一体何故なのだろうか。

(……………)

答えは出ないし、出したいとも思わなかった。生気を感じさせない体温は、それでも行人にとっては思考を遮るほどに心地が良いものだった。

コーヒーマシンの持つカフェインには色々効能があるらしいが、その中でも眠気覚まし効果があるのは周知の事実だろう。

朝のルーティンによし、エナジードリンクが苦手なワーカホリックにもよし、まだ中等部の子供でも飲める理想的なカフェイン飲料だろう。

(……クソッ！)

行人は苛立ちのままにマグカップに口付け、中身を一気に流し込む。中身はもちろん、機材ついでに買い足したインスタントコーヒーだ。

「——ッ！」

多量のカフェインによって活性化した頭を、壁越しに聞こえてきた微少な足音がさらに刺激する。間髪入れず行人はホルダーの発動体に手を伸ばしていた。

扉が開くと同時に、その拳銃を突き付ける。

「……ついに錯乱したか？」

それに応える、少し気だるげで冷えた声。だが自身に向けられている拳銃に表情一つ変えず、その男——コール・ロペスは行人に向かって歩いてくる。

「過剰なカフェイン摂取に不眠、それに過労、本番では社畜としてなぶり殺されたいらしいな」

そして慣れた手付きで拳銃を取り上げ、発動体に戻す。分類上は同じ学生のはずなのに、年が三つ違うだけでこうも武器に耐性が付くのか。いや、単に強者の余裕なのかもしれない。

「もう休め、まだ本番まで時間はある」

だからこんな風に、平然とそんなことを言うのだ。

「……何かしてた方が落ち着くんですよ」

「論外だ馬鹿が、フレンドリーファイアなんて俺は御免だ。だからお前のために働こうとするな。チームのために自分を休ませろ」

……………

「——知ってるか。七つの大罪において、怠惰の本来の教義は怠けることじゃない。決められた安息日を守らない……つまり自らに定められた役目を果たさないことだ。いいか、これはお前だけの戦いじゃない。お前のために、お前を使い潰すな」

「——おはようございます……」

「お、おい、大丈夫かよおめえ……」

ギラついた目とは裏腹に恭也は純粹に……いや大会の方が大事だからそのついでだろうが心配してくれているが、それに応えるだけの力が今の行人にはまだない。

昨夜、結局自分は寝られないと駄々をこねた結果、どうやらコールに寝かしつけられたらしい。それも実力行使で。

初めて味わった電気の味をレビューしたいところだが、思い出せる

のはまあめちやくちや激痛だった。

首筋にはまだ痛みが刻まれていて、寝違えとか比較にならないレベルだ。多分跡も残ってる。電気使いとは戦ったことはあるが、まとも
に当たったら多分こんな感じなのだろう。

「お前にはいい薬だ、首ついでに頭も冷やせ」

「妙に帰りおせえと思ったら原因てめえかよ」

「暴力に訴えるのは良くないよ、コール。それ、下手すると気絶じゃす
まないことあるから」

いや、なんで二人ともそれで事情を察せるんだ。特にレイラさん、
平然と怖いことを言わないでくれませんか。

「生憎、ちょうどいい方法が思い付かなかったもので」

「そもそもなんでスタンガンなんて持ってんですか……」

「絡んできたやつが騒いだら面倒だろう？ だから無力化したらすぐ
気絶させるんだ」

「てことはまたロトリビト歓楽街か？ てめえ根本的には素行不良で進級出来な
かったの忘れてねえか？」

「まずよく行くこうと思うね、あんな所。駄目だよ？ 悪い人多いし」

面子の絵面的に、そこまで派手で荒れてるわけでもないコールと、
睨みの効きやすい三白眼が特徴的な恭也の立ち位置が逆に見えなく
もない会話が続く。

かくいう行人は、あれから全く会話に混ざってない。このアクが強い二人もそうだが、それについていけてなんなら窘めることすら出来るレイラには素直に尊敬する。

と、そこへ最後のメンバーが入ってくる。それがわかった瞬間、それまで楽しげだった空気が一旦息を潜める。

クローディア・エンフィールド。メンバー最年少でありながら、現在進行形で序列第二位を維持している、全てを見通す《千見の盟主》バルカ・モルタ。

「——皆さん、よく集まってくれました。私の我が儘に付き合っていたただけでることに、深くお礼を申し上げます」

「よく集まったって、今日は本番だから当たり前なんだけどね」

「まあまあ、そこは決まり文句ということぞ」

「言った本人が気持ちよく言いやがるなよ……」

……その実このいい加減さだが、その奥に潜む黒が滲み出ている。

「会長、早く本題へ」

「ですね。——チーム・ランスロットに勝つために、私が提案できる作戦は一つです」

『さあ皆様、本試合もまもなく大詰めです！ この試合を勝ち抜いて次の試合に進むのは《聖騎士》ペンドラゴン率いるチーム・ランスロットか、それとも今大会のダークホースと一目置かれているチーム・エンフィールドか!?』

チーム・ランスロットの特徴は、以前の《獅鷲星武祭》グリップスから変わっていない。五人の力を一つに集合させることで発揮される、圧倒的な総合力だ。

アスタリスクにおいて星脈世代ジエネステラの戦いは、基本的に一対一で行われる。それにこの都市では身を守るにも、何かを得るのにも己の力がある。そういう場所故に、ここでは個性が尖った輩が多い。

その個性を殺さず、そして五人の集団の域に留まらず一つの生命体のようにまで落とし込めるのは、群を抜いていると言えるだろう。

互いが互いを知り、信頼し、言葉すら交わす必要もなく流動的に動く。団体競技におけるチームの理想形だ。

そんなチームに対して、こちらと同じように応えるなど延命措置も良いところだった。だからクローディアは、それを崩すための連携を提案していた。

「——ちよつ、なんでこっちはかり狙ってくるんですの!」

「あなたが厄介だからに、決まってるでしょう!」

「ハイハイお嬢さん、熱烈なラブコールは一人だけにしてくれないか

い！ そう雑に扱われると、流石に傷付くなあ！」

不規則に纏わりつく煌式ルークス武装と、鋭く襲いかかる光弾と、柵の奥から獲物を狙う猛獣の如くケヴィンと双剣を交えるクローディアに、レティシアが光翼と共に叫びを飛ばす。

クローディアの刃はケヴィンの護りによって未だ遮られているが、だとしてもかなり動きにくいだろう。自分の守りに意識を割き、その合間に放った光翼も敢えなく打ち落とされる。

この調子でレティシアを削り落とせば、この戦いで勝利は現実味を帯びてくる。盤面を支配するには、さしものチーム・ランスロットでも後方支援無しには不可能だ。

加えて、今年の後衛に《贖罪の錐角》ゴート・アマルティアの使い手が見つからないのが大きい。

単純にそれに値する人物がそれに代わる人材がいなかったのだろうが、《白瀟の魔剣》レイグレムスの背後からさらにあんなものを放たれてしまったのは近付くのも難しかった。

「さあレティシア！ 貴女の校章を頂きますよ！」

「くっ……！ ——ケヴィン！ 貴方はライオネルの援護に向かいなさい！ この鬱陶しい攻撃を止められるのは貴方方しかいませんわ！」

(む、これは……)

声をあげての指示、これは本来の連携を変える合図となるのだろう。だがこの状況下で無理矢理動けば最悪一人分の戦力を……それ

も最も重要な後衛役を失うだけで終わってしまう。

「いいのかレティ！　こんな攻撃の雨霰、一人で防げんのか!？」

「それは前線を押し上げてくだされば済む話ですわ！　それにこれはわたくしと彼女の問題ですよ！　売られた喧嘩は買わなくてはブランシャル家の恥、わたくしの一生の恥ですわ!！」

「オーケー、レティ！　負けるんじゃないぞ!！」

かくして、戦況また動き始める。レティシアは支援に割いていた力を用いて煌式武装、光弾、そしてクロードディアをも押し返すような巨大な光翼を振り下ろす。

その際にケヴィンが脇を通り抜けて、前線へと走り去ってせまう。

「……ッ、いいのですか、レティシア？　貴女はチームの要でしょう。そんな貴女がここで私との一対一を選ぶのは、些か賭けにならざるを得ませんが」

それは抜けられたことによる苦し紛れの挑発ではなく、単純な疑問だ。クロードディアとしては、いつしか見覚えがあるシチュエーション。だかチームとしての勝利がかかっている以上、絶対に勝ちを狙える方法ではない。

故にクロードディアは、その問いによって得られる答えと、そこから推察できるであろう結論を頭に浮かべていく。つまりは何か隠し玉の可能性を。

「そんなこと百も承知、寧ろ上等ですわ。別にわたくしが勝てばいいだけの話ですし。それに……」

「……なんです？」

「——そうではなくては、わたくしが納得できませんわ！」

そう言つて細剣を抜き放つたレティシアの光翼が、クローディアには更に輝きを増しているように見えた。

「……厄介なものだね。因縁というものは」

激しさを増す背後のクローディアとレティシアを横目で見据えながら、目の前の《ベントラゴン聖騎士》がそう呟くのが聞こえた。

アーネスト・フェアクロフ。中等部からガラードワースの序列一位、五代目の《レイリグレムス劍聖》、そして純星煌式武装《レイリグレムス白瀧の魔劍》の使い手。

能力は任意の対象のみを切る、四色の魔劍に漏れず防御不可能の聖劍。

そんなアスタリスク随一の強者が、自分の目の前にいる。そう考えると、身体に重圧がかかってくる。手が汗ばみ、足に重しがつけられるような感覚。

こんな風にプレッシャーを感じたのは、オーフェリアの能力を見た時以来かもしれない。

「さて、待たせてしまつてすまなかつたね。再開しようか」

剣を構え直すアーネストだが、行人にしてみれば勘弁してほしかった。

一応純星煌式武装であるこの《ナイアーラトテップ数多の偽り》は、なんとかあの聖剣ともかち合うことが出来た。ただし、あくまで透過されないだけであり、その切れ味に勝ることは出来なかつた。

つまり武器による打ち合いが結局成立しないのだ。耐えて二、三発、するとしたらこちらから攻撃してそれを受け止められた場合だろうが、この相手に迂闊に動いてもカウンターを食らつて終わる気しない。

「……………」

落ち着け、自分が何と相対してきたと思つている。何を求めてここまで来たと思つている。

俺は父を捨て、弟を奪い、母を殺した奴らが赦せない。幸福だったあの日々を壊して、それを糧として日々を生きているそいつらが。そして、それでも尚生き長らえている自分が、堪らなく、憎たらしい。

だからこれは、そのための第一歩だ。まずは奴らの存在を突き止めて、その上で奴らの喉元を食い散らかしてやるために。

空気を胸いっぱい吸い込み、満足するまで息を吐き出す。脈打つ心臓の鼓動が収まっていくのを感じると、行人は武器を握り直す。

そうだ、排除する。障害を。倒す。打ち負かす。壊す。殺す。

どうやって？ 剣で。槍で。銃で。体術で。拳で。脚で。全てを
使ってた。

「……………」

漏れ出たようなアーネストの笑みなど、もはや行人の目には映らな
かった。

聖騎士たち

アーネスト・フェアクロフとは、完璧な人物だ。何をやってもそつなくこなし、何があつても公正で、何をされても冷静に考える。アーネストは、そういう人間であり続けている。

アーネスト・フェアクロフとは、栄光あるガードワースの《聖騎士》だ。生徒会長であり、序列一位であり、五代目の《劍聖》とも言われている。アーネストは、そういう人物であり続けている。

そしてアーネスト・フェアクロフは、そういったモノであり続けるだけの才覚を持っている。剣技、教養、精神……それを見込まれた上で、己を《聖騎士》とするための枷を受け入れている。

だがこの《獅鷲星武祭》において、アーネストはその枷に対して久しく鬱陶しさを感じていた。その原因は、溢れ出てなおも止まらない目の前の膨大な鬼気……もといその宿主だ。

「……………」

星導館学園序列七位、名を永見行人というらしいこの少年の、治まることを知らない鬼気に、アーネストは当てられていた。

知覚した者のみが認識出来る、殺気とも違うおどろおどろしい感覚。前者をナイフが突きつけられる感覚と形容するならば、後者は激情が意思を持って睨み付けてくるようなものだろう。

それは言うなれば化身だ。この少年の精神を象る権化だ。

気圧される？ この僕が？ そんなわけがない。僕はガードワースの聖騎士であり、劍聖であり、そしてアーネスト・フェアクロ

フだ。

騎士の名に懸けるならば、取り憑いた悪魔は切り払うのが務めというものである。ならばアーネストは迷いなくその聖剣を振るう。

それが僕に課せられた務めだ。

「どうした!? アーネストを抑えてもこれじゃ攻めきれないぞ!」

「デメエー々うるつせえなあ! 先輩面はもうウンザリなんだよオツサンがあ!」

恭也は戦い始めてすぐに、この男たちが戦法的にも性格的にも苦手な部類だと気付いた。

恭也自身、体格も星辰力もそこらの星脈世代と変わらないことは一番よくわかっている。

なんなら各国から人が集まるこの都市においては低めの部類と言えるし、この間のレスターとかいうやつを見た時は色々な意味で絶望したくらいだ。

だから恭也は、そんな体格にも星辰力にも左右されない戦い方を模索した。それはすなわち、体力と素早さだ。相手に張り付いて、こちらがイニシアチブを取り続ける。

しかしその戦法は、同時に恭也自身の視野を狭める悪癖を伴うこととなってしまうた。

「前に出すぎだ！ 挟まれるぞ！」

「のわっ!？」

突如、恭也の身体はワイヤーアクションのように宙に浮いて引つ張られる。そしてほぼ同時に、先程までいた場所には長槍と騎槍の重厚な一撃が重ねられていた。

日々ランカーとして序列戦を繰り返す日々は、たった一人の相手に対する集中を驚異的なまでに引き上げた。逆に言えば、目の前の敵以外の全てが目に入らなくなってしまっていたのだ。

自覚はあった。癖を直すための努力もしていた。しかしこの土壇場で再発してしまうことになろうとは。

「乗せられてるぞ、落ち着け。特訓と同じようにやれば大丈夫だ」

「……うっせ、わかってんだよ」

そんな軽口を叩きながら体勢を立て直していると、背後からは光が飛翔する。音速を越えた光弾は音をも置き去りにし、寸分のズレもなく騎馬へと命中する。

「……銃声が変わったぞ、合図だ」

「やっとかよ。じゃ、気合い入れてかねえとなア！」

(合図だ……！)

辛うじて聞き取れた銃声の変化に、作戦が次の段階へ進んだのを感じとる。

まさかと思っていたが、クロードイアが行くだけで本当に《光翼の魔女》が一对一に出てくるとは思わなかった。

行人としては渋々同意した作戦だったが、成功したなら異論はない。今頃前に《黒盾》が出てきているはずだ。

そして《王槍》ロンゴミアンドに守りがついたことで、彼らの攻めは苛烈さを増す。特に《鎧装の魔術師》ブライトウエはその突破力を遺憾無く発揮してくるだろう。

それをジェットストリームアタックなんて言っただのは誰だったか。

「レティシアの支援がなくなったからといって、僕は負けるつもりはないよ」

踏み込みながらの袈裟斬りから一転、下からの切り上げまたも一転、校章目掛けての一突きから更にこちらの懐へ潜り込むような横風ぎ一閃。

突きを避けるために身をよじらせたが、そのために重心が下がったこの体勢では後ろに下がる以外の回避運動はとれない。その上この剣を武器で受けたとすれば武器ごと叩き切られる。

だが行人は冷静だった。何故ならこの男が、いやこの聖剣が相手なら、剣そのものを自分が避ける必要はないのだ。校章に当たらなければ、その他の剣戟は無意味に等しい。

「……ッ！」

後ろに飛び退けると予想していたのだろうアーネストの剣は、行人の首をすり抜けていった。

……首はついている。聖剣など、恐れることはないのだ。

「……そんないなし方をしたのは、君が初めてだよ。永見くん」

攻めに転じるため起動した拳銃の光弾をなんなく防ぎながら、信じられないものを見るような目でアーネストは告げる。

「君は何故避けなかったんだい？ 僕の得物が聖剣でなかったら、君は今頃死んでいたんだよ？」

「——簡単だ」

銃を撃つ手を止め、行人もこの試合で初めての声を上げた。

「それ以外にないから。死ぬかもしれない、それがなんだ。勝つためなら死の恐怖だって、あるいは死すら超越する。ただそれだけだ」

言い終わる頃に、一筋の光がアーネスト目掛けて走った。

「くッ！」

レイラからの狙撃銃による支援射撃だ。チーム・ランスロットを崩すにおいて、後衛である《光翼の魔女》^{グロリアーラ}の封じ込めは最優先事項だった。

しかしそのためには護衛に付く《黒盾》^{ガレス}の鉄壁の守りを、さらにそこへ行くまでに《王槍》^{ロングミアンド}や《鎧装の魔術師》^{ブライトウエン}、そして《聖騎士》^{ペンドラゴン}の猛攻をどうにかする必要があった。

そこでクローディアは、あえて自分たちを分散する作戦を考えた。単純なチーム総の合力では勝てないから、ならばその繋がりを分断しようと考えたから。

クローディアが切り込み、恭也とコールが前線を抑え、レイラがそれら全てを支援し、そして行人がチームリーダーとして本丸を引き付ける。

今頃《光翼の魔女》が孤立したことで支援が絶たれ、《黒盾》は前線を押し上げるために護衛を離れたが依然膠着が続いているはずだ。

先程の銃声は、こちらが《一鎧装の魔術師》の鎧をも貫けるほどの威力を持っているということを示した合図だ。

当然当たらなければ意味はないが、随一の機動力を持つあの重騎兵に対しても、レイラはミーティングの時点で宣言していた。

『あんなのに外すくらいなら、わたしにこの銃を握る資格はないよ』

そして彼女は当ててみせた。機動力の源であるその鎧馬に。

鎧を無力化されうる可能性をちらつかされた彼らは、迂闊な動きは出来ない。こうなつては《黒盾》が唯一の頼みだ。

もはや助けなど来ない。さあ、決着をつけよう。

「――アーネスト！」

「っ!？」

響くはずのない突然の声に気を取られて、その隙に行人はアーネストを見失っていた。

ただの跳躍なら、着地音でどこにいるかなんてすぐにわかる。つまり、アーネストは……

「ッ、クソ！」

後方で浮いている光翼を撃ち落とすべく、拳銃を手にして発砲する。が、たかが拳銃程度では撃ち落とすだけの威力も期待できない。

『レティシア・ブランシャール、バッジブローケン校章破損』

クローディアがやってくれたのであろう、試合から退場となる選手的能力を保持することはできないため、光翼はこの時点で消滅を始める。

だがそのタイムラグの間に、アーネストは地面と平行になるほど鋭く跳ぶ。その狙いは、この膠着状態の源でもあるレイラだ。

「ッ！」

レイラもすぐさまそれに気付き、狙撃銃から短機関銃へと持ち変えて応戦するが、聖剣の広い面に防がれる。

『レイラ・マーティン、校章破損』

まずい。互いに抑え役がいなくなった場合、戦力的に不利なのはこちらだ。おまけに前線を張っていた二人はアーネストに後ろを取られている。

唯一見込みがあるとすれば、アーネストが合流する前に中央に固まった残りの三人を全員で片付け、人数差でごり押す。これ以外にない。

それは皆わかってはいるはずだ。現にクローディアと恭也はその三人の方向に急行している。

あの加速から見て、コールが二人の間に引力を生んだに違いない。コール本人も走りだが向かっている。出来ることなら剣も纏わせていたのだろうが、中盤の時点で全て叩き切られた故に仕方ない。これだけでも十分な仕事だ。

引つ張り合うクローディアと恭也は、そのスピードをそのままに剣を振り下ろす。異様な近付き方とは裏腹に十分な速度を伴った剣戟は、守りに徹したとしてもすぐに引き剥がせるようなものではない。

それに《ブライトウエン鎧装の魔術師》は馬に乗っている以上、あの攻撃を耐えることは出来ない。もしそんなことすれば、その威力で馬から転げ落ちることになる。

必然、身を守れるのは《ガレス黒盾》と《ロンゴミアンド王槍》だけだ。走る場所もな

いたためランスチャージも使えない。

いける。まだ取り戻せる。このままやつらを囲い込んで、勝利をこの手に。

しかし実際に守りに出たのは《黒盾》と、なんと《鎧装の魔術師》。己の長所である馬を捨て、地に足つけて恭也の剣を受け止めたのだ。

そしてさらに、その馬は唯一誰もいない方向から包囲を抜け出し、目的地へと駆け出す。その先には……

「チッ！」

気付いたコールは残っていた最後の長剣を取り出し、馬に向けて投擲する。能力もおそらく込みで。

その頃こちらも追い付いたが、削るには一足遅かったらしい。

二人の間で守られている《王槍》は、等身以上の長さを持つ槍を巧みに振り回す。同時に恭也とクロードイアは、相手の体術によってそれぞれが宙へ跳ね上げられる。

二人も負けじと空中でアクロバティックに回避するが、この時点で、チャンスは既に潰えていた。

「はあッ！」

鎧馬に跨ったアーネストが一気に距離を詰めて聖剣を振り抜き、コールに襲いかかる。

当然、コールも黙って見ているわけではない。追わせていた剣を手

元に戻し迎撃を試みる。しかし本来、剣の勝負こそアーネストが最も得意とするものだ。

『——コール・ロペス、バッジブローケン校章破損』

「……チツ」

相討ち狙いの攻撃は惜しくも一步届かず、アーネストが校章を両断、尚も速度を緩めず急接近してくる。

「ちつくしょうがあー！」

恭也はコールの脱落にそう叫びを上げ、再び例の三人衆へと近づいていく。今度は挟み撃ちでもなく、拳銃を撃ちながら闘牛のように一直線に。

そして剣が届くまであと一メートルもない場面で、恭也は自棄になったかのようにその銃をも投げつける。

しかし恭也もバカではない。何の意味もなくそんなことをするのは、序列ランカーなどやっではない。

「ぬおっ！」

彼らの丁度目の前で、銃は少量の煙を伴って爆発をする。そして出来た僅かな隙の間に、恭也は自分を見ていた《フライトウエン鎧装の魔術師》に飛び付き、逆手持ちの剣の柄を鎧に打ち付ける。

「どうしたア!? 守ってみせろよほらッ!!」

「やらせんー！」

そこに襲い掛かる《王槍》と《黒盾》の文字通りの横槍は行人らが割って入ることで時間を稼ぐ。

押し退けられようと必死に食らいつき、二回、三回、そしてついにその鎧の胸を打ち砕く。

『ドロテオ・レムス、校章破損』

「ぬかった……ッ！」

これで三対三。ついでに能力者が脱落したことでアーネストの乗っていた馬も消滅する。だが落馬などなんのその、アーネストの足が止まることはない。

「よくも……！」

「次はてめえだ盾ヤロウ！」

恭也は流れのまま《黒盾》に向けて刃を振るう。このままならクローディアと挟み撃ちでケリが付くが、そうは問屋が卸さない。

「盾だけじゃ、ないんだなあこれが！」

クローディアと板挟みになっているにも関わらず、《黒盾》は長剣で恭也の攻撃を難なくいなしてみせる。もちろん、クローディアの攻撃も同時にだ。

「せいやあッ！」

「ぐあー！」

そして《王槍》が行人を投げ飛ばし、攻撃に夢中の恭也にぶつける。これでまたクローディアは距離を取らざるを得なくなってしまった。

「クッソ！」

「アタックしてくれんのは嬉しいんだけどさ、男は対象外なんだよねー俺。それにしつこすぎるとモテないよー《阿修羅》くん」

「ア、ア、!?!」

「落ち着いて、先輩」

地雷だったのか、それとも単に煽られたからか、喉を潰す勢いで声を荒げる恭也を抑えて、投げた拳銃の代わりに自分のやつを渡す。

正味これのお陰でパワーバランスがひっくり返ることもないだろうが、無いよりかマシだ。

さて、これで残りはこの時代遅れの純星煌式^{オーガルクス}武装と予備のナイフ型煌式武装のみだが……もっと強力な能力を持ってたりしないのだろうか。

そう思ったところで、こいつはただ白々と光るだけなのだが。

「——さて、形勢逆転だ。今度はこちらの番だよ」

合流したアーネストたちが、今一度陣形を伴って突撃してくる。

その先頭に立つアーネストの純白の聖剣を見据えて、そしてもしそれがこの手にあつたらなどという思考をひとまず捨てて、行人たちは

決戦へと臨んだ。

治りかけ

知らない枕の独特な柔らかさの感触に目が覚めて、するとその目線の先にはこちらを覗き込むような人の顔らしきものと、いつもに比べて妙にだだっ広く感じる知らない空間。

そしてそれら全てには、辛うじて輪郭が見えるかどうかのぼやけがかかっている。

何が起こっているのかよくわからなくて、とりあえず起きてみると、妙にふわふわした感覚の現実味の無さになんとなく察しが付く。

多分、夢なんだろうな、と。

いつだかの蛇野郎に侵された毒の感覚にも似ているが、それよりも心地がよくて、とても穏やかな気持ちなのだから、夢以外に考えられない。

夢なんて見るのはいつぶりだろうか。普段からカフェイン漬けの生活のせいで、録な睡眠も久しくとっていない。

この前先輩に寝かしつけられた時だって、疲労が抜けるどころか頭痛が酷くなっただくらいだ。

そんな様子なので、寝るという行為自体が正直嫌いだったのだが、これならまだマシになれるかもしれない。

ああ、それにしても心地よい。もしあの頃のように母さんがいたら、こんなこともしてくれたりしたのだろうか。

いや、流石に怒られるだろうか。この歳でそんな子供っぽいことを

したら弟に示しがつかない。それにここは父さんの特等席だ。

仕事からたまに帰ってくる父さんの、疲れ切った体への特効薬。手料理も添えれば地獄からだって這い上がってくるのかなんとか。

たまに見せる父さんの姿はそれでも頼もしく感じてたから、それを真に受けて、いつ戻ってくるんだろうと帰らぬ人を一年も待ち続けたのが懐かしい。

今にしてみれば、墓を建てて弔ってやることも出来なかったから、まだ現世を彷徨っているのだろうか。そもそも地獄にいないから、帰ってくることもないのかもしれない。

幽霊の世界でも、また母さんと巡り会ってたらいいなと思う。二人ともいい大人のくせに、息子二人で呆れるくらい仲が良かったから。

そういえば、みんなどんな人だったんだろうな……

そう思い更けるのを最後に、行人の意識はまた深く堕ちていく。

「ツ！」

途端に覚醒した頭に呼応して、行人の目蓋がカツと見開く。そしてそれを見つめるのは、常人なら身をすくませるといふ魔王の相貌だ。

「……起きたのね、気分はどうかしら」

ふと、風が吹き抜ける。都市のスラム街の更に奥の、如何にも放置されていると言わんばかりな建物でも、春風の陽気さは微かだが生きているらしい。

それに靡く少女の真つ白な髪がくすぐったくて、それとは別に初めての柔らかな触感に名残惜しさを覚えながらも行人はゆつくりと体を起こす。

「……今までで一番の寝心地だったな。これが、えつと……」

「^{ブラーナ}星辰力を失わせる毒よ。人体に影響はないから安心しなさい」

所々記憶が虫食い状態だったが、思い出してきた。確かここに来たらオーフェリアに流石に休めと言われて、渋々それを了承したんだっただ。

^{ブラーナアウト}星辰力切れで無理矢理身体を休ませられた形だが、完全に脱力しきったことで疲れが吹き飛んだ気がする。

「確かに、寧ろ快適なくらいだ。まさに毒薬変じて薬となる、か……てか膝枕なんて、どこで覚えてきた？」

重ねて尋ねる。寮の枕より寝心地が良かったのでそこはいいのだが、行人から見たオーフェリア像からすると、そんなことをしてくれるというのが少し意外だった。

「どこでなんてないわ。昔やったことがあっただけよ」

「へえ、昔……」

気になりはしたものの、それ以上は聞かなかつた。というより、聞く気があまりなかった。

質問したくせになんて都合がいいのかと自分でも思うが、別に無理して聞きたいとも思わなかつたし、今が心地よければ良いと思うから。

それきりこの場所に音をもたらずのは、心細い春風だけとなるはずだった。

「――またか」

「そのようね」

下方から聞こえる無数の足音が、心地よい静寂をかき消していく。オーフェアと出会った時からずっと絡んでくる、オモ・ネロとか言う組織の構成員たちだ。

初めは十人程度の取り巻きだったのが、追い払うにつれて人数が増えたり用心棒を雇ったり、とにかくやたらと突っかかってくる。

今回は多分百人相当で殴り込みに来たのだろう。この間のモーなんとか――確か二つ名は《螺旋の魔術師》^{セブテントリオ}だったか、そっちの方が正直嬉しいのだが。

「しばらく集団と戦うのは勘弁してほしいんだけど……
《獅鷲星武祭》^{グリップス}ももう終わったし」

持っている武器の確認を急ぎながら、愚痴っぽく行人は呟く。ナイフや拳銃、突撃銃といった煌式武装と、それに溶け込む《数多の偽り》^{ナイアーラトテツ}。

拳銃だけ先に起動してホルスターに突っ込み、《数多の偽り》の発動体を手に握る。

「そんなことをしなくても、私が力を振るうだけでいつも解決するのに」

「いや、そんなことさせて一人ダラダラしてたらいつまでもお前に追いつけないし、俺が全部やりたい」

今までそうしてきたオーフェリアには悪いが、そんなことさせたらせつかくのサンドバッグも一瞬で使い物にならなくなってしまふ。

やっと序列三位の《輪蛇王》^{クエレブレ}にも拮抗出来るようになって、そこらの有象無象なら何とか蹴散らせるようになったのだから、このままやれることは全てやりたい。

そしていつか、お前と肩を並べられるようになれば、今度こそ大切なものを守るようになる。そんな気がする。

「……まあ、今に始まったことじゃないわね」

「ありがとうな、オーフェリア」

そうこうしてる内に、足音はどんどん大きくなっていく。これだけ大きく響くのだから相当数いるのだろうが、あの狭い階段をわざわざ上ってるのだからご苦労なことだ。

「んじや、行ってくる」

「ええ」

言葉を交わしてから、今日も行人は戦いに身を投じる。

永見行人の一日は、朝五時半の一切れのパンと一杯のコーヒーから始まる。

新しく買い置きしておいたパンの袋を乱雑に開けて取り出し、ジャムも付けずに口へと放り込む。食べ終わるまでに寝間着から制服に着替え、終わる頃に今度はコーヒーを飲み干す。

こうすると、コーヒーの熱さが丁度いいくらいになるのだ。

脱水症予防の水を片手に寮へ飛び出し今日は郊外へ。ストレッチをしてこまめに水を飲みながら、走り込みや素振りを繰り返す。

一通りを終えてから七時半頃に引き上げ、そのまま学園へ直行、そのまま登校する。

やることが射撃練習だったりの違いはあれど、これが大まかな朝のルーティンだ。

そしてこの後はただただ暇菜時間が続く。授業を受けたり飯を食うだけで、唯一体育だけは身体を動かすためやる気になるが、やることとのスケール的には結局プラマイゼロだったりする。

そんな早く終わるのを待つだけの時間がようやく佳境を越え
思っていた時、寧ろ佳境はこれからだと言うことを行人は思い知ら
れた。

「どうしたの行人くん、その隈にその傷は」

「うげっ」

「うげっ、って酷くない？」

昼食時の休み時間、全生徒の憩いの場である食堂にて、ついに出
会ってしまった。この鬼教師に。

「またスラムに殴り込みに行ったの？ だめでしょ？ あんなどこ行
くなんて。昨日は勉強したの？ まだ中二から中三なら進級出来て
も、高等部に行くならその調子じゃ足りないよ？」

あの《獅子星武祭》以降、会う度にこの調子だ。毎回こんな小言を
言われて、挙げ句無理矢理勉強会など開かれたら堪ったもんじゃな
い。

幾分やかましかろうと、これなら恭也の方が断然マシだ。

「……宿題とかはちゃんとやっていますし、序列加入者の優遇制度使
うから大丈夫だって言ってるじゃないですか」

「いつまでも冒頭の十二人にいられる保証はないし、それじゃ根本の
学力は身に付かないんだよ？ それで進級とか卒業出来ても、戦う以
外のことも出来なきゃ絶対まずいって」

「はいはい……」

「あ、信じてないな？　なら無理矢理にでもお姉ちゃんが見てあげよう。ほら、早く端末を取り出しなさい」

あ、まずいなこれ。何かスイッチを入れてしまったようだ。穏やかな顔のはずなのに圧がヤバイことになってる。

「センパイ、何やってんすか……って永見？　珍しいなあ、おめえがここにいるなんて」

「いたいわけじゃなくて捕まってるんですよ。お願いですから助けてくれませんかね……！」

「捕まってるって、まーた勉強抜け出したのかよ。やっとけて、あんま序列で調子乗ってるよとコールみてえになんぞ」

「俺がどうかしたか」

「うわっ！　ビックリさせんなこの野郎！」

「はっ？」

「ほらそっちも落ち着いて、とりあえず移動するよ？」

「——はぁ……」

ああ、どうやら今日も逃げられないらしい。いつも足すら動かないのは本当に何故なんだろうか。

結論として、足すら動かないのではなく拘束が強すぎて動かせないだけだったらしい。

(や、やっと終わった……)

時刻は既に五時半、食堂の窓から覗く夕陽は空を仄かに彩っており、その景色は春の暖かな気温と共に見る者の心を和らげてくれるのであろう。

しかし当の行人の場合、疲れは心より身体……特に脳の割合が大きいため、今回は当てはまらなかった。むしろ団子でも用意してほしい。

「普段からやってればこうはならないはずなんだけどなあ」

「先輩割とスパルタだし、しょうがなんじゃねえっすかね……慣れる気配ねえのは流石に擁護出来ねえけど」

「だらしないぞ、永見」

「逆になんでてめえはそんなに余裕綽々なんだよ……マジで意味わかんねえ」

とか言うそっちも俺からすれば訳わからん側ですよ、風本先輩。本当に同郷なのかあんだ。

「再三言っとくけど、この学園一応文武両道を謳ってるくらいだから、

ノー勉強で進級出来るほど甘くないからね。恭也の付き添いもどれだけ時間費やしたことか……しかも今度はコールだし……ヨヨヨ……」

「その節はお世話になりましたから、オレもこいつの面倒は見ますから、だからそんな落ち込まねえでくださいよ先輩……」

「俺は別に見られなくてもいいんだが」

「てめえそう言つて自分から勉強してるところ見たことねえんだが？」

「うう……意外と素直で可愛い可愛い行人くんだけが私の救いだよ……」

「刺しますよ?」

「あゝあゝかわゝいゝいゝなゝあゝ」

「その辺でやめてあげたらどうですか先輩。恭也が怨めしそうにそつち見えますよ」

「は!? 勝手に何言つてやがつ、ちよ、先輩オレにまで抱きつかないでっ!」

「もちろん恭也も可愛いぞー? ほらほら照れるでない照れるでない」

一度スイッチが入ったレイラの猛攻は止まらない。流れるように巻き込まれた恭也共々頬擦りやら色々スキシップを繰り返される。

いい加減うざったいくらいなのだが、恭也の方は少し嬉しそうなのは何故なのか。

「おい永見、てめえどこで油売ってやがんだ」

と、ようやくここで新しい声が食堂に舞い込んでくる。

「あれ、八津崎先生？ どうしたんですかこんなところに」

「よおレイラ、今てめえが抱きついてるそいつには先客がいてな。で？ せっかく頼まれたから射撃の指導取り付けてやったのに何してやがんだ？ あ？」

「……そういう訳です、離してください先輩」

明らかに機嫌が悪い八津崎先生の登場によって、何とかレイラの拘束から解放されることが出来た。

いつも捕まるとぬいぐるみのように扱われるから、こんなに早く逃れられたのは初めてかもしれない。

「あ、じゃあ私もそれ行きたいな。最近撃ってないから鈍ってるかもだし。先生、その指導って途中参加は大丈夫そうですか？」

「あ？ ……多分大丈夫じゃねーかな、おめえ程の腕ならむしろ大歓迎だろ」

いやどこまでもついてくる気だなあんた？ あんたは蛇か俺はそれに睨まれたカエルか？

「恭也はどうするー？」

「オレは……そつすね、もう少しコイツの勉強見ることにします。そ

うでもしなきやまた何もしなそうっすし」

少しの間言い淀んだものの、結局恭也はコールの監修を続けるらしい。コール自身とても不服そうが目線で救難信号を発してきているが、生憎それを受信するアンテナは持ってない。

「オツケー、じゃあ行ってくるね」

「……永見」

「頑張ってくださいね、勉強」

ついに声を漏らしたコールには出来る限りの笑顔を投げてやって、行人とレイラは食堂を後にした。

第一幕 紫獅邂逅

出会い

かつて、ここには目的があつて来た。

人には目的があるべきだと思っている。

何故なら、何をするにしてもその到達点がなければ、その意義を見失ってしまうからだ。

目的も無く、ただ物事をこなすだけの存在。それはもはや作業でありそれをこなすものは……機械とどう違うのだろうか。

別にそれで他人を嗤って、そして押しつける訳ではない。それ以前に深く考えるようなことでもないのかもしれないが……。

だが、自分には類稀な才も、選ばれた地位も……そんなものは何も無い。

だからせめて、自分は目的だけは失いたくないと……そう思っていた。

ただの日常でも……いやただの日常だからこそ、何故自分がここにいるのか分からなくなるだろうから。魑魅魍魎が蔓延る世界で生き残るには、それだけでも勝っていなければ……。

だがそれは、もう失くしてしまった。

絶対に失つてたまるかと、そんな想いなどいざ知らず。現実には、無慈悲に、それを奪っていった。

そこにあつたのは失意、絶望、そして喪失感。

——何故、俺は戦っていたのか。何故、俺はここにいる？ ああ、これからどうすればいい……。

元々のネガティブな思考がさらなる負のスパイラルに陥っていく。

そんなとき、夢か現実かもわからない意識が、不意に引き戻された。

「——おーい？ ……聞こえてる？」

窓から差し込む光と、男子寮ではあり得ない呆れ気味の声によって目を覚ます。手前に映るのは、その声の主でこちらを覗き込む少女だ。

「今日は早めの用事があるんじゃないかな？ 普段ならまだ寝てる私がわざわざ起こしたんだから、返事くらいしたほうが良いと思うんだけど」

用事……なんだっただろうか？ 眠りから覚醒したばかりの意識ではまぶたもろくに開かず、頭もうまく働かない。

「ほら、制服とパンと……あとコーヒー。眠気だから辛うじてわかるけど、あんまりクラブ活動を疎かにするのもどうかと思うよっ」

そうだ思い出した。今日は久々にクラブに顔を出すつもりだった。これでも部員の端くれ、活動期間が設定されていないとはいえ、週に一度くらいは顔を見せなければならぬ。

……とはいえ、ほとんど幽霊部員状態なので、友人はおろか知人がいるかすら怪しいのだが。

「大丈夫？　いつもなら、減らず口の二つや三つでも言ってると思うけど」

「——いや……何でもない」

そこまでかかってやっと、今日初めての声を上げた。

快晴。春の優しい暖かさが夏の熱い日射しへと移り変わる時期。学園祭の熱気が収まると同時に、近々開催される星武祭フエスタへの更なる熱気が高まっている。

最近のクラスでは《鳳凰星武祭》フエニククスの話題で持ちきりで、《華焰の魔女》グリュエエンローゼやら《轟遠の烈斧》コルネフオロスやら、他学園含む《冒頭の十二人》ペーヅ・ワッの名前が蔓延っている。アスタリスクで暮らしていれば——いやどこで暮らしても見る光景だが、その盛り上がりようには恐怖すら覚える。

まあ自分が出るわけでもないし、興味もなかったからどうでもい

い。そう思いながら学園へと繋がる道歩く。最近授業(まともにも受けてないが)や内職で忙しかった。そんな中気だるげな体に鞭打って来ているのだから、当然その速度は遅い。

顔を出しに行くのは落星工学研究会落星工学研究会(らくせいこうがくけんきゅうかい)

星導館学園の中でも長い歴史を持つクラブ。アルルカントのような本場には劣るが、煌式武装ルックスの調整なら学園の装備局に勝るほどの技術を持つ。星導館でも有数の大きさと歴史を持つクラブだ。その規模による設備の潤沢さは落星工学の本場であるアルルカントには劣るが、煌式武装ルックスの調整などであれば学園の装備局より重宝されることもある。

突如、遠くで爆発音が響いた。

「!?!」

聞こえたのは女子寮の方向、遠目でもわかる一輪の炎花が咲き誇っている。星導館の女子生徒で炎を使い、かつ正反対である植物の花をモチーフとした技を使う者など、たった一人しかない。

「……………あんのアホ姫め……………」

思わず眩くのと同時に、体は勝手に動いていた。

「よっ！……と」

着いた場所は多くの群衆によって囲まれており、とてもじゃないがその奥を見られそうにない。そこで丁度良くあった広葉樹の幹に乗って、上からそれを見渡すことにした。見えたのはとある二人の決闘だ。

まずいたのは、《華焰の魔女》ことユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルト。自らの星辰力と万応素をリンクさせ、物理法則をねじ曲げた力を発揮する異能力者《魔女》の一人だ。昨年転校してきたばかりでありながら、一年足らずで《冒頭の十二人》として名を残す実力者でもある。

彼女が使うのは炎。その汎用性は高く、よく使われる技でも四種類以上ある。これは特性が一方方向に突き進むことの多い能力者には珍しいことで、隠し玉や今後の成長を踏まえるとその技の数は底知れないほどになるかもしれない。

ただし性格に少々難があり、人との関係を全て貸し借りで考える、タッグ戦の《鳳凰星武祭》に出るつもりだがパートナーが見つからないなどの課題もある。ついでにある一国のお姫様で、所謂ツンデレ気質でもある。

そしてそこにはもう一人、ユリスと長剣を持って向き合う誰かがいた。見慣れない風貌の青年で、剣の構え方からそれなりの使い手であることがわかる。

だがあの《華焰の魔女》に勝てるほどには見えなかった。

なぜ二人がこんな朝っぱらから決闘をしているのかはわからないが、互いの強さが釣り合っているとは思えない。青年は何とかユリス

の放つ炎の槍を避けているが、かなりギリギリで完全に防戦一方だ。

そもその前提として考えると、この戦いはユリスの方が圧倒的に有利だ。少年の武器があつた剣だけだとすれば、自ずとれる戦法はユリスの攻撃を掻い潜って一太刀浴びせに行くしかなくなる。

しかしあの青年は、襲いかかる火炎を防ぎ避けることに精一杯だ。近づくことなどできそうにない。

「——咲き誇れ——六^{アマ}弁^{マリ}の爆^{リス}焰花！」

仕留めきれないことに業を煮やしたのであろうユリスが、先程までの炎の槍より威力の大きい技を放つ。

六弁の爆焰花——ユリスの火炎の強さを物語る大技で、一つの火炎球から巨大な炎を咲かせ辺りを焼き付く。技の宣言によつて周りのギャラリーも身を引いていき、しかしあの青年がどう対処するか期待も高まっているようだ。

青年は避けるどころか、寧ろその炎に突っ込んでいく。そして……

「——天霧辰明流剣術初伝——ふたつみずち貳蛟龍！」

剣を十文字に振り、六弁の爆焰花を文字通り切り裂いてみせる。あの高火力技に匹敵する強さ……メテオアーツ流星闘技だろうか。

そのとき、上から見ていたからわかったことがあつた。決闘とは関係ない煌^ル式^ク武装^スの矢が、なぜか地面に突き刺さっていたことに。

「野郎……！」

飛んできた方向から逆算するに、犯人は女子寮の屋根から放ってきたようだ。確かに決闘をしている位置からは死角になりやすく、タイミングも爆発と同時に行えば気づかれにくい。

「間に合えよ……！」

このままでは逃げられてしまうかもしれない。足に星辰力^{プラナーナ}を込めながら他の建物の上を伝って、できるだけ速く犯人の見えた屋根に向かう。星辰力のコントロールには自信があるとはいえ、さすがに三メートル以上離れた箇所を飛び越えるのはキツイ。

「ッ……、危ねえ……な！」

辛うじて手が届いてくれたので、そこから体の動きを駆使してよじ登る。いたのはややずんぐりした黒ずくめの、見るからに怪しい人物で煌式^{ルークス}武装は弓型。間違いない。やつが犯人だ。

「逃がすか！」

手に拳銃型煌式武装を発現させ、走り迫りながら引き金を引く。ブレながらも放たれた光弾は三発。二発は外れ、残りの一発だけがその人物の背中に命中した。

だがその人物は怯みもせず、学園の周りにある森の中へ逃げ去ってしまった。もはや追うことはできないだろう。

……おかしい。仮にも煌式武装の弾が当たったのだから、普通は痛がるか、せめてよろける程度の反応をするはずだ。《^{ジェネステラ}星脈世代》は星辰力を防御力に転換できるが、それは攻撃を受けているだけで無効化しているわけではない。最低限衝撃くらいは発生する。

なのに、先の人物からは一切のリアクションを感じ取れなかった。まるで感情や感覚が無いかのようだった。

「……………考えても仕方ないな……………。……………あ」

今思い出したが、ここは女子寮だ。星導館の寮はお互い異性禁止の原則があり、そのための警備は厳重で懲罰も重い。例を挙げると、最近侵入した下着泥棒は戻ってきたときカタコトしか喋れなくなっていたとか何とか。

……………ここにいるのがバレれば、身体的にも社会的にも立ち直れない罰と評判を与えられるのは火を見るより明らかで、それだけは絶対に嫌だ。

最悪の事態を避けるため、早急にこの場を離れることにした。

戻って来てみると決闘は終了したらしく、ギャラリーはほぼほぼ解散していた。上から見えるのはユリス、青年、そして星導館の腹黒生徒会長クロードイア・エンフィールドだけだ。

周囲やユリスの腑に落ちない声と表情から、おそらく強制終了でもさせたのだろうか。まさに不完全燃焼といったところだ。

そしてクロードイアの話を読み聞きすると、あの青年は特待生として招かれた生徒のようだ。転入手続きを済ませていないため、まだ学

園の生徒じゃないから決闘しちやだめということらしいが、

(……絶対に嘘だなあれ)

あの笑みは裏で何かを考えているものだ。経験がそう叫んでいる。今まで関わってきた中で、クローディアが完全に素の自分を見せてきたのは片手で数えられる程度だ。それ以外は全て、真意を掴ませない笑みを浮かべているのがほとんどだった。今回もそれに当てはまると思う。

いやはや、ムカ着火ファイヤーにブラックホールなど、女とは怖い生き物だ。

「……そこにいるのは誰だい？」

あ、バレた。青年は完全にこちらを捉えており、これは下手に誤魔化しても無駄となるだろう。こうなっては仕方ない。意を決して木から身を乗り出し、そのまま地面へ着地する。

「……そう怖い顔すんなよ。シワが増えるぞ転入生」

——近くの木の上から気配がしたので声を掛ける。するとそこから一人の男子生徒が降りてきた。体格は綾斗とほぼ同じだろうか。顔はやつれ気味で目付きが鋭く薄い笑みを浮かばせている。その眼光とは裏腹に、妙に飄々とした態度からやや不気味な印象を与えてく

る。

「あら？ 先輩じゃないですか。ご無沙汰してます」

「よう、クローディア」

「え？ 知り合い？」

ユリスとの決闘を止めてくれた会長さんとその男が軽く会釈する。先輩と言っていたが、見たところ二人はかなり親しげだ。

「どうも。えーつと……」

「天霧綾斗、ですよ。先輩」

「……じゃ、天霧でいいな。多分信じてくれないと思うけど、俺は決闘をよりちゃんと見たくて木の上にいただけだから。害意は無いから。だから安心してくれ」

「は、はあ……」

登場の仕方から怪しき満載の人物だが、会長が親しげにしているから大丈夫だろう。……多分。

「経緯は知らんけど、その火災を体現したようなやつに捲き込まれたのは同情するわ……」

「私を何だと思ってるのだお前は」

「焦げ肉生産機」

「ならお前を焦がしてやろうか？」

「逃げ回る俺が焦げるのとお前が直に来る担任に八つ裂きにされるのどっちが先だろうな」

「ぐ……」

……すごいなあ。ナイフのような鋭さだったユリスを、こうも軽々とあしらっているのに対し感嘆を覚える。

「あ、そうだそうだまだ名乗ってなかったな。——高等部二年永見行人。一応お前の先輩に当たる。……これからよろしくな？ 天霧綾斗くん」

「——不思議な人だったなあ、あの先輩」

学園の廊下を生徒会長——名前をクローディアという——と歩きながら呟く。

「永見先輩ですね。どんな人を感じましたか？」

「やっぱり登場の仕方から、最初はすごく怪しかったよ」

「そうですね」

「……でも」

本人には悪いと思うが、木の上からいきなり現れたとなれば不信感も募るといふものだろう。だが、

「——なんていうか、妙に……親しみ？　みたい……何て言えばわからないけど、そういう何かを感じたんだ。本当不思議だよ、初対面なのに」

「——オラ永見！　寝てんじやねえぞ！」

「……五分後には目が覚めて眠気とれてスッキリしてもっと授業が頭に入るんで待ってください」

「まず寝てんじやねえよ！」

迫り来る声だけを頼りに、屁理屈ですらないものを吐きながら教科担のげんこつを避ける。最初は反応すらできなかったが、今では対象を見なくとも攻撃を回避できるようになった。

「つたくてめえは、油断も隙もねえ……」

「別に注意割かなくて大丈夫ですよ」

「——ハア……あんま調子乗ってんじやねーぞ？」

八津崎女氏はバットを立てながら、今度は冷ややかな声をかけてくる。だがその裏には教師としての責務と、こちらを心配しているのが少しだけわかる。

彼女は行人が高等部一年のときの担任で、そのときから高圧的でありながらも、生徒といつも本気で向き合っている姿を見てきた。おそらく今もそうだろう。

「元《冒頭の十二人》だかなんだか知らねーが、後になって困るのはてめえだぞ？　少しは真面目に授業を……」

「お気遣い感謝しますが、別に困っても俺はいいですよ」

だが周りから視線が集まる中、そんな気遣いすら不要だと、行人は反抗的な態度を崩さない。

「……オイいい加減にしろよ。どんだけ世の中舐めくさってる気だてめえ」

「別にそんなつもりはありませんよ」

舐めくさっているわけではない。それは本当だ。ただ単に、自分はこの世界で生きていきたいなどと思っていない。ただそれだけだ。

舞台の裏側

落星工学研究会はピーキーな煌式武装ルークスの調整を主に請け負う。そのための研究や試験は部員の日課と言っている。行人の場合は自分の煌式武装がほとんどだが、その日課が当てはまるのは変わらない。

「えっと……こいつがこれで、んでこっちはこうだから……」

授業という戦場から帰還した放課後、行人は研究会の活動室にて自分の煌式武装の整備をしていた。理由は以前起きたアクシデントによって修理が必要となったからだ。

本来は顔出しのついでに朝のうちに最後の調整を終えようとしていたのだが、今日の朝は急用ができたため、当初の予定を変更して放課後に研究室へ入り浸っていたというわけだ。

一応、これらは自分でカスタマイズしたものだ。なので仕組みは一番理解しているつもりだが、自らの手で実際に直すとなると理想通りにはうまくいかない。

しかし続けているうちに、こういった単純な作業も楽しくなくなってくる。行人が使っている設備は上等ではないものの一通りの作業はこなせるし、室内も比較的狭くて掃除されておらずあまり良い環境とは言えないが、余計な雑音が入ってこないのがまた心地良い。

「……ん？」

忙しく作業をこなしていると、突如メールの通知が届く。差出人はクローディア・エンフィールド。用件は……

「——急ですみませんがお仕事ができました。生徒会室に来てくださ

い……………か……………)

——尚更、今の作業を早く終わらせる必要ができたようだ。しばらくして作業の終わった煌式武装を展開、それぞれの動作をしっかりと確認し、メールに返信する。間に合わせではあるが大丈夫だ。特に問題ない。

星導館の生徒会とは個々の学年の自治組織ではなく、学園側と生徒の綱渡しをし、全体を統括する一つの組織という感覚が強い。故に学園校舎の最上階にある生徒会関係の部屋——例で言うと、社長室的オフィスなどでは中等部から大学部の生徒、ときには教師までもが入り交じっている。学年ごとに校舎が分かれているのが普通な中で、この光景は少し異質に感じるだろう。

だがその一面から関わる機会が多い。星武祭^{フェスタ}へのエントリーや純星煌式武装^{オーガニック}の貸し出し、はたまた学園祭関連など様々。時期が来ると生徒会の仕事は一気に増大するのだとか。

「……………そろそろ休暇届けでも出すかな」

窓の奥に広がる緑を見渡しながら思う。今回もおそらく内職^{サボリ}関係の話だろう。最近は授業に整備に内職にと休みが授業^{サボリ}しかなかったから、そろそろ自分に^ご褒美を与えても良いのではないだろうか。

「クローディア？ 来たからドアを開けてくれー」

生徒会室のドアをノックしながら、奥にいるであろうクローディアに呼び掛ける。事中だったのか、少し遅れてから返事は返ってきた。

『……永見先輩ですね。どうぞ、お入りください』

内側からロックが解除され、高級そうな木造のドアを開ける。中は高級感漂う絨毯や皮のソファ、学園の絵画などによつて彩られていて、特別貴族でもない一般ピーポーである行人は未だ慣れることができずにいた。

「邪魔するぞー。——で？ 用件ってのは一体なんだ？」

「珍しくド直球ですね。メールの返信も遅かったですし、何か急ぎの用事でもありましたか？」

「お前自分の言葉忘れてないか？ 普通に考えて急がにやマズイ事例だと思ふんだが」

相変わらず憎らしいほどに軟らかい笑みを浮かべながら接してくるクローディア。メールでの通達をしてこないことから直接話さなければならぬような用件と予想できる。そんな重要なものであるなら、ことを急かすのは当然だろう。

「確かに急ですみませんがと送りましたが、別に急いでほしいとは書いていませんよ？ それに、今回の件はついで程度でいいですから」

「……なんだそれ。わざわざ煌式武装の整備までしてきたつてのに」

要するに、クローディア的には少し遅い時間という部分を指してい

たのだろう。

「なるほど。だから返信がいつもより遅れていたのですか」

合点がいったようで、クロードイアはうなずいている。行人はメールは来てからすぐに返信しようとするタイプなため、送ってから返ってくるまでの時間が短い。ついでに今回は、作業の終了まで二十〜三十分はかかり、それが終わってから返した。

これでも作業を早めた方だったが、予定より急ピッチで済ませてきたのは無駄になったようだ。まあ急ぐ必要がないというのは、準備にかける時間があるということなので朗報ではある。

「では本題に移ります。——ユリスが襲われたのはおそらくもう知っていますね？」

「ああ。付け加えると、犯人も見かけた」

「上々です。それでして、しばらくの間、ユリスの観察や襲撃の防止を務めてほしいのです」

頼みとはつまり、ユリスの行動を遠くから観察し、やってくるであろう襲撃者たちの撃退である。……それなんてストーカー？

「いや、まあ、それはいいんだがな……もっとう、他のやつじゃダメなのか？ 例えば夜吹とか」

頼まれたことを受けるのはいいが、疑問が思い浮かんだので例を挙げながら聞く。

ユリスは高等部一年。それに対し行人は二年。警護的な仕事であ

れば立ち位置がもつと近い人物の方が適任だと思うが……。

「夜吹くんは戦闘が得意なタイプではありませんし、綾斗やユリスの同級生です。今回はあくまで、ユリスや犯人の認識外からの監視が主ですから。……ああでも、先輩の判断は尊重しますよ。ユリス自身は実力者ですから真つ向勝負での負けはまずないでしょうし、怖いのは闇討ちをされることだけです。何度も言いますが、その阻止が今回の狙いです。方法は特に問いません」

「はあ……——オーライ、了解した」

よかった。悪態は欠かさないが、聞く限りではいつもよりマシンな部類だ。ちゃんとした理屈を聞いた上で、行人はそれを了承した。……とここで、

「……別に、それを捕らえてしまっても構わんのだろう?」

「過度な自信は身を滅ぼしますよ?」

「はい自重します」

やはり世の中はそこまで甘くない。というか、色々とすいませんでした。半ば反射的に反応し、部屋を出ていくため扉を開けようとした直前で、思い浮かんだことを口にする。

「……そっういやクローディア、あの……天霧を呼んだのはお前で合ってるよな?」

特別聞きたかったわけではない。ただなんとなく、頭に浮かんできただけだ。

「そうですね……、何故、そう思いますか？」

「まず、あいつは特待生の肩書きと能力が噛み合っていない。リースフェルトと戦ってるのを見りや大体はそう思うだろうな」

客観的に見て推測できる綾斗の戦闘力としては、そこそこ経験を積んでいる標準的な強さの剣士といったところか。そこら辺の生徒よりは強いが、総合的な実力は他の人物に一步及ばないタイプだ。

星導館で比較するなら、純粋な近接戦の能力は体格や特性からレスター・マクフェイルや東薙茨あずまちいばら東薙茨（あずまちいばら）

大学部所属の星導館学園序列六位。倒鬼の二つ名を持ち、自身で創始した星脈世代流の実践合気柔術を使用する。に劣り（前者は身長二メートルのガチムチインファイター、後者は触れられたときには骨を砕かれるという逸話を持つ）、持っている手札は能力者のユリスやネストール・フアンドーリンネストール・フアンドーリン

星導館学園の序列四位。大学部所属。氷屑フリームスルスの魔術師の二つ名を持つ実力者で、氷柱による遠距離攻撃、氷の剣による近接攻撃に加え、地面を覆う氷塊などで敵の動きを制限することもできる。（どちらも応用力が高い能力者）に劣る。

勿論強さとは単純な能力だけで測れるものではないが、修羅場をくぐり抜けた——言わば年季が入っているといったものも感じられない。強いて言えばあまり見たことのないタイプの構えなどを使っていたが、それもアドバンテージにはならないだろう。

ここまで羅列したが、つまり特待生として招くほどの人物ではないのだ。

「能力・成果・実益至高主義の統合企業財体が運営する。それが学園側のスカウト。それがわざわざ、あんな平凡で扱いにくいやつを招くな

んて判断するわけない」

それこそ、適当な少年兵にでもする方が、後始末なども考えてお釣りが返ってくるはずだ。

「それを押し通して彼をスカウトし、尚且つその利益を考えられる人物。——《パン・ド・ラ》の未来予知を持つお前しかいないだろ」

「……まあ隠す必要もありませんね。はい、私が綾斗を呼びました」

あつさりとクローディアは認める。

「ですが先輩はそれを知ってどうするのでしょうか？　もしかして、その理由もお聞きになりたいのですか？」

「いや別に」

「……釣れないですね先輩は……」

残念そうなフリをするクローディアだが、そこは正直どうでもいい。元々クローディアが関わっているかという点が少し気になっただけで。——統合企業財体が関わっていないなら、絶対に大丈夫だ。

「こつちも忙しいんだ。あんま雑談にかまけてると睡眠時間なくなっちゃう」

「先輩は余裕を持って行動するタイプだと思っていましたか……」

「窓使ってギリギリまでやってる」

「……ああ、そういえば二階の個室でしたね……。無理は禁物ですよ

？」

さ

「——ただいま……」

四畳程度の狭くルームメイトもない自室に戻ると同時に、カバンを放り投げて上半身だけベッドに倒れ込む。フカフカのお布団と柔らかいマットレス、そして襲いかかる満足感は何にも代えがたく、このままでも今すぐ眠りにつけそうだ。

だが今日は一度情報を整理したい。今朝のように無理やり体を動かし、なんとか意識を保つ。

まずはあの犯人だ。人物像さえ特定できれば、事件の早期解決にもつながる。

今回の犯人は女子寮からの狙撃を行ってきた。決闘が行われていた場所からはそれなりに距離があり、そのうえ登校する時間帯から人も少ない。遠くからの闇討ちには理想的な環境だ。

これだけの条件を見極めた上での実行。単に逆恨みによるものとは考えにくい。もっと計画的な犯行なのは間違いないだろう。一応女子寮の屋根現地を調べに行ったが、これといった手がかりも見つからなかった。まあ、場所が場所なので残るものも残らないのは当然だが。

次に犯行の理由。フェスタ星武祭に出場しようとしているユリスがやられ

て利益が出るのは、やはり他の学園だろう。学園内の人物にはレスターを筆頭にユリスをよく思わない者も多かったらしいが、今はもうそういう存在だということに落ち着いているうえ、この根幹にあるのは対抗心であって憎悪ではない。なので比較的可能性は低い。

こちらの推測はかなり簡単にしぼりこめる。ガラードワースとクインヴェールは露呈した際のデメリットから論外。レヴォルフはあの会長が《鳳凰星武祭》^{フェニックス}の時期に動くとは考えられない。界龍^{ジェロン}も生徒会の特性上あまり可能性を考えにくい。……よつてアルルカントが残る。

まだ足掛かりをつかめてないので断定はできないが、アルルカントには天才が何人かいるとも聞く。常人にはわからない何かを見据えているということ、とりあえず納得しておくことにしよう。

今度は自分がとれる行動だ。クローディアの言う通り、今後は遠くからユリスの周囲を監視するのが役割となる。狙われるのが特定の人物である以上、犯人を見つけないこと自体は容易い。なんせ敵側からこちらに向かつて来てくれるのだから。

そしてある程度情報が集まったのを見計らい、警護を切り上げこちらから捜索に出る。学園にも風紀委員会がある。事態が大きくなれば関わらざるをえないため、そういうものは心配しなくてもいいはずだ。

「……こんなもんか。あー疲れた。早く寝て明日に備えよう」

あらかた情報を整理し終えて指針も固まってきたので、一旦思考を止めて寝る支度をし、改めてベッドの布団をめぐって入ろうとする。

「……………すう……………」

「……………床で寝るか（白目）」

戦力外通告

「あークソツ、首回りいてえ……」

あの後にはまたいつも通りの日常。起きて、授業を受けて、帰って、寝る。唯一違う点は、休み時間などはユリスの周囲に気を配っていることだ。

行人にとつて幸いだったのは、ユリスの食事処が良心的な値段の北斗食堂であったことだ。色々と金銭に乏しいものとしては、まるで無意識に救いの手を差しのべられた感覚さえあった。

ついでに食事中での暗殺的行為はなかった。こんなところで仕掛けられてはたまったものではなかったので、正直ホツとした自分がいる。

——そんなこんなで時間が過ぎた。

付かず離れずの距離を保っていると、既に放課後——つまり襲撃の可能性が一番高い時間帯になっていた。監視にも本腰を入れなければならぬのだが……

「呑気なもんだな……」

そんなことなどつゆ知らず、ユリスは綾斗ともう一人小さな女子生徒を連れて学園を回り始めた。綾斗は学園に来たばかりで、もう一人も行人には見覚えがない。新人と後輩を連れての案内といったところか。

このまま何も起こらず、時間が過ぎてくれれば一番嬉しい。

(——つていう時期が俺にもありましたねえ！)

何が起きているか、簡潔に、単純に、わかりやすく回答しよう。綾斗がいなくなったら、女子二人が喧嘩をおっ始めようとしていた。——過半数以上の男子生徒がドス黒い嫉妬の炎を煌めかせそうな事態だろう。てかさうだ。そうにちがいない。

というか、いなくなったら喧嘩はさすがにおかしすぎる。綾斗の取り合いでもする気なのかあの二人は。うらやましいというか腹立たしいな畜生。

なんて様子を見てみると、彼女らがいた近くのベンチに数本の矢が刺さっていた。

「……は？」

矢が飛んできた方向をたどっていくと、意外と近くに犯人はいた。びしょ濡れになりながら噴水の中に立っている少し太めな黒ずくめの弓使い。間違いない、あの時の男だ。

……いやいや、それだけで片付けられる問題じゃない。あの男は噴水から出てきたのだろう。だが当の噴水には何も見えてなかった。周りに気づかれないうちに潜伏してユリスを狙うというのはわかるが、その潜伏期間が長すぎる。三人がこの中庭に来てから綾斗がどこかに行くまで、およそ三分ぐらいだったはず。

《ジェネステラ星脈世代》の体の強靭さは常人より上だが、体の構造が変わるわけではない。必要な酸素の量も、常人と星脈世代のそれとではほぼ変わらないのだ。

「……？ ……!? いや考えてる場合じゃねえな」

思考に没頭しすぎて、クローディアから頼まれたことをすっかり忘れていた。目的はあくまでユリスの警護、それは今しかできない。

視覚外から弓使いを起動した煌式武装ルークスの照準機で捉えて、その引き金を引く。銃口から光弾が放たれる。寸分たがわずとまではいかないが、ユリスの炎の槍もそいつには向かっている。意識もそこにとられているだろうし、完全に足へ直撃コースだ。

——しかしそこにまた何者かが現れた。今度はどこか見覚えのあるがっしりとした体格で、両手で戦斧を握っている大柄な人物。

「なッ!？」

そのとき行人が驚いたのは、新しい敵が出たからではない。まず大柄は、ユリスの扱う炎を凌いだ。そしてそのとき、放たれた光弾——
ずんぐりに当たるはずだったものが、大柄の胴体に当たったのだ。

普通なら撃たれた傷口を押さえるか、「どこからだ!？」という感じで辺りを見渡してくるところだ。だがその大柄はビクともしなかった。
星辰力ブラーナを防御に回せない状態で狙撃を受けたのにも関わらずに。

被弾箇所の黒いローブは穴が開いたが、そこからは流血すら見えな
い。はたしてあれは本当に人間なのだろうか。それすらも疑わしく
なってきた。

とりあえずそれなりの距離からの援護なので、もう一度狙いを定め
ようと煌式武装を構え直すか、照準機からの光景は突如として黒ずく
めから爆発へと変わった。

一度ユリスたちの方に視線を戻してみると、そこには身の丈の数倍

はあろうかという煌式^{ルークス}武装を構える後輩の姿があった。

「……どどーん」

聞こえてくるなんとも気の抜けた声とは裏腹に、発射されたエネルギー体は着弾と同時に様々なものを吹き飛ばす。襲撃犯やら噴水やら……とにかく範囲内ならなんでも粉微塵にしていた。後で学園からお叱りを受けることは確定的だろう。

正直やりすぎと思わなくもないが、結果的には襲撃を阻むことができた。少なくとも当初の目的は達成したといっていだろう。犯人たちもあれほどやられれば、すぐに動けるはずもない。

「……いやいやいやいや……」

……はずもない、そのはずだった。彼らはまるでピンピンしていた。彼らにとつて肉体的ダメージなどなんともないのか、噴水の基底から噴き上げ降ってくる雨の中を、襲撃者たちは一目散に逃げていく。それを平然と見渡して特にリアクションも起こさない二人と合わさつて、見ているこつちとしては開いた口が塞がらない。

「——おーいー」

高等部の校舎からようやく綾斗が帰ってきたようだ。ピンチに駆けつけるには一足遅かったが、あのクソ真面目^{ユス}は自分の問題に他人を巻き込むのをよしとしない上、借りを作るのも嫌がる。ここは巻き込まれなくてよかったと捉えるべきか。一方の彼女らは……

「……幸運を祈るぞ天霧……」

まあ、うん。ナニとかナニやらが透け、それが夏のキラキラとした

太陽の光に照らされ、色々とビューティホーな光景が広がっていた。ただそれは危険な実力者たちのものなので、気に触れれば野次馬ごとく消し炭になるに違いない。

先の現象から正直消し飛んでくれた方が世のためとも思うが、仮にも知人の望んだ後輩だ。腹黒会長かすかな祈りを捧げながら、行人は誰にも気づかれないようにスツとその場を去った。

「——綾斗に、ユリスの近くにいるよう取り付けることができました」

そのとき、世界の時間が止まった。

「……はあ」

「というわけで、突然ですが警護の必要はなくなりました」

「あ、はい、そうですか……」

土曜日、仕事終わりの夜。警護自室に帰ってきて早々、クローディアとの通話中突然のいらぬ子宣言によって、行人のHPは大きく削られた。

「……って、え？ 待って？ 色々聞きたいけど、一番に今後俺どうすりゃいいんだ？」

リストラをされる社員の気持ちというのはこういうものを指すの
であろうか。ともかく根掘り葉掘り問いたださなければ、あまり気が
収まらない。

「——えつとな、順を追って質問してくぞ。まず何があつた？」

最初に聞くのは、どんな経緯があつてそうなったのかだ。確かにこ
この生徒会(他の事情は知らないが)は一般生徒との交流が多い方だ。
だが顔見知り程度の人物にそんなことを頼むのは、いつもの計算高い
クローディアを知る行人にとって耳を疑う行為だ。

「先輩は知っているでしょう？ ユリスが綾斗に学園を案内していた
のは」

……なるほど。つまり少なくとも気を許しているため、近くでま
わらせていた方が良いということだろう。だが、

「——確かにこの目で見たがな……仲良いのはわかるぞ？ でも前提
として、あいつ戦力として頼りになんのか？ 何度も言ったが、あれ
は特待生といつても基礎能力は普通くらいだ。それが
《冒頭の十二人》を仕留めに来るような輩を相手に？ 冗談キツイぞ」

少しおどけながら手を広げる仕草もとるが、裏腹に行人は真剣だ。

襲撃者たち。あれは中々に手練れで、特に頑丈さがずば抜けて高
い。なにせ改造済みのお手製煌式武装ルックスの光弾でさえびくともしな
かったのだ。それと戦うのであれば、せめて今話している人物や主犯
格に見なされてそうながチムチ……要するに《冒頭の十二人》並みの
実力であるのが好ましい。個人的にはそう思う。

「そこは大丈夫です。彼は今日《黒炉の魔剣》の所有者となりました。

まだ手続きに時間がかかっていますが、直に優秀な戦力になります」

「…………え、マジ?」

《黒炉の魔剣》といえば、四色の魔剣のうちの不振りで、その刀身は熱を溜め込み、「触れなば溶け、刺せば大地は坩堝と化さん」なんて逸話までできている強力な純星煌式オーガルクラス武装だ。

適合者は今までで二人しか出ていないという気難しい純星煌式武装でもあつたはずだが…………、

「…………ちなみに適合率は…………」

「九十七パーセントです」

「畜生ッ!」

少し納得いかなくて思わず叫び散らす。悲しきかな、主人公補正(?)とは抗えぬ理であり、それを覆すものなどない。…………というか、突然の転入からお姫様に気に入れられ、専用の武器を入手する展開…………そういう存在のそれに近すぎるだろ。

「い、いや、それでもすぐに使うのは無理だろ? 少なくとも何日かは。その間どうすんだ?」

「——えつとですね、綾斗は、基本そういった頼み事はやり遂げるタイプですから」

…………ん?

「…………随分信頼してんだな」

「そうでしょうか？」

クローディアはいつも通りの笑みを浮かべており、やはり真意を探ることはできない。

前述の通りだが、クローディアは打算的な人物だ。故に自分を取り繕い、相手を信頼しきることは滅多にない。初対面なら尚更、むしろ相手を探って利用価値を見定めることもある。なのに初対面で一週間と経ってないのに、ここまで大胆に詰め寄るのは本当に珍しい。

「……先輩が私をどんな風に見ているかはわかりませんが、とにかく心配はいりませんよ」

やっべバレてーら。

「あー、うん、わかったわかった。とりあえず納得したからそのなじるような目をやめて？ 俺のか弱い心がボロクソになっちゃう」

「その割には、かなり過激なこともしていますね？」

「ナンノコトヤラ」

都合が悪くなったので閑話休題。

「あーとにかくだ。これから俺はどう動けばいい？ 特にならぬら、こっちの予定通りに事を進めたいんだが」

「どういって？」

そこから当初考えていた概ねを伝える。

「——なるほど。こちらから搜索をですか。……確かに先輩のような一生徒であれば……ですがそれを行うには、まだ情報が足りないかと思われまますよ」

「そこは重要じゃないさ。敵さんにとって問題なのは、邪魔者がこちらを嗅ぎ付けに来ていることだ。誰かが躍起になって捜してくる手前、下手に証拠を残すことはできないから慎重にならざるをえない。まあその分こつちも証拠を抑えにくくなるかもしれないが、本当にごく一部……てか一人が適当に探し回っているだけだ。むしろ潰しかかってくるかもしれん。そうなれば儲けもんだ」

当初はもつと情報を集めてから始める予定だったが、こうなつては致し方ない。ユリスに付く警護に不安が残るものの、当の本人は迷惑を嫌う。本格的に守るにはこつちで事を運ぶしかないのだ。

「……いえ、やはり可能性が薄いです。あまり何度も動きすぎて、逆に警戒が強まったり歓楽街などに話が広がってしまえば、それこそ手の付けようがありません」

ここまで自学園の生徒より犯人の証拠を優先するのはやはり……

「——やっぱ、銀河の意向もあんのか？」

「はい。この座にいる者としては、立場上そういったものを守る必要もありますし」

銀河。我らが星導館学園の運営母体であり、最も信頼してはならないもの統合企業財体の一つ。

「なら、今回俺はそれを聞く気はない。それを守った上で手に入るものとかどうせロクなもんじゃないし」

「できればやめてほしいのが本音ですが……もう一つの事情もあります。それに私は先輩の判断を尊重すると既に言っております。——こちらからわかるほど目に見えた変化が無い程度であれば、お好きなだけどうぞ」

それは言わば、統合企業財体の害になり得る行為の黙認もとい放任の言葉。統合企業財体が全てであるこの世界。さらに言えばただの一般人がそんな行為をし、その幹部の一人娘がそれに目をつぶる。聞けば誰もが耳を疑うのではないか。

だが二人ともそういった感覚と、それを行える友好関係を持っている。クローディアと行人は、つまりそういう人間なのだ。

「うむ、了承してくれて助かった。まあしてなくても変わらずやるけどな」

少しドヤ顔みたいにながら言う。するとクローディアは、行人にとって初耳なことを世間話に出してきた。

「——先輩は教師の方々に、よく変わったと聞きます。それも悪い方に。どうしてこう、反抗的な方向に変化してしまったのでしょうか」

反抗的な……以前の八津崎女氏にも関係することだろうか。行人が高等部一年のときの担任でそのときが初対面だが、そのときも教師として、何人が問題児に当たる生徒のことを聞いていたのかもしれない。

とにかく、クローディアの耳に入ったのは、そういう昔行人と接点があった教師から小耳に挟んだものだろう。

全くひどい言いがかりだ。素直に聞いていればいい大人になれる
とでも言つて、道徳など欠片もない道理を押し付けてくる気なのか。
ああなれるだろうとも。ただしそれは都合がいい大人だが。

実際問題、自分がなぜここまで反抗的に堕ちたのかはわかっていな
い。ただの子供の見栄か。若き故の反抗期か。

理由はわからない。だが単純に信じれなかった。それらを信じた
いとは思えなかつたし、思わなかつた。あのことにはもう納得したは
ずなのに。

「さあ……なんでだろうな。真面目の反動でグレたとか？」

そんなことは関係なく、行人はいつも通り、自覚のない愛想笑いを
浮かべるだけだ。

「——まあ、それくらいの方が私は助かりますけどね」

そしてそれは、こちらと同じだった。

掃き溜め

再開発エリアはエリアなどと銘打っているものの、その実体は完全に放置された廃墟だ。時折星狼警備隊シヤーナガルドムが見回りに来るが、それ以外にここを管理するものはない。薄汚れた者共が蔓延る完全無法地帯のスラム。それが再開発エリアである。

その範囲は広く、ロートリビト歓楽街と合わせてアスタリスクの負の部分象徴する場所の一部だ。柄の悪い不良やギャング、金を求める亡者のような鳴き声、女たちの嬌声やらが蔓延している。まあ自分もそこを利用する者の一人なので、あまり悪くは言えないが。

兎にも角にも、こういったところは無駄に規模が大きい上に、何かしらトラブルに巻き込まれるのも珍しくない。出歩いて誰かに絡まれているのを見ることもあれば、逆に自分が絡まれることもある。

こうした条件から、裏仕事をこなす輩の立ち会いはうってつけの場所だ。

現に行人も朝っぱらから、路地裏にてその一つに巻き込まれていた。

「——何度も言うけどさあ、お前ごころ辺のこと俺より詳しいだろ？早く吐いた方が楽だと思っただけだなあ」

……ただし加害者としてだが。

「ヒイツ！ も、もう許して……」

「いやだからさ、情報提供してくればなんもしないんだよ俺は。てかさつきから震えすぎでしょ大丈夫？」

言葉だけは比較的優しいものの、三人に絡まれてからまず短剣で一人の間接部を突き刺し行動不能にし、さらにかかってきたもう一人を拘束、足の骨を砕き戦意を喪失させるという一連の流れ。さらに始動をほぼノーモーションから遂行し、尚且つ平然と近づいてくる姿は男にとって恐怖でしかなく、行人が質問を繰り返しても変わらずこれだ。

「……仕方ないな」

「——ッ!? ……」

誰かに見つかったても面倒だ。鳩尾に拳を叩き込むことで、男は意識を失くし横たわる。残りの二人も同じように気絶させ、適当な場所に隠しておく。

制服からして一応レヴォルフの生徒だが、最初にかかってきたのは彼らだ。正当防衛の限度は優に越えてるだろうが、別に自業自得だろう。

「他のやつにも当たってみるかねえ。いやでも悪目立ちしすぎても後が困るしな……」

実際問題、レヴォルフのようなやつらには強さによる階級があり、最上級にもなれば構成人数数百人以上の組織の頭領になったやつも聞いたことがある。

この行動がそれらに知られでもしたら、行動に支障をきたすのは火を見るより明らかだ。

「とは言っても、皆目見当もつかないから……。やっぱカツアゲ方

式で情報集めた方が早いか……?」

だが手作業で探すにしても、何の標もない現状では無謀というものだ。さてどうしたものか……。

「……まずは足で探すか」

考えた結果、しばらく散策してから聞き込みをすることにした。先駆者は言った。捜査とは足で稼ぐもんだ、と。あまり頼りたくない理論だが、今回はそれにあやかってみるとしよう。

「さーて、最初は――」

……それから三時間は経っただろうか。ある程度条件を絞ってもやはり一人で探しきれぬ広さではなく、地図上のぼつ印は五十を優に越えようというのに向に終わる気配がない。

「――疲れた……。休憩はさんでから聞き込みにシフトするか」

時刻もちょうどお昼時、エネルギーを消費して空っぽな胃が空腹を主張してきている。が、肝心の食べ物を行人は持っていないかった。

コンビニのおにぎりなんて買ってないし、手作り弁当なんてもつてのほかだ。かといってロードリヒト歓楽街の店はまだほとんどが閉まっている上、開いてたとしても当たりはずれが激しく、疲労が溜まった今の状態で要らぬギャンブルをするのはさすがに気が引けた。

「でも商業区もこっから遠いんだよなあ……てか正直めんどくさい」

とりあえず再開発エリアから抜けるのが先決だ。確か中央付近には決闘や《フェスタ星武祭》のスタジアムが集中していて、それ目当ての観光

客用に店も多くあつたはずだ。

適当なハンバーガーショップで食事する姿を思い浮かべながら、行人は中央に足を運んだ。

見つけた店は有名な某ハンバーガーチェーン店。時間帯から客足は伸びていて、外から見てもそれなりに混んでいるのがわかる。

「チーズバーガーとポテトのセットを一つ。ドリンクはコーラ。持ち帰りです」

注文からしばらくして差し出された袋を手に持ち、近くにあつたベンチでバーガーをほおぼる。久しぶりに食べたが、出来立てのビーフパティとスライスチーズの組み合わせは格別だ。やはりバーガーはチーズ一択。異論は認めない。

「——ああ、ここがいい！」

「ん？」

やけに張り切った声が先ほどの店の前から聞こえてきた。見てみるとそこには、服を清楚な白で統一して日傘をさすお姫様と、それにエスコートされてる冴えない格好の男。……なんだこれ逆デートかな？

それにしても珍しい光景だ。あのツンデレ姫が誰かといっているのなんてそうそう見れるものじゃない。ついでにそれが庶民的なハンバーガーシヨップに男連れで入っていることもあり、普段を知っている者としては珍しさがさらに際立つ。

「……妙に手慣れてんなーあいつ」

思わず凝視してしまった。注文から支払い、食べ方まで手慣れている。姫なんて高貴な地位を持ちながら、意外と根はそうでもないのかもしれない。実は儉約家とかだったりするのだろうか。

……あ、今喉を詰まらせた。それも綾斗によって。と思いきや、今度はめちやくちや真剣になつて話し合っている。

今まで見てきたものとは違った一面。あまり想像できない部分を見るというのは、やはりおもしろいものだ。こう……普段は見られないからこそそのギャップ萌えがすさまじい。

——だが何故だろうか。これまで見てきたどの組み合わせと比べても、彼らの組み合わせが一番しっくりきているような気がする。

そんな風に変人染みた行為の余韻に浸りながら、塩気の効いたポテトとコーラを味わっていると、今度は別の怒号が聞こえてきた。

「——闘えって言うてんだよ！」

タンクトップを着たニメートルはある筋骨隆々の巨漢。星導館学園序列九位《轟遠の烈斧》こと、レスター・マクフェイルだ。

近くには取り巻きの二人がいつも通り。怒鳴っているところからまた決闘をせがんでいるようだ。その不屈の精神には素直に感嘆す

るが、勢いよくテーブルを叩くその見てくれは先ほどの者と変わらな
いたただの不良学生だ。

例の襲撃者ではないだろうが、決闘ですらない小競り合いで被害が
出てしまつては本末転倒だ。仲裁のため二人に近づくが、そこで意外
な人物が現れた。これまで会話に関わっていなかった綾斗が、突然会
話に入ってきたのだ。

「…………お？」

そこで起きた意外な出来事が、行人の興味をさらに引き立てた。

今日は予想外のことがよく起こる日だ。何せ綾斗は威圧感満載の
レスターに対して、一切たじろぐ様子を見せない。行人のイメージだ
が綾斗はあまりそういうタイプに見えなかつたので、この行動は本当
に意外だつた。

気づかれないうちにある程度距離を縮める。どうせなので、天霧綾
斗とは一体どんな人物かここで確かめることにした。あのレスター
に涼しい顔でいられる者はそうそういないため、そこに興味が湧いた
からだ。

それからというものの、綾斗は態度を崩さなかつた。それどころかレ
スターを挑発していた。あの巨大な体格で詰め寄られれば、普通なら
ガチガチになつていようだろう。中々に肝が据わっている。

だがここで行人は、会話の最中で重要なことに気づいた。

「そ、そうですよ！ みんなわかってます！ 決闘の隙をうかがうよ
うな卑怯なマネ、レスターさんがするはずありません！」

これは怒り狂ったレスターを、取り巻きの一人がなだめているとき発した言葉だ。

ユリスは《冒頭ページ・ワンの十二人》であるため、周りのメディアがニュースに掲げるのは彼女がメインだ。決闘をすれば決闘を行うユリスを。スキャンダルであればその行為をしたユリスを映す。

だが一回目の決闘では襲撃者の情報はなく、逆に二回目のニュースでは決闘を行おうとしていたことは報道されていない。せいぜいユリスが襲撃者たちを撃退したことだけだ（それすら実際はあの後輩がやったものだ）。

ここから襲撃者は決闘の隙を狙ったと推測するのはまず不可能だ。なにせ二つの情報には関連性がない。つまりニュースを観戦していた一般人程度ではこの事実を知ることさえできない。

ただしそれができる人物たちがいる。一つは被害者、そしてもう一つが……

（あいつが犯人ってわけか……）

そうだ。つまりあの痩せ細った取り巻きは、事件に何かしら関わっていたということになる。確証は無いがほぼ間違いないだろう。

「——っというやつを見なかったか？」

「……いや知らねえな。他を当たってくれ」

時に説得し時に交渉し多種多様な人物に聞き込みしたが、情報は一向に浮かんでこない。

犯人がほぼわかっていながらすぐ行動に出ないのには、れっきとした理由がある。確かに犯人が誰かは確定と言っているものを偶然手に入れたが、行人は風紀委員のような機関に所属していない。そのため誰かを取り締まる権限自体を持っていないのだ。できるのは更に証拠を集め、それを摘発することだけだ。

そうした理由でかなり搜索を進めたが、宵闇が近づいてきても決定的な証拠は出てこなかった。完全に路頭に迷った気分だ。

「……あれ、ここどこだっけ」

……物理的にも迷ってしまった。歓楽街と再開発エリアを何度も行き来しているので、地図を使っても迷ってしまうことがいくらあったのだ。初見の人は地図がなければ絶対に入ってはいけない。

見るたびに赤の比率が増えているような地図を確認しながら、薄暗くて迷路のような路地を進んでいく。灯りのおかげで全くの暗闇というわけではないが、遠くを見渡すのはほぼ不可能と言っていい。

「……ん？」

歩を進める途中、行人は奇妙な人影がすることに気づいた。奇妙というのは、動いている輪郭だけが見えて肌や服などの部分が見えないのだ。まるで体が暗闇に同化しているような……

「つてあぶねッ！」

とか考えてたらいきなり拳銃をぶつ放してきやがったあいつ。とか銃撃時の光で一瞬見えたが、あれは同化してるんじゃないやなくて黒ずくめで目立っていないだけだった。

急な攻撃にビククリして、思わず声を上げながら道の奥に逃げ込んでいく。適当な方向に曲がってしまったが、ここでやられるよりは遙かにマシだ。現にやつはこちらを追ってきており、現在進行形で光弾をぶちこもうとしてきているのだ。

避けるためとはいえ、最低限しかない狭い道で行う回避運動が何気にツライ。

(落ち着け……落ち着け俺……今俺がとれる行動はなんだまはそれはそれだけを考えろ……！)

自己暗示にも近い方法で本来の調子を整える。できれば反撃したいところだが、走っているはずの敵さんは地味に命中率が高く、振り返って狙いを定められない。そのためここはガン逃げするのが最善策と判断した。

幸いその考えは功を奏したようで、かすり傷はいくつかできたが致命傷を負うような大事には至らなかつた。問題点を挙げるなら、このままではジリ貧なのと、地図を見れないため道筋がわからないことだ。

逃げることにだけ集中していたため、今自分がどこにいるかなど皆目検討もつかない。やけによく聞こえていた足音の量が多くなっていくことも相まって、むしろこっちが追い込まれている気がしてならない。

(てかなんでこんなに聞こえんだ？ 足に鎧してるわけじゃあるまいし……)

よく考えてみるとおかしかった。今聞こえている音も、気づけた理由も、特徴的だったその足音によつてだ。靴で走っているときの音ではない。もっとと金属的な——さらに言えば機械的とも言えるような——そんな音。

「……マジかよ……」

……どうやら神様は、そんなことを考えてる暇はないとおっしゃりたいらしい。曲がり角を抜けた先に道は続いていかなかった。後ろからはやつらが迫ってくるが、このまま進んでも結果は同じだ。上からという発想を満たすための梯子も、隠れるのに使える散乱した箱とかもない。万事休すだ。

逃げ切れないとしても、撃退するという最終手段もあるにはある。最低限の広さがあり、誘き寄せて倒すには向いた地形なので実行すれば可能性もなくはない。だがそのためには、やつらがここに入ってくるまで身を隠す必要がある。何か……何かないか……

(——そうだ！)

路地の暗闇に見える五つの影が、一匹の獲物を狙って走り抜ける。

複数で囲み、陽動し、罠に誘い込む。狩りの鉄則だ。

この程度のゲームなど朝飯前だ。影は群れからあぶれた草食動物へそつと近づくように、武器を構えて警戒しながら、ゆっくりじっくりと追い詰めていく。

普通なら闇は視界を遮るが、影たちにはなんの障害にもならない。まるで猫のように、多少暗かろうと^{狩場}辺りを見渡すことができる。

やつはあの転入生のように、もしかしたら後々邪魔になるかもしれない。不確かな芽は早めに摘んでいく。周りから切り崩して追い詰めていくこの感覚。そして最期に浮かぶ表情……ああ、今から楽しみでしかたがn

「!？」

「——は、はい、一名様ごあんなーい」

人形と公主と叢雲

行人は全ての追っ手が所定の位置を通過したのを見計らい、二メートルほどの上方から降下し、最後部にいる影を踏みつけ、突撃銃を持つ腕の間接部を短剣型の煌式武装^{ルークス}で指し貫く。

行人が潜伏したのは、壁と壁の間。建物同士によって狭められている狭苦しい場所を利用して、自らを固定していたのだ。これによって目前の餌に釣られた馬鹿共を一箇所に集めることができた。

正確にはまだ全員入ったわけではないが、予想外の位置から現れたことで対応が遅れている。この状況ならそれほど問題ないだろう。

しかし行人はある違和感に気づく。それと同時に、襲撃者たちに一貫して抱いていた疑問も晴れることとなった。

(この感触……そうかそういうことか！)

模型を踏みつけたような感覚、肉や骨とは違う金属的な感触、今までの銃撃で傷一つ付かず呻きすら挙げなかった体。人間ではない。おそらく擬形体^{バベット}の類いなのだろう。

見た目はプラモデルの素体だが、肉付けさえすれば本物との見分けがつかなくなる。それほどに巧妙だ。

今までの襲撃が全てこいつらの仕業であれば、長時間水中にいられたことも、光弾を受けても平気だったことも、犯人が見つからないのも全て合点がいく。擬形体なら呼吸いらずで痛覚もない。

遠隔操作すれば自分に飛び火する可能性も下げられ、造形を誰かに似せればそいつによる実行と思わせることもできる。これほど闇討

ちに向いたものなら使わない方がおかしい。

「なら、遠慮はいらねえ……なッ！」

相手が無機物なら加減する必要などない。今度は倒れ付した擬形体の脚を思い切り踏みつけて破壊、星辰力プラナーナを込めた攻撃で関節を粉碎され、もはや身動きもとれない状態だ。

一步遅れて残った四体の内二体ずつが銃撃、突進をしてくる。統率がとれているとはとても言えないが、フレンドリーファイアなどない手前お構い無しだ。行人は咄嗟に地面のアサルトライフルを手に取り、乱射してこれを迎え撃つ。

前後からの銃撃で前衛の体はボコボコになったが、それでもまだ歩みを止めない。人型が一心不乱に突っ込んでくる様は、まるで映画のゾンビ兵だ。

「……チッ」

絶え間なく撃っていたライフルの銃口がオーバーヒートしてきているようだ。このままでは迎撃したとしても、使い物にならなくなってしまう。使い捨てとはいえ貴重な遠距離攻撃手段をここでなくするのは惜しい。

そこで行人は、近づいてきた擬形体パベットを先に倒すことにした。もちろん銃は使わず、かといって他の武器も使わず。

これがいつもの決闘であるのなら、間違いなく不可能だ。相手は二体で武器持ち、こちらは一人で徒手空拳のみ。数でも装備でも負けており、とどめに行人は拳法の達人ではない。できて感覚的に、その場に合わせて攻撃を繰り出すので精一杯だ。

だが今回のような状況なら……

「——はあッー！」

自分でも充分対処できる。

別に難しいことをしたわけではない。ただ攻撃を避けて、そのボロボロのボディに掌底を叩き込んだ。

こいつらが自立型か遠隔操作型かは知らないが、どちらにせよ擬形体に技を繰り出すことはできない。擬形体である以上、絶対にだ。ろくに経験を積んだわけでもない、ただの素人臭い動きを行動として処理し、武器を振るうだけ。

生まれた^たたの^だの^機械^械の赤子は技など知らないし、いくら武術の達人でも、コントローラー^{ボット}を通して同じ精度の技を繰り出すのは不可能だ。

たかが素人相手に負けるほど、行人は落ちぶれていない。独学でかじった戦闘術でも、難なく相手取れる。

そしてもう一体は攻撃をいなし拘束、肉の盾ならぬ鉄の盾（もはやぼろ切れみたいだが）を持ち、後衛へ無理やり接近していく。

絶え間なく飛翔してくる光弾を盾で防ぎながら、まだ冷えきつてない手持ちのライフルで牽制、そのうちの何発かが一体に命中。武器を落としてダウンする。

「これでッー！」

頭数が減ったところでぼろ切れを銃床で処理し、一気に近づいて最

後の一体には近距離フルオート射撃を叩き込む。もはや先の前衛二体に引けをとらないくらいの状態となった。所々チーズみたいにもなっている。

「……………」

終わった。戦いは終わった。

「——まあまあ……………」

すぐに習慣の自己採点へ移る。これはアスタリスクで暮らしていて身に付いたことの一つだ。

さて、数字にするならば……四十から五十点といったところだろうか。いざ戦闘になってからの動きはまあ良しとして、その前に当たるところがやはり改善点だ。

結果を急いで早く降りてもいいと判断したせいで、何かと余計な手間がかかってしまったからだ。そもそも一本道なら長射程ほど有利になる。そんなことわかりきっていたはずなのに。

とはいえ過ぎたことを引つ張りすぎても意味がない。ここは助かったと喜ぶべきか。

「……………」

武器を落とした擬形体パベットが素手で殴りかかってくる。それなりのスベックだが、やはりその動きは単調で芸がない。戦い慣れてない人物でも、これなら勝てるのではないだろうかと思う。

「はあ……………」

ここまで来ると、もはや面倒なレベルだ。おそらくこれを差し向けた者は、同じように面倒な性格なのだろう。

所持していた拳銃型煌式^{ルークス}武装を起動し、腕、脚、一箇所ずつ体の間接部を撃ち抜いていく。

「これは……」

完全に無力化した擬形体^{パベット}……いや、もはや擬形体ではないのだろう。その中身は何もなかった。動きを伝達する回路も、心臓部とも言える動力炉もない。本当にただの人形だ。

造形や性能の全てを見て考えるならば、これを作ったのはアルルカントなのだろう。強化すれば星脈世代^{ジェネステラ}にも充分戦える性能を誇り、尚且つ擬形体ということのカモフラージュもできる。

だが中身が何もないというのはおかしすぎる。ではこいつらは一体どうやって動いていたのか。

「……能力者か？ いやでもこいつらを遠距離から操作できるやつなんて……」

と、思い当たる節を探そうとしたところで、行人は重要なことに気づいた。

「——ぼっちの俺がわかるわけないじゃん……」

何を隠そう、入学当初対応をミスったため友達はおろか知り合いない片手で数えられる程度だ。そんな輩に、学校中の魔術師^{ダンテ}、魔女^{ストレガ}を思い浮かべることなどできるはずもない。

「こりゃクローディア行きだな。情報提供して探してもらおうか」

こうして、路地裏で引き起こされた一人対五体の戦いは幕を閉じた。

「——とまあそういうわけで、今回馳せ参じた次第で候ふ」

「……なるほど、大体事情はわかりました」

クローディアには、とりあえず自分の予測できることを全て伝えた。犯人のこと、実行方法、バックに付いている学園、何が起きたか、思い付く限りのことはあらかた話した。

「特に背後にアルルカントがいる線は当たっているだろうな。なんせその人形に使われてたパーツ、通常のものより性能が良い。構造も独自の可能性が高い」

「よくもまあこの短時間でそこまで……」

「いや、実際に調べなきゃわからんけど、実際に戦った感想はそんなだったな」

そこは明日調べて報告をいれる予定だ。今回の事件は意外と規模が大きいかもしれないし、なんにせよ情報は多い方が良い。

「ところで……なぜ平然と部屋に上がろうとしているのですか？」

「へ？ いやだって夜は冷えるし」

「私は今バスローブ姿ですけど」

「フツ、甘いな後輩よ。目の前に極上の獲物がいて、それを取り逃がすなど愚の骨頂というものだ」

男ならわかるだろう。目の前にエロ本があれば目を逸らすどころか凝視してしまうあの感覚を。それと同じ原理だ。むしろ現物であるため価値は格段に上。カメラがあるならそれこそ三脚を使って最高の角度で撮影しておきt

「そうですかそうですか。ではその時は、私も得物バンニドを使って先輩を迎え撃ちましょうか」

「ごめんなさい」

いくら先輩後輩の違いはあれど、ここはアスタリスク。強さによって序列が決まる世界なのだ。序列二位に正面から立ち向かって無事でいられるほどの屈強さは、行人には持ち合わせていない。

というかそれ抜きでもあれはヤバい。目が死んでいた。それどころか光っていた。赤と緑のオツドアイみたいになっていた。あの状態のクローディアに挑むのは自殺行為がすぎる。いくら屈強な男でもそう思わせる気迫をまもっていた。

「先輩が欲望に忠実な面があるのは知っていますからね。あなたを退けるなら、これくらいはしないと」

「……うん、まあ直に話すのは通信よりこの方がいいからだから。そこはわかってくれ?」

「フフツ、わかりました。——頼りにしてますよ」

行人は軽く手を振って、女子寮の屋根を下っていく。

「……あ」

その時、二人は心の中で叫んだ。

(なんでお前が^{先輩}ここにいるんだよ!?)

(まずいまずいまずい! 今ここで女子寮の自警団に報告でもされたら確実に死ぬ! とにかく意識を逸らさねえと!)

(こんなところで先輩と会うなんて思わなかった……とにかく誤解を解かないと! ——でもなんて説明すれば……)

先に口を開いたのは行人だった。

「——あーお前天霧だよな? いやーこんなところで会うなんて奇遇だなあホント。意外と散歩好きだったり?」

「え？ まあ散歩は好きな方ですけど……」

「あーそっか。やっぱ夏の夜つてのは風が涼しいからなー。そういうのにもちようどいいし、つい外に出ちまうよな」

「……あ、はい、まあそうですね……」

（……と、とりあえずなんとかなったか？）

かなり無理やりだが、はち切れんばかりに脈動する心臓を抑さえ込みながらここまでやったのだから誉めてほしい。というかこれ以上はもう無理だ。

「……えっと、永見先輩も散歩ですか？」

「ああ、部屋にこもりつきりだとたまに病みそうになるからな。適度に外の空気を吸うと心がスツキリする」

嘘ではない。ストレスがマツハなときは別のことで気分転換をする。やっていることの効率もよくなるし、こうでもしないとやりきった後の反動で再起不能になることがあった。

「少し意外ですね。クローディアからあまりそういう話を聞いてなかったのだから」

「……なんて言ってた？」

「何かをやることはできるけど、やるときしかやれない男。なんて言っていました」

おのれクローディア。的を射ているから反論できないじゃないか。

それからというものの、男子寮に向かう間は結構会話が弾んだ。身の上話とか新しいクラスだとか、新入生となら妥当な部分をよく話した感じだ。話し慣れてくると心臓の鼓動も落ち着いてきて、自然と話題が出るようになっていた。

「にしてもなあ、よくあの焦げ肉製造機に付け込むことができたよなお前」

「付け込むって……焦げ肉まではいつてませんでしたよ。強いて言うならウエルダンぐらいです」

「いやマジで焼いてたのかよあいつ……」

多分だがあれから担任のお叱りが入ったばかりだろう。そこから破るまでの期間が一週間いかないのはどういいうことなんだ。

「……先輩は、ユリスとは友達なんですか？」

ふと、苦笑いしていた綾斗が尋ねてきた。

「どうした急に」

「初対面するとき、結構仲がいいように見えたんですよ。ユリスはクラスでも一人のことが多いですし、先輩も知っての通りあんな性格ですから、少し気になって」

「……友人関係かって聞かれれば、それは違うと思うな。かといって顔見知りってわけでもないし……」

さて、どう答えたものか。他人の事情を軽く話すのはプライバシー

に関わる。かといって変に誤魔化しても誤解を与えかねない。

「——わかんね。比較的知り合った仲の他人だろ。多分」

「そんな適当な……」

どうやら天霧は真面目くんのようだ。こういった言動には乾いた反応しか返ってこない。

「別になんだっていいだろ。あいつと向き合えるやつなんてそうそういないし、少し話せるだけでも中々だと思うが」

ユリスが頑なに周りの干渉を嫌うのは周知の事実。ちよつとした雑談すら断るほどで、一時期はそれがきっかけで挑戦ラッシュが起きた。

聞いたときは本当に驚いたものだ。後に大体の事情を知ったため行動はわからなくもなかったが、さすがにやりすぎだと何度思ったことか。

「お前から見たらどうだ？　ユリスの近くにいるやつって貴重だから気になるんだよな」

「俺からですか？　……真面目で不器用で、でも優しそうだなって思います」

「……へえ……どんな？」

「……出会いはまあ、最悪でしたけど……でも学園や町の案内はちゃんとしてくれるし、不器用でもしっかり応えようとしてくれる。……俺は嫌われてるから、あっちからはいい印象持たれてないと思います」

けど」

また同じような苦笑いで綾斗は質問に答える。絵になるほどしくりくるコンビだったくせに、よくもまあ言えたものだ。——だが、

「……そうか。それはちよつと意外だな」

それだけ見ているなら、きつと大丈夫だろう。

もしそれが仮初めの何かだとしても、それだけのことだ。

「つと、そろそろだな。じゃあな天霧」

事件

「んー！……そういやよく眠れてたんだよな最近は。こんな清々しかったのは久しぶりかもしれん」

休み明けで誰もが落胆する週の始め、だが行人はそれにも関わらず妙に気分がスッキリしていた。全ての授業を寝ずにこなしたことでクラス中がざわついたが、正直自分が一番驚いている。

これも昨日一昨日と続いて比較的早めに寝たからだろう。疲れきって、休みたくて、いち早くベッドに突っ込んだことはよく覚えている。

まあそれでも、結局早く起きすぎたせいで最後の授業が終わった瞬間に一時間ほど寝ていたが。

やはり慣れないことはしないほうがいい。そのせいでまだ明るいとはいえ、着々と夕陽が照ってきている時間だ。今日は予定もなかったため自由に過ごすつもりだったというのに。

「……帰るか」

誰もいない教室でそう呟き、席から立ってドアに手を掛ける。携帯端末が鳴ったのはそれと同時にだった。繋げてきたのは……

「——はあ……もしもし？ 一体何の用だクローディア？」

また厄介事を持ってこられるのかと思い、伝えられる前に突っぱねようとする。近頃は休みもなしで、昨日は特に大変な一日だった。もうそろそろ休みたいところだ。

『——先輩？ 緊急事態です。出入り口に綾斗は見えますか？』

「？ 走ってるのが一応見えるが……、——何があつた？」

だが切羽詰まったような声色に、大体の事態を察する。『緊急事態』なんて言葉をクロードイアが使うとは、よほどのことがあつたのだろう。

『ユリスが単身で、例の犯人の元に向かつてしまいました。先に綾斗を向かわせましたが、《黒炉の魔剣》セルベレスタを持っているとはいえやはり危険です』

やはりか。あのお転婆姫め。いい加減人に頼ることを覚えた方がいいんじゃないか。

「それで？ お前としては俺をどうしたいんだ？ 天霧に直接加勢した方がいいか？」

戦力差を心配しているのであれば、小細工抜きに助力するのが手っ取り早いという確実だ。

相手の戦力は未知数。加えてバックには他の学園の力がある。ならばこちらにも相応の戦力を送ればいい。単純だが、それが一番効果的だ。

『いえ、人形を使ってくるのが相手のやり方なのであれば、相性を踏まえてもそちらの心配は不要です。いくらスペックを上げようと、《黒炉の魔剣》セルベレスタは防御不可能、あまねくを焼き切る強力な純星煌式武装オーガルクスですから』

なるほど。その言い分には一理ある。敵が人形での攻撃を得意と

しているのであれば、その特権である装甲全てを無意味とするあの魔劍は、まさしく天敵となる。

「じゃ、今回俺は監視や後始末か？」

『ご明察です。先輩のおっしゃった通り、今回はそちらを担当していただきます。当のアルルカントから茶々が入らぬとも限りませんからね。位置情報はそちらに転送してあるはずですよ』

「了解した」

大方を把握し、早速地図を見ながら、学園を飛び出すべく廊下を走り抜けようとする。

『……そうそう先輩。——あの子のこと、忘れないでくださいよ？』

「——了解した」

「——こちらヴァニティ……なあ、このコードネーム使わなきゃダメか？」

『そりゃそーですよ。てか折角ネットで調べてきたのに、使わにやもったいないんすから』

右手の通信機から、ボイスチェンジャーを間に挟んだ声が聞こえて

くる。

クローディアからの指示から暫くして、こちらは所定の位置にいた。具体的には、ユリスと犯人がいる廃墟の手前付近といったところだ。それなりに高いところにいるため、探そうと思えば彼女らを探すこともできる。

先に向かっていたという影星からさらに綿密な位置、地形、その他必要そうな情報が送られてきたことで、位置取りはかなり楽だった。

正確には、そのメンバーの内の一人からだ。

『第一、感謝してくださいよー先輩？ 会長さんのご指示とはいえ、本来影星の任務は極秘事項。一般生徒である先輩に伝えたのバレたら、俺も先輩も一貫の終わりですからね？』

今現場付近に潜む影星は彼を入れても三人程度とのことだが、そのいずれかに露見すれば、行人はなんらかの処理を受け、無線機の奥のやつも重い処罰は免れないだろう。最悪二人揃って始末される可能性もある。それはわかるのだが、

「いやそれとこれとは関係ねえだろ」

『互いに名前を呼ぶならいいとして、自分が誰か名乗るときにバレたらヤバイでしょ？ 予防線ですよ』

「せめてもつといいやつねえのかよ？ なんだよヴァニティつて。余計なお世話だわ」

『いやなんで大学レベルの英単語知ってんすか……』

v a n i t y
ヴァニティ……直訳すると虚飾心、空虚を意味する単語である。ちなみに、以前行人がネットサーフィン中に見つけたとある人物の二つ名の一部でもあったりする。

兎にも角にも、無線機から聞こえる声の主は、このコードネームを変えさせる気はないらしい。理由の筋自体は一応通っているため、今は深く追及しないでおく。ついでに相手のはミカゲ^{御影}。適当とはいえ、ネーミングセンスどうなってるんだ。

『と、とにかくですよ？ 俺ら影星は諜報機関であって、荒事はあんま得意じゃない。なんで先輩は、一番荒事が多そうな目標の廃墟を監視しててください。露払い程度ならこっちでもできますし。後で犯人確保中の俺と生徒会長さんと合流するってことで』

「さりげなく話題を逸らされた気がするんだが……ん？ ってオイ！」

あの野郎勝手に通信切りやがった。何故クローディアはあんなやつと関係を結んだのか。ブーメランだがちよつとした謎だ。

「……誰もいねえなあ」

周りを見回しながら、行人は思わず口にした。

影星は数人がここを囲むような配置をしており、主に通りかかった人を気づかれずに追い払ったり、援軍として来た敵の報告、対処を主な任務としているらしい。

初見でこれを抜けることは困難だろう。ついでに自分は後から来たが、配置がわかつている分ちようと抜け道を通ることができた。

この状況のため辺りは誰一人いないと錯覚するほど静かで、夕陽によつて際立つ薄闇はより不気味さを増している。

……難しい言葉で表したものの、実際に感じるのはそんな詩的情景ではない。

それなりに時間が経つたとはいえ、綾斗は影星の情報を受けておらず、自分のようにすぐここにたどり着くことはできない。——ぶつちやけ暇なのである。

「武器の確認でもしとくか……」

短剣、拳銃、突撃銃、手榴弾、閃光弾……自身のホルダーから煌式武装ルークスやそれ以外の装備品を取り出し、一つずつ動作や状態を確認していく。

「あつ……」

その過程で、その内の一つがなくなっていることに気がついた。

「はあ……はあ……」

綾斗は再開発エリアを走り抜ける。学園からここまでほぼノンストップだったが、多少の息切れなど一切気にしない。

クローディアから送られた地図によれば、おそらく今から向かうところが最後だ。最後までハズレを引き続けるとは、こんなときに限つてなんとも不運だと自分でも思う。

「あれは……?」

そんなこんなで路地を走っていると、そこに三人程度の集まりを見つけた。どうやら煌式ルークス武装を持って何かと話しているようだ。

「——へへっ、嬢ちゃん。こんなところで一人なんて危ないぜ?」

「そーそー、俺らみたいなのに捕まっちゃうかもしれないからねー。あ、もう捕まっちゃってたか」

「……はあ」

ここまでほとんど人を見なかったが、その分のツケが回ってきたのだろうか。実際の光景を見るのは初めてだが、このような行為が本当にあることを踏まえると、やはりここは危険な都市なんだと改めて再認識させられる。

だが言い方は悪いが、ちようどいいと言えばちようどいい。クローディアから渡されたこの武器オーガルクスを試してみる絶好の機会だ。

「!・なんだテメエ!」

そのままの速度を維持したまま例の純星煌式セルベレスタ武装を起動し、一気にチンピラ共に急接近、そこで彼らの煌式ルークス武装を全て叩き切る。

結果全員がやや泣き顔になりながら、決まり文句すら口にせず踵を返し姿を消していった。

「それにしても、本当に焼き切るんだなあ……」

そうして手に持つ純白の刀身の純星煌式オーガルックス武装を見つめる。

刀身は絶えず熱を放っており、その余波は使い手にすら届く。振るった刃は実戦用の煌式ルックス武装をもともせず、もはや振らずに当てるだけでもよかっただろう。

防御不可能の魔剣。『触れなば溶け、刺せば大地は坍塌と化さん』。まさにその通りだ。恐れられるのも納得である。

「つと、君、大丈夫かい？ 怪我はない？」

ハツとしてチンピラを追い払った理由を思い出した。助けようとしていた人物を見て、そちらに声をかける。

その姿を見て、襲われていた理由に少し納得してしまった。襲われていたのは少し深々としたパーカーの女の子だ。真っ白なロングヘアと白い肌がとても特徴的で、ほぼ純白といっても差し支えない。

顔は童顔であどけなさが残る。しかしそれは、いつの間にかフツと消えてしまいそうな儚さと人形のような無機質さ、そして透明感を纏っていて、見た目より数段大人にも見える。

連中の言葉で表すなら、めったにお目にかかれない上玉、というようなつなのだろう。

「——うん、ありがとう。おかげで助かったよ」

「それならよかった……」

どうやら怪我はなかったようだ。これがあと一步でも遅れていたら、さらに大変なことになっていただろう。

「助けてくれてありがとね。それじゃ——」

手を振りながらそう言い残して、彼女はその場から帰ろうとしたが、

「……どうしよう。道がわかんない」

「えっ?」

入り組んだ路地をキョロキョロと見回してから、彼女はさらに口にした。ここは道がこちらこちらへ交差しているので、いつの間にか迷ってしまったのだろう。

「……えっと、だったら俺についてくるのはどう? 俺も詳しい訳じゃないけど、一応地図も持ってるし、一人で帰るよりは安全だと思うけど」

また襲われることがないとも限らないうえ、迷っているのを放っておくというのもなんだか忍びない。

「いいの?」

「あー……ちよつと急ぎの用事があるから、すぐにとはいかないけど」
「ありがとう。ならそうしてくれると嬉しいな。あ、道がわかったらそこまでいいよ。そうしたらあとは勝手に帰るから」

それは大丈夫なのか少し不安になったが、ここで足止めを食らい続けているのもまずい。とにかく了承して、綾斗は先を急ぐことにした。

「——それで？ 用事というのは何か聞かせてもらってもいいかな？ 事によつては手伝えるかもしれないし」

「……ごめん、それは言えないんだ」

走りながら手伝いを申し出られたが、綾斗はそれを断る。

確かに申し出はありがたいが、これは大変危険なことのため、見ず知らずの人にはとてもじゃないが頼めない。もし彼女が綾斗より強者だとしてもだ。

それに、本来はユリスが一人で片付けようとしたことだ。うかつに規模を大きくしては、またユリスに怒られかねない。

「そつか。それは残念だね。——それで、君の用事ってあれのことかな？」

「え？」

その言葉を受けて、遠く指差された方向に目を向ける。するとそこには、電灯とはまた違った灯りが廃墟の隙間から見えた。

「っ！……あれは！」

間違いない。あの煌めき、この都市に来て最初に食らった技と同じ、あの炎だ。

「——はあッ！」

足に星辰力を込めて、それを一気に解放し炎が見えた場所まで跳躍する。——もう二度と、大切な人を失わないために。

「——ごめん、遅くなった」

「……そういえばここら辺だったかな。意外と遠くに行ってなかったんだ」

少女はかの少年が跳んで向かった廃墟を見つめ呟く。

ちよつと外を見たいと思って抜け出したら迷子になって、でも実際は全然離れていなかった。いやはや、錯覚とは恐ろしいものである。

「あれ、でも……あれ？　どの辺だったかな……」

だが迷っている事実だけは、どうやら全く変わってなかったよう

だ。これなら以前勧められた端末をもらっておいた方が良かった。

「……とりあえず上に行ったらいいかな」

廃墟から鳴り続ける轟音には興味も持たず、少女は近くの建物を登っていった。

落差

「——やめろおおおおおおおおおッー！」

「…………こちらヴァニティ。屋上から真つ逆さまな目標を視認した。なお、天霧たちに被害が及ぶような攻撃、またはそれを行う人物は確認できなかった。よってそちらの指示を求める。オーバー」

ジエネステラ
星脈世代でもただではすまない高度から落下する陰キャを目で追いなながら、行人は無線機で指示を請う。

それまでは綾斗の戦いぶりを観察しながら周囲を警戒していたが、途中から目的が前者に移ってしまっていた。

《セルルベレスタ黒炉の魔剣》の強力さにも驚いたが、それ以上に驚愕だったのは天霧の戦闘能力だ。純粹な力、武器を振る速さ、それを操る技術、そして溢れ出るほどの星辰力フラーナの量。見た限り全ての域で高水準だった。

確かに《セルルベレスタ黒炉の魔剣》による助力もあつただろう。だが仮にそれを使っていなくとも、おそらく並の学生では十秒持つかもわからない。なにせ彼は純星煌式オーガルクス武装の力あれど、ユリスを抱えた状態のまままで百体以上の人形を倒したのだ。その事実には偽りはない。

その上恐ろしいのは、おそらくだが伸び代がまだあるであろうことだ。あの状態でも、まだスペックを最大限引き出しているようにはまだ見えなかった。

刀藤綺凜
鍛えればアスタリスクにおいて新星、アーネスト・フエアクロフ 剣 聖、オーフエリア・ランドルフ 最 強
にも勝る可能性がある。凡庸の極み？ そんなものではない。稀に見る才覚を持った、いわば超弩級の原石のようなものだ。

『ごちらミカゲ。あー了解です。それなら次はそいつの落ちたところに向かってください。会長も向かっているのです。そこで落ち合いましよ。……てか意外とノリノリじゃないですか先輩』

「んじやーなー」

『え？ ちょっと反応くらいしてくれてm——』

どうだ夜吹、ぶつ切りは結構心に来るんだぞ。これに懲りたら自重することだな。

ちよつとしたおふざけをかましてから、背の低い建物を縫って目的地に向かう。落下点は廃墟の裏口らへんだったはず。自分も呼ばれる理由は、基本的に不慮の事態への考慮だ。なので、また上方で待機する方が都合がいい気がする。

道中であれを探すのも考えたが、正直今回はあれがいなくとも大丈夫だろう。この目で実際に見て、やられた本人に継戦能力は残っていないのはわかっている。なんせ奥の手も切った上で負けたのだから。

「どーもどーも先輩。いやーひどいじゃないですか。あれが可愛い後輩に対する仕打ちですか？」

「うっせ自業自得だろ。てかお前もここにいんのかよ。上でスキャンダルでもしてろよ」

手頃な場所を発見してそこに向かったが、それより先に夜吹英士郎が潜んでいた。学園の諜報機関である影星と同じ思考をできた……と、考えれば聞こえはいいが、新聞部もといスキャンダル部というえげつない部活動員と同じということだ。気色悪いつたらありやしない。

「いや取材って言うてくださいよ……それはそうと先輩。その話、あとで詳しく聞かせてください」

ニヤリと笑みを浮かべた顔はやはり気色悪い……天霧とリースフェルトの情報は、後で大金せしめて売ってやろう。大事な収入源は見逃したくない。二人は固い握手を交わした。

さて、場違いすぎる会話を終えてから、二人は任務に戻り目線を下に移す。

「おっ、見えた。あれがクロードディアと、襲撃犯のサイラス・ノーマンか」

ちょうど夕日が不気味に映るところで、《パンIIドラ》を構えたクロードディアは幽鬼のごとく現れた。サイラスはテンプレのセリフを吐きながら時間を稼いでいるが、無力化されるのも時間の問題だ。

「ですね。レスターの取り巻きですし、星導館じゃそれなりに有名な部類の人物ですよ。これが露見したら、一体どうなりますかねえ」

「多分、あいつがそんなことを……!? みたいな感じだな」

「さてさてー? 一体どうなることやら」

英士郎にとってこの事件は、結末よりも過程でどうなるかが一番楽しみらしい。仮にもエージェントがそれはどうかとも思うが、個人の感覚に意見する義理はない。行人はそつとしておいた。

(さて、本当に何も無ければいいんだが……)

「う、うわああああああああ!!」

突如取り乱してサイラスはナイフを投げる。しかしクローディアにはまるで通じない。そもそもの実力差が開きすぎているのだ。

(……終わったな)

「やめ、やめろ、やめろ……やめろおおおおおッ!」

——誰もがそう思っていたその時、辺りが轟音に包まれた。

「のわっ……! ——なんなんだ今のは……?」

よろけた体を引き戻してすぐ下を確認する。今のは上から何かは落下したことによって起きた揺れだ。だがそれほどの質量、一体どんなものが降ってきたのか。

「あは、アハハハッ……アハハハハハハアッ!! どうやら運は僕に味方したようですねえ! 生徒会長様?」

サイラスは態度を一変させ、先の戦闘と同じような高圧的で自信家な口調に戻る。

それはサイラスの操る人形とは違った。精巧だがほとんど骨組みだけで、しかしそれ故に一目でわかるほどメカメカしく無骨な外見。

目測で二メートル以上の体躯と、それと同じ大きさのハンマーを持っている。まさに戦闘用という言葉がふさわしいロボットだ。

「やっぱり僕は見放されてなかった！　これでアルルカントに保護してもらえば、僕は——」

サイラスはそこまで言いかけたが、現実には彼の思惑通りにはいかなかった。味方かと思われた擬形体パベットは、サイラスの方を向く。

「な、なんで僕を見る……？　敵は、あ、あっちだぞ？」

なぜかわからない行動に、また腰を抜かして怯えるサイラス。もしあれの攻撃を食らったとして、今の彼では致命傷じゃすまない。しかし骨折と恐怖で動けないサイラスに成す術はない。尻を着いて後ずさりするのが精一杯だ。

「い、嫌だ……死にたくない……！」

擬形体は怯えるサイラスにゆつくりと近づき、巨大な武器を頭上に構える。そして、

「なんでなんだあああああツツ!!」

行人はその擬形体を目掛けて飛び降りる。その際、夜吹の持っているブレード型煌式武装ルークスを無断で引き抜いた。

「夜吹！　これ借りるからな！」

「え？　いや、ちよつ!？」

それに続いて夜吹も低空スカイダイビングに参加する。

(間に合えよ……)

当の擬形体はすぐにでも武器を振り下ろしそうで、もはや迷っている暇などなかった。煌式^{ルークス}武装を展開し、体を限界まで捻る。そして、

「でえいやッー！」

自らと平行に振り下ろされるハンマーに向かい、軌道をずらす形でブレードを無理矢理ぶち当てた。

「がはッー！」

「ヒ、ヒィィ!!」

なんとかサイラスには当たらなかったが、本人は足を引きずって逃げてしまい、行人も体勢を崩し背中から落下してしまった。吸収できなかった衝撃が体を突き抜け、肺の空気が押し出される。それと同時にヤバいものも出てきそうだ。

「オエツ……ク、クローディア。ここは俺が持つから、お前は夜吹と、あいつを追え……」

必死に吐き気を抑え込みながら、おそらくサイラスが逃げたであろう方向を指差し弱々しい声を張る。

「大丈夫なんですか？ その体じゃさすがに……」

「誰かの前で吐くって、俺は無、えっぷ……」

なんとか強がってはいるが、正直なところ限界が近づいてきてい

る。しかしあのパラッチ野郎がいる前でだけは吐きたくない。その意思が、色々なものをすんでのところで閉じ込めていた。

「わかりましたけど、無理なら手を引いてくださいよ？ 先輩」

「わーっただから早く……うえ……」

最後の忠告を節目に、二人はサイラスを追って全速力で走り出した。それをしっかり確認して、行人はポケットに詰め込まれていたコンビニの袋を取り出す。

「◎△\$♪×?・●&%#——!! ハア……ハア……」

数年ぶりに胃袋のものを吐いた気がするが、とりあえず出すもの出したことでとりあえずは収まった。まだ気だるさは残っているものの、さすがにそうも言つてられないのが現状だ。

「てか、よく攻撃してこなかったなお前……」

吐瀉物で満杯の袋を置きあわてて距離をとったが、それに対して擬形体は自然体だ。ずっとこちらを見てくるので、こちらを観察しているように見えなくもない。

だがそれならそれで好都合だ。相手が攻撃してこないのであれば、こちらが先手をとれる。

(つて、そりゃ攻撃するわけねえなこれじゃ)

そう思い込んでいたのも束の間、ブレードは刀身がやや欠けて点滅してきている。弱々しく、いつ失くなくてもおかしくない状態だ。

しかしそれでも理由が知れなかった。あの陰キヤサイラスを始末しに来たのなら、負荷を抱えた行人など強引に突破して追えばいい。

だがこれではクローディアたちに先を越されてしまう。それも確実に。行動の意図が読めない。何か別の目的があるのか。それともただ単にポンコツなのか。

如何にせよ問題なのは、今行人の手にはまともな武器がないということだ。いやあるにはあるのだが、相手がアルルカント製の擬形体パペットだとして、手榴弾以外の手持ちは傷を与えられるかも怪しい（その手榴弾も二個しかない）。

試しにライフル型煌式ルークス武装を起動し弾を撃ち込む。しかしさすがアルルカントというべきか。装甲には凹みすらついていない。

そしてこちらの攻撃を合図に、例の擬形体はハンマーを構えながら接近し、その勢いのまま振り下ろして反撃を開始した。

それ自体は単調で比較的簡単に避けれるが、被害を受けた地面はヒビが入っている。攻撃力は想像以上に高い。やや力任せな連撃を躲しながら、光弾をライフルの代わりに取り出した拳銃で撃ち込んでいく。

「にしても！ よくこんなやつが！ ここに入つてこれたもんだなッ！」

それに慣れてくると、行人の頭にまた一つ疑問が浮かんできた。

影星が警備しているというのにはいるというのには、そいつらはもう倒されたと考えた方がいいだろう。他の人員はクローディアと英士郎だが、まだサイラスを追っている最中だ。つまり援軍は期待できない。

い。

ついさつきまで終わったな……とか頭の中でほざいてたりした自分とかその他諸々を、今すぐ過去に戻ってぶん殴ってやりたい気分だ。こちとら猫の手も借りたいというのに。相方が方向音痴だったことを、これほど不幸に思ったことはない。

「おわっ！」

徐々に擬形体パベットの攻撃は頻度が増し、精度も高くなってきた。迫ってくる巨大な体はさらに圧が強くなり、それにより行人は判断を誤って廃墟の中に追い詰められてしまう。

「殺し屋ならぬ壊し屋かよ……しかも破壊ってか粉碎だし」

反応はない。さて、この状況をどう打開すべきか。個人的にはこういうパワータイプが一番怖いのだ。当たれば一発KOなんて、考えただけでも嫌すぎる。しかもどんどん正確になっていくときた。

仕方がない。ここぞのために温存しておいた閃光弾を使うことに決めた。が、

「……………うっわ最悪だ」

どうやら動いていた拍子にどこかで落としてしまったようだ。こうなってくるとかなり辛い。本当になんでもいい。何かないか……

(ダメだゲロ吐いたのしか頭に浮かんでこねえ！)

悲しきかな。ハンマーがこちらに向かってくるなか、ここまでの記憶で一番インパクトがあったのは、まさかの落下による嘔吐だった。

(……いやおかしいだろ!? 負け直前にゲロ思い浮かべるってふざけているのかあッ!)

アスタリスク中探しても、戦闘中にゲロを吐きゲロを思い浮かべるのは精々一人だろう。

「——あああああああああ……!」

……いきなり人が垂直に落下する戦闘も、おそらくこれだけだろう。

始動

「……………」

予期せぬ投下物によつて戦闘は一時中断されていた。行人はもちろん擬形体パペットすらがそちらを振り向き、落ちてきた人物を確認している。

「……………なんで脆くなつてるかなあ」

いやそれはおかしい。この廃墟の、しかも声の間こえ方からかなり上から落ちてきたと思うのだが、その少女は頭を搔くだけであまり痛がる様子はない。骨折どころか打撲すらない様子だ。

（てかあいつは——）

……兎にも角にも、擬形体に隙ができたのに変わりはない。手榴弾を近くに放ると同時に、股下を斬りつけながらぐり抜け、それからすぐに繰り出されたハンマーも飛び込み前転で避けて距離を取り直す。

これで窮地を脱することができた。どれも効果はなくブレードも衝撃に耐えきれず刀身を失ったが、発動体は機能を残してる。さらに幸運なことに、状況を打開できる一手というやつが見つかった。

「おい、一体どこほつつき歩いてたんだ？」

「あ、ちよつと近くをね。外に出たのは久しぶりだし、見たことない場所だったから」

予想通りの受け答えにイラついた行人は、そのバカの頭にげんこつ

でツッコむ。少しだけ頭をさすったが、やはり痛みを感じているからには見えない。

「……何してるのかな？」

「こつちのセリフじゃボケ。まずはその方向音痴をどうにかしろよ」

「なら前に言ってたの持たせてよ」

「お前いらないうって言ってたじゃん」

「えー……」

反省の色はない。ここぞの場面でフラストレーションを発散するのは本当にやめてほしいのだが。もう適度に外に連れていくしかないのか。悩ましいところだ。

そんな気の抜けた会話に我慢できなかったのか、擬形体はこれまで以上に唐突に攻撃してきた。

「……で？ これを倒すのに、私はどうしたらいいのかな？」

二人で廃墟の外に逃げながら、少女はこちらに問う。

「いつも通りだ。色々やって、最終的に敵を倒す……もう言わずもがなじゃないか？」

そして少しだけ笑みをこぼしながら行人はその問いに答え、互いの手を握る。すると行人の手には、いつの間にか発動体が握られている。少女と同じで真っ白なマナダイトを持つ、純星煌式武装オルガルスの発動体だ。

『さて、ここからどうするのか。楽しみにしてるからね』

頭の中にその純星煌式武装の音が響いてくる。しかしそんなラノベ的状况でも、当の行人の頭は苦悩していた。

……やべえどうしよう。正直なところ、目眩ましに使えるものがないのを失念していた。大見得切ったくせに、一の矢を忘れていたなんて笑い話にもならない。

この純星煌式武装は攻撃力を増すような能力を持っていないため、一気にゴリ押すことはできない。かといって、現状最高火力である手榴弾もまだ使うときではない。なにせよ、まずは隙を作る必要がある。

(いや、あるにはあったな。——すんげー使いたくないけど)

それは人間なら生理的な意味で嫌悪するものだ。まあこの際仕方ないと割り切るしかないだろう。全速力である場所に戻る。擬形体パペットは目標が目の前の障害を叩き潰すことなのか、一切迷わずこちらに向かってくる。

何か仕掛けてたとしても猪のごとく突っ込んでくれるのだけが、敵がパワータイプ(というより脳筋)で良かったと思える。ただしそれが理由で負けたらまずそれを恨むが。

(あった！)

行人が見つけたのは、自身が放置したはずの袋だ。中に入っているのはもちろんアレである。

ライフル型煌式ルークス武装と純星煌式オルグルクス武装の発動体を手に持ち、手榴弾はホルスターに、例の袋は側に置く。これで準備は整った。

「……ほら来いよ。お前をバラバラにしてやるから」

さつきと同じようにライフルを掃射する。擬形体パベットは顔色一つ変えずに突っ込んでくるが、それでいい。むしろそうでなくては困る。夕イミングまで三……二……一……

「——おらよおッ！」

十分に近づいてきたところに、行人はライフルを捨てて袋の中身をバケツのように放り出す。刺激臭のある粘液はカメラがあると思われる顔付近に多く命中し、それによって擬形体の視界を塞いだ。

これで終わりではない。目眩ましが命中するとすぐに駆け出し、純星煌式オルグルクス武装を展開させて擬形体のとはまた違うハンマーにする。

「すっ転ベッ！」

姿勢を低くしながらもう一度股下に滑り込み、今度はハンマーを振り抜きながら、通り抜けざまに刃の無い部分を足に当てていく。猪突猛進な人型ロボットの足に何か引っかけたとなると、

「——!？」

そいつはつまずき膝を着いて倒れ込む。

まだ終わりじゃない。次は純星煌式武装を貫通力が高い長剣へと展開し直す。そして倒れている背中の上に立ち、全体重をかけて何度も装甲に突き立てた。仮にも特別な武器だ。単純な性能だけで見て

も通常の煌式武装より上なため、堅牢な装甲でもギリギリ突破できる。

「あとはこれで……よしー！」

仕上げに手榴弾のピンを抜き、穴にそれを埋め込み体から離れる。擬形体パベットは体を立ち直してからまたこちらを向いたが、その時点で既に遅かった。

手榴弾は内部で爆発し、擬形体の中身を粉々にする。その音が聞こえると同時に、高性能な機械はただの鉄屑と化した。

「倒した……か？」

予想以上の威力で弾け飛んだ残骸を確認し、行人はようやく腰を下ろした。

「——ああああ疲れたああああ……」

とにかく疲れた。戦った時間は普段と比べても大差ないぐらいだが、それよりも敵の圧がすごい。ゴツイロボットがターミネーターの如く襲ってくる状況なんて、アスタリスクでもそうそう起きない。

他には自分の戦法が心にきているのも原因の一つだったりする。吐瀉物を使って戦うなんて考えが今となってはヤバい気がするし、何か人間性にくるものがある。

これらの影響もあって、今の行人は大きな疲労や脱力感に見舞われていた。さっさと報告して早く寮に帰りたい。

「もしもしくローディアか？ こっちの仕事は終わったがそっちはど

うだ？」

帰路を急ごうと、足早に路地を抜けながら端末を開く。しかし、返ってきた言葉はどこか上の空だった。

『……あ、はい、すいません先輩。それでどうしましたか？』

「いや、だからそっちはどうなった？」

『えっと、こちらは大丈夫です。また明日落ち合いましょう』

「は？ いや待て——」

端末から音がブツリと聞こえ、クローディアから通話を切られてしまった。何かあったのかもしれないが、再び繋ごうにも返事がない。行人は新たな謎に困惑するばかりだ。

「一体何なんだ……？」

場所は変わって、ここは再開発エリアの先とは違う区域。そこにいるのはクローディアに英士郎、それから縛り上げられたサイラスと、

「——んー！ んー！」

「ちよつ、いい加減落ち着けて！」

押さえつけられながらも必死に暴れている少女だった。

「なあ会長！ ホントにこの子で合ってるんですよね!？」

「……はい。この子が、捜していた人物で間違いありません。できれば傷つけずをお願いしたいのですが……」

クローディアはそう言うが、少女はほとんど錯乱状態で話を聞いてくれそうにない。捕まえてからここに来るまで十分以上経つというのにこれなのだ。手を出さずに無力化するのはかなり難しいだろう。

「お願いします」

「了解っ！」

「——ッ！」

指示を出されたとほぼ同時に、少女の鳩尾を打ち気絶させる。無抵抗の相手をやるのにどこか思わないでもないが、これも一応任務だ。今度謝るから我慢してくれ。

「にしても、一体どういうカラクリですか？ 知人に頼んで手を増やしましたけど、それでも普段の二〜三倍はかかりましたよ」

少女から手を放しながらクローディアに問う。

今の時点で英士郎にとって一番の疑問はそれだ。今日の任務は影星を通した、ある意味公式の依頼。故に英士郎は、比較的顔見知りである人物に協力を頼み人手を増やしていた。

だがこの少女は、影星の人員を持ってしても簡単には捕まえられなかった。腕利きが揃っている精鋭（自分で言うのもなんだが）が相手をしているのだからだ。

当の少女は中等部二年。一年からいたとしてもそれしか経っていない。その上本人は決闘を好まず、アスタリスクに来る前の実戦経験もない。そうなることややはり魔女ストレガなどの能力が疑われるが、

「……隠しているわけでもないんですよね？　能力不明って、正直なところ怪しすぎますよ」

そう、クローディアは英士郎にすら、その情報を教えなかったのだ。

影星は星導館学園もとい統合企業財体の管轄であるため、普通の学生よりは上位の情報アクセス権を持たされている。日陰者な部類である英士郎であつてもだ。

そこには個人のデータも少なからず含まれる。だがその権限を持つてしても能力は判明しなかった。あるのは魔女であるということと、能力不明という記述。そしてクローディアはその生い立ちから、影星より調べられる情報量が多い。

これだけの条件があれば怪訝になるのも当然だろう。

「でしょうね。ですが生憎、私のところでもそうだったデータは見つかっていません。なにしろ彼女は、その力を表舞台で見せていませんから」

どうか。いつものような真意を掴めない笑みで、淡々とそう言われても信憑性に欠ける。つまり知りたいなら自分で調べるしかない。そういうことだ。

「……とりあえず帰りましょうや。あんまり長くいると怪しまれますし。その子はそっちでお願いしますよ」

「ふふっ、了解です」

クローディアにやられてそこでのびているサイラスを雑に抱え、英士郎は機関へと向かう。さて、彼女は今後どうなることやら……

「——にしてもさーカミラ、人が造ったものに吐いたもの投げつけるってホント頭おかしいよねー」

いきなり話を振ってきたかと思いきや、珍しく不機嫌かつ予想外な言葉にカミラは一瞬硬直した。いや、急なこと自体はよくあるのだが、食事中の話題としては合わなすぎるだろう。

「……どうしたんだエルネスタ。そんな唐突に」

「いやね？ あのこと……サイスくん……だっけ？ にさ、あたしの人形渡して色々やらせてたじゃない？」

「ああ」

そのおそらく違う名前であろう人物の件とは、エルネスタが自分の人形のテストのために利用していたものだ。少なからず自分も携

わっているの、そのことはよく憶えている。

「それでね？ ついでにあれの試作品を送り込んでみたのよー」

「……あの擬形体パペットのことか？ いやだがあれに使える分のAIはもう——まさか既製のものを使ったのか？」

「まあねー。ちょっと惜しいけど、中身の回収なら遠隔で移すこともできるし、彼にとつても先行体験みたいになるしね。もちろんボディには処理用の起爆装置も着けてたから安心！ ……まあ思わぬ形で発動したけどねー」

とりあえず大体の事情はよくわかった。とどのつまりエルネスタは、自身の創作物を汚されて怒っていたのだ。

なんとと言うおとも、擬形体は戦闘や業務に扱われるだけのものがそれが現状で、エルネスタもそこは理解しているはずだ。そこで何かが起ころうとも、送り出した時点で何かを言う権利も、言われる筋合いもない。

……ないのだが、同時にエルネスタは擬形体パペットを深く愛あしている。それを承知していたとしても、好きなものを破壊され、挙げ句の果てに吐瀉物を掛けられたとなれば怒るのも当然だ。

エルネスタ自身も態度は崩していないが、内心はかなり怒りの炎が燃え盛っているはずだ。長年の付き合いによる感覚だが、彼女の笑みの中にはそんな迫力が見え隠れしている気がする。

「次はこうはいかないからねー？ ——名も知らぬ誰かさん」

いつもと同様に無邪気で冷徹な、だがそこに怒気が混ざった笑顔

で、エルネスタは誰に言うでもなく呟いていた。

「…………お前は？」

「…………白江利奈です」

「そうか。——これからよろしくな」

なぜなに!? アスタリスク 外伝 壺

行&? 「なぜなにアスタリスク」

行「えー、どうも。この作品の主人公を務めさせてもらっている永見行人です」

? 「アシスタント役の???です。……ねえ、私の名前すごいボカされてるんだけどなにこれ」

行「いや、まだ明かされていないキャラの名前出せるわけないだろう常識的に考えて。しばらく我慢してなさい。さて、このコーナーは、読者の方々がおそらく抱くであろう疑問について前もって解答を置いておくという、作者のバカな思いつきによって作られたものです」

? 「ついでに付け加えると、この回での私たちと本編の私たちはまったく関係ないからね。あ、基本的に行人が作者の代弁。私がそれに応える人だよ」

※場合によって異なります。

行「じゃー記念なのか判断しかねる最初の議題はー?」

『なんで純^{オー}星^{ガル}煌^ル式^{クス}武装が実体持つてんの?』

? 「……これ、リメイク前にも一回言われてたよね」

行「作者がそれを始めた理由の一つでもあるな。八話の前書きにも書いたから大体の人は察してるか? えーメタ的な話すると、最初は人間と人外の違いを書きたかったからだな。他にもあるアニメから影響を受けたのが事の発端だったりする」

？「まず君は墓守じゃないでしょ。それに性格違いすぎだし、人になる設定は原作にもなかったけどね」

行「言うな。作者がヤバい人ってバレるだろ」

？「確か原作の、純星煌式武装には意思があるってところと、煌式武装ルークスの原理を見て思い付いたんだっけ？（無視）」

行「だな（便乗） といつてもややこじつけ気味だけど。まず煌式武装は周囲の万応素マナを集めて武器の形を形成してる。ここは原作の用語解説にも載ってるぞ。んで、それは核となってるマナダイトに記憶させた形によつて変わる。剣だったら剣の形に、斧だったら斧の形にな」

？「つまり、マツハでできる鑄造みたいなものなんだね」

行「合ってるけど余計分かりにくいな。？の言い方で表すと、要するにマナダイトという鑄型に、万応素という金属を流して出来てるのが煌式武装つてわけだ」

？「……なんか、気持ち悪いぐらい設定読み込んでるね」

行「設定厨（？）の性だな。興味が出てくるとwikiとか考察とかメチャクチャ見るタイプでもあるからこうなる。あー話を戻すと、つまりマナダイトに記憶させたものが人の体であるなら、煌式武装または純星煌式武装オルクスが人型であつてもおかしくないんだよ」

？「でもそれだったら、擬形体とか代用できそうだけど」

行「それは無理だつて作者は考えてる。煌式武装で用意できるのは

体だけで、自我は複製できないから。さっきの例で言うなら、どんだけ鑄造とかの技術を駆使して人間の体型、骨、内臓、血管、その他諸々を全て再現したとしても、人間同様に動くわけじゃない」

? 「なるほど?」

行「まあ作者の説明力では難しいと思うから、とりあえずちゃんとした設定があつてのことなだけ知ってくれ。そうすれば大丈夫だ」

? 「多分そういう意味じゃなかったと思うよそれ。ーとにかく、私の存在は原作、オリジナルの両方の要素に関わってくるものだから。それは絶対に変わらないからね」

行「話が大体終わったところで、そろそろ終わりの時間だな。それじゃ次回もお楽しみにー」

? 「バイバーイ」

? 「……次回なんてあるの?」

行「知らん」

※あくまで作者の独自解釈な部分もあるので、そこには敢えて触れない方向でお願いします。

第二幕 志怖反発

相方

「——すまん。ちよつと先行っててくれ」

「え？」

「いいから。ほら早く」

自学園のトレーニングルームにやって来たが、珍しい客人が目にとまったため無理やり先に行くように促す。クローディアから聞いてはいたが、なんの偶然か思いの外早くに出くわすことができた。

「……すみません。失礼ですが、アルルカントの方ですよ？　なぜ他学園の方がここに？」

行人が見つけたのはアルルカントの制服を身につけた人物だ。大人の雰囲気は漂う褐色の女性で、冷静というかクールな印象を受ける。

「君は？」

「自分はトレーニングのために来た学生です。近々《フェスタ星武祭》が始まりますから、その特訓に」

予想外の反応にも応えられないよう思考を止めず、やや顔色を伺いながら、だがそれを悟らせないよう表面は自然体で会話をしている。

相手を侮るな。アルルカントは星導館に手を出してきた学園だ。いくら協力体制だとしても、寝首をかかれる可能性は十二分にある。

「そうなのか。私たちはちよつとした用事で来ていてね。アルルカント以外の学園はそうそう見れるものじゃないから、少し見物させてもらっていたんだよ」

「私たち？ 一人しか見えませんが――」

視覚障害が起きていなければ、自分の目の前に見えているのは一人だけだ。こんなところで冗談を言うはずあるまいし、辺りには見えな
いが他にもう一人いるのだろう。

「なに？ そんなはずは……エルネスタ、何をやってるんだ」

「いやーごめんごめん。やっぱり珍しいからついねー」

遅れて出てきたのはもう一人の女性だ……多分。体は先の女性とほぼ同じ（特に一部は飛び出るほど豊満）だが、対面から見せる無邪気な態度が子供っぽさを抱かせる。どちらかといえば少女の類だろう。

同僚かもしれないが、どちらかという姉と妹みたいな関係と言われたほうがしっくりくる。

「あれ、この人は？」

「ああ、彼は《星武祭》のためにここへ来たものだよ。さつきそここで会った」

「どうも。エルネスタさん……でしたか。自分は永見と申します。どうせなら案内したいところですが、なにぶん用事がありますし……」

「大丈夫だよそんなのー。この後別の用事もあるしさ」

まあ本音を言うと半分は嘘だが、もう半分は本当だったりする。なぜならこういった会話は、続けるだけでも好感を持たれやすい。

アルルカントは全学園随一の技術力を持ち、故に得られることも多い。それらを探ることを考えると、一定の交流を持っておきたいころではある。

「ですよね……まあ仕方ないです」

「それにさ、割り切ったとしても、人のもの壊す人とはちよつとねー」

……ん？

「えつと、なんのことです？」

「覚えてない？ ほら。ちようどいいところに袋の中身かけたの」

あ、ヤバい。これはマジの目だ。無邪気な笑顔なのは変わらないが、なんだか鬼みたいなのが背後に見える気がする。しかも思い当たる節があるため余計に怖い。

「……あー、エルネスタ？ 以前言っていた人物とは彼のことだったのか？」

「うん、そうだよ？ まー映像消しちゃったからカミラは知らなくて当然だけど」

「いやそうじゃなくて……見間違いじゃないのか？」

いやそれこそおかしい。確かにあまり強そうに見えないと言われたことはあるし、それは自覚している。だからわからなくもないが、それでも初対面に対して失礼すぎるのではないか。

「はあ……すみませんが、目の前に本人がいる事実忘れてます?」

「いいよーカミラ。もつと言っちゃえ」

「遠慮つての覚えてくれませんかねあなたは。いくら美少女でも限度あるんですが」

手が出るとまではいかないものの、敬語で話す口調は今にも崩れそうだ。

それを保てているのは序盤から持ち続けた警戒心と、予想の斜め上をいく返答に怒りより驚きの方が勝っているからだろう。褐色の女性性は常識人かと思っていたのに。

「……気持ちはわからなくもないが、その辺にしておいたほうがいいぞエルネスタ。あまり取引先と亀裂を生むものじゃない」

「それもそっか。じゃねー永見くん。——《星武祭》では覚悟しといてね」

去り際にエルネスタがそう言い残して、アルルカントの二人は出ていってしまった。

なんとまあ、厄介そうな者に目をつけられたというか。彼女らは戦闘するタイプではないし、クローディアが言っていた例のやつらだろう。おかげで今年は波乱万丈な日々を過ごすことになりそうだ。

「あら？ 永見先輩、どうされましたか？」

「え、クローディア？ なぜここに」

行ってしまった二人に気をとられていると、背後からクローディアが近づいてきていた。足音のペースからやや小走りで来ていたらしい。

「この前言っていたアルルカントの方を案内していたのですが、少し目を離れた隙にどこかへ行ってしまった」

それは珍しい。クローディアがそんなミスをするとは意外だ。つまり走っていたのはあの二人を追うためと。

「そいつらならもう出てったぞ。多分外で待ってるはずだ」

「ありがとうございます。……それで先輩、この前紹介した子を見かけましたが」

「え？ ……あ」

「いやほんと悪かったから。だからそのアサルトライフルの銃口向けるのやめて？ 俺痛いじゃすまないから」

こちらに向けられたライフル銃を手で抑えながら、それをしてくる

本人をなだめる。

「人に用事があるとなつてこさせて、そのくせ先に行かせてあまつさえ長く待たせたのはそちらですよ？」

「はい、本当に申し訳ありません。だから撃たないで。な？ 頼むから」

後輩に表情一つ変えず煌式武装ルックスを向けられるのは初めてだ。最初会ったときはもつとおとなしい人物だと思っていたが、普段が物静かなだけらしい。

「おい永見。私たちも暇ではない。用がないなら帰ってほしいのだが？」

「様子見に来てあげた先輩にそれはひどくね？ なあ天霧」

「え？ いや俺に言われても……」

綾斗に助けを求めたが、とりあえず味方はいないという世知辛い事実だけが明らかとなった。あるときは焼かれかけ、あるときは撃たれかける。一応最年長者だといふのにこの扱いはなんだ。

ともかく目的のトレーニングルームには来ることができた。暇ではないと豪語する通り壁にはどでかい穴がポツカリ空いており、なにやら激戦を繰り広げていた雰囲気漂っている。

「てかお前が暇じゃない理由は施設破壊か？ こんな派手に壊して――」

「それ、私がやった」

「はい？」

話題を逸らそうとするも、また予想外の声に出鼻を挫かれてしま
う。

振り向いた先にいたのは、以前ユリスと一緒にいた後輩（推定）だ。
この部屋にいたのは綾斗、ユリス、そして後輩の三人だが……こうし
てみると、その小ささがよくわかる。

ぶつちやけ小学s

「あつぶえ!？」

「今よからぬことを考えていた」

「確定してもないのに拳銃出すな！　どういう神経してんだお前え
！」

あいつ撃つてきやがった。他のやつらでさえ威嚇で済ましている
のに、一人だけ過激すぎだろう。

敬語も使わないし、アスタリスクにまともな学生はいないのか。都
市がおかしいからって偏りすぎだと思う。

「ほら紗夜、落ち着いて。それで先輩、今日はどうしてここに？」

「はあ……はあ……助かったわ天霧。——んで、今回はちよつと、
《鳳凰星武祭》のための訓練にな」

「訓練？　お前は《星武祭》には出ないと言っていたはずだが」

「まあ、そのつもりだったんだがな……」

「永見先輩。《鳳凰星武祭》^{フェニックス}に出たとして、あなたはどの程度まで勝ち進めますか？」

「……すまん。俺もしかするとハツカ油で涼しいと錯覚してたかもしれないわ。聞き間違いじゃなけりや、今《鳳凰星武祭》に出たらどうなるって質問したか？」

時は一週間ほど前。話題に出てるそれを基準とすればあと一か月と十日間といったところか。任務からも解放され、疲れを癒し休暇を満喫できていた頃だ。

そのときは丁度生徒会の手伝いをしていた。なんでも他の役員が用事で出払っていて、書類とかの整理が追いつかないんだとか。

くそ暑い教室で授業を終えた後で、クーラーの効いた快適な空間での作業という恵まれた環境に、行人はなんの迷いもなく承諾。そうした経緯で涼しく過ごしていたが、そこに今質問が投下された。

「いえいえ、聞き間違いではありませんよ」

「じゃあれか。俺の弱さを皮肉ってるのか」

「それも違います。先輩は曲がりなりにも《星武祭》^{フェスタ}経験者。そんな人物が今年の大会に出たとすると、どうなるか気になりました」

なるほど。共に戦っていた二人にとって共通な話題。確かに雑談にはうってつけだ。だが、

「出てるけど《獅鷲星武祭》^{グリップス}とじゃ種目が違うだろ」

行人が出場していたのはチーム戦の《獅鷲星武祭》。タッグ戦である《鳳凰星武祭》^{フェニクス}とは必要なスキルとかが違ってくる。

「……本題は？ 唐突にそんな質問してくるあたり何かあるんだろ？」

「話が早いですね。はい。実は先輩には、今年の《鳳凰星武祭》に出ていただきたいのです」

クローディアは行人に要件を簡潔に伝えてくる。休暇はじっくり堪能した後なため、そろそろ別の仕事が来るとは思っていたが、まさかそれが《星武祭》^{フェスタ}への参加とは。

「先に聞いとくが、今回は裏方仕事じゃないんだな。むしろ情報収集とかの方がやらされると思ってたんだが」

「そうですね。私も当初はそちらをお願いしようと思っていました」

「思っていた？」

「ちよつとした事情がありました……」

そこまで言いかけたところで、生徒会室のドアからノックの音が聞

こえてくる。時間的にもシーズンのにも誰かが自主的に来るとは考えにくい。きっと他にも呼んだ人物なのだろう。

「ドアは開いています。お入りください」

「……失礼します」

入ってきたのはどこにでもいるような、紫色の髪を持つ中等部の女子生徒だ。いわゆる地味っ子というやつで、クラスに一人はいるずつと本を読んでそうなタイプに見える。

「以前の事件では、ユリス以外にも被害を受けている人物が多数いました。彼女はそれによつて、出場を取り止めなければならなくなつたうちの一人です」

「……突拍子のないことはそれなりにあつたが、今回ののはもはや意図がわからないぞ」

「それは先輩にしては珍しいですね」

当然だろう。傭兵生制度傭兵生制度

星武祭フェスタにおいて参加者が上限に達しなかつた場合、民間の傭兵から選手を集う制度。などといった特殊なルールは、《星武祭フェスタ》において絶え間なく変化し続けるものだ。だが参加している選手に直接作用するものは今までなかった。

例え選手が欠落しても、そこには補欠として募集した別のペアを入れるのが通例で、既に落とされた参加者が再度関わることはほとんどない。

「彼女とタッグを組んで《鳳凰星武祭フェニクス》に出場する。これが今回の依頼

です」

「おいちよつと待った。それ運営側にも許可とった上で言ってるのか？　だとしたらなんで運営はそれを許した？」

「今回は少々特殊な措置をとる年です。つまりイレギュラーにイレギュラーが重なるだけですから、そこを突いて説き伏せました。言わば代理出場のようなものです」

そんな強引な……。

「……まあ仕方ないか。それが許可されてのことなら異論はないし」

「さすが先輩。話が早いですね」

「とりあえず、彼女のデータとかあったらこっちに渡してくれ。あとはこっちでなんとかする。あ、さっき言ってたイレギュラーってやつこのことも頼むぞ」

「では、出てもらえるということでもいいですね」

「クドイ。ほれ行くぞ」

「え、ちよつと……！」

半ば困惑気味の中等部の腕を掴んで、強引に生徒会室を飛び出ていく。善は急げだ。

「なんですか？　そんな挨拶もなしに急いで」

「《鳳凰星武祭》が始まるまであと二か月もない。あれに出るんなら、

最低でも互いの能力を把握するので一週間、連携に慣れるのに二週間以上。そこに個人の改善点を直したり予備の期間を考えると、今からでも急がにや間に合わん」

掴んだ手を振り払った少女に、返答の際を与えないほど早口で論ず。

今回は前回優勝した界龍ジエロンのペアはいないが、クローディア曰くイレギュラーがいるとのことだ。準備するに越したことはない。

「——そーいやまだ言ってなかつたな。俺は永見行人。流れでわかる通り、お前の相方になるやつだ。……お前は？」

「……白江利奈しらえりなです」

「そうか。——これからよろしくな」

理性と本能

「——と、まあ大体こんなところだな」

大筋の流れを説明したところで、まず口を開いたのはユリスだ。

「色々と聞きたいことはあるが、なんというか……意外と苦労しているのだな」

「うん。わかってくれてなによりだ」

事情が明らかになり、最初は邪険な態度だったユリスも次第に落ち着きを取り戻していた。あのツングレ姫が他人を受け入れるとは、立派になったものだ。

「えーとりあえず本題に入るんだが、とどのつまりお前らの特訓に付き合わせてほしい。勿論ただでは言わない。こつちの情報もできる範囲で明かす。どうだ？」

「……悪くない考えではあるな。現状、私たちに必要なのはタッグ戦の練度だ。その提案を呑むのもやぶさかではないのだが……」

そこまで言うと、最後にユリスは綾斗の方に近づき同意を仰ぐ。急造タッグとはいえ経緯が経緯か。信頼関係はバツチリのようだ。

「——うん。わかった」

「よし。では、ありがたくその提案を受けよう」

ユリスが代表して言うが、ただ確認をとるだけにしては随分と時間がかかっていた。こちらの対抗策を話していたと考えると間違いはない

だろう。

だが策を講じてきたのはこちらも同じだ。圧倒的に経験が足りないのは否めないが、今回は練度を上げるのが目的であり勝ち負けは関係ない。

学園の序列グリユーエンローゼ五位と純星煌式セルベレスタ武装の所有者である以上、彼らは一般的なタッグより上なはず。評価の目安としても丁度良い。

「んじゃ頼みますよ。ルールはタッグで、序列変動なしのエキシビジョン。校章を破壊したやつ勝ちな。さて、準備はいいかー白江？」

「……問題はないです」

最初から展開しっぱなしだった突撃銃を構えながら、利奈は淡々と返事をする。

対する綾斗とユリスも自分の煌式武装を取り出しており、既に準備万端のようだ。しかし、

「天霧、お前《セルベレスタ黒炉の魔剣》はどうした？」

天霧は肝心の《セルベレスタ黒炉の魔剣》を持っておらず、他にも先の戦闘で目撃した爆発的な星辰力は感じられなかった。

「舐めプしてんなら、俺結構傷つくんだが」

「そんなまさか。どうせですし、先輩方が勝ったら教えるってことでどうですか？」

煌式武装のブレードを正眼に構えて、綾斗はやや挑発的に言い放つ。わざとらしいが、それなりの自信はある、という体で受け取っておくことにしよう。

自分も悪態をつきながら発動体を取り出し、戦闘態勢を整える。

「そうかよ。後で後悔しても知らんぞ。——よし……いくぞ」

周りに聞こえないように一言だけ呟く。するとそれに呼応した声が頭に響いてくる。

『オーケー』

「……それがお前の純星煌式武装か」

「ああ。新顔もいるんだし、改めて紹介しておこう。——
《数多の偽り》^{ナイアーラトテップ}……星導館じや飛びきり微妙な純星煌式武装だ」

『……あとで絞めるよ?』

やめてください。

試合開始の合図が部屋中に鳴り響く中、まず最初に動いたのは利奈だ。中距離が得意なライフル型煌式武装ルークスの特性を活かし、後方からユリスを牽制し続ける。

「くツ、鬱陶しい！」

ユリスは飛翔する光弾を身を翻して避け、自らの技で焼き払ってみせるが、ライフルは火を吹くのをやめない。

今回戦う相手ペアにおいて、より厄介なのは綾斗ではなくユリスの方だ。

確かに以前の事件において、綾斗は並々ならぬ力を見せつけた。だがそれは奥の手なのか使ってくる様子はなく、その状態であればあまり脅威ではない。

一方ユリスは力を包み隠さず全面的に駆使しており、さらに自分の距離を保ちながら敵を封殺する戦法を得意としている。もし彼女を自由にしてしまえば、前衛後衛もろとも動きが制限されて完封されてしまうのだ。

そしてこちらのペアには、それを真つ向から受けて反撃までこなせる者はいない。

強さを参考までに表すと、誰もが知つての通りユリスは序列五位の地位を持ち、綾斗も想定では《冒頭ペーの十二人ジ・ワ》クラスの力を持っている。

行人は素の状態で序列二十位から十五位程度。利奈に至っては経験不足もあつて正直序列五十位に届くかも怪しく、どちらも実力者とはいえない出来だ。

もちろんこれは現在のスペックだけを見た場合の話であつて、後の成長や相手に合った工夫などでいくらかでも覆るだろう。だが裏を返

せば、単純な実力だけでぐり押せる試合はほぼ無いということの意味する。

だがそれは予想していたことであり、対策もしつかり立ててある。

「はあッ！」

「させるかよー！」

綾斗は途中まで妨害もなく向かってきたが、それも行人によって遮られ、そしてユリスから離れた場所へ徐々に押し込んでいく。

これからの戦いにおいて、最も重要なのは連携や作戦。つまり単純な強さに関わらないものだ。不幸中の幸いか、行人はこういったものを考えるのに慣れている。

そして今回試合をするにあたって考えてきた作戦は、率直に言えば的を絞らせず、そして前衛と後衛を切り離すことだ。

「綾斗！ ……ええい邪魔をするな！ 咲き誇れ——ロンギフローラム鋭槍の白炎花！」

ユリスは綾斗の救援に向かうため、高い威力を持つ炎の槍を出現させこれを利奈へ発射する。

彼女の技は飛び道具だけでも素早く相手を射抜く《リヒングストンデイズ鋭槍の白炎花》、スタンダードな《アサマ赤熱の灼斬花》、小回りの効く《ブルームローズ九輪の舞焰花》、広範囲を焼き払う《アサマ六弁の爆焰花》の四つがあり、さらに設置型の罠や防御などを入れればまだまだ種類がある。

その能力の多様性には驚かされるばかりだが、よく見てみると使っ

てくる技のパターンは大体決まっている。ここぞという場面以外では前述の六弁の爆焰花を除く三種の技で攻めるのが基本で、他の技を使うことはほとんどない。

ならばそれに耐えられる盾を用意しておき、こちらはその強度を越える高威力技を撃たせないよう攻撃し続ければいい。

「ぐっ……！」

利奈はホルスターから煌式武装の発動体を起動し、自分目掛けて飛んでくる槍を受け止める。衝撃に多少声が漏れたが、存外ダメージは軽い。

利奈が起動したのは、行人が特別に作った専用の大盾型煌式武装だ。

先の続きだが、個々の戦闘力でも連携でも負けている以上、この戦いでは綾斗とユリスを切り離す——いわゆる擬似タイマンの状況に持つていくことが、勝利への最低条件だ。

これは矛盾に感じるかもしれないが、複数人の戦闘というのは、個人の強さと連携や戦術といったものの積で強さが決まる。元々連携など実用化できていない手前、より訓練期間のあった彼らと総合力で競えば負けるのは目に見えている。

だが個々の戦闘力ならばどうだ。これまでの訓練で見てきた感想だが、利奈は身を守ることであれば普通以上にこなせるし、銃による反撃もそれなりにできた。特別製の煌式武装によりその防御力は普通と比べてかなり高い。

一方ユリスは技の汎用性こそ学園随一だが、それ故に突破力がな

い。六弁アーマーの爆焰花リリスのような高火力技はあれど、その発動にはそれなり
の隙が必要となる。

このように、個人個人であれば救援に来る人物がおらず、相性によつて相手を封じ込めやすくなる。もちろん利奈の守りも万能ではない。何かの拍子に打ち破られることは間違いなくあるだろうが、少なくとも五分持ちこたえてくれれば及第点だ。

そしてユリスの注意が利奈へ向かっている間に、

「オラア！」

「ハアツ！」

こちらで綾斗を仕留める。

互いの刀身がキリキリと音を立てながらひしめき合う。どうやら手加減している綾斗と、行人の膂力は互角程度のものらしい。

……いや、実際には手加減でもないらしい。実際に剣を合わせてみてようやくわかったが、必死な表情で歯を噛みしめながら、溢れ出るほどの力を人並みに抑えるなんてまず不可能だ。

これは推測だが、あの事件で垣間見たものは本来の強さではなく、能力を一時的に増幅させた強さだったのだろう。ついでにそれを発動すると、何らかのデメリットがあると考えられる。

事実、あの力を使った後の綾斗は——といっても一部しか見ていないが——とても疲弊していた。ご丁寧にユリスに膝枕までされるほどに。

「考えるだけでムカついてきたなあオイ！」

「一体なに考えてるんですか!？」

教えてやる義理などない。というかなチユラルに、一国の姫から膝枕とかありえないだろう常識的に考えて。羨ましくはないが何故かムカつく、そんな一点の曇りもないピュアな心を乗せて、綾斗に武器を叩きつける。

時に蹴りを入れて不意を突き、時に劍撃をいなして翻弄する。緩急をつけた攻撃を繰り返し、それでいて利奈に注意を払えるよう攻め過ぎずに立ち回る。いつぞやの訓練で身につけた戦い方だが、また役に立つ日が来ようとは。

「くっ……! だったら!」

一度距離を取ってから綾斗は劍を構え直し、先程よりものめり込み気味で突進してくる。

「ん? ……のわっ!」

「天霧辰明流組討術——ふせかずら臥蔓」

迎撃すべく上段から劍を振るうが、綾斗は軽々と受け流し、それどころか足を止めることなく行人に体当たりを仕掛けてきた。

体勢を崩され、行人はなす術なく地面へ組伏せられてしまう。

「続けて——壬卦ず、っ!」

万事休すだと思われたが、別方向から放たれた光弾によって二撃目

は中断された。

「ツ！ サンキュー白……江……？」

間一髪で助けしてくれた救世主だが、そちらを見ると小刻みに震えていた。他にも荒い呼吸を何度もしており、取り繕っていても恐怖しているのがわかる。銃身もブレており、心ここにあらずといった様子だ。

「おい白……っ！ なんだよ邪魔くせえな！」

利奈を引き戻そうとした声は、すぐに立ち直った綾斗にかき消されてしまう。このまま利奈がやられれば二対一でなぶり殺しだ。それだけは避けなければ。

「どけよっ！」

「行かせません！」

一度ペースが崩れたことにより、押していたはずの剣戟は逆の立場になっていった。凄まじいほどの猛攻。向かってくる剣の頻度は上がっており、まさしく攻撃こそ最大の防御状態だ。

猛攻からの切り返しを苦手とする行人では、これだけ肉薄されると手の打ちようがない。純正煌式武装ナイアールラトテップの方も、能力を発動しようが状況は覆ると思えない。

「ユリス！」

「咲き誇れ——六弁アママリリスの爆焰花！」

まずい。あれは高い火力を持つ技だ。利奈の射撃によって抑えられていたのがなくなり、星辰力^{プラナーナ}を溜める余裕ができたためユリスは発動に踏み切った。

それに行人の立ち位置は、綾斗が切り返してきたおかげで距離が狭まっている。六弁の爆焰花の範囲にも、二人まとめて入ってしまったているだろう。道理で攻撃を強めてきたわけだ。

「あ……あ……」

もはや目に見えて足をガクガクさせており、せっかく渡した盾もこれでは意味がない。連れ出そうにも範囲が広いため抜け出せないし、かといって撃退するには既に膨らみすぎている。

(チツ！ 仕方ない……)

「盾！」

そこに誰にでもなく叫び、大急ぎで利奈の元へと向かう。間に合え……でなければ揃って丸焼きだ。

成長し膨れ上がった蕾が、やがて炎をともなった花卉に変化し、爆裂する。余波だけで草木が枯れ、直に受ければクレーターが出来上がる。

「はあ……、はあ……」

やや顔を焦がしながらもなんとか生還するが、すぐさま行人は口を開いた。

「ギブ！ ギブだから！ だから人肉ステーキつくるなうっかり焦げ

肉製造機！」

その直後飛んできたのは、彼女が得意とする炎ではなく、頭蓋骨を粉砕する鉄拳だったとか。

表と裏

気がついたときには戦っていた二人はもういなかった。目を覚ましたのは先のと違いうトレーニングルームだ。なんでも放心状態だったそうで、返事もしなかったので勝手に連れてきたらしい。

記憶はあやふやだが、それでも無意識の内に覚えているようだ。疲れきった身体からは倦怠感が抜けず、頭にはフラッシュバックの感覚がこびりついている。

「で？　なんでああなったか、素直に教えてほしいんだが」

「……たまたまです。明日には治ってますから」

心配してくるが、素っ気なく返事をする。最近はあまり戦闘もしていなかったから、偶然反応してしまっただけだ。だから心配されなくてもいい。

「なわけ。無理してるなら戦闘中に深呼吸できるよう頑張れ」

「ですから無理なんて……」

「していないとでも？　汗だくで過呼吸になって、挙げ句心まで手放したのが無理じゃないとでも？　お前随分図太いんだな」

初めて見たときの飛び出すほどの真面目さはどこへやら。ペアを組んでからよく聞く減らず口には、ため息しか吐くことができない。

「……別にお前をどうこう言うつもりはない。それにトラウマ関係なら経験がある。少しぐらい力になれるかもしれん」

「……………」

予想してなかった回答に、利奈は戸惑ってしまう。自分と同じような何かを、彼は経験したということか。

ならば別にいいだろう。経験もしていないカウンセラーたちの、乗り越えられるだとか、君は悪くないだとか、もううんざりだ。

せめてマシな返答になることを願いながら、その原因を伝えることを決めた。

「詳しいことは省きますけど、——爆発や火が苦手なんです。見たり聞いたりすると、いつも怖くて……！」

「なるほど」

どうやら見当違いだったのかもしれない。いつも聞くフレーズではなく、他人行儀な四文字を並べられただけ。

そんな簡単にわかれてたまるものか。目の前で人がやられ、それで傷を負う。外では狂人が笑いをあげ歓声をあげ、中が崩れ落ちるほどそれは苛烈さを増す。その恐怖は経験がないとわからない。

それを知る人物かと思っていたのに、ことごとく裏切られた気分だ。アスタリスクここ恐怖心にいて、心決を腐らせて、あんな闘ことに明け暮れた者に、わかるはずがなかったのだ。

あんなものどどこがいいのか。何が面白くて、何故あれに熱中できるのか。必要がなければ、こんな場所来たくもなかったというのに。

癒えない傷を治すため、治療を受け、その上でここに来た。なのに

……

「——それは反射だな、それも恐怖の。特定の現象を受けると、身体が無意識に反応するんだろ？　そこまでの経験はさすがにないしわからんけど、気を失うほど疲れるんなら相当だな」

そんな風に悲観的に捉えていると、しばらくして行人はどんどん口を開いていく。

「その反応からして当たりか？　まあいい。俺がするのは過去の詮索じゃなくて、お前のそれをどう抑えるかだ」

……そんな露骨に出ていただろうか。わざとらしく腕を組み、こちらの顔を覗き込んでくる。

「さて、これからトラウマの抑制について考えにやらんわけだが、準備はいいな？」

そう言っって行人は、後ろで組んでいた手を前に回してくる。その手に握っていたものは、

「せいぜい頑張れ」

あの目見たものと同じ、安全ピンの外された手榴弾だ。

手榴弾を出すと同時に、行人は全力でバックステップしその場から離れる。利奈は動き出しは遅れたがちゃんと盾で守っており、初っ端からくたばることはなかったようだ。

「なん……の……つもり……！」

体を震わせ途切れ途切れになりながらも、利奈は必死に声を絞りだし理不尽に訴える。

行人は落星工学研究会の工房で試験的に作った、シンプルなグレネードランチャー 榴弾銃型の煌式武装を取り出して答えた。

「反射で起きることを無くすなら、それを意識して抑えるのがコツだ。だがお前はその刺激に対して弱すぎる」

また弱り始めた利奈など気にもせず、容赦なく煌式武装の銃口を向け、引き金を引く。

「慣れる、その感覚に。光景を常套化し、音を聞き流し、そして心を鎮める」

「そんな……と……と……、ヒイツ！」

轟音が鳴り響き、爆発が辺りを満たしていく。だが行人の声が聞こえているのかいないのか、盾に隠れてうずくまってしまった。

まあそれも仕方ないことだ。恐怖やトラウマを克服するというのは、そう易々とできることではない。それこそ何週間、何カ月といった期間をかけて、段階的に慣れていくのが普通だ。

それをこんな強引に行えば、ああなるのもおかしくない。時間がな

いからとはいえ強行手段に出るのは、正直なところ不安な要素も孕んでいるのだが、彼女にはそれを越えられる理由があるはずだ。

「……はあ、今日はここまでだな。立てるか？」

「……………」

呼びかけには答えず、フラフラとした足取りで無言で扉の向こうへ出ていく。

軽くサイコパスだと自分でも思うが、まあ人間なんて大体がそうだろう。そんな風に自己完結して、行人もトレーニングルームから出た。

それからはそれぞれ寮に戻り、そしてまた明日から訓練を始める日々だ。地道に、そしてある種虐待のような訓練を続ける。二週間経った頃には軽くマグロ目になっており、歩く姿には亡霊のような雰囲気漂い始めていた。

さすがにまずいと思ったので今日は休みにする。どこか適当なところに通わせ、心をリラックスさせるつもりだ。

「しかし、よくついて来ようと思ったなお前。自分で言うのもなんだが、トラウマにトラウマ重ねるスパルタも生ぬるいことしてるやつだぞ?」

「……会長さんからの指示がなかったら、あなたなんか顔も見たくないですよ」

人通りの多い市街地を回りながら、利奈は大きなため息を吐く。

それもそうか。あんなことをしてくる輩に好意を抱くなど、余程のマゾか変態だけだ。

ともあれ訓練で何度も顔を合わせる必要上、こんな会話をする程度には互いに打ち解けてきている。上っ面だけの親しさだが、これからペアを組んで戦う者同士それくらいの関係はあった方がいい。

といっても、行人が悪口やらにも反応せず利奈が抑えるのを面倒くさく感じたからだと思うが。出会って一ヶ月も経っていないのに、その凶太さには感心を抱くほどだ。

事実、彼女はトラウマによって萎縮することはあれど、素の精神力はかなり強い部類だと思う。いや、正確には我慢強く芯があると云ったほうがいいか。

なぜなら足が震えるほどの恐怖を受けているのにも関わらず、訓練を続けようと未だに思っているのだ。他にも根がストイックなのが理由だろう。

その分背負い込みやすいのが難点だが、そのガス抜きのために今回は外出している。ただ正直なところ、肝心の何をしたいかわからないのが現状だったりする。

「で、何をしにいくんだ？ 酷なこと強いているのはこっちだし、できる限り費用は負担するが、あんま高いのは無理だぞ？」

それなりに貯蓄はあるが、稼ぎは一般学生の域を出ない。仕送りもないため実質貧乏な方だろう。せめて家計に大きな打撃がないことを願う。

「……さすがに、手榴弾で吹き飛ばされかけた分は払ってもらいます

よ。そこだけは納得できません」

「え?」

いつも通り無表情で、激昂する様子も見せず、利奈はさらりと言う。そして行人はというと、返事が予想より穏やかだったので少し啞然としている。

いや、こういうのもおかしいが、もつと全ての方面から非難されると思っていたのだが。

「そこだけ? 全体的におかしいからとかじゃなくて?」

「……方法はともかく、時間が少ない中無理矢理にでも治さなきゃ戦えないのは事実ですからね。すごく不本意ですが」

「よくもまあ、あんなのを続けられるな」

「そうしなきゃだめですから」

どこか遠くを見つめながら、利奈は思い詰めた表情を浮かべる。こんな風に愚痴を挟みながらも、目標に向かって努力する姿を見ると応援したくなるようで、それでいて止めたくもなる。

ただし、行人は人の意思を尊重する主義であり、そこに自分の意見を流し込むのは筋違いというものだ。

「さて、今はそんなお前にご褒美をやるために歩いているわけだが、これどこに向かってんだ? ……まさか」

確か記憶によれば、こちら側は商業エリアの一端で様々なものを取

り扱っているが、その中でも電子用品などに関係する場所だ。

特に携帯端末とかの再契約を行うことが多いが、それ以外でここに寄る理由といたら……

「——あ！ ありました。あれが目的地です」

店にどでかく張り出されているのは、クインヴェール女学園生徒会長で、昨年の《リンドブルス王竜星武祭》における準優勝者。そして世界が誇る歌姫。シルヴィア・リユネハイムだった。

鼻歌を口ずさみ、店のテープが張られた袋を抱えて利奈は来た道を戻っていた。

「来た目的がまさかCDだったとはな。てか意外と高いもんだな」

CDなんて買うことがないので、初めて見たときはその値段に声をあげて驚いたものだ。四桁は優に越えているのだから、懐に優しくない。

値段の高さに嘆いていると、歌うのをやめて会話の続きを口にする。

「なにせ、あのシルヴィア・リユネハイムの最新アルバムですよ？
しかも特典付き。最初の入荷では瞬く間に売り切れて、その後は生産

が追い付かなくなるほどだったとか」

「しかも特典付きかよ……道理で高いわけだ」

「当時はお金がなくて断念してましたが、人であれば遠慮は入りませんし、きつちり使わせてもらいましたから。あ、後で聴きますか？ 私のオススメは愛の詩で、あの透明感があるようでポップなところが――」

……なんだろう。こう、真面目だと思っている人物ほど裏があると
いうやつだろうか。普段は結構静かなのだが、そこからは考えられない
ほど饒舌になっており、呼吸も別の意味で荒くなっている。

まあ初めて見たときに比べ大分明るくなったし結果オーライか。

「あ………すみません。少し取り乱してしまつて。気持ち悪かったです
よね」

「いや驚きはしたけど。別に熱中するものがあるのはいいことだろ」

「でも、あんまりそういうのは……」

一転して利奈は、一歩引いた態度をとるようになった。

「はあ………こうなりやヤケだ。次に支障が出ても困るし、吐き出せる
ことは吐き出せ」

「実は、昔そういう趣味を話したら周りから引かれたことがあつて
……」

行人がそう問いただすと、恥ずかしがりながら理由を口にくれ

る。

シルヴィアの学年的に、昔とは利奈は小学生後半ぐらいだと思うが、その頃はまだここまで話題になっていなかったのか。それとも余程田舎だったのか。

そこら辺は詳しくないのでわからないが、とにかくアイドルが好きで同級生から色々言われたことがあるらしい。

「……時期はともかく、別に気にすることないんじゃないかね。仮にも世界の歌姫だし、好きな人は山ほどいるだろ」

「それはそうなんですけど……クラスにもそういうのは何人かいるので、恥ずかしいというか怖いというか」

「なんだか聞いている内に焦れつたくなってきた。もう早めに終わらせよう。」

「それで馬鹿にするやつがいたら蹴りを入れてやればいい」

「……あの、飛躍しすぎでは？」

「そいつらに逆に聞きたいけど、絶対に格上のものがあるならそれを聞きたい。それに、人が人のことをとやかく言う権利はない。それが普通だ。……多分な」

そもそもこの話、アイドルやアニメ、ゲーム、俗にオタクと言われる文化が他の娯楽に劣っているなんてことはない。少なくとも酒やタバコには勝ってるはずだ。

「やつらは下を見て安心感を得ることしか脳にないんだ。だから甘や

かす必要なんてない。言葉でわからないなら別のものでしっかり伝えてやれ。それがそいつらのためにもなる」

「は、はい……」

若干ひきつった顔で利奈はうなづく。多分だが、先の自分もあんな感じだった気がする。

大会前夜

「……………」

「ふう……よし、今日はここまで」

「……やっと……です、か」

構えていた武器を降ろし、地面にへたり込みながらホッと息を吐く利奈。

訓練開始からざつと三週間後。利奈は火や爆発で震えることも少なくなってきたおり、最低限まともな判断はできるようになった。

呼吸を荒くし足をすくませ、気を失っていた最初期の頃と比べると格段に変わってきている。

「お疲れさん。よく耐えきったな」

こちらも煌式武装ルークスを発動体に戻し、ぐったりとしている利奈に近づいて労いの言葉をかける。

だが完全に克服するにはやはり至らなかったようで、疲労感相変は相変わらず滲み出ている。

「正直死にかけてます……《星武祭フェスタ》に出る気じやなきや、こんなの命がいくつあっても足りませんよ」

「おいおい、ちゃんと直撃は避けてただろ？」

「爆発物だとそれでも衝撃が来ますし、元々苦手じや説明できないほどですし……それに、日が経つ毎に新しい武器を担がれたら心も折れますよ……」

「確かに」

新しい武器というのは、例の試作型煌式武装の改良型だ。いつも同じでは体がそれに慣れてしまうので、日に日に改良を加えたものを持ち出していったのだ。

ロングバレルなど銃身を変えたり、そもそもの機構を改造してほとんど別のものにしたたり、日進月歩とはいかないがとにかくバリエーションを変えまくった。

さすがに自分一人では間に合わなかったのとある人物に技術指南を願いだしたが、その人にはとても感謝している。なにせ自分では複雑なものすら揃えることができた。

「いやまあ、それでもよくやったと思う。最初は声も出るか怪しかったのに、途中からの追い上げがすごかった。何か影響されることでもあったのか?」

「……刀藤さんは知ってますよね」

「ん? ああ、ちょっと前に天霧と戦ってたうちの元序列一位か」

刀藤綺凜。中等部一年でありながら卓越した剣技を持ち、入学早々一位の座を手にしてそれを保持し続けた期待の新人だ。

《疾風刃雷》の二つ名の通り速く鋭い剣を得意とし、剣の才能では五代目剣聖アーネスト・フェアクロフをも上回るとすら噂されるほどの

実力者。

ついでに十代前半とは思えない体つきをしている美少女なため、隠れたところでファンクラブもできているとか。それらしき人物曰く、『あの強さからは予想できない小動物みたいなギャップがたまらん！』とのこと。

利奈の声は、次第に真剣な色を帯びていく。

「私がここに来たのは、《星武祭》^{フェスタ}に出て願いを叶えてもらうためです。……でも私の場合、まず戦闘に向いてないじゃないですか」

……

「私が彼女と同じ歳のときなんて、それはもう酷かったですよ。相手と向き合うこともできなくて、かすり傷一つで嫌になったり、そういうのばかりです」

「……それで？」

「でも、あの頃の自分と同じ歳で、あんなに強くて頑張ってる、今は違いますけどそれを一位っていう結果として出してるのを見ると、ここで立ち止まったらダメだって思うんです」

「……」

「そういう理由があったからです。単純に、ただ負けず嫌いなだけだと思いますけど」

最後は少し自嘲気味に締める。なぜ自分がここまで関心を持ったか、わかった気がする。付け加えるならば、このまま彼女が向かうで

あろう結末も。

「そうか。聞くのも野暮だったな。俺から言えることは……いや、やっぱねえわ」

言うべきかどうか迷うが、本人のやる気を削いでしまうのも悪い。

だが断言できる。このままだと彼女はいずれ、自分の弱さを痛感することになるだろう。

「それはそうと、実は気になったことがあるんだがな。お前ストレガ魔女だけど、能力はまだ使えないのか？」

話を変えるため、何気に訓練を始めたときからある疑問を投げかける。

初対面の後でクローディアから利奈の情報を受け取り、そして彼女が魔女であることを知った。魔女とは他にはない特殊能力を持つ者。それが仲間だと把握して、そのときは胸が高鳴るばかりだった。

だが現実はどうだ。練度とかいう問題じゃない。まず任意で能力を使うことが無理だときた。扱えない力ほど無意味なものはない。それを聞いたときには、危うく不満を口にしたものだ。

なににせよ、能力者としての戦力は期待できそうにない。すぐにそう割り切り思考をシフトして、ひとまず情報から出した適正を吟味し、遠距離で戦える武器突撃銃を使わせることに決めた。

当時はそれで一段落したが、未練がましいようだが使えるに越したことはない。なにせイレギュラーの参加が前提である。そんな連中と戦うのであれば、何か一つでも尖った部分が欲しいのだ。

ふとしたことでまた使えるようになったとか、そういう希望的観測でもいいからとにかくすがりたい。

「……一応、使えないというわけではないです」

「マジか!？」

「ですけど、よほど焦って追い込まれたときじゃないと無理ですね」

「……マジか、自分の力を制御できないクチか。そりゃ困ったな」

複数人での戦いでは、個々の力よりも戦略や連携、アドリブ力が重視されやすい。任意で発動できないというのは、そういうチームプレーにおいてかなりのハンデとなる。

「いや、待てよ。魔女や魔術師ストレガの能力つてのはイメージによるものだって聞いたことがある。もしかすると、力をコントロールするためイメージが弱いのもしれん」

イメージというのは、要するに想像力だ。おそらくだが、今の利奈にとって能力とは、極限状態に無意識で発動するものだ。故に普通の状態では、自分がその力を使っている姿をイメージできてないのかもしれない。

「使ったこと自体はあるんだ。その感覚を、どうにか普段の自分にも適用できないか?」

生憎自分は魔術師ダンテではないため、能力を使う感覚はわからない。だがそれでも、頭の中で自分をイメージする感覚はわかる。

つまりはシミュレーションだ。該当する動きや技を実践する前に、それを完璧にできている自分を思い浮かべる。能力を開花させるには、おそらくそういったトレーニングが必要になってくるはずだ。

「そうは言われても……大体、発動するときには余裕がないというか、自分でもよく憶えてないというか……」

なんてこった。利奈自身も、感覚はあまり憶えてないらしい。せっかく能力を使えるかもしれないのに、光明ここに潰えたりといった感じだ。

「まあ仕方ないな。《鳳凰星武祭》^{フェニクス}まであと少しだ。変に意識して支障が出てもあれだし、頭の片隅にしまっておく程度で」

できないならそれでいいと納得し、思考を切り替える。

本番まであと数日程度。ここからは大体のタッグが粗探しを集中的に行い、全体の総仕上げに取りかかる。自分は戦略などの補正、武装の再調整を主にするつもりだ。

「それと、慣れるための地獄は明日で終わり。最後の調整に入るから、後で煌式武装^{ルックス}を回しといてくれ」

利奈は無言で頷く。

「……なあ、その愛想のなさはどうにかならんもんかね」

「自覚はありますけど、お互い様ですよそれ。というか職員室で話題になってた人に言われたくないです」

「あんの○アツキンヅジめえ……」

おそらく、いや確実に、以前妙に突っかかってきた老教師だろう。授業は普通に良いのに、生徒を気にかけてガミガミするのだけが欠点だ。頼むからお口チャックを覚えてほしい。

「てか反面教師がいるなら学べアホ。お互い様で正当化しちや駄目な部分だろそこは」

「説得力がないのに言われても困りますよ……大体、そこは先輩としてしっかりした態度を——」

この不毛と言えるか微妙な争いは、それなりに続いたが結論も出ずに悶々としたまま終わりを迎えた。

そして大会前日。互いに身体を休めるため訓練はなく、かといってやることも特になかったので、今日は研究会の個室に籠り武器の確認をしていた。

「……いよいよ明日か。結局いつも通りで休んでねえな」

『休む気なんてあったのが驚きだよ』

自室のベッドに腰かけて呟くと、頭に響く声がそれに応え、その主

が宿る発動体から体が現れる。

「特にかける望みもないのに、今回はやけに気合いが入ってるね。そんなにあの子が気になる?」

「んなつもりはない。俺はクローディアからの依頼をこなし、対価として報酬を受けとる。そのためにはまあまあ成果を出さなきゃならん」

「そして今の君は、嘘をつくために表情が固くなっている」

「ッ!」

「フフツ、見事に騙されたね」

慌てて自分の顔を確認するが、そんなことをしても意味がないことに気づいた。

夏休みだからと朝から籠っていたのが災いし、どうやらひどく気疲れしていたようだ。おかげで普段ならなんともないことにも反応してしまった。

「……はあ、いらんこと覚えやがって」

「嘘はいつもさらっとつくでしょ? 崩してみたくなってね」

「オーガルククス純星煌式武装さまは、いつから人を弄ぶことが趣味になったんだよ」

「わたし、元々面白そうなことには首を突っ込みたくなる性格だけど?」

ああ、ため息が止まらない。こういうときに限って減らず口が無く

ならないのは、純星煌式武装と使い手で同じ性質が惹かれ合っているのか。

「さて、実際どうなのかな？ 君から見て彼女は」

「旅行の恋バナみたいに始めるなよお前……どうって言われても特にならない。アスタリスクに来るやつとしては、さして珍しくもないし」

大会で勝ち抜けばあらゆる願いを叶えられるこの都市において、生徒は戦うか戦わないかの二種類に分けられる。利奈は前者に当たるわけだが、そういう輩の願いとしてはポピュラーな部類だ。

とあるサイトに載っていたが、ここで戦う生徒が願うのは誰かを救うか金目的、そして権力がほとんどらしい。まあ余程の変人でなければ、何でも願いが叶うと聞いて考えるのはここら辺だろう。

「それだけ？」

「……逆にさ、なんでそんな気にすんだよ」

「君の親しい人は金髪の子と忍者っぽいものだけでしょ？ その枠に新しい人が入ったなら、普通気になるものじゃないかな」

目をキラキラはさせていないが、好奇心剥き出しな口振りで話を急かしてくる。そして悪意のない顔で微ボツチを宣言した顔をぶん殴りたくもなかった。

「まあ、手助けをしてやりたくなくなるな。ああいうのは目的地まで猪みたく走ろうとするから」

「……身に覚えがあるんだね？」

「名答」

大会で勝ち進むだけなら、自分一人で戦った方が正直言って楽だ。勝ち負けはともかく、そのほうがなにも考えずに好き勝手やれる。

そうでありながら、ペアを組む相手に色々してやりたくなった理由はそれだ。

あの頃を思い出しながら、淡々と言葉を続ける。

「多分自己嫌悪なんだろうな。昔の自分を見せられてるようで、それが嫌だから手を貸したくなる」

「へえ、嫌だっと思ってるのに、それを助長するようなことをするんだ。どうなるかは君がよく知ってるんでしょ？」

「目的さえ果たせば、少なくとも俺みたいにはならんからな。それに知ってるやつがいるだけで、劇的に変わるもんだ」

目的のためなら無我夢中になり、理不尽でも必要だと受け入れる。そんな無鉄砲すぎる心のあり方は、自分がよく知っているとも。その凄さから、最終的な結末まで全て。

「わたしとしては、手を出さなかったらどうなるかも気になるんだけどね……行人がそうすると決めたのなら、それを拒む気もないよ」

「ああそうだ。てか元より拒ませる気もないがな。飽きたかもしれないが、まだまだ付き合ってもらおうぞ」

「飽きるなんてとんでもない。君がわたしを見捨てない限り、いつま

でもどこまでも、地獄の果てにだつてついでいくよ」

二人は拳を合わせる。互いに歪んだ笑みを浮かべながら。

初戦

「元来煌式武装にはこれといった制限を設けてこなかったのだけど――」

《星武祭》^{フェスタ}当日、ドームで談笑やらをしていたレヴォルフを除く学生一同は、開会式のアナウンスによって会場へと集まっていた。

演壇ではちようどアスタリスクの市長が話を終え、司会を《星武祭》運営委員会の委員長であるマディアス・メサに代わっている。

壮年で人当たりのいい風貌。人前で喋り慣れた快活な口調。スーツの上からもわかる鍛え上げられた身体。そして何より、抑えられた上でも感じられる習熟された星辰力^{プラナーナ}。

過去に行われた《鳳凰星武祭》^{フェニクス}で優勝した星導館のOBで、その願いを委員会就任に使った変わり者。それが彼だ。

一大イベントを表立って監督する立場だ。なればそこで終わりというわけではないため、今まで続いていることからその能力の高さが伺える。

現在も話の合間に少し別の話題を入れたりして、観客たちの興味を損なわずにいる。さすがに全員ではないだろうが、ほとんどは間違いなくマディアスの話に没頭しているだろう。

しかし行人は、そのほとんどに入れなない一部の一人であった。

「……なんで聞き入れるのかねえ」

別に話し手が嫌いというわけではない。マディアスは文武両道を

体現し、学生時代から今にかけて優秀な成績を残している。普通なら尊敬に値する人物だ。

それなのに何故そんなことを思うのか。答えは至極単純で、大勢の前で行われる長つたらしい会話が苦手なのだ。

一部除くが、小中高一貫して校長などの話は全て寝過ぐしていた。隣に起こされるまでが一連の流れだったが、途中からはそれもなくなるほどだ。

もちろん形式上必要なのはわかる。だが、それはそれとして眠くなるものは眠くなるものなのだ。市長としての期待とか、そんなものいらないから早く寝かせろよと愚痴りながら唇を噛んでいた。

今だって正直眠い。《星武祭》恒例のレギュレーション変更さえなければ、立ったまま寝るなんて器用なことすらやってのけそうな気分だ。

「——我々は常に、諸君にとって最善の道を用意するため、全力を尽くしていることを信じて欲しい」

演説はクライマックスへと移り、マディアスは最後に《星武祭》への期待を煽る言葉を放ち演壇を降りていった。《星武祭》のためという決まり文句で観客と選手はそれぞれ真反対の反応をしており、前者は歓声に満ち、一方後者は呆れを浮かべている。

話の内容を要約すれば、新たなルールを導入したから頑張れというものだ。いきなりそんなことがされれば、今までには無かったものが追加され、悪く言えば面倒事の原因が増えたのだ。選手にとっては傍迷惑でしかない。

だが観衆はそれを受け入れる。何故ならこれは所詮娯楽であり、それを面白くするための案を実行されただけだ。そのため楽しむことを至福とする彼らにとつて、そもそも拒絶する必要がない。実績あるカリスマ的委員長によるものなら尚更だ。

如何に面倒だったりおかしなことが起こっていたとしても、面白ければ許されるのがこの場所なのだ。故にどれだけ害があつても納得するしかないのが齒がゆいところである。

「はあく……ねみいわ」

大きく口を開けてあくびをし、今にもやられそうな眠気をなんとかこらえる。聞かなければならない話は終わったが、この後自分たちはこことは違うステージに移動しなければならない。

如何せん距離が遠く余裕をもつ必要があるため、今から寝るわけにもいかないのだ。他にも、解散してできる荒波に吞まれることを危惧しているのもある。

それからは必要性を疑う式典の数々を乗り越え、行人は無事交通機関に向かい、無事会場までたどり着くことができた。電車に乗っている間船を漕いでいたのは、もはや言うまでもないだろう。

「いやー疲れた疲れた。精神的に死ねるわあんなん。早く寝たい」

「休めって前から言ってたのに睡眠不足ですか？」

「違う。これは開会式という名の眠気を誘う儀式によつてもたらされた睡魔のせいだ、今までの俺は睡魔から攻撃を受けて――」

「はいはいわかりました」

「なんか今日辛辣じゃね？」

溜まっていた疲れを愚痴にして身の潔癖を表すが、今回は相手もさ
れずあしらわれた。

「大体、なんでこの状態で寝ようと思えるんですか……あと二時間で
すよ!?! 今日なんですよ!?! 私なんて昨日から寝れてませんよお
……」

大きな声を上げたと思いきや、頭を抱えて弱々しい声を発する利
奈。

彼女のつつけんどんな態度はいつものことだが、現在は緊張でいつ
も以上に増しており、周りには人がいるにも関わらず叫び声まで上げ
ている。

大げさな気もするが、《^{フェスタ}星武祭》初参戦ともなれば無理もないことだ
ろう。何せ彼女だけに限らず、ここに来るまでもそうだったのは何
人もいるのが見えた。

中には某主人公の如く、同じことを連呼している者がいるほどだ。
もつとも、言葉のチョイス的に逆効果だと思われるが。

「大丈夫大丈夫、これから出る試合はお前の出番ないし」

「わかっています……わかっていますけどー!」

「はあ……まだ部屋に着いてないしとりあえず落ち着け。周りからし
てみりや、今のお前ヒステリックな人だぞ?」

「あつ……すいませんでした」

ハツと我に帰り、利奈は頭を瞬時に下げ周りに謝罪する。様子から見て相当緊張しているようだ。

深呼吸を促し必死に宥めながら、誰もいない控え室へと入る。

「ふう、ここなら廊下よりマシだ。……にしてもお前、意外と本番に弱いんだな」

「逆に落ち着いてるのが——って、そういえば経験者でしたね……」

人をおかしいみたいに言いかけたが、自己完結したようでそれは途切れてしまう。

「本選に出る頃には慣れてるはずだ。といつても出たららの話だが」

「せめてそこは断言して欲しかったです。会長もそれくらいやってのけると言っていましたし」

「そんなの知らないしムリだ」

ここにはいない知人からの期待に対して、寧ろ逆に断言する。《星武祭》^{フェスタ}はその性質から、各ブロックに有力候補が配置される仕組みとなっている。

いずれも強敵揃いで、今回例を挙げるならドSの具現化だったり、はたまた重力を操ったり、最有力ともなると人外だったりする。簡単に勝てるような相手ではないのだ。

そんなやつらに勝利を断言できるのは余程の強者か、または考え無

しのアホだけだ。自分にはできない。

「ま、勝つために全力は尽くすさ。そのために、まずは俺を目立たせる必要がある」

「……一応戦略なのはわかりますけど、文面だけ聞くとただの目立ちたがり屋ですよねこれ」

「そう言うな。ヘイト稼ぎは立派な役割だし、お前の持つ秘密兵器を的確に当ててるためだ」

話し込んでいるうちにも、時間は刻々と迫ってきていた。

『さて、もうすぐEブロック第二試合が始まります。これからどんな試合が繰り広げられるのでしょうか。私はダークホースが出てくるのではと心臓のドキドキが止まりません』

特色のないアナウンスが一回り小さい会場に響く。ここは中程度の大きさのドームで、こういった場所では有力候補ではない学生たちが主に戦っている。

もちろん実力ある者たちだが、大会ではいわゆるモブみたいな扱いを受けているのがほとんどだ。故に大番狂わせがここで稀に起きることもあるため、ここではコアなファンが比較的多いらしい。

『今回は界龍ジエロンと星導館の組み合わせによる試合ですが、界龍の代名詞といえば、やはり拳士タオシーと道士でしょう。独自の拳法と星仙術を扱う彼らに、星導館がどう対抗するかが見所ですね』

『なるほど……確かにそうですね。と、試合開始の時間が近づいてきました』

アナウンスの警告によって、対戦相手たちは戦闘体制をとり始めた。一人は低い姿勢で拳を構え、一人は何枚もの呪符を手に持つ。

「んじゃ、お前は正座でもして待ってろ」

こちらも準備をするが、念のため利奈に言い聞かせておく。当の本人は盾の発動体を持ちながら無言で承諾してくれた。

目をつぶって感覚を研ぎ澄まし、ゆっくりと深呼吸をする。戦っている自分を思い浮かべ、ゆっくりと。

「……よし」

終わったところでホルダーから純星煌式武装オーガルクスの発動体を取り出し、少し小さな声で呼び掛ける。

「いくぞ。今回は全力で叩きのめす」

『つまりいつも通りだね。了解』

「《鳳凰星武祭》Eブロック三回戦二組、試合開始！」
フェニックス バトルスタート

試合開始の合図と同時に、道士が行人に向かって炎を纏った呪符を飛ばしてきた。しかし、それは予め展開した盾によって防ぐ。

続いて向かってきたのは拳士で、岩をも砕くような掌打を間髪いれずに放ってくる。動きが素早く破壊力も十分だが、拳だからこそその欠点もある。

まずバックステップで相手との距離をとる。そして、

(引っ掛かった……！)

「なにっ!？」

縮めた間合いから相手を逃すまいと突っ込んできた拳士に、槍に変化した純星煌式オーガルクス武装を打ち込む。

『おっとお!? これは確か永見選手の——』

『《数多ナイアーラトテツブの偽り》……様々な形態を持つ、彼の純星煌式武装ですね』

《数多の偽り》の能力、それは模倣だ。今までにこれと交えた武器を再現することができ、剣、槍、弓矢などその用途は多く、新しいものと戦えば戦うほどそのストックは貯まっていく。

今の姿は、以前序列戦で戦った相手の武器を模倣した槍だ。様々な武器になれるということは、それごとの間合いを持っているということ。

つまり自分は、相手に合わせた武器を選択し、それにより有利に立ち回ることができるということだ。

校章を何度も突きを繰り返し、たまに打ちつけ徐々に削っていく。リーチの短い相手には常套手段だが、もちろんこれで終わるわけがな

い。

立ち回りがしにくくなったのを見計らって、また呪符がこちらを目掛けて飛翔する。

取り回しの良い剣でそれらを切り払い、また同じ展開に戻ると思われた。

(……やっべ)

しかし先と同じように得物を交えていると、向かってこなかった呪符のいくつかが、今度は頭上から雷の音を鳴らし始めている。

一刻も早く避けなければならぬが、リーチが短くなった武器をそのまま使わされた影響で、行人は押され始めていた。

迫る拳は衰えることを知らず風切り音すら聞こえてきており、まさしく攻撃こそ最大の防御を体現している。回避運動をとれるほどの余裕を、今の行人は持っていない。

防ぐのを止めれば拳を叩き込まれる。かといって強引に引き剥がせばその隙に焦がされてしまう。なんとも嫌なジレンマに呑み込まれてしまった。

『これは……なぜ白江選手はこの状況で動かないのでしょうか?』

『私にも意図を図りかねますね。このままだと永見選手はやられてしまい、苦戦を強いられるだけです』

武器を飛ばされ、アナウンスからもそう告げられ、誰もが勝負を決したものだと思っていた。

——そして、それで終わらないのが《フェスタ星武祭》だ。

「破ッ！」

得物を失って安心したのか、拳士は渾身の一撃を放ってきた。だが威力の大きい蹴りが繰り出されたことを確認して、行人はそれをガツシリと受け止める。

そして重心を崩されよろけた拳士を、頭上に向けて投げ飛ばす。

「ッ……おらよッ！」

「くッ！」

突然の反撃に動きが遅れた拳士に振りほどく暇などなく、煙を上げながら気絶した。

『お？ おおつ、まさかの展開！ 八方塞がりかと思われたあの状況から、なんと相手を倒しながら一気に打破しました！』

『すごい冷静ですね……武器を飛ばされたら焦るはずなのに、そこからすぐに戦い方を変えるのは普通なら難しいですよ』

予想外の事態に、会場は盛り上がりを見せ始めている。かくいう行人は、ブラーナ星辰力を防衛に回したとはいえもろに食らった腹を押さえながら、《ナイアラトテツ数多の偽り》を拾い上げる。

「いてて……下手したら内臓逝くんじゃねえかこれ」

「クソッ！ これなら……食らえ！」

「おっと、させないぞ」

残された道士は懐から取り出した数十枚の呪符を発動しようとするが、その前にこちらもピンを抜いた物体を投擲する。

「なにをッー！」

物体は爆発によって轟音と光を伴い、短時間視界と聴覚を奪う。当然自分にも効果はあるが、予め知っていれば対処は十分できる。

そしてこの小さい隙でも、それなりに近づくことはできる。

「よっー！」

周辺には地雷式の呪符があると踏み、高く跳躍して目の前に着地して校章を切断する。

「試合終了！ 勝者、永見行人&白江利奈！」

決起

「……やっと、帰ってこれた、ぞ……」

精神的な疲労をまろに出しながら、ようやく着いた室内の椅子にもたれ掛かる。それは利奈も諸共で、違うのはかすれた声を絞り出して質問してきたことだ。

「なんで、あんなにいるんですか……？ 私たち、そんなに有名じゃないですよね……？」

「多分、俺が『フェスタ星武祭』に出たことのある人物だから……」

質問にそつち系統のものがあつたため、理由はすぐにわかつた。それなりに有名な人物とチームを組んでいたことが災いして、行人は時の人の一人となつたことがある。

無論これは一時的なもので、その上脇役的な存在だつた自分が人々の記憶に残るはずもなく、三ヶ月も経たずにそれは消え去つた。

ところがどっこい、その消えた人物が再び舞い戻り、初っ端から一対二で勝つという荒業をしてのけたとなれば話は別だ。

集まるはずのなかつたマスコミはそれを嗅ぎ付けて辺りを回っており、見つければ足止めは必然。隠れて来たためにここまで疲労が溜まってしまった、というのが今に至る流れだ。

「……それ、明らかにあなたのせいじゃないですか。責任とって行つてきたほうがいいですよ」

「絶対に嫌だ。俺アイツら嫌いだし」

本当とも冗談ともとれる提案だが、首を思いきり横に振りそれを拒絶する。

以前の経験からわかっていることだが、やつらはグレーゾーンという感覚を持っていない。情報のためなら、見境なくなんだって聞いてくる。

戦法の発案といったことから、経歴や年齢、メンバーとの関係、挙げ句に職権乱用みたいなプライベートの質問まで選り取り見取りだ。ずけずけと人の情報を探ろうとするやつらに、何度辛酸をなめさせられたことか。

それも最前線で。

「っ!？」

インターホンの音が聞こえたことで行人は身構えたが、それは後の声によって解かれることになった。

『もしもし、こちらに永見先輩はいらっしゃいますか?』

「……なんだクローディアか、脅かさないでくれよ」

大きく息を吐いて安堵し、扉のロックを解除してクローディアを室内に招き入れる。

「おや……疲れているようですが、何かありましたか? その様子だと試合の他に理由がありそうですねが……」

「なあ、理由は話すけどまず聞かせて? お前は俺をなんだと思つて

るの？ 俺だって人間ですし、失敗もあれば疲労も溜まりますからね？」

「あの程度で根を上げるような人ではないでしょう？」

「試合は大丈夫だちゃんとガードしたからな。だがその後だこの野郎！ お前が自分隠すために俺をマスゴミ連中の前に持ったの、言っとくがまだ憶えてるからな！」

とぼけた笑顔で対応してくるクロードディアに、ここぞとばかりに過去の怨嗟をぶちまけていく。

「あの……状況がよくわからないんですが」

「あら、白江さん。一回戦突破、おめでとうございます」

「い、いえ、あれはあの人が頑張った結果ですから——」

「ねえ無視しないで？ 澄ました顔でスルーすんのやめて？ そして何がなんでも敬称を使わないのなんで？」

無視をする腹黒い後輩と、妙にぞんざいというか辛辣な態度の後輩。なんでこう、もつと性格の良い後輩がないのか。属性としては結構来るものがあるのに。

「ふふっ、仲はよろしいようで」

「それはないです」

「普通にひでえ……」

「まあまあ。なんにしても、先輩はあなたが勝ち上がる上で絶対に役立ちますよ。かつてチームを組んでいた私が保証します」

「え？ 会長と同じチーム……ですか？」

漫才みたいな会話は終わりを見せ、唐突に行人とクロードイアは同じグループだったことが話題となる。

「ええ、あの頃はまだお互いに未熟でしたから、フォローしあつて必死でしたよ」

「嘘つけ。俺とお前の腕が同じな訳ないし、トレーニングでの手合わせじゃ九割方そっちが勝つてたろ」

模擬戦での試合は適当なペア同士での連携強化が基本だったため、相性などもあるため正確な優劣が決まったわけではないが、勝率は十回戦つて一回勝てば御の字だった。

だがそれほどの余裕があるのにも関わらず、その時のクロードイアはまだ何か隠しているような気がしていたのだ。となれば実力差は歴然だろう。

「そうは言っても、あの頃から月日も経ちましたし、今戦ったら負けてしまうかもしれませんよ？」

「その顔で言われてもなあ」

なんてお世辞を言うクロードイアだが、表情一つ変えずに返されて勝てる気がしない。というか勝たせてくれるような人物じゃない。

「えっと、それとさっきの話に一体何の関係が……？」

唐突に始まった思い出話の間に割り込んできたのは、未だに怪訝な顔をしている利奈だ。

「ああそうですね。簡潔に申しますと——確かアーネスト・フエアクロフと立ち会って、一分以上持ちこたえていました」

「……はい？」

「——やー怖いねえ。《悪辣の王》^{タイラント}からの紹介だし怪しかったがよ、序列入りしてないのが惜しいくらいだぜアンタ」

逆立った赤毛を持つ青年が、二人しかいない控え室で声を発する。髪色の如く熱気のコもった言葉は、試合外だというのに暑苦しさを感ぜさせる。

「……なんだ返事もナシかよ？ その陰気っぽいところも相変わらずだなあ。退屈しないって聞いてたつてのに、静か過ぎるつたらありやねえ」

目の前の少女は椅子にもたれかかったまま、眉ひとつ動かさない。脱力感満載なその様子は、目を開けながら寝ているのではと錯覚するほどだ。

事実、今のも聞こえてはいるだろうが、反応する素振りはない。退

屈しのぎになるのは、精々どうしたら反応するかを考えるぐらいだ。

「——私としては静かな方が良いんだけどね……そんな血気盛んでも良いことはないだろう?」

「んあ?」

無い頭を必死に回転させ、何か挑発的な言葉の一つでも捻り出そうとしていると、遅れて声が返ってきた。

「うるさいのはそんなに好きじゃないんだ。元気なのは良いことだけど。無駄にエネルギーを使ってたら本番まで持たないじゃないか」

「オレそんなうるせえか? 叫ぶのは能力以上に自分の性もあるけどさ」

「無駄口を叩く必要を聞いてるんだよ。私と話してるより、他の所に行った方がお互いに良い気もするよ」

人に対して遠慮無く、まるで邪魔だとも言いたいようなことを彼女は平然と口にしてくる。

一応タッグなのだから、少しぐらい仲良くしたっていいと思うのだが。

「そう言わずによ、もっと互いに色々話さねえか? てか外は他のヤツらでいっぱいだしよ」

「そこに暑さが入らないのがすごいよ君は」

別に普通くらいだろう。絶賛真夏日で日も照っているが、むしろ物

足りないくらいだ。

「……はあ、いいよ。だったら仕方ない。ちょうどいいし、話に付き合っただけよ」

「よっしゃー！」

「わかったから騒ぐな、やかましい……」

今、利奈は神経を研ぎ澄ましている。トレーニングルームを走りながらの射撃訓練。室内を半周してから、対角線に置かれた的を狙って引き金を引く。これを何度も繰り返す。

実戦では一瞬の迷いすら命取りだと、あの鬼畜^人も映画のように言っていた。それに偽りはない。あの目見た人も、緊迫しきった会場の中で戦っていた。

もしかするとあれは……

「……………」

いや、違う。あの人と同じな訳がない。それに今は訓練中だ。集中しろ。邪念を招き入れるな。

……。

.....。

.....。

「——おい？ とつくに指定した回数過ぎてますけど〜？」

「え？」

おかしい。慣れてきてからも、終わるまでを平均しても二十分以上は絶対にかかっていた。

だがカウントを見ると、確かにそれは目標値まで達していた。いつもなら聞こえていた終わりの合図がなかったし、熱が入りすぎて無我夢中になっていたのかもしれない。

「ほれ、早くシャワー浴びてこい。熱中症になられても困るし」

言われた通り備え付けの更衣室で服を脱ぎ、たくさんかいた汗をシャワー室で洗い流す。若干強めなお湯が気持ちよく、心が浄化されるようだ。

「ふう……」

しばらくして無事、覗きもなく体を洗い終わり、替えの衣服を着て行人の下に戻る。ここでは行人が例の純星煌式^{オーガルクラス}武装を持ち、様々な武器を交えた素振りを行っていた。

普通のものとは違い、手の内にあるものが剣、槍、斧、といった具合で目まぐるしく変わるので、かなり異常な光景だ。

「……フツ！ ハアツ！ ——こんなもんか？」

「あの、少しいいですか？」

「ん、なんだ？」

ふと、それを見ていて素朴な疑問が浮かんできた。

「その武器って、色んな形があって状況によって使い分けるものなんですよ？ 形を変えるときは、一体どうやってるんですか？」

煌式武装の発動体はものによって異なるが、特定の動作を行った上で展開される。このプロセスはどんなものでも基本的に変わらない。

だがその純星煌式武装の場合は、展開できるであろう形態が多すぎるのだ。やはりそれらに備わっているという意志が関係しているのだろうか。

「んーそうだな。他は知らんが、俺の場合は星辰力の伝達を当てはめてやってるな」

「……えっと、どういうことですか？」

「つまりだな、まず親指は剣、人差し指は槍みたいに、予め武器と星辰力の送り方を当てはめておく。そしてそれをこいつに教えとく。後は適応した星辰力を送れば、それに対応した形態が出てくる」

「音に置き換えると、音の種類、大きさ、高さで判別しているというわけですか？」

「多分それで大丈夫だ」

それを聞いて少しげんなりする。それなりに期待していたのだが、思っていたのと違ったのが理由だ。

「なんで素直に答えたら落ち込まれるんだ」

「いえ……なんでもありません」

「あーとにかく、もう次の試合も間近だ。体はいつも通り休めておくように。ではこれにて閉廷！ 解散！」

無理矢理な掛け声を合図に、利奈は暑苦しい帰路に着く。

夏は嫌いだ。熱が体に溜まるし、元々北国育ちなのでそもそも縁がない。というか夏が好きな人の気が知れない。

冬は鬱陶しい虫もあまりいないし、雪合戦やスキーが楽しい。冷えた身体を暖めてくれるお鍋は最高だし、何よりも雪が綺麗だ。朝が寒いのを除けばこれ以上ない季節だと言えよう。

……前提として、そもそも熱いのがキライだ。

「——待っててね」

いよいよだ。まだ本選にすら選ばれていないが、ここまで来れた。最初は疑っていたあの鬼畜も、会長の評価通りに戦ってくれている。今でもあまり好きではないが、それに関しては感謝してもしきれない。

必ず勝って、金を持ち帰って元通りの生活を送るために。

あの姿を思い浮かべるだけで、なにとだつて戦おうと思えば良かったのに。何もかも燃やし尽くすあの赤を見るだけで、身体が震え上がる。

あのキチガイみたいな訓練を受けたとき、今すぐ逃げ出したかった。生物の本能以上に怖がる心が、逃げ出したいと叫んでいた。

だがそんなことは言っていられない。もう一年は待たせてしまった。だから、こんなところで立ち止まってなどいられない。

理性による抑圧

『やって来ましたよおEブロック第三回戦！　今回も実況のナナ・ア
ンデルセンと——』

『お馴染み左近千歳で、お送りするで』

選手以上に濃いキャラが担当するプロキオンドームは、これまでの会場とは規模が段違いだ。二回りは大きくなったにも関わらず、座席は満員御礼という言葉がふさわしい。

もちろんそれに比例して声援の量も増えるわけで、まあすごくうるさい。夏場のセミと同じくらいうるさい。これから戦う相手を考えても億劫で仕方がない。

と、入場時点で既に思っていたのだが、まったく関係無い事態によつてそれはさらに悪化する。

『それでえつと……千歳さん。今回はどんな人でしたっけ？』

『だーかーらー、ちゃんとデータ見ときつてゆーとるやないかー』

「……なあ、アスタリスクのやつらつてさ、やっぱあんな感じのしかいないのか？」

「さ、さあ……」

いや、わかっている。一応様式美的な理由で確認したが、するまでもない。そもその存在がずれているこの都市から、良くも悪くも、まともな人間が出てくる訳がないのだ。

ほどなくして談笑は収まり、双方の選手が揃ったことで話題は紹介へと移行した。

『あーコホン、レヴオルフ側はポニファーツ・プライセポニファーツ・プライセ』

レヴオルフ黒学院の序列十位。高火力の火炎放射を使い、叫ぶなどして心が熱くなるほど威力が高まる。選手とラディーナ選手。ポニファーツ選手は序列十位で、かの《華焰の魔女》グリューエンローゼ以上の火力を出せる炎使い。その熱い志を真正面からぶつけることから、《叫炎の魔術師》ウオルカヌスの二つ名を持つてる実力者や』

『そして、あの青髪の方がラディーナ選手……ですよ？ データはあんまりないですが、これまでの試合を見る限りでもかなりの強者と見受けられます』

正面向こうに見える逆立った赤毛の青年がポニファーツ、青というより群青色に見えるのがラディーナだ。二人のデータは多少学園側から受け取っている。

ポニファーツは紹介の通り、ユリスのように炎を操る魔術師^{ダンテ}だ。ただ少し違うのは、彼の場合汎用性は高くなく、単純な火炎放射によって焼き尽くす火力特化という点と、

「ヨツシヤアアア!!」

……つまりこういうことである。能力が単純な分イメージが直接強さに依存するようで、試合中は選手が熱狂的でやかましくなる。

いずれにせよ、火を使うという時点でこちらには一番の天敵だ。何故なら利奈は火を感じるだけで体を強ばらせてしまう。出来るなら速攻で片付けたい。

もう一人のラディーナは、レヴォルフには珍しい堅実な剣士といったイメージだ。というのも、彼女は先の通りデータがない。唯一あるのは試合の映像だが、それでも速さを得意とすること以外わからない。

『今回の試合は、実質冒頭の十二人による戦いです！ 明確な実績を持つ者同士の戦い。今大会のプレリウドとなること間違いないでしょう！』

「すまん白江、俺あの暑苦しい赤毛と一緒にされんのめっちゃ嫌なんだが」

「いや、えっと……も、もうそろそろ始まりますから」

「アツハイ」

煌式武装の発動体を持って持ち場に着く。大丈夫。多少イレギュラーがあっても、予想できるものなら十分に対処できるはずだ。もしそうでなかったら……無事勝てることを祈るしかない。

『《鳳凰星武祭》Eブロック三回戦二組、試合開始！』

「行くぜえええええええええエエエ!!」

ポニファーツが叫び声を上げながら、前方二人は一直線に突っ込んでくる。

レヴォルフの学生は個を尊ぶため、集団戦は苦手なものが多い。《冒頭の十二人》ともなれば尚更だ。なのでペアを組んでいるとはいえ、タッグ戦特有の連携はほとんどないと見て間違いない。

発動体を起動し、まずは彼らの分断から開始する。

「そんなチャチなもので、オレを止められると思ってんのかア!? オ
ラアアアアア!!」

手から炎を吐き地面を焦がしながら、ポニファーツはそのスピード
を引き上げた。あつという間に辺りは焼け地獄となり、温度は真夏日
のそれを軽く越しているだろう。

だが問題ない。それら全部、まとめて吹き飛ばしてしまえばいい。

「ムダだっつんでんだr——」

「早く横に飛べ、吹き飛ばされる!」

「ツチ」

引き金を引く。展開された大型の煌式武装ルックスに溜まった力は個々の
エネルギー体に圧縮され、銃口から解き放たれたそれらは群体にバラ
けて炸裂し、当たらずとも燃え盛る炎を捲き込んで消えた。

『こ、これはー!? 永見選手、謎の武装を展開し発射! ここで戦いを
繰り広げていた沙々宮選手にも、負けず劣らずの銃器です!』

『あれは散弾銃と榴弾を組み合わせた武器のようやね。過励万応現象
によるエネルギーを炸裂弾として拡散発射してるみたいや。でもあ
れだけの出力をどうやって……まさか、ロボス可変式?』

さすが技術大国アルルカントのOG。気づくのが早い。

火を使う相手との戦闘を想定したとき、最も課題となったのは消火方法だ。炎が残れば、その分行動が制限されてしまう。これは利奈にも関わらず言えることで、トーナメント内にポニファーツがいる時点で難儀していた。

そこで行人が目をつけたのは、爆風消火だ。火薬などの爆発の風圧を利用した消火方法。これならば、戦闘でも爆発物を使うだけで済む。

ただし、生半可なものではすぐに元通りだ。いつそ能力の使い手すら巻き込むほどの超火力が欲しかった。そしてたどり着いた。沙々宮氏考案のロボス可変式構造ロボス可変式構造

沙々宮創一によって考案された煌式^{ルック}武装の方式。複数のマナダイトを連結させることで、通常より出力を底上げさせることができる。欠点として、煌式武装の使用に過励万応現象が必要不可欠となる。へと。

結果としてかなりピーキーな性能になってしまったが、訓練さえ積みめば難なく使えるはずだ。

「よし、死にたくなかったら撃ちまくれ。わかってるな？」

「……簡単に死を強要しないでくださいよ」

若干震えながらも例の銃を受け取って、ここで初めて利奈が戦線に参加した。

彼女には星辰力^{プラナーナ}が尽きるまで、数撃ちや当たる戦法でポニファーツを相手してもらおう。炎は変わらず無理だし爆発物なので近づかれると二重の意味で終わるが、制圧力があるので接近を許して発狂することはないだろう。

問題は……

「——頼むからどいてくれないかな？ 私も消し炭にはなりたくないんだ」

「精々皮膚が焦げるくらいだから大丈夫だ。だから、心配せずやられてくれよッ！」

行人は反対方向から回り込んできたラディーナと対面する。凜として剣を構えるその姿からは、強者特有の覇気がひしひしと伝わってくるようだ。

彼女のスタイルは、長剣と片手に籠手を装備するという珍しいもの。構え自体は両手による西洋剣術なので、パツと見ガラードワース流に見えなくもないが、全貌は全く違うと言っている。

その最たる理由は巧みな体術による間合い管理と、荒々しくも隙を的確に突いてくる剣撃だ。

「ほらほらどうした？ 私のこと殺るんじゃないのか？」

「なあお前って思考まで物騒なのか!? 理由はわからんけど殺伐としてるんだが!？」

踏み込みから袈裟斬り、切り上げと連続で切りつけようとするが簡単に躲されてしまい、逆に剣の切っ先がこちらをかすめた。

「ならよ……」

両手で攻撃の構えをとっているラディーナの剣を、盾に展開した

《数多の偽り》^{ナイアーラトテップ}で受け止める。そして空いた右腕を使い、

「食らえッ！」

ホルダーから予備の煌式武装^{ルークス}を取り出し、それを校章に向けて突き刺す。盾で死角ができた状態で、ほぼ密着から繰り出した攻撃。普通の人物なら避けきれず、最低でも浅手を負う場面だ。

だが彼女は違う。

「——甘いな」

「……クソッ」

満を持して踏み切ったというのに、行人は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

見えないはずの短剣が校章に来ることを予想し、ラディーナは冷静に籠手を当てて軌道を逸らしたのだ。

ラディーナは何といっても立ち回りが非常に堅実で中々近寄らせしてくれず、防御も硬い。かといってカウンターを狙おうにも、一転した猛攻によって押しきられてしまう。

なにより《数多の偽り》^{ナイアーラトテップ}の基本である、間合いや戦法を狂わせる特性が全く通用しない。

攻守どちらか一点に特化したスタンスを的確に使い分け、他には真似できない特殊な技法を初見で見切った彼女は、今まで戦ってきた剣士の中でもかなり戦いにくい部類だ。

「さあさあ、来ないならこちらから行くぞ？」

「お前友達いないタイプだな？ いやそうに違いない。そんだけ煽りセンスあるやつに親しいやつがいるわけ——ってあつぷねえ!？」

「お前は特別に、素手で内臓を引っ張り出してやる」

「凶星じゃねーか！」

とにかく、わざとかもしれないがやつは挑発に乗ってこちらを標的として認識したようだ。やるなら今しかない。

(今だ！)

もう一つの予備である拳銃を取り出してすぐ様発砲、大まかな狙いしか決めていなかったため、もちろんラディーナにはかすりも少ない。

「無駄な足掻き……！」

そう言い放って剣を掲げた途端に、

「……ッ!？」

「へへッ……」

ラディーナの煌式^{ルークス}武装が宙を舞っていた。

『これは見事な連携です！ 見たところ永見選手が立ち位置を調整して発砲音で合図を出し、そこを白江選手が背後からラディーナ選手の剣を弾き飛ばしたようです！』

『永見選手は合図と同時にポニファーツ選手へ牽制、いつもなら光弾すら遮る炎もなかったから、通常より容易に連携ができたんやろな』

状況は一気に逆転、徐々に壁へと追い詰めていく。これっぽっちも意識していなかった外部からのスナイプによって得物を弾かれ、彼女は牙をもがれたも同然だ。ポニファーツの方も直に片が付くだろう。

……なのになぜだ。ここまで優勢なのに、なぜこうまでも悪寒が走るのか。なぜこうまでも劣勢なのに、当のラディーナは汗一つ流さず、笑ってさえいられるのか。

「……まだ何かあるのか？」

剣を正眼に構えながら、底知れぬ何かを警戒して歩を進める。

「いや、別にない。といつても、あつても答えるような真似はしないさ。ただ……」

「なんだ」

「やはりね、本番前のウォーミングアップは必要だと思うんだよ。なまった身体じゃ、本気は出せない」

「……………」

自分が負けそうだというのに、捨て身の特攻がなければ、真打ちを出すようにも見えず、しかし諦めて降参する素振りもない。ただ何かを見据えながら、奇妙な笑みを浮かべるだけ。

顔の半分側だけ目が吊り上がり、口角も上がっている。まるで

ジョーカーが付けるモノクロの仮面のようだ。

(いや、そんなわけない。誘って校章を壊すのが関の山のはずだ……！)

予備すら持ち出さない彼女の姿を見て、そう自分に言い聞かせる。まだ戦う意思があるのなら、この状況で他の武器を出さないのは明らかにおかしい。

唯一籠手は残っているが、ラディーナの体捌きはあくまで動くためのものであって、直接攻撃に使うものじゃない。だとすればこちらを誘ってから、不意打ちか何かを狙っているに違いない。

「……ふんッ！」

まばたきで目を瞑ったところを見計らって、校章に向けて素早く剣を振るう。

それは数秒もあつたかわからない出来事だ。まばたき一回程度の猶予で、剣の切っ先は握られ、斬撃が届くことはなかった。

「ッ！」

予期せぬことからバックステップで距離をとるが、飛び退いたはずの合間は見えない。いや、認知する前に詰められたといったほうが正

しいだろう。金属製の重い掌打が腹部にめり込み、内臓が悲鳴を上げる。

「うぐあつー！」

「……………」

先の理性ある狂気とは似ても似つかない、獰猛な獣じみた笑みの女が、そこにはいた。

どんでん返し

「……クソ、なんだってんだコイツ」

急激な変貌、そして避けた攻撃が地面すら抉り取る様に、行人は恐怖心を抱き始めていた。

剣を捨て、己の身一つでこちらに向かってくるラディーナ。変化したのは髪色、目付き、戦法と様々で、中身が入れ替わったのかと錯覚するほどだ。

特に、彼女が魔女^{ストレガ}ということには驚かされた。

「……………」

(聞く耳持たず……というより聞こえてねえなありや)

言葉を発さずともこちらを射抜いてくる眼光。肉食動物を連想させるほどの前傾姿勢。救援に向かってもいいはずのポニファーツに見向きもせず、こちらを執拗に狙ってくる。

もはや周りすら見えてないだろう。見ているのは目の前の獲物だけ。

意思疎通自体ができないため確認もできないが、彼女を覆っているものは紛れもなく万^マ応^ナ素の塊だ。能力によるものなのは間違いないだろう。

どの動物にも似つかないが、能力が織り成すそれは人間の腕ではない。指は四本、腕は爪が鋭く、脚は普通より長くなり背丈も少し高くなっている。

能力にせよなんにせよ想定外だらけだ。ようやく一人倒せたと
思っていたのに、どうして敵側が覚醒（正確には狂化だが）してしま
うのか。

自分を見返してみようが、要所所で巻き返される、物量に押し
切られる、そもそも戦いになっていないことが多い気がしてきた。

（つと、んなこと考えてる場合じゃ、なかつたなッ！）

今は思い出に耽る場面ではない。咄嗟にそれを理解し、意識を目の
前の状況に傾ける。

今のラディーナは、先ほどまでの技術タイプとは正反対に、一撃の
パワーとスピードが純粹に高くなっている。

要するに、高い能力が売りの純パワーファイターということだ。体
術に至るまでの巧さは無くなったが、それと引き換えに手にしている
力は強大だ。その上手数も多い。

救いがあるとすれば、いずれも単純な軌道ばかりで読みやすいこと
だ。上下左右から縦横無尽に、鋭い爪が振り下ろされるが、いずれも
直線的で捻りなんて一切ない。

「……………ッ！」

しかし被害を受けた地面は爪の跡がごっそり残っており、耐えられ
るとはとてもじゃないが思えない。速さは段違い、威力もレスターと
同等かそれ以上だろう。

常人ならすぐにバテてしまうはずだが、体力はこの試合分ありそう

だ。

(…………どうしたものかな)

如何せん猛獣退治は初めての経験だ。人同士の戦いとは勝手が違
いすぎる(普通なら逃げるものだが)。

だが今の状態では、校章を狙いにくくなるのは間違いない。彼女の
能力に《ブライトウエン鎧装の魔術師》鎧装の魔術師(ブライトウエン)

聖ガロードワース学園序列第七位の二つ名。本名はドロテオ・レム
ス。魔術師ダンテであり、能力で鎧を身に纏うことから名付けられた。のよ
うな防御力があるかは定かでないが、早めに方を付けたいところだ。

「…………やるか」

四の五の考えても戦わないのでは仕方ない。銃は外装を壊された
ため使えず、残っているものもいささか頼りないが…………なんとかする
しかないだろう。

『え？　ち、千歳さん、一体何が起こってるの…………あれ』

『なんやあれは…………データベースには載ってない能力？　みたいやけ
ど…………外見が完全に別人になつとるし、若干雰囲気も変わつとるみた
いやね…………あかん、流石にわからへんわ』

「ひええ……、す、すごいですねあの人……会長もそう思いませんか？」

「……………」

「……か、会長？」

「ああ？」

「ヒイツ！ な、何でもないです！」

やれやれ、能力を買ってそばに置いてから幾ばくか、相変わらず些細なことでやかましい女だ。何もなければ今頃ドブにでも捨ててこさせるというのに。

まあ、今回ばかりは驚くのもわからんでもない。画面の奥で暴れているレヴォルフの学生。事情を知らぬ者からすれば、化けの皮が剥がれたようにも見えたはずだ。

今から数年前、ウルサイス姉妹をレヴォルフに招き入れる以前の話だ。あの時ディルクは、紛争・貧困地域に使える駒がないか探していた。

地域を限定するのは当然、社会的弱者の弱味につけこみやすいからだ。連中は問題を抱えているのがほとんどで、それを打開できる力で釣れば、あとは代償に従事を求めるだけで簡単に利用できる。

その条件でたまたま目に留まったのが、ベスティア・ベルダ……獣のように暴れているあの女だ。天涯孤独で独り暮らし。

身寄りには既におらず迫害で友人もいない。過去に能力の暴走で生

活を失っており、現在はスラム暮らし。学校にも行っていないから操るのは容易い。引き入れるにはうってつけの人物だ。

猫の情報から身元を確認し、金の準備をしながら自ら足を運んだ。もちろん懐には猫を忍ばせながら。

『……………』

『…………どちら様かな？ 足を追ってこれるのは残してないはずだけど』

そこで見たのは、情報とは微妙に異なる青髪の女だ。髪以外に明確な差違がほぼないため、猫がミスを犯したとも最初は考えたが、それはないと断言した以上そうなのだ判断した。

『アスタリスクって？』

仕方なく話を持ちかけたが、話せば話すほど情報との差違が明らかになるばかりだった。人を逆撫でするような言動、相手を見極める冷やかな目付き。

だが地頭がいい人物のようで、アスタリスクの存在すら知らないくせに、学がないなりに最大限のリターンを取ろうと情報を聞き出してくる。

『ふむ……………そうか……………』

ああ、失敗した。失うものも取り戻したいものもない。他人につけこむ自分にとって扱いにくい人物なのだと、そう思った。

『つまり、思う存分暴れられるんだね？』

だがその心配は杞憂だったらしい。

それからというもの、ヤツは私兵として任を与えればきちんところなし見返りも求めない、猫に近い存在となった。

統合企業財体が関わらず人を介する必要もない分、こちらとしては使いやすい。唯一欠点があるとすれば、定期的に暴走してしまうところか。

報酬も、代償も、服従も、ヤツにとっては意味を成さない。理性とは無縁の、本来の自分を解放できることこそが生き甲斐であり、習性なのだ。

「——オラアアアアアアアアアア!!!」

手のひらから吐き出される炎を消し去るべく、渡された擲弾発射器の引き金を引く。ものすごい勢いであろうとなんのその、全てを爆風によつてかき消し、距離のあつた使い手本人すら吹き飛ばす。

そして一時しまっておいた小銃を起動し、校章目掛けて狙い撃つ。始まってからこれの繰り返しだ。

「……っ」

銃身を支える腕が、引き金を引く指が、震えそうになるのをじつと堪える。同じ行動の繰り返しだとしても、利奈は心身ともに疲労を重ねていた。

無慈悲に迫り来る炎は爆発の一センチ外だったとしてもこちらに向かってくるし、撃つ度に響く爆音は恐怖心を煽ってくる。一ヶ月以上前から耐性を付けていなければ、今頃崩れ落ちていたはずだ。

あの男に会って、無理矢理にでも炎や爆発に慣れさせられたところ、あの頃とは比べ物にならないほど耐性を付けられたことだろう。なんせ誕生日のろうそくの火を見るだけで倒れ込んでいたのがなくなったのだ。

だが根本的な部分は変わらない。光、音、臭い……どれか一つでも感じるだけで、体が感覚を思い出し、言うことを聞かなくなりそうになる。

でもやらなければならない。いくら怖くても、心が拒絶しても、役割くらいは果たさなければ。

一人では何もできず、あまつさえ逃げ出してしまった自分にとって、あの男は光だ。戦いの素人である自分に武器を与え、術を伝授し、心を鍛えてくれて、戦いに参加してくれている。

欲望渦巻くこの世界で、見ず知らずの人間にわざわざ加担する理由は正直察することができない。だが何であろうと、あいつがいなければ、試合にすら勝てないのだ。

「そっ……っ……」

爆発の合間を縫って狙いを定める。もちろん校章を狙って。

無理に仕留める必要はない、役割に集中しろと言われたが、そうも言ってもらえない。この戦いを早く終わらせて、優勝を勝ち取る。私はそのためにここにいるのだ。

「食らえええエエエエ!!!」

痺れを切らしたのか、ポニファーツは今までで最大級の火炎放射を放ってくるが、単細胞みたいに何度もやられたおかげで、こちらも対処に慣れてきたところだ。

今回は煌式^{ルークス}武装の爆発を地面にも多く直撃させる。ポニファーツはこちらの周りを走りながら、ある程度距離を保っていた。おそらくだが、近づく際のリスクより銃弾の避けやすさを意識したのだと思う。

だがそれ故に走るルートはある程度固定されており、そこでは何度も爆発が起きていた。それで脆くなった場所を、より一層強い力で砕いてやる。

「ッ!? ぐあっ!」

するとそれなりの硬度を持つドームの地面が、破片となって飛び散った。

辛うじて避けていたポニファーツだが、第二の矢をもろに受け喰い声を立てて倒れ込む。薄い傷が全身に付き、戦闘続行は厳しそうだ。

「――畜生ッ……!」

……驚いた。いくら小さな破片といえど、飛んだ原因は爆発の衝撃波だ。生身で耐えられるものでないことはよく知っている。それに能力の使用中は防御が不安定になるはずだが……

いや、あとは校章を撃つだけだ。要因を特定する必要もない。炎を出されても無事な距離から引き金を引く。

(ツ、何……!?)

しかし、突如として衝撃波に襲われ、発射した光弾はポニファーツから大きく外れてしまう。

一体何が起きた。なんらかの爆発によるとしても、行人たちとの距離は百メートルは離れている。手榴弾を使ったとしても音が聞こえるだけのはずだ。

どうしても疑問が拭えず、利奈は後ろに振り返る。そこに見えたのは見覚えのない真正銘の獣と、武器を飛ばされ身動きが取れない行人だ。

迷わず銃を向けた。彼を失くしてしまえば、試合の勝機は絶たれるからだ。

デカイ図体に数発が命中。気はこちらに逸れたようで、二メートルはありそうな巨体が、通常の倍以上の速さで向かってくる。

例の煌式^{ルークス}武装を再起動し、自らの星辰力^{プラナーナ}を巡らせる。文字通り猪突猛進な動きだ。避けられる心配はない。

(発射……!)

マナダイトが輝きを増し、銃口から爆裂弾が放たれた。そしてまばらな弾は最終的に獣の周囲にまで分散し……

「……………」

爆裂した。詳細な強さは知らないが、一般的な手榴弾でも池に投げ込めば数メートル規模の水柱ができるらしい。威力は多少低くても、それがいくつもあるのだ。無事で済むわけがない。

——常識的に考えるのであれば。

「はあ?」

爆発をまともに受けたはずなのに、その勢いが弱まることはなかった。何度打ち続けようと、体が欠けようと、一心不乱に走り続ける。

やがて距離を測る必要もないほどになっていた。

もはや新しく武器を起動する時間はない。盾代わりにその手のものを前に出し、爪を受け止める。

だが巨大な体格、そして全体重を載せた勢いを一人で耐えられるはずもなく、

「ッ、ああ……………」

足は地面を離れ、武器に押し潰される形で壁に叩きつけられる。肺が締め上げられ、苦悶の声さえ出すことができない。気絶しなかったのは奇跡と言えた。

いち早く正常な思考を取り戻さんと、異常者のように呼吸を繰り返す。痛みになど構ってられない。早く、早く……

「——よくも、やってくれた、なア……！」

だが悪魔が嘲笑うかのように、第二の試練が下された。

最後の一撃

「いってて……容赦なさすぎだろあのクソ女……」

一旦手放してしまった純星煌式武装を、踏まれていた自分の部位をさすりながら拾い直す。

「さて、と」

意識がしつかりしてきたところで、状況を見定めるべく頭を回転させていく。

まずは最も警戒すべき人物……ラディーナについてだ。身体は頭から脚まで全てが万応素で覆われ、まさしく完全体と言える姿となっていた。

背丈は高く、爪は鋭く、人としての面影はほとんど見られない。

もちろんさらに強くなっており、体毛のような万応素はそれなりの硬度によつて攻撃を防ぎ、鋭い爪と身軽な脚が狩人のようにこちらを追い詰めてくる。

《冒頭の十二人》にも劣らないその力、それが未だにこちらを狙ってくるのだから、脅威的という言葉に尽きるだろう。

次に利奈たち。わざわざ敵の相手を中断して、こちらを助けてくれたようだ。しかし行動を誤ったこともあつて、現在進行形で追い詰められている。

ポニファーツ自体は消耗、損傷ともに軽くはないので、一応逃げられなくもないはずだが……トラウマが邪魔して立つこともできない

ようだ。

肩の動きが激しく、炎は直撃せずとも体温上昇は相当なはずだ。脱水症状も懸念される。ひとまず彼女の救出、それからポニファーツに止めを刺し、ラディーナの相手をこなす。

誰の助けもない。全て一人でやらなければならないが、つべこべ言っている暇はない。何もしなくても結果は負け一直線だし、何より自分の純星煌式武装^{オーガルクス}、そして技術は汎用性特化だ。ここで活かさずしてどうする。

右手で《数多の偽り》の発動体を、左手にはナイフを握り込み、走る。

(来たな……！)

こちらが動くと同時に、身構えていた獣は同様に向かってくる。

攻撃力、素早さ、いかなる部分でもスペックはあちらの方が上。だとしても、その差をなんとかして埋めるのが自分の役割だ。

「ふんッー」

ある程度の距離まで達したら、まずはナイフを正面に投擲する。当然投げるためのナイフではないし、ストッピングパワーだって少しもない。

案の定、速度は緩まない。飛んでくる物体を避ける、防ぐといった動作もなく、馬力を全て推進力に変えて爪を振りかぶってくる。

それでいい。一瞬でも、その視界に被さればいいのだ。

（——そこだッ！）

正面から立ち向かうふりをして、至近距離まで近づいてきた巨体の、その脇をヘッドスライディングの要領で滑り抜ける。

「——ツぶねえなー！」

攻撃が目前にまで迫り一瞬死にかけた気分だが、スレスレで首をすぼめたためなんとか切り裂かれずに済んだ。

すぐさま立ち上がり、盾を構えて炎の中に突っ込む。

所々から焦げた匂いがする。制服を越えて皮膚が焼け、思わず声が出てしまう。だがそんな傷など、既に負い慣れている。その程度のことには構ってられない。

「オラアッ！」

「ッ、……！」

武器なんて展開してられない。一発目は顔面を、二発目は腹部を。炎の元凶である赤髪の青年を殴りつけ、さらなる追い討ちをかける。

苦悶の表情を浮かべ、一歩二歩と後退りをして、傷だらけの青年はようやく倒れた。

想定の上のもの労力を払い、やっと相手の内一人を倒したが、今の行人にそれを喜べる合間はない。

「オイ！ しつかりしろ白江！」

声をかけても返事はない。それもそのはずで、利奈の具合は判断する必要もないほど悪化していた。汗はダラダラ、顔は青ざめており、呼吸は頻度が激しすぎる。

それに目の焦点も合っておらず、意識喪失寸前……いや、いつそうなってもおかしくないほどだ。

(クソツ、なんとかして火から遠ざけねえと……)

だがしかし、そこに空気も読まない来客が来てしまう。

「――邪魔くせえんだよ……いい加減なあ!!」

ここまでで一番ダメージを受けておらず、目立った弱点を突くこともできないラディーナだ。全速力で、反転してまた向かってくる。

ペア共に消耗が激しいこちらに対して、一人やられた代わりにもう一人はまだ戦える相手側。奥の手もないのにどうやってあれに勝てと。

できることと言えば気休め程度に利奈を飛ばし、なけなしの体力で身を守る程度だろう。

……決め手どころか悪足掻きになるかすらわからないが。

「ハア……ハア……」

熱い。身体中に汗が纏わりつき、呼吸をするたびに熱気が体内に入り込む。猛暑なんて比べ物にならない。視界もぼやけ始めている。

(ええいままよ……！)

歯ぎしりしながらも、利奈の懐から盾型煌式武装を掠め取り、純星煌式武装も槍型に展開、中世の兵士のように武装を構える。

地面を切り裂くようなものを真正面から受け止めるとは思わなかったが、こうなったら運任せだ。槍がやつの纏う力を貫き、校章を割るのに賭ける。

今までの経験上、やつは単調な攻撃しかしてこなかった。ならば今回も、突進して爪を思い切り振るはずだ。

(……来る！)

目の前まで迫り来る猛獣。ここまでは予想通りの動き。このまま防御体制を維持し、最悪相討ちに持ち込むはずだ。

だが今度のは少しだけ違う。その腕を振りかぶるのではなく、全身を使って飛びかかってくる。

(……ッ！)

予定とは違ったが、自分でも驚くほど咄嗟に、体は後ろへと倒れ込んでいた。

空中に浮かんだ体の、その下でやり過ぎせば、力に押しきられることもないだろうと、自らの経験が判断したのだ。

「食らえッ……！」

タイミングを見計らい、レヴオルフの校章があると予測される胸部を槍で穿つ。

「――畜生……っ」

結論から言うと、槍が命中したのは校章ではない。最後の一撃も虚しく、狙いからは外れていた。

疲労、そして何よりも暑さにやられていて、体が言うことを聞かなくなっていたのだ。

一応攻撃を受けたのに姿勢も崩さず、平然と空中で体の向きを変えて当の相手は二撃目を加え、行人の校章を切断する。

「永見行人、バッジブローケン校章破損」

無機質なアナウンスを合図に行人の体は倒れ、意識が朦朧になっていく。

その最中、何発かの銃声が鳴り響いた。たかが数発、ジエネステラ星脈世代を倒すには今一つ足りない。

「――ラディーナ、アンコンシヤスネス意識消失」

なのに会場からは、もう一つのアナウンス音が聞こえてきた。

「——突然の変身に追い詰められるも勝利。要因は星辰力切れ……か
なり辛勝だったようですね」

動画サイトに載っている動画と、「まさかの一番狂わせ！ 劣勢と
思われた星導館側の勝利！」というありふれたタイトルを見ながら行
人と通話する。

『改めて《星武祭》^{フェスタ}の壁の高さを感じた……これで優勝できるやつやっ
ばすげえわ』

「アスタリスク中の実力者が集まりますからね。生半可な方がいた方
がおかしいです」

『お？ デイスってんな？ か弱い先輩のことデイスってんな？』

「別に周知の事実でしょう。先輩が弱いのはかなり前から言われてま
すよ」

『それ事実だけど教えてほしくなかったなあ……』

端末の奥からはしよんぼりとした声が聞こえてくるが、別段けなし
ているわけではない。

この場合の「弱い」というのは能力による強さだけを見たもので、要

するに身体スペックでは劣っているというだけのことだ。

戦いにおいて必要なのは何も能力だけではない。技術に精神力、観察眼や戦術、有利な状況の構築力から意地の悪さ、諦めの悪さ……勝利を決めるものなんて挙げ始めればきりが無い。

クローディア個人の見解だが、行人の強さと言えば頭や純星煌式武装オーガルクラスではなく、勝ちに対するストイックさだと思っている。一度目標が決まれば、そこへの道筋を一心不乱に造り上げる精神力。

もちろん前者も彼を構成する一部だ。だが入学僅か一年程度で、当時使用方が未開だった武装を開拓し、素人から序列七位にまでのし上がった手腕は伊達ではない。もともと、全盛期に比べればそれも衰えているが。

「別に弱かったとしても勝てないわけではないですよ。それにあなたは元序列七位、《冒頭の十二人》の座にまで上り詰めた方なんですから」

『落ちぶれてなけりや自信になつてた』

……ああ言えばこう言うところは、もはや諦めるべきだろうか。

「———そういえば、白江さんの様子はどうですか？ あのとときは相当無理をしていたみたいですし、今後に影響してなければいいですが……」

半ば面倒くさくなってきたので、急遽別の話題に移る。

試合に終止符を打った利奈だが、行人曰く、そのとき既に体調を崩していたらしい。それにただでさえ戦闘未経験者に等しい人物が、最

高峰の大会である《星武祭》^{フエスタ}に出場し、いきなり実戦を体験しているのだ。それで受けるストレスも大きいはず。出場停止……最悪PTSDに陥る可能性だってあった。

『ああ、それなら心配ない——っていうか心配するだけ無駄だなありや。何度聞いたって、『出場します！』の一点張りだ』

「そうですか……判断は任せますが、あまり無理はさせないでくださいよ？ 人はあなたほど頑丈ではないんですから」

『おお、俺をサンドバッグにしてきたやつが言うときすがに説得力あるなあ』

「先輩」

『わかってるわかってる。とにかく、こっちは心配しないでくれ。んじゃ』

ちよつぴり蔑むように冷やややかな目線を向けると、いつも通りな返答が聞こえて、通話はそこで切られた。

行人から聞く限りでは、どうやら何があっても大会に出るのだけは決めているらしい。やはりこれも、《星武祭》^{フエスタ}優勝者に与えられる権利が原因なのだろう。

実現するものであれば、どんな願いでも一つだけ叶える……まったく羨ましい限りだ。それで叶うのであればこちらも気が楽なものを。

「……まあいいでしょう」

生徒会の椅子に腰掛けて脱力し、事務で溜まっていた疲れを外へ逃

がす。

『——クローディア、無事かい?』

「ツ！」

件の件と、一気に気が抜けたからだろうか。ふと、頭の中にあの光景が浮かび上がる。

その日、その時、その瞬間、私は……

「——フフツ」

おっと、思わず笑いが漏れてしまった。今の自分の顔は、普段の生徒会長からは想像できないような、恍惚としただらしないものになっているのだろう。さながら恋する乙女といったところか。

「あと一年……もう少しの辛抱です……フフツ、フフフフフ」

夕焼けが照らす生徒会室では、一人の少女の狂ったような笑いが響き渡っていた。

なぜなに!?!アスタリスク 外伝 弐

行&利「なぜなにアスタリスク」

行「どうも、何故か他の話よりUAが多かったせいで来させられた主人公の永見行人です」

利「名称不明さんに代わって呼ばれた白江利奈です」

行「あいつの名前が明かされると思ったか？」

「あれは嘘だ(?)」

利「単に名前決めあぐねただけですけどね」

行「(名前) ないです」

利「火炎放射機で消毒しますよ？」

行「すいません許してください、なんでもしますから!」

しばらくお待ちください……

利「——さて、じゃあ始めていきましようか」

ク「あの、いきなり呼ばれたと思ったら永見先輩が焼け死んでるのですが……」

利「気にしないでください」

ク「なるほど、承知しました」

※何度も書きますが、この回は本編ではありません。

利「パパっといきますよ。えつと……あ、これですね」

『利奈って過去に何があったの?』

利「うーん描写不足ですねこれは」

ク「作者にも自覚があるんでしょうね。無能感漂う題目ですけど、補完として話を進めていきましようか」

利「ですね。——えー私白江利奈の過去ですが、結論から言うと事故に巻き込まれました」

ク「といますと?」

利「簡単に言うと焼き討ちみたいなものです。一応裏設定?として北の大地に住んでいるというのがありますが、その辺境では差別意識とかはまだ残ってます。もちろん《ジエネステラ星脈世代》も同様に」

ク「世界観的に、《星脈世代》への差別がかなり強いんじゃないかという作者の考えが影響してるんですよね」

利「ですね。で、親から無下にされることもなかったし、差別は受けながらもそれに流されない友人もいて、発展途上国よりかは普通に暮らせてました」

ク「そこに起きたのが……」

利「……まあそういうことです。辺境の地というのもあつて、中心部に比べて警備とかは少なかつたりしたので、過激派が来たんです。『やつらは化け物だ!』『ここから追い出せ!』って」

ク「中々に重いですよ。本編じゃかなり思い詰めてますし」

利「本編の私は、思い詰めすぎて自暴自棄になつてました。正直なところ、未だそうなる可能性も孕んでるとか。アスタリスクに来た目的は、その巻ぎ沿いを食らつた友人を治すのが目的です。うちの家もあつちの家も、あまり裕福じゃないので……」

ク「——少しいいでしょうか?」

利「なんです?」

ク「原作を見ている方々であればわかると思いますが、そつちの登場人物……特に私とかと比べると重いけど普通ですよ」

利「あ、今の会長の発言なんですが、作者からお手紙が来てます」

ク「え?」

利「読み上げますね」

作『——個人的な意見ですが、アスタリスクのキャラクターたちは高校生のはずなのに色々とずば抜けた部分が多すぎると思います。特に筆頭なのがクロードイア。壮絶すぎるでしょあなた』

利「とのことです」

ク「……………」

利「え、えっと、ではまた次回もお楽しみにー（汗）」

第三幕 闘志欠落 抜け殻

「——心配しないでくれ。んじゃ」

通話の切れた端末を尻ポケットにしまい、虫が集まる薄暗い街灯の下でとある人物を待つ。夜に近づくにつれ風は涼しさを増しており、熱が酷かった最近と比べると何百倍もの心地よさだ。

「んー、流石に早すぎたか……?」

大きく背伸びをしてから辺りを見回すが、目的の人物はまだどこにも見えない。やはり《フェスタ星武祭》シーズンだから忙しいのだろうか。

『なんかデートの待ち合わせみたいだね』

「やめろ。あの人としたデートなんてした日にや、命がいくつあっても足りん」

「ほう、それは一体誰のことだ?」

完全に、危ない人にしか見えない会話に気をとられていると、明らかな怒りが込められた声が、背後から聞こえてきてしまった。

「——いやー誰のことでしょうね。どなたか存じ上げませんが……」

「私はそこまで破天荒ではないし、お前を疲れさせるほど無邪気でも自己中心的でもない」

(一緒にいるだけで疲れるんだよなあ……)

女気のない普段とは違うカジジュアルな私服だが、ヘルガ・リンドヴアル——一応、自分の師匠に当たる人物——らしい。振り替えると同時に目を疑ったが、どうやら師匠でも、私用のときは服を見繕うようだ。

「……それと、公衆の面前でそいつと話すんじゃない。率直に言つて危ないヤツだ」

「寮から出かけるんですよ？ 中等部くらいの娘牽引してたらそれこそまずいでしよう」

ホルダーを指差すヘルガの手を払い、正当性を主張する。

当然だが、学園の寮は女子禁制だ。専用の待合室で話すのが限度で、異性を部屋に招くなどもつてのほか。発覚した瞬間、問答無用で自分がしよつぴかれることになる。

さらに追い討ちをかけるようだが、方向音痴なので後から合流は不可能。発導体から体を作り上げるため、誰にも見られずなれる場所はほとんどない。

「別に話さなければいいだろう」

「機嫌悪くすると食費増えるから無理です」

「……お前の浮かない顔の理由、一つだけわかった気がする」

わかってくれるか師匠……。

『ねえ、早くー』

「……適当なところで実体化させてやってください。かさんだ分は払いますから」

「あ、ああ……」

……財布、そろそろ大丈夫だろうか。

調理場に絶えず立ち込める湯気、店内に響く大声、店前に置かれた食品サンプルと、料理名が書かれた札の数々。デジタルな町並みには合わない古臭さが、また違ったレトロさを醸し出している。

そう、ここは……！

「おおお……これがあのラーメン屋……！」

……ラーメン屋である。知らない店ではない。かなり前に行きつけで通ったところだ。繰り返すようだが、ここはラーメン屋だ。隣では白い少女が都会に来た田舎者のように目を輝かせており、周囲の人々は熱々の麺を必死に啜っている。

「よりにもよってここですか……」

「なんだ、何か言いたいこともあるのか？」

いや、中心部にあるだけあって少々値は張るものの、味はうまかつたはずだし文句はない。ただ……

「ゆっくり会話するのにラーメンって伸びませんか？」

「バリカタで頼めば問題はない」

「俺チャーハンだけにしようかな」

アレに節制という感覚がない以上、こちらが我慢するしかない。ぶっちゃけ栄養なんていらなはずだし、役回りが本来と逆のはずだが。

まあ、この時期忙しいはずの師匠がわざわざ呼び出したのだ。ただ食事をするというわけでもあるまいし、頼むのはなんだったといい。

「……………」

「どうしました？」

……そう考えていたのだが、当のヘルガからは頭を悩ます様が見られる。

「…………今日は頑張っている元弟子への祝いとして誘ったんだが？」

「…………ええ？ まっさか、あのアスタリスク史上最強の魔女ストレガであり、鬼と鬼畜と鬼女と鬼神を合わせ持ったような人がそんな——」

「くどいぞ」

「いやだって…………え？ 今日エイプリルフルじゃないですよね？」

え？」

弟子の時では考えられなかった事態に狼狽えてしまい、脳内もゲシュタルト崩壊を起こしてきた。

弟子入りといっても実際は押し入りのようなもので、結構強引なところもあった。なることができたのは確か、頼み込んでから三ヶ月後くらいのことだ。

そしていざ始まったとなれば、荒々しいったらありやしない。実戦、修正、また実戦……延々とこの繰り返しである。一体何百回ボコボコにされたことか。

まあそんな調子だったので、ヘルガからはよく鬱陶しがられた。飯を奢られたこともない。寧ろ仕事のストレスをぶつけられ、骨や関節が逝きかけたこともある。

「財布は受け持つ。だから好きなのを頼め」

「あー……んじや、お言葉に甘えて……」

なんというか、若干申し訳なさそうな顔になってきてるし、これ以上ふざけたらまた殺されることになりそうだ。苦笑いを浮かべながら、券売機で適当なやつを買うことにする。

「短い期間だったとはいえ、面と向かって褒めるのは初めてか。——ひとまず《鳳凰星武祭》^{フェニクス} 予選突破、おめでとう」

「あー……ありがとうございます……ごいいますっ……」

「なんで行人が疑問系になるの」

そう言わないでほしい。ストレートに褒められるなんてことは久しぶりなのだ。さすがに少し照れくさい。

「かなり切迫した戦いだだったが、そいつの扱いも含め上出来だろう。本当なら色々口出した部分はあるのだが、既に師弟でもない。指摘するのも野暮というものだ」

「嬉しいけど一言多いです……」

それは口にしてしまったら元も子もないと思うのだが……ヘルガの長年の戦闘で鍛えられた観察眼は一級品だ。以前と比べると、粗が目立っていたのかもしれない。

一応師という立場であった彼女にとっては、やはりそういう不手際は気になって仕方ないのだろう。しかし、それを飲み込んでとにかく勝ちを喜んでくれたのは少し嬉しい。自分なりの頑張りが認められた気分だ。

「——ところで、わざわざ星武祭フエスタに出たということは、お前もやつと何かを見つけたのだろうか？　もしよければ教えてほしいのだが……」

ちょうど三人分のラーメンが届いたところで、ヘルガは新しい話題を出してきた。だが行人は、それに答えない。

「……………」

「まさか、まだ何もないのか？」

正確には答えられないという表現が適切だろう。大体の会話には皮肉混じりでも返すというのに、その問いだけは何故か口が開けな

かった。

「……それでよく勝てたものだな」

「……………」

「二年前、私が言ったことは覚えてるな」

「——落ち着いてください。早く食べなきゃ麺が伸びますよ」

沈黙に痺れを切らし呆れたかと思えば、今度は鬼気迫る雰囲気へヘルガが切り出したのに対し、行人は麺を啜ってから、ようやくその減らず口を動かす。

「……明確な目的を持って、でしょう？ 忘れたことはありませんよ」

別れ際、ヘルガが言い放った言葉だ。

「そうだ。人が欲望を叶えるべく集まるこの場所では、それに吞まれない意志が必要となる。お前のような学生なら尚更だ」

目的とは、すなわち意志の源だ。到達点への欲求はそれを叶えるための強い向上心を生み、そしてそれを支える意志が生まれる。まるで植物のような、強靱で再生する意志が。

この都市における本質は競争——奪い合いだ。勝てば強者に、負ければ弱者に、見てくれが複雑に見えるだけで、紐解けば至極単純な弱肉強食の世界。生き抜こうと思わなければ、ここでは生き残れない。

ヘルガはこのこの元学生であり、そうでなくなつてからもここを警備し続けている人物だ。それは誰よりも理解している。

「でしようね。ですが、自分は既に死んだような身です。ここで生きたい訳でもなければ、何かを成し遂げる気もない」

「その考えを止めろと言っているのがわからないのか？ いい加減、過去に執着するのはやめろ。囚われていても、何も良いことなんてありはしない」

「してません。というか、もう割り切ってますよ」

割り切ってしまったわなければ、気が狂ってしまいそうだ。

「だったら——」

「見えないんですよ、何も。一步先どころか、足元すら」

過去の出来事を割り切って、なんとか歩いてみようとしてみても、何も見通せないのだ。もはや自分がちゃんと立ってるかもわからない。できるのは精々、もがくことぐらい。

「言ってることはわかります。けどわからないんです。自分が何をしたいか。何を望んでいるのか。自分が一体、何なのか」

自分が、『永見行人』という人物がしてきたことが、一体何に役立つのか。今までしてきたことが無駄だったらと考えると、いても立ってもいられなくなる。

自分ではあんな風に言ったが、実際には割り切れてなくて、ただの強がりなのかもしれない。現に自分は過去と結び付けて事を考えている。

ああもう、何がなんだか自分でもわからなくなってきた。

「……ごちそうさまでした。久しぶりに話したし、今日は楽しかったです」

「おい、話はまだ——」

無視して店内から外へ出る。寮に戻る前に真っ先に向かったのは、ある区域の一角だ。

スラム街みたいに殺風景で寂れてて、風の音だけが聞こえてくる。壁の落書きと相まって、幽霊の住み処に見えなくもない。

——もし、自分の全てが運命だったとしたら。何も出来なくて、何を為す力もなくて、何を為そうとも思わなくて、それが何のせいでもなく、ただ決められたルールだとすれば。

もちろんそんなわけがない。全て自分の怠慢だ。……だが、運命のせいだと、何もかも投げ出せてしまえたら、どれだけ気が楽になるのだろうか。

「……なあ、どうなんだ？ お前もそうなのか……？」

なけなしの声を絞り出す。

何故だ。何故そうまで放り出せる。生きるのに疲れたからか。何かに絶望したからか。それとも、赦しを求めているからか

……だがそれに答える声はない。

「——オーフェリア……」

あの日、運命を語った少女の名だけが、その場に虚しく響いた。

「……追わなくていいのか？」

ラーメン屋に二人残された、ヘルガと純星煌式武装オーガルクスの少女。何故かここに残った少女に、ヘルガは理由を聞く。

「——まだ食べ終わってないよ？」

「それは……まあ、そうだが……」

返ってきた答えは、当然といえば当然だ。……当然だが、もう少し持ち主に対する誠意はないのだろうか。

実際に使ったことはないが、純星煌式武装についての知識は一通り頭に入っている。

それぞれ固有の意志が宿っており、相性によって使用者が選別——つまり武器が使い手を選ぶ性質を持つ。行人はそれに選ばれた人物だ。相性も特段悪くなさそうだった。

それにしても少し冷たいというか、それなりの年月を共にした同士としては放任主義的な扱いが目立つ気がする。信頼しあっているのだとしても、もう少し心配して、彼を追いかけてもおかしくないはず

だ。

「大丈夫。向かった場所なら察しがつくし」

「……慣れてるんだな」

「何度も行かれたらさすがにね」

「やはり以前から、あいつはああなのか？」

「ああって？」

「何もかも見失っていて、思い詰めている」

自分に師事していた頃の行人は、真っ直ぐだった。身を削るようなことを何度も行っていたぐらい、一点に向かって一直線だった。

しかし今の彼は曇りきって、あの時ほどの熱意などまったく感じなくなってしまうた。

「……かもね。燃え尽きた……って言ったらいいのかな？　だからって、あんなにいっぱい言うのも意味がわからないけど」

「あれではまた負ける。お前もそれを目撃しただろう」

事実、二年前の《獅鷲星武祭》で行人は負けた。

「相手が悪かったただけじゃないの？　劍聖だなんだから叫ばれてたあの人とかがたまたま強かっただけ。勝負は時の運だとも聞くし、運が悪かった。それだけじゃない？」

確かに、それも間違つてはいない。あの戦いの対戦相手は、《獅鷲星武祭》最有力候補の《銀翼騎士団》ライフロードスであり、お世辞にも勝てる勝負とは言えなかったかもしれない。だが、

「実力も運も、やりようによつて全てはね除けられる。それが人間というものだ」

そしてヘルガはここで生きてきた者として、その光景を幾度として見てきた。

「……？」

が、首をかしげてさすがに信じられないといった様子だ。

「ほら、食べ終わったのだろうか？　いつまでもここにいないで、行つてこい」

いずれ彼女にもわかるだろう。というより、嫌でもわかることになる。それを強みとして、奴は公式序列戦を戦い抜いたのだから。

失敗

戦闘において、それぞれの役割とは常に重要だ。ゲーム的にだが大まかに分けると前衛と後衛。さらに言えば、攻撃職、盾職、支援職、回復職などよりどりみどり。

多少差違はあれど、リンダブルス 一対一でも、フェニクス 二対二でも、グループ 集団対集団でも、戦いである以上この仕組みは変わらない。

この組み合わせを理解することが、勝利には必要不可欠だろう。自分を知り、相手を知る。相性から有利不利を暴き、それに対策を立てる。

力押しで勝てるのなど、精々素人のケンカまでだ。欲望を叶えるために戦う以上、相手は自分に対策を立てていることが前提となる。

もちろん、それを崩すために奇策を用いるのも手段の一つである。予期せぬことをされれば、その分をまた立て直さなければならぬ。

しかし、それが原因で前提のチームプレイが疎かになれば……

「バカッ！ 前に……出すぎだー！」

戦力はガクンと落ちる。

今の戦況はというと、戦闘が始まって五分ほど経過。相手はガラードワースの両手剣使いと剣盾使い。

実質的な戦力が均衡しているためか、それまでと比べると戦いは長期化しており、互いに決め手に欠けている状況だ。

だがあくまで気を逸らすはずの利奈は、目の前の相手を撃つことに意識を傾けており、本来の役割を果たせていない。一人一人の分断が出来ているためまだ問題ないが、正面切って張り合ったとして、技術で他に劣る利奈では負ける可能性が高い。

もしそうなれば前後からの挟み撃ちを食らい敗北……見方を変えれば追い詰められてるとも言える戦況だろう。

余談だが、利奈は試合開始から、煌式武装の引き金をほとんど引きっぱなしだ。

銃器型煌式武装には火薬式の弾倉などはないが、撃ち続けた分銃口に熱がたまっていく。あんなに撃ち続けていればそろそろ……

「っ！　なんでっ！」

突然起きたトラブルに驚き声を上げた利奈。やはりだ。冷却が間に合わずオーバーヒートしてしまっている。一つ前の戦いによる影響で、予備の武器も持ってない今の彼女にとっては絶体絶命だ。

まず第一に、戦っている相手二人は、本選に出るだけあってそれなりに強い。

「覚悟ッ！」

合わせたはずの剣が、今度は真反対から襲い掛かり、かと思いきや防御が軽々といなされる。

切り結んでいる両手剣使いの少年はその巨大さに関わらず、手首を返すガードワース特有の剣技を片手剣の如く駆使し、縦横無尽な剣捌きを繰り出してくる。

刀藤綺凜の連鶴が近いだろうか。あそこまで滑らかではないにせよ、剣術においてはあちらが勝っている。

盾使いの方も、高い防御力による生存能力は試合を長引かせている一因の一つだ。

さて、変に奇策を練っても火に油を注ぎかねないし、こうなつては多少体を張つても、強引に突破するしかないだろう。もつとも、最初から全てねじ伏せられればそんな必要もないのかもしれないが。

(三……二……)

「止めたッ！」

純星煌式武装が手元から飛ばされ、がら空きになった校章目掛けて袈裟斬りが繰り出される。これは連撃だ。手元に身を守るものなど無いし、ホルダーから新たな発動体を取り出す暇もない。

(――……！)

だがそれがどうした。武器ならまだ残っている。

「何だと……ッ!？」

振り下ろされた剣を遮つたのは、防具も何もない行人の腕だ。星辰力を纏わせてはいるものの、刀身が当たっている場所には鋭い痛みが襲ってきている。

それでも、予想してなかった防御方法により相手の虚をついた。この隙を見逃すわけにはいかない。

「ぐうウ……ああッ！」

歯を食い縛り、悲鳴のような雄叫びを上げながら、行人は拳を叩き込み、さらには相手の持つ剣を奪い取り、それをとある方向にぶん投げた。

「ッ、何だッ!？」

飛翔する両手剣。多大な質量と大きさを持つそれは、目の前を通り過ぎただけでも怯みを与える。故に当たらずとも十分だ。

「ハア……ハア……」

身体を盾として使うのは久々だ。腕はまだ痛むが、絶好の機会だ。相手の武器は剥ぎ取った。こちらこそそろそろ反撃に出るとしよう。

「……さてさて、剣無くして戦えるかな、名門さま？」

「ッ、舐めるな！」

簡単な挑発に歯ぎしりするものの、相手は闇雲にはならず、まずファイティングポーズを取った。こういうところは、ガードワースの滅私の精神が生きていると思う。

といっても、たかが形だけの素人に負けるつもりなど毛頭無いが。

武器なんて必要ない。脱力し、自然体で歩みを進める。そしてふとしたタイミングで、そのリズムを狂わせる。前方向に踏み込み急速接近。腕を肩甲骨から鞭のようにならせ、星辰力も込めた拳で、何度も何度も、相手を殴り付ける。

「ぐっ……うう……」

それなりの回数殴っただろうか。校章は守ってても身体中アザだらけ。なんなら顔面血まみれにするつもりだったが、予想以上に弱い。

ガードワースの生徒の弱点は、武器に重きを置く分、徒手空拳での戦闘が苦手な点だ。一対一での決闘を想定した剣術。かの剣聖のような強さは確かに魅力的だが、あれは境地に達したが故の強さだ。

中途半端な強さで、得物を失くしたり使えない場合を想定してないのは、些か不十分——いや傲慢と言わざるを得ない。

なのにその目は光を帯びている。まだ負けてないと、一パーセントでも勝てるチャンスは残っていると、希望を捨ててない目だ。

「おれは……あの人みたいに……」

きつと、彼には夢があるのだろう。あの人というのは、おそらく剣聖のことだ。だから、真っ直ぐ前を向いていられる。

——だがそれも空しく、無慈悲に鳩尾へと蹴りをぶちこみ、言葉を途切れさせる。

「——うるせえよ」

……正直に言おう。身勝手ながらも、非常に不愉快だ。

こちらを見つめる芯のある目付き、ボロボロになろうと歩みを止めようともしない身体、勝利を渴望している曇りの無い精神。

本来喜ばしいことのはずだ。誰であろうと、人が前を向いているのは。夢に向かって突き進んでいるのは。

だが今の行人にとっては、それがたまらなく憎らしい。

「ふむ……さて、だ。無事と言えるかは微妙な終わり方だったわけだが……何か言うことはあるか？ 白江」

「……すみません、またやつてしまいました」

もうそろそろ見慣れてきた控え室。対戦が終わり、また一つ増えた傷跡に包帯を巻きながら、穏やかさの欠片もない笑顔で利奈を見つめ抜く。

実はあぁなってしまったのはこれが最初ではない。この一つ前の試合でも、似たようなことが起きていた。

事前段階では、できるだけ鬱陶しく、存在が頭から離れた瞬間、また光弾を当てるように頼んでおいた。間違っても火力で押さえつけはせず、あくまで気を引く程度に。

やはり実戦慣れしてないのに、指令を出すのは難しいのだろうか。目前の敵に対して、引き金を引き続けることに集中してしまう……俗に言うトリガーハッピーというやつだろう。

主な原因は極度の緊張だ。いつぞやのスパルタ訓練で轟音やらには慣れたと思っていたが、それだけでは思いの外無理らしい。そう
なった以上、こればかりは慣れるしかないが……

「そうだな……今度は何かリラックスできるものでも持ってこい。そ
したら幾分マシになるだろ」

「わかりました」

如何せん時間がない。それに次の相手は、どうせほとんどが一人で
戦うことになる。

（――あれの解放も視野に入れるか……？）

今までわざと使わなかった奥の手に関して、行人は思考を巡らせた
が、考えるまでもなかった。

答えはNOだ。しくじれば全てが無駄になる。気にも留めなかつ
た目線が、一瞬でこちらに向き始める。

それにこんなところであれに頼っていては、そんなの……

「……よし、これで整備は完了だな。んじや、ちよつと外に出てくる
わ」

予め持ち込んでいた工具を机に置いて、行人は伸びをしながら部屋
を後にした。

(……よしっ)

誰がいるというわけでもないのに、利奈はばれないようにと部屋を見回してから、そこに置かれている純星煌式武装——《数多の偽り》ナイアーラトテツブの発動体を手に取る。

それは、あの人が持っている武器が気になったのが理由だった。何せ選ばれたものしか使うことのできない強力な武器、その実物だ。利奈のような者は、本来なら触れることすらできない。

それが目の前にある。……やってはいけないことだとは思う。だがそれでも、初めて見たものに対する好奇心を抑えることができなかった。

「……………」

色んな方向に回しながらじつくりと、すみずみまで観察してみる。すると突然、頭に声が響いた。

『……………何してるのかな?』

「うひゃあ!?!」

自分でも知らない声と共に発動体を放り上げてしまう。

『そんなまじまじと見られると、さすがに恥ずかしいよ……………っつて、こっちこっち、気づいて』

「え？ いや、でも……え？」

困惑しながらも、状況を掴むために頭を落ち着かせ、発動体に視線を戻す。何にせよ、さっきのは幻聴ではなかった。いや、正直そう思いたいが、何者かの声が入ってきたのが直感的に理解できた。

噂でしか聞いたことはなかったが、もしかしてこれが、純星煌式武装の持つ意思というやつだろうか。

確かに意思が宿っているとは聞いていたが、

(意外と……)

予想していたのとは違うなと思いながら、もう一度発動体を手にする。

利奈としては、もつと威厳があるというか、尊大な感じを予想していたのだが……思いの外自分たちと同じような気がする。

『気づいてくれた？ それなら、何か返事をしてほしいな』

「——えっと、この声はあなた……なんですよ？」

『そうだよ。キミは……彼のタッグパートナーの子だよ』

「は、はい」

武器と会話をする、というのはなんとも奇妙な感覚だ。なんせ無機物である。話し方はともかく、見た目はそも生物ですらない。

『……お願いがあるんだけど、いい？』

「なんですか？」

『わたしを起動してほしいの』

「……あ、これですか」

言われた通りに発動体を起動する。すると他の煌式武装同様、周囲の万応素^マが集まり形を作り始めた。

いや、煌式武装と同様とは言い難いだろうか。それには腕があった。脚があった。顔があった。——人間が持つそれと全く同じ、真っ白な少女の身体があった。

(これは……)

「——ふーん……」

彼女はこちらを覗き込んでくる。曇りのないその眼は、こちらを吸い込んでしまいそうだ。そして、

「なるほどね」

「……なんですか？」

「なんでも……フフツ」

いたずらそうな笑みを浮かべた。理由はわからない。だが合点がいったような、からかわれてるような、そんな感じだった。

「質問、いいかな？」

「え？ あ、どうぞ」

疑問が浮かんだのも束の間、それを遮るように質問が飛んでくる。

「彼のことだけど……君はどんな人物に見える？」

「あの人のことですか？ ……はつきり言わせていただくと、ちよつと不気味だと思えます」

「へえ……それはまたどうして？」

「……なんていうか、戦いに勝つことを考えてるのに、勝ち負けに関心がなさそうな気がして」

十五にも満たなくせに大口を叩いたと我ながら思うが、これが利奈にとって偽りのない行人へとイメージだ。

最初はただ、叶えたい願いがそれほど大事なのかと思っていた。だが一度、二度三度と戦闘を重ねていくにつれて、その有り様はそうではないように感づいてきたのだ。

何故ならば、勝ったときも負けたときも、彼は何の表情も浮かべなかった。何の感情も出さずに、すぐ別の勝利に向けて思考を張り巡らせる。

勝ったら嬉しいはずなのに、負けたら悔しいはずなのに、何も感じてなさそうだった。戦闘行為をこなすだけなその様が、利奈には今大会に出てる機械バットたちよりも、ひどく機械的に見えた。

「へえ……じゃあ、ちよつとしたアドバイス、いくつかかしてあげる」

「アドバイス？」

「そう、アドバイス。情報がたくさんあるほど、色んな見方ができるし」

何のアドバイスだろうか。まあ何はともあれ、貰えるものは貰っておくことにしよう。

「しばらく……この大会が終わってもかな。彼に付いてってみるといいよ。石の上にも三年って言うし」

「あー、ありがとうございます……ごいします？　って、ちよつとー！」

そう言い残すと、少女の身体は跡形もなく消えていた。

適応

「——いい加減、慣れた……っっていうか飽きてきたな」

「わかりたいですけどわかりませんよ、それ」

ほとぼしる歓声と、その中でも存在感を保つアナウンサーの声とは反対に、もはや何の感情も湧かなくなつた行人が吐き捨てる。

うって変わって、舞い戻つて来たここはプロキオンドーム。数戦前よりも見るからに広くなつたというのに、やはり声援の数は増す一方で、凄みすら感じなくなるほどだ。

そしてその対角線には、それを一身に受けている人形が見受けられる。

アルデイとリムシイ。アルルカントの天才様が造り上げた、強力で自立型の新しい擬形体パペットだ。

「——聞くがよい！ 今回も貴君らには一分の猶予をくれてやろう。我輩たちはその間、決して貴君らに攻撃を行うことはない。存分に仕掛けてくるがよい！」

アルデイがそう宣言した直後、さらに濃い密度の音量が会場を包み込む。炎系の能力者がいるわけでもないのに、下手な炎天下よりもここは熱が立ち込めているようだ。

「あれさ、多分なんの悪びれもなく言ってるんだろ？ だとしたら煽りスキル高すぎないか？」

「……煽ってる自覚はなさそうですね」

「もうちよつと話続けないか?」

何気なく振った話題を興味なく応答され、行人は肩を落とす。

エルネスタ・キューネとカミラ・パレート。二人とも優秀な技術者だ。そんな二人から生まれた彼らの強さは一級品であり、それは実戦で既に証明されたに等しい。

片や矛盾のような高い攻撃力と防御力、片やハヤブサのような機動力と精密さ。おまけに片方は、人間の限度をはるかに超えた動きが可能ときた。

羅列すればするほど、あちらさんのスペックが脅威的になるのは言わずもがなだろう。ぶっちゃけドリルでどうこうとかいう次元じゃない。一分間のハンデも領ける。

——さて、交渉開始だ。喉の調子を確認し、会場にも響き渡るようなやたら重装備な懐からメガホンも持ち出し、声を張る。

「……あー、えつと? ——第六回戦まで勝ち上がってきた偉大なロボット様方」

「ん? なんであるか?」

「一分という絶大なハンデを課していたにも関わらず、ここに至るまで数々の強者をなぎ倒してきた事実。正直畏敬の念を覚えるほど見事だったと思う」

「おお! そうであろうそうであろう!」

「が、生憎そちらの主人が特別優秀だという証明にはまだ届かないんじゃないか？　とも考えている」

瞬間、アルデイのけたたましいくらいな喜びは消え失せる。満更でもなさそうだったリムシィでさえ、表情が固まっていた。

「……………どういうことですか？」

「自立型擬形体パベットで初めて、星脈世代ジエネステラに勝るものを造り上げた、それは結構。それどころか一分というハンデの上で圧勝する、それも結構。だが、ここアスタリスクではそれができる実力者はそれなりにいると、個人的には思っている」

マディアス・メサの見様見真似だが、アルデイとリムシィら、及び会場全体にも向けて行人は語りかける。特に、奴らのマスターに対する敬いを逆撫でするように。

こと強者という存在に限れば、ここほど適した環境はない。そして強者しか眼中にない観衆は、この発言に必ず食いつくはずだ。

「そこでどうでしょう？　そちらがハンデとして与える時間をもっともっと延ばすというのは。二分、三分、時間が増えれば増えるほど、その強さが、そちらのマスターの偉大さが、一層深く伝わるといふもの。その圧倒的な強さが証明されたとすれば！　かのヘルガ・リンドヴァル隊長や、《孤毒の魔女》エレシユキールのような熱狂は間違いないだろう！」

……………。

(……………どうだ？)

「……いいだ r」

「いいでしょう。あなた方の提案、受けて立ちます」

……静まり返ったのは五秒か十秒か、少なくともそれくらいはかかったところで、観客たちの熱狂は再び燃え上がる。

「わたしたちは二分間、猶予を延長します」

「……存分にかかってくるがいい！」

『な、なんとということでしょうか!? 永見選手の挑発とも取れる提案に、リムシイ選手ら即決で同意しましたあ!』

(……よっし!)

「うわあ……えげつない」

カMEMシでも見てそうな後輩は無視して、行人は内心ほくそ笑んでいた。

もちろん、この提案には強制力など微塵も無い。一蹴されればそこで終わり。それ以前に、選手があんなことするなんて前代未聞。支離滅裂もいいところだ。

だが彼らの一分間ハンデは、元はと言えば自分たちの主人の偉大さ

を知らしめるために行われている。

当然、主人らの名誉を尊んでいる彼らにとって、それを貶めうる行動はもつとも嫌うもののはず。ならばこの挑発には乗ってくると、行人は読んでいた。

その予想は的中した。

「さて、時間は稼げた。だが本番はこれからだ。準備は？」

「あなたにはプライドというものが無いんですか？」

「そんなもんじゃない。もしあったら、もつと強くなってた」

そう自虐的に嘆きながら、もはや用済みとなったメガホンを投げ捨てる。

「……………これは」

「めっちゃくちやですね……………」

試合が始まるまであと少しといったところだったが、紗夜と綺凜はギリギリまでアルデイとリムシイの試合を見物していた。

もちろんだが、二人はもうすぐ相対する対戦相手を見くびっている

わけではない。戦術も確認したし、動きの確認もバッチリだ。

ただその次の相手が、今大会における最強クラスであっただけで。

「あの人形たちの忠誠心は相当だと思うけど、それを実践するとは」

防御障壁を見てからは絶対にあり得ないだろうと考えていた作戦を目の当たりにし、紗夜は感嘆すらしていた。

確かに攻撃が始まるまでの時間を稼いだ方が、その分有利なように見えるかもしれない。しかし、それは自分が相手にまともな攻撃を食わされる場合の話だ。

もし普通より長い時間を使って、その分をずっと動き回っていたとして、それでまったく相手に効いてなかったとすればどうだろう。

体力は減り、星辰力^{プラリーナ}は足りなくなり、銃身や砲身は焼けて冷却が必要となる。以前の戦いで見せた武器を加えたとしても、絶対的な守りを持ち、尚且つ疲れも感じないアルデイに対して効果的とは思えない。

「紗夜さんから見て、あの障壁を破るにはどれくらいの出力が必要だと思いますか？」

「……少なくとも、わたしの使う煌式武装^{ルークス}以上じゃなきゃまず無理だと思う」

紗夜の見立てでは、あの障壁の出力は余程高出力な防御フィールドと比べても異常なほど高い。

自分の煌式武装の威力を疑うつもりはないが、ヴァルデンホルトが

あの防御を抜けたとしても、本体に傷をつけられるかどうか……

かといってそれを避けて攻撃しようにも、機械特有の反応速度は人間を優に越えている。画面の奥に見える行人も四方八方から攻撃を入れているが、結果は全て防がれて終わっている。

どうやら今回も、得られそうな情報はなさそうだ。さっさと見切りを付け、綺凜の方に声をかける。

「と、そろそろ時間。行こう、綺凜」

しかし返事はない。見てみると、綺凜はかつてないほどに画面を注視していた。

「……綺凜？」

「へっ？ あっ、はい！ 何ですか？ 紗夜さん」

「えらくガン見してたけど、どうかした？」

「……大したことじゃないんですけど、前と今の動きが全然違うというか……」

「……どういうこと？」

何かがおかしいと、綺凜はそう感じたらしい。

子供の頃、天霧辰明流をかじった程度の紗夜にはよくわからないが、あれだけ相手が違うのであれば戦法もそれ相応に変わっても不思議じゃないはずだ。

「この前先輩たちと見た予選の映像、覚えてますか？ あのときの試合と、ユリス先輩の言ってた人物像を考えると、攻撃が少し雑すぎる気がして……」

「たしかに……？ でもなんでそんなことを？」

映像をあの時の記憶と照らし合わせるが、綺凜の言う通りかもしれない。

あの男は身体を回転させたり跳ね回ったり、どこかのSF映画張りのアクションがかなり多くなっている。あんな動きではスタミナも持たないし、アルデイが攻撃を始めればすぐに壊される。

なぜだ。波状攻撃……回るような攻撃……大雑把な動き……

（違う……リースフェルトはそんなことをする人物なんて言っていなかった）

傍目から見て違和感のある動きではなかった。攻撃の雑さはともかく、連鶴のように継続的に攻撃し続ける戦法もあるにはあるのだ。

それに武芸者ならともかく、普通はそんな風に見えないだろう。むしろ観客はその派手な動きに釘付けらしい。

（釘付け……攻撃で引き付けて意識外から？ でもアルデイの反応速度ならそんなの造作も……あれは……？）

「どうした永見行人。大見得切ったはずの貴君の動き、その程度のものであるか！」

「こっちは機械じゃないんでね！ 動けばそんだけ疲れんだよ知らなかったか!？」

「舐めないでほしいであるな。それくらい我輩の頭に入っている！」

脇を抜けながら剣を振り抜き、そこから回転し切り付け、弾かれた力を利用して更に回転、剣戟が来ると見せかけ武器を鎌に変形、奥から引き裂こうとするが防がれる。

これで大体一セットが終わり、次は頭上に跳んで斧を展開。こんな感じの戦いを始めて二分くらい経ったか。掛け合いという名の滅らさず口もだんだん多くなってきた。

戦況的には、珍しく優勢に傾いている。順調すぎて少し怖いくらいだ。

「——思い知ったのであるか、永見行人。数分時間が増えたところで、我輩たちが負けるなどあり得ないのである。現に貴君らは我輩の障壁を越えられず、リムシイの動きにも惑わされている」

残り三十秒。

アルデイの冷静な状況判断に、全くもってその通りだと行人は心の中で頷く。行人自身、そんな高火力な武器なぞもってないし、刀藤流の連鶴みたいな技もない。

利奈に至っては場違いの域だ。攻撃が始まれば最後、一分ともたずに校章を撃たれる。

「ああそうかい！ そりゃ、最高の気分だな！ サンドバッグを殴るってのも、案外楽しいもんだ！」

残り十秒。

だがそれでいい。多様な動きと応答で興味を誘い、もつとこちらに注意を引くのだ。

斧を真正面に叩き込み、そこからさらに袈裟斬り。次は長槍を展開し、突き立てると見せかけて棒高跳びの要領で跳び上がる。

頭上を切り付けながら背後に回って、そのままの勢いを維持し剣で回転切り。最後に切り上げながらも一度跳び、頭上から脳天目掛けて下突きを食らわせる。

「……無駄である」

しかしそれさえも防がれてしまい、行人は障壁の上に着地する。

残り時間……ゼロ。

「——タイムアップ、であるな」

真下のアルデイの手にハンマー型煌式^{ルック}武装が顕現する。それは二メートル以上の長さを持ち、何もしてないのにこちらの足に届きそうなほどだ。

「……不可解である」

障壁の下に見えるアルデイがふとそう呟く。

「何が？」

「これだけの時間を設けた割には、貴君は何もしてこなかった。以前は吐瀉物を掛けてきたというのだから、今回も何かしてくるのが道理ではないのか？」

「……なら、一ついいこと教えてやる」

未だ攻撃に移らないアルデイだが、何かしらを警戒しているらしい。たしかにこちらを警戒するのは普通の事だが、こっちに釘付けなアルデイに対し一つアドバイスをしてやる。

「相手は俺だけかもしれないが、攻撃は俺からだけじゃない。……俺の武器は俺だけじゃない」

「白江利奈は未だリムシイに抑えられている。貴君以外に誰が——」

アルデイが言い終わる前に、不意にスイッチの音が鳴った。

「これは……」

「これが、あの男の戦い方だ」

フローラもいなくなつた控え室で、綾斗とユリスは彼らの試合を見ていた。ちよつとした気分転換のつもりだったのだが、予想と全く違つた展開に綾斗は声を漏らしていた。

「以前戦つたからわかるだろうが、やつ単体の力はそれほど大きいものではない。だが個別の対抗策を練る、もしくは有効な装備品を作ることでそれを凌いできたのだ」

「対策を練るのがうまい……つてこと？」

「——やつはどんな武器でも人並みにこなすし、役に立つなら飛行ユニット、ワイヤー、粘着性の液体、使えるものなら何だつて使う。そしてそれらを自在に駆使して、一度は《冒頭ペイジの十二人ワン》にまで登り詰めた。現に私だつて、アルコールを利用して自滅させる戦法を使われた」

なるほど、どうりであんなに多様な動きが出来るわけだ。

以前の模擬戦で感じたことだが、ユリス、レスター、綺凜、イレネ——他の《冒頭の十二人》たちと比べると、行人は力も技もあまり高いとは言えなかつた。

色々な武器を扱えるようだが、それは器用万能ではなく器用貧乏。身体能力も通常時の綾斗より若干上といったところか。

では彼の何が優れているか。それは相手に対する対応力なのだろう。

相手の弱点を突き、それに対する勝機を見いだす。そのためにはどんなものでも使うし、どんなものでも使えるようにする。基本的なこ

とかもしれないが、その全てに対応するのは存外難しいものだ。

どこの流派にも属していないであろう行人の身のこなしは、その過程で様々な修練や戦闘を経験し、個々の動きの組み合わせ方も知った上でのもの。そういうことなのだろう。

どんな相手にも、オーガルクス純星煌式武装だけではなく、あらゆる煌式武装や道具も駆使して対応する。そのときの相手に対応し、自らを変貌させる。

「すごいね……」

「ああ、勝てない相手ではないが、あまり戦いたくもない相手だ。まったく」

爆発の起きた画面を見据えながら、二人はその光景に感嘆していた。

届かぬ手

ユリスの六弁アマリリスの爆焰花にも劣らない威力の爆発に、実行者であるはずの行人は息を呑んでいた。

使用した爆薬はなんでも軍用にも使われる代物らしく、仕入れるのに金がかかるし重量もキツかったが、それに見合う効果は嫌でも感じ取れる。

《ジェネステラ星脈世代》だとしても、生身では重症間違いなしだ。だがアルデイはそれを障壁もなしで食らった。装甲にヒビくらいは入っているだろう。

一方、利奈たちの方は――

「避けて！」

「は？」

と、行人が振り向こうとしたと同時に、利奈の悲鳴にも似た声が聞こえてくる。そして……

「ッ！」

後方から響いてきた音に悪寒を感じ、半ば反射的に体を翻らせる。顔を上げると、元いた場所は無数の跡が残り蜂の巣になっていた。

空中からこちらを見据えるリムシィ。口を開いていたように見えるが、何を言っているかはわからなかった。何故ならリムシィは今もなお空中にとどまり、煌式武装ルックスを連射し続けているからだ。

(化け物が……！)

どれほど神業級の射撃技術を持ってしても、空中という不安定な場で銃器を連射しその悉くを標的に当てるなど、人間業ではない。

加えてリムシイは、それを片手で、さらにこちらと利奈を個別に狙いながらそれを成し遂げている。元々光弾に光弾を当てて防御していたからといって、勝手が違いすぎるだろう。

相手が人間でないことを、改めて再認識させられた気持ちだ。

(後ろに目があるわけでもあるまいし、まして反動だつてあるんだぞ……!?)

左右に小刻みに動くことで、狙いを定めさせないよう立ち回る。この程度の動きで対処できるのは、三人の位置がほぼ一直線状になるよう利奈が調整してくれているからだ。

今のうちにアルデイを叩く。そう意を決したのも束の間で、凄まじい重圧が気迫と共に襲いかかるのを感じた。

「まだまだ、この程度ではないのであろう!？」

そのハンマーが振られる毎に、熱のこもった風圧が頬をすり抜けていく。機械とは思えない、まるで戦士……いや本物の騎士とでも言うかのような攻撃。

あまりの凄みに武器で受け止めることも出来ず、それどころか時々加わるリムシイの援護射撃への対応も疎かにしてしまいそうだ。

「さて、どうだろう、なッ！」

挟み撃ちを避けるため、水平に振られたハンマーを、そしてアル
ディの頭上をも越えるべく脚に星辰力ブラーナを込めて跳躍する。

「ぬおっ!?!」

しかし、その行く手を突如謎の壁のようなものによって遮られた。

「隙有りである!」

「ツ、クソ………が………!」

咄嗟の判断で数多ナイアールラトテツブの偽りを盾に変形させ、殴り付けるように攻撃を
受ける。

文字通り人間ではない膂力に、行人の身体は完全に宙に浮いて吹き
飛ばされるが、それで終わりではなかった。

「ツ………ぐっ………!」

一メートル程度のところで、行人の身体が何かに打ち付けられる。
大きく弾んだ身体に、追い討ちに猛スピードで走ってきたアルディの
ハンマーが行人を押さえつける。

「感謝するぞ! 貴君との戦いによって、我輩は新たな戦い方を知る
ことが出来た!」

「お前………ツ!」

身体を軋ませながら、全身の筋肉と星辰力ブラーナを酷使して圧力に耐え
る。

想定しておくべきだった。防御力に気を取られて、その障壁を妨害に転用してくる可能性を考えていなかった。

とはいえこの戦い方を今知ったということは、奴の障壁に対する捉え方は差程変わっていないはずだ。ならば……

(……………)

力を身体全体から足を中心になるよう入れ直し、体制を変えて拳銃の発動体を取り出す。

ハンマーやらに遮られて大まかな位置しかわからないが、これでの状況は打破できるはずだ。そう信じて、銃口をアルデイの校章付近に向ける。

「むッ！」

しかし思惑は悉く外れ、壁の感触が消える気配は全く無い。防ぐのに障壁を使つて欲しかったのだが、壁を攻撃の要とすると同時に捉え方も変わってしまったのだろう。

「そんなものでは、我輩を止めることなど出来ないのである！」

「ッ……………！——クソがあッ……………!!」

歯ぎしりして自分の甘さを悔やみながら、持っていた最後の手榴弾のピンを抜き、自爆覚悟で放り込む。

やっと消えた障壁と共にハンマーが振り抜かれ、行人の身体が受け身も取れず外壁にぶち当たる。

意識が飛びそうになり喉元まで少量の血が上ってくる。この感じだと内臓を少しやられただろう。

まあ爆発が効かず痛み分けにならなくとも、最低限脱出は出来た。……正直、この時点で手に負える気がしないが。

「ハア……ハア……ホント、反則だよな……」

「その言葉、誉め言葉として頂戴するのである」

血を吐き捨て、肩で呼吸を整えてアルデイを睨み付ける。減らず口を叩く場面では決してないのだが、それでも思わず口から漏れ出してしまう。

見たところアルデイの身体からは、未だ目立った外傷が見られないのだ。爆発物は行人にとって、純星煌式オーガルクラス武装に頼らず出せる火力で最高クラスだが、それら全てがほとんど効いていない。

（——白江……アイツはまだ持ちこたえている……ならリムシイを不意打ちで倒せばいけるか……？）

このままアルデイを狙っても、耐え切られてやられるだけだ。ならいつその事、片方を先に叩く作戦に切り替える他ない。

確かアルデイの障壁は、強度と展開速度が高いが複数の展開はしていなかった。もしそれが出来ないのであれば、二人がかりで当たれば突破も少しは現実味を帯びてくる。

やるしかない。

「さあ、そろそろ終わりにするのである」

アルデイがハンマーを正面に構え、ゆっくりとこちらに歩いてくる。もちろんこちらの近くには、逃げ道の一つを潰すように障壁が展開されている。

しかしこれから横に薙ぎ払われるであろうハンマーを、行人はギリギリまで待ち構える。直前まで引き付けて、隙を少しでも作るために。

「フーン！」

限界まで脱力していた脚を星辰力^{プラナーナ}で強化し、これでもかと言うほどの力で地面を蹴り、前方に向けて飛び出す。狙いはリムシイただ一人。

それと平行して、ここにはまだ存在していない……しかしどこからでも自分を妨害できるものに意識を張り巡らせる。

「皆さんのためである！」

現れたのは、これまた防御障壁。こちらの走る軌道に合わせていきなり出現しては、行人は何度もそれに衝突する。当然後ろからは、アルデイも走りに向かってきている。

予備動作は特になし、来るタイミングも不明。唯一頼れるのは己の予測のみだが、高度な演算能力を持っているであろうロボット相手に、そんなものは加味できない。

(鬱陶しい……！)

行動毎にタメを入れ、そこからサッカーのフイントのように急旋回を繰り返していたが、もはや焼け石に水だ。精度が上がってきているところを見るに、パターンはほぼ割り出されてしまっている。

となると……

(松葉杖……いや、車椅子は考えておくか)

リムシイまでの高度、およそ五メートル強。一般的な星脈世代の身体能力は、鍛えた男性三人分相当だと聞いた。

跳躍力はどれだけ見積もっても大体二メートル、脚に星辰力プラナーナを込めたとしても三メートルほどだと仮定しても、リムシイには届かない。

何かしら高度を稼ぐ手段が必要だが、我ながら考えがぶっ飛んでいく。

——まあ、文字通りブツ飛ぶのだが。

「今度こそ！ 砕け散るのであるッ！」

「砕けるもんなら——」

ハンマーの振りほぼ直線、構えた場所もベストだ。

玉砕上等、脚の骨くらいくれてやる。

「砕いてみやがれえッ！」

行人はハンマーが斜めになるタイミングを図り、その面に向かって着地する。衝撃は膝を使って吸収、もちろん全ては無理だが、有り

余った力は行人の身体を砲弾のように発射させた。

それが狙いだ。これでいい。このまま一直線に飛べばたどり着く。

(……ッ!?)

まずった……アルデイの障壁だ。行き人は空中で動ける能力なんてないし、バーニアなんて都合のいいものも今回は装備していない。

せめて吸血暴姫……いや、《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》とでも戦っていれば……

(そうじゃないだろ！ マジでどうする……!?! 十八番の爆弾戦法も在庫がないが、かといってこれを切るのだから……ああ、クソッ！
もう打つ手がねえッ！)

血管が熱を帯び、脳が焼き爛れてしまいそんな思考が、破裂してしまうかのような心臓の鼓動が、幾万と繰り返されているのを久々に感じる。

考えろ、考えるんだ。ありとあらゆる手段、全てを講じてこれを突破し――

「ぬおっ！」

突如、障壁は現れたかと思えばすぐさま消えた。混乱する行人だが、思考などもはや行人の頭にはなかった。

リムシイまであと少し……あと少しだ……あと少しで……

「!?!」

そこで行人の意識はブラックアウトした。

「極度の緊張状態によるストレス、ですか……？　そうだとしても、あんな風になるとは……」

「君の話では、彼は以前も《星武祭》^{フェスタ}に参加していたのだろうか？　——残酷だが、どれだけの選手でも限界はあるし、大局での負けによってトラウマを負う者は少なくない」

（——ここは……どこだ……？）

行人が目を覚ますと、そこは知らないベッドの上だった。いつもの寮のベッドではなく、寝返りが打ちにくい入院患者に使われるようなベッドだ。

近くからは聞き覚えのある、年季の入った男と若い女の声が聞こえる。

センサーだけを使って周囲の情報を集めるが、これ以上は流石にわからない。行人は仕方なく、呻き声を上げながらその重苦しい身体を起こした。

「……クローディア？　それと……」

「と、起きたかね、永見行人君」

「仏教面で声をかけてきたのは、ヤン・コルベル院長。星脈世代ジエネステラでも類稀な治癒能力者魔女や魔術師の中でも、治癒能力を持つ者は極めて稀。基本的に治療院専属であるが多く集う治療院の長。本人は治癒能力は持っていないが、数多くの怪我人を見てきた優秀な医者だ。」

「……院長、何があったか聞いても？」

「端的に教えるならば、君は空中を飛んでいる最中で失神し、敗退を余儀なくされた、というところか」

「失神、ですか？」

「おそらくだが、原因は過度のストレスであろうな。君たちのような星脈世代ならば、Gによるものとは考えにくい。試合が終わってからも発汗がひどく、血圧、心拍数も異常値だったのを見るに、余程焦っていたのかもしれない」

つまり自分は、久しぶりすぎる大試合に緊張しすぎて意識を失ったということか。しかし……

「……の割には、俺の体、特に怪我してないですね」

「ああ、それなら心配しなくていい。曰くあの擬形体パベットが、落下する君を助けてくれたらしい」

「リムシイが……？」

何故そんなことをしたのか、若干腑に落ちなかったが、事実怪我が無かった行人は頷かざるを得なかった。そして事態を理解したことで、一つの疑問が浮上してきた。

「白江は……!？」

「ご心配なく。白江さんなら既に察へと帰宅してますよ。目立った怪我もありませんでしたし、問題ありません」

「……そうか、よかった」

ホッと胸を撫で下ろす。自分が意識を失って、もしそのまま戦闘を続けていた可能性を危惧していたが、どうやら杞憂だったようだ。

「ただ、何か話があるようでしたよ。病院を出たらすぐ来てほしいと、そう言われています」

「……そうか、……そうかあ……」

だが別の問題が発生してしまったことで、行人の束の間の安堵はすぐに憂鬱へ変貌した。利奈に対する謝罪……いや、それも聞き入れられるかどうか……。

彼女が《フェスタ星武祭》に何を望むのかは正直わからない。だが少なくとも、お遊び感覚で参加した訳でないのは明らかだ。

中等部で、武術の教えも無しでいきなり挑もうとすることが、どれだけ事を急いでいるか察せないほどバカではない。

(……場合によっては、一生賭けて償わないとならんかもな……)

そうだ。これで願いを叶えられる、そう思って俺を頼っていたのであれば、俺はそれを裏切った。

誰もが袈裟だと思うだろう。願いが叶う——文面でしか理解出来ないそれは、救いを求める者以外にはその重さは到底理解出来ない。

かつて自分がそうだったからわかる。故にその事実を、行人にはより一層重く押し掛かった。

事件発生

「——結局何もわからずじまいじゃねーか。オイ、本当にあれが、最強の純星煌式武装だつてのかわ？」

期待外れの応戦に貴重な時間を使わせやがった、画面の奥で笑みを浮かべる野郎に乱暴に言葉を吐き捨てる。

『最強、というには些か語弊があるが、君も《蝕武祭》^{エクリプス}の客だつたならばわかるだろう？ ——全てを記憶として吸収し、際限なく膨張し続ける。あれは力の塊だ。人には扱い切れぬ程のね』

「……………」

返される言葉一つ一つが忌々しいが、全て事実であることはデイルクもわかっている。

『なんなら試してみるといい。どうやらまた何か企んでいるらしいじゃないか。ついでにそれも調べてみるのはどうかな？ ……ああ、もちろんやり過ぎない程度でね』

「テメエ……………どこで知りやがった」

『彼女の密偵は至るところで暗躍してる。これくらい造作もないさ』

「ケツ、そうかよ。精々、黄昏の二の舞にならなきやいいがな」

言い終えるとすぐに通話を切り、強引に会話を終わらせる。あいつの言葉に従うのは癪だが、今後に向けて確かめる価値はあるか。

「俺だ。…………ああ、追加の任務としてこいつの確保も……………なに？」

……そうか、ならそのまま実行しろ」

飛んで火に入る夏の虫とは、まさにこの事だ。

夏と言えば何かと聞けば、冷帯や寒帯にでも住んでない限り暑さと答えるだろう。梅雨とかも混じるかもしれないが、とりあえず暑い。これは確定だ。

アスタリスクもそれは例外ではない。照りつける太陽は、槍のように強い日差しを容赦なく浴びせてきている。

ただこの場合は、ただただ気温が高いというより……

「観客席もそうだったが、人多すぎんだろアスタリスク……」

渋谷のスクランブル交差点も真っ青な人だかりを掻き分けながら、皆が集まるといふドームに行人は向かっていた。

言うまでもないが、《フェスタ星武祭》や文化祭シーズンになると、ここの人口密度は何倍にも膨れ上がる。

これまではこの時期に出歩く必要も無かったので、特に意識してこなかったのだが、今になって事の大きさを実感している。

ミシツ、とかギシツ、みたいな、鳴るはずの無い擬音が本当に聞こえてくるような感覚すら覚えるほどだ。ああ、クーラーの快適な治療院が恋しくなってきた。

「はあ……早くしないと遅れてしまうんだがな……」

事の発端は、紗夜と綺凜の試合があるからどうせならそこに集まろうとクローディアから聞いたからだ。彼女としては、彼らには一斉に挨拶したかったのだろう。

何せあのメンバーは、星導館にとって多大な貢献をしており、尚且つ知人でもある。生徒会長としても個人としても、そういう労いは必要というものだ。

まあ中身がああの腹黒となると、何か裏があるのでとは正直疑わざるを得ないのだが、そこは考えないようにしておく。

さて、今の試合状況は……

(つて、もう終わってんじゃねえか！)

その唐突な結果に驚きながらも、群衆を踏み台にして行きたい気持ちを持ちながら抑えながら、行人は控え室へ急いだ。

「部屋は……ここか。——永見行人だ、入っていいか？」

『……永見先輩ですね？　どうぞお入りください』

受話器越しのクローディアの声は、妙にこわばったものだった。気のせいだとも思ったが、部屋に招かれてすぐに確信へと変わった。

「……何だ一体？　そんなピリピリして……」

試合に負けた後とはいえ、それだけとは思えないほど部屋の雰囲気
が殺気立っている。特にユリスは、これ以上無いほど神妙な顔付き
だ。

「永見か……丁度いい。どうせお前にも話さなければならん」

「おう相変わらずの生意気さに感動すら覚えるよ俺は」

「悪いが、敬意を払う必要があるとは思えんな。——クローディア、任
せるぞ」

「了解です」

そう言い残して、ユリスと綾斗は部屋を出て行った。残っているの
は行人とクローディアだけだ。

「さて、あのツンギレに代わって説明してもらうぞクローディア」

「単刀直入に申します。……白江さんが猫に——グルマルキン黒猫機関に捕らわれ
ました」

黒猫機関……その単語が飛び出した瞬間、自分の心から熱が引いて
いくのを感じる。任務をこなす時のいつもの感覚だ。

「……他には誰が？」

「ユリスの国から来たメイドの子が」

「相手の目的は？」

「星導館側の戦力を削ぐことかと。現に解放条件として、綾斗の持つ《黒炉の魔剣》セル＝ベレスタの緊急凍結処理を出してきました」

クローディアから現状についてどんどん聞き出していく。動くにしても、状況がわからなければそも動けない。まずは情報収集だ。

「これからどうするつもりだ？」

「《黒炉の魔剣》セル＝ベレスタは手続きを偽装して引き続き綾斗に、その間に刀藤さんたちで人質を探し出す算段です」

となると、探すのはやはり再開発エリアか。予想はしていたが、また面倒な場所を選んでくれる。

「範囲を予測した地図データと、先の二人の連絡先です。端末で確認しておいてください」

「……よし、どうせしばらく隠れるんだろ。後は任せておけ」

ゴ丁寧にお辞儀するクローディアを余所に、行人は控え室を出ていく。

「刀藤綺凜だな？ 俺は永見行人。先輩の先輩って言えば何となく伝わるか？ ……何か用って酷いな沙々宮、話聞いたから協力するつも

りなんだが」

戸惑う刀藤と、冷やかな態度の紗夜。声色から想像するに、幸先はお先真つ暗といったところか。

しらみつぶしに探すとして、タイムリミットは恐らく閉会式……綾斗らの決戦も視野に入れるならばさらに短い。

せめてちよつとでも足掛かりが欲しいところだが、片っ端から潰すしか方法がない。何とかするしかないだろう。

「提案だが、搜索する地域を区分して分けたい。どうにか三人で……は？ 方向音痴？」

……撤回しよう。お先どころか、足元すら見える気がしないと。

「……………」

声は出ない。猿轡によってどのみち出せないが、もし着けられてなくとも、今の利奈には呻き一つ発することは出来ないだろう。

正直、今にも狂ってしまいそうだ。

(…………怖、い…………死にたく、ない…………)

これは恐怖……今まで味わったことのないほど強い、身の毛がよだつような恐怖だ。だがいくら生存本能が叫ぼうが、少し動けば殺される。

これに比べれば、《フェスタ星武祭》の試合なんて戯れ合いみたいなものだ。

特にあの目だ。冷たくて、光も生気もなく、彼らの冷ややかな視線とも違う機械みたいな目が、この目にはつきりと焼き付いている。

あんなものは人ではない。あれは……

(……！)

ふと視線を前に向けると、向かいで捕まっているメイドの子が笑顔でこちらを見ている。それは若干ぎこちなく、体は少し震えている。

……バカか。一体自分は何を考えていた。感情に身を任せて無為に時を過ごすなど。その結果が一ヶ月前だと既に思い知ったはずだ。

それにこんなとき、あのシルヴィアならどうするだろうか。

……決まっている。彼女を助けて、犯人を捕まえるために行動する。

だから落ち着け。まずは落ち着け。でなければ誘拐犯を出し抜くことも、彼女を助けることも出来ないのだ。今度こそ、助けなければ。

(……よし)

思い出によって自分を奮い立たせる。手始めに現状分析からだ。

一番分かりやすい現状からだ、言うまでもないが利奈は拘束されていた。両手を縛っている縄は固く結んであり、どう足掻いてもほどけそうにない。これは彼女も同様だろう。

そして目覚めたのは柱が多い暗室。いや、暗室というにはやや明るい。いや、やけに小さな光源が多い気がする。マフィアの頭領が会談でもしてそうな雰囲気な所だ。

窓は無く、外の景色から場所を予測することも出来ない。ただ外音が全く聞こえないため、少なくとも繁華街のような場所ではない気がする。

周りの様子でわかることと言えばこれくらいだろう。となると、次は犯人の特徴や目的の推察だろうか。

だが利奈が覚えているのは、小さなメイドの子が拐われるのを見て、それを追いかけていたら身体に重い衝撃が走ったところまでだ。

そして自分は情けないことにミイラ取りがミイラになってしまったわけだが、その意図がわからない。

少し前まで何か話していた様子だったが、利奈が目覚めたのもちようどその場面だったためこれもわからずじまいだ。

誘拐ならば身代金やそれに当たる何かを要求するのが基本のはず。

自分は口封じのためと考えて、その場合人質として価値があるのは

……

(…………いや、今はそんなことどうでもいい)

一旦頭をリセットする。それがわかったとしてどうする気だ。精々彼女を優先して逃がそうと思うのが関の山だろう。

今はそれよりも、犯人の能力を探るのが先だ。

確か意識を失う直前、あの男はメイドの子を運んでいた。そのため手は塞がっていたし、罫を仕掛けられるような場所でもなかった。

考えられるのは他の仲間がいたか、あるいは彼が《魔術師》であるか。

他の仲間……いるだろうか。たった一人の、それも……多分ただのメイドなのだろう少女に対して、二人も三人も出向くだろうか。

(……もしかして、夜吹さんみたいな作業員?)

忘れていたが、これは《星武祭》^{フェスタ}という一大イベント中での犯行だ。^{アスタリスク}こここのセキュリティは他に類を見ない(ド田舎に住んでいたため標準がわからないが)ほどだが、今の時期は特にそれが強化されているらしい。

事実、《星武祭》の開催期間中にそれが滞るような事態は一度も起きたことはないらしい。

となると残るのは、それを熟知している者……つまりこのアスタリスクにおいての作業員だ。そして腕利きの揃っているそれらの者たちなら、この程度の任務に複数は動員しないはずだ。

よってあの男に仲間はいない。

(あとは能力……!)

先の結論で、彼が何らかの能力ないしそれに類似した力を持つこともほぼ決定したとあっていい。一人だということがわかっただけでも御の字だが、情報は多い方が良いとペアであったあの男も言っていた。

(癩に触るけど、役に立ってますよあなたの教えは……！)

そうして意を決した利奈は、能力が使われる可能性に賭けてもがこうとする。

だがそうする前に、言葉ではない悲鳴が聞こえた。

「――！」

声の主は、目の前にいた女の子だった。どこからともなく現れた得体の知れぬ何かが、彼女の頭を鷲掴みして押さえつけていたのだ。

そしてそれは、思わず身体を前に突き出した利奈にも牙を剥いた。

「……大人しくしているろ」

冷えきった声色が、冷酷に告げる。

——死が迫っている。棘のようなものが、こちらを貫こうと首元まで来ているのを感じる。再び恐怖が身体を震わせ、心を支配しようとしている。

だがそれでは駄目なのだ。そこで怯えていては、自分は一步も前に踏み出せない。

怯えるな。目を逸らすな。その原因の隅々までもを観察し、脳に焼き付けろ。

(……影！)

影……そうだ思い出した。あの時、外は雲一つ無い晴天だった。そして会場の出入口付近には、そういった日光を遮るための屋根があった。

そして利奈が意識を失ったのも、そうして影が広がっていた空間だった。

なるほど、部屋の構造にも合点が行く。この部屋に散らばっている無数の影は、扉の前、自分やあの子の付近、そしてやや広めの中央に多く分布している。

それぞれ突入時、救出時、戦闘時に使われるだろう場所だ。逆に光源は、手が出しにくい部屋の角とか縁に置いてある。

そしてそれは、元々部屋に付いていなかったものも多いようだ。そういうことなら……

(――あった)

利奈は男の持ち物に、服装と明らかに噛み合っていない煌式武装の発動体を見つけた。あれはあの男を撃退するために取り出した、利奈の拳銃型煌式武装だ。

先の結論から、部外者に行方不明と断定されかねないものは回収すると考えていたが、思った通りだ。

情報は十分集まった。対策も考えた。次はその機会を待つ。

まだ自分には、この状況を打破するだけの力はない。ならばその代わり、自分に来ることをやるだけだ。

迷走

「ーそうか。……ああ、残念だが、こつちも目立った進捗はない。……は？ あのな沙々宮、イラつくのはわかるが、一人で探せない奴の言葉じゃないからなそれ。ーそうかい、じゃ切るぞ」

自販機で買った缶コーヒーを飲みながら、目が悪くなりそうな暗闇で端末を操作する。

時間帯は既に日を跨いでいるが、フローラという子と利奈については何の進展もないのが現状だ。

二手に分かれているだけマシだとしても、その程度の人数では全く足りないほど広いのが再開発エリアだ。

事実、調べていないことを示す地図の印は、そうでないものと比べると何倍もの数が残っている。

これでも数を絞り込んだ方らしいが、約半日かけてこれだ。そういう意味では綾斗やユリスらの途中参加は嬉しいものだったが、やはり人数不足は否めない。

というか、いくら情報通の英士郎が加わっても、しらみ潰しに探すという手段そのものが荒唐無稽と言わざるを得ない。

よくここに入入りしているからわかる。たとえ地図があつたとしても時々迷うのだ。こんな所に自販機があつたことだつてついさつき知つた。

「……はあ、そろそろロートリヒト歓楽街も探索に移るか」

歓楽街方面に移動するため、地図を拡大して方角を確認する。

二回目の打ち合わせで、あの区域は自分と綾斗が担当することになった。理由としては、女子たちでは色々絡まれる可能性があるからだそうだ。

提案したのは綾斗。息を吐くようにこういった心遣いをしようと思えるのは、流石優男といったところか。本人的には無駄な時間を割かれないようにする意味合いが強いらしいが。

そういう面では一応賛成だが、あの面子にその心配がいるかは正直疑わしい。

「ーこっちか」

休憩は終わりだ。無駄な思考を切り捨て、行人は光と欲望が渦巻くネオン街へと足を急がせる。

路地を抜けて最初に見えたのは暗がりによくいる不良や犯罪者ではなく、派手な装飾に包まれた飲食店の数々だ。

再開発エリアも歓楽街も不良や犯罪者の温床であることは本質的に変わらない。だがその大きな違いは原動力にある。

再開発エリアの深部であれば、そこはレヴォルフのように力でねじ伏せ従わせる力の世界。それに対し歓楽街は、経済力さえあれば弱者でさえ強者を従わせられる金の世界だ。

そして金の力は、直接的な暴力よりもずっと広い範囲を支配する。今日も今日とて、マフィア共は昇進とはした金を求め奔走しているらしい。

(とはいえ今日はやけに多いな……)

出来るだけ人目につかないよう群衆に紛れる形で捜索を続けていて、行人はそう感じた。

夜の歓楽街は常にイルミネーションが灯っているため明るいのが、かなりの人で溢れておりあまり遠くまでは見通せない。

それほど密集しているというのに、どこに目をやっても黒服姿の男達が視界から消えない。

《フェスタ星武祭》の特性を考えれば主に外来客が多そうなものだが……

(既に嗅ぎ付けられてるのか？ それともこの付近に隠れている?)

行人は人混みから人通りの少なそうな路地に一旦避難しに向かう。

でたらめだとしても、『とある学園の生徒がギャングの住処を探している』のような噂を流してやれば、少なからず組織が動くはずだ。

そうなるかと必然的にここの警戒も高まり、こちらが動きにくくなる。

マフィアと黒猫グルマルキン機関の繋がりは不明だが、何にせよ騒ぎが大きくなるのは避けたい。幸い変装用の服装は黒が基調だ。暗闇に紛れながら移動するのも一つの手だろう。

しかしその最中、行人はギャング達もがその路地に入っていくのを見かけた。それも何かを追っているのか、かなり急いだ様子でだ。

(……まさか天霧か？ だとすれば不味いぞこれは……)

ここで目をつけられる人物を挙げるなら、綾斗も間違いなくそのリストに載っているだろう。

何せ自分が来るずっと前からここで調査をしていた。それに綾斗とはさつきから連絡が途絶えていた。

綾斗なら負けはしなくとも、馴染みのない彼にとってこの土地勘は全く無い。トラブルは十分起こり得る。

「ーおい、仕事だぞ物真似師。……今は名前なんて何でもいいからー」

「本当にこっちなのか？ 暗すぎて全くわかんねえぞ」

「まだ言ってるのかお前、いい加減地形とか覚えろよ……」

街灯もなく、ネオンの光も届かなくなってきたとはいえ、入団してそれなりに経っているのに、まだここら一体について頭に入れてないとはごく仲間に苦言を呈する。

「うるせえ！ 今日グエンの野郎が出っぱらってんだろ？ どうせ何の手柄も得られねえんだからいいじゃねえか」

グエン。元《リンドブルス王竜星武祭》のセミファイナリストだったらしい男。奴の経歴の真偽は知らないが、とりあえず腕が立つのは事実だ。

所詮使い走りの一人に過ぎない(加えてたまに暴走する)のだが、幹部もその腕っぷしだけは重宝しているようで、たまに護衛として付いているのを見たことがある。

ただし経歴がどうこう言う前にキャリアの差は歴然で、探すもよし、抵抗されてもよしという自分達の上位互換のような人物だ。

普段の離脱者の暗殺のような仕事であれば、自分達は手も足も出ないだろう。

「だから今がチャンスなんだろうが。ガキ一人捕まえりゃ手柄だぞ？
こんな楽なことはそうそうねえ。今話してる時間も惜しいー」

「……オイ、あいつじゃねえか？ 写真にあったガキって」

はつきりとは見通せない。しかし臆気だがそこに見える暗色の男に、二人は近づいて互いに小銃を構える。

「オイ！ こころら嗅ぎ回ってんのはテメエか？ ちよつと話をしようぜ？」

「ーやだね」

そしてその瞬間に、二人の意識は暗転した。

「永見先輩？ お疲れ様ですね」

「……やめろ気色悪い」

本人と何ら変わりのない天霧綾斗のような何かを制しながら、スーツ姿のマフィア二人をハエが集っているゴミ箱に詰め込む。

《ナイアーラトテップ数多の偽り》の能力は、ルーックス煌式武装のみに留まらない。形有るものであれば、何もかもを模倣し再現することができる。

人形態として使っているあの姿も、元はいつかの所有者の一人らしい。最初は止めてくれと頼んだものだが、いい加減面倒になって好きにしろと自分で言った。

「ひどいなあほんと。せつかくわたしが身体を張ってあげたのに」

「だ、か、ら、せめて一回戻れよ！ その姿でその喋り方気持ち悪いんだよ！」

ああ鬱陶しい。姿も声も完全に綾斗そのものだが、性格も思考も仕事も本来のそれとは違う。つまり少女体でしていた動きを目の前の青年もしているわけで……一言で言っただけかなりキモい。

神話とか見ても思うことだが、どうして神様というのはロクなやつがないのか。

「はあ……だめだ繋がらん。遊んでないで天霧を探しに行くぞ」

奇行を無視してまた連絡を試みるものの、三十秒以上経つても綾斗が出てくる気配はなかった。となると、やはり何かあったということだろう。ならば放っておくことは出来ない。

『そんな溜め息ばっかついてると幸運が逃げちやうよ?』

頭に声が響いてくるが、無視して発動体を黙らすように雑にしまい込む。それを言うならば、この事件に当たった時点ですぐに運は使いきっているだろう。

使い切る程の運があったかと言えば、それはそれでまた別の疑問が浮かんでくる。その証拠に搜索メンバーは難ありしかいないし、トラブルが起きてそうな轟音がついさつき聞こえたばかりだ。

普段なら無視するところだが、状況が状況だけにそうもいかないのもまた辛い。

(……………でいいか)

外付け非常階段に跳躍し手すりを掴み、そこに乗り上がって石材造りの建物を上へと登っていく。

周囲を見渡してみると、走ってきた方面には歓楽街のけたたましい光が、そして空には優しい光を放っている上弦の月が見えた。

半月には若干足りない中途半端な月は、いつの間にか昇り終えていたように既に沈み始めている。

夜明けが近い証拠だろうか。星はまったく見えない。時刻は午前四時、端末の時計をチラ見して、音が聞こえてきた場所へと屋上を伝って向かう。

「つと、(っ)か……？」

音の方角と大きさからなんとなく予想した箇所而降り、やや明るくなってきたここら一体を探す。結局のところ天霧の姿はなかったが、代わりに壁にめり込んでのびている謎の男がいた。

「……………」

……とりあえず吊るしておこう。外見や装備からしてロクでもなさそうだし。

というわけで、ズボンのベルトを抜き取って、近くの街灯に手首を縛り付けておく。あとどうせだから、腹いせに下半身を全て剥ぎ取っておいてやった。

いい様だ。これでマフィア関連の人物でも、露出狂として^{シャイナガム}星獵警備隊が取り締まれるはずだ。

「……………なんだこの声は？」

悪人を裁いた優越感(笑)に浸っていると、今度はどこからともなく歌声が聞こえてきた。

人気もなくじめじめしたここには似つかわしくない、とても綺麗で透き通るような声。聞いているだけで森林浴をしているような感覚になり、とても落ち着いてくる。

声質だけではない。歌の素人である行人にもわかるほど歌としてのレベルが高く、自然と引き込まれてしまう。

そして無造作に、声が聞こえてきた上方へ顔を向けると……

「……夢でも見てんのか……俺は？」

明け方の空には、天の川のような万^マ応^ナ素^ナが広がっていた。その星雲の如き軌跡は空一面を覆い、夜明けの光と合わさってさらに幻想的な景色を作り上げていたのだ。

間違はなく、これは魔^ダ術^ン師^テか魔^ス女^トの能力だ。ここまで範囲の広い能力ならば、それは探知系の能力者か。

いや、先程から聞こえてくるあの歌声、もしかその正体は……

（……《^{シングルドリヴァ}戦律の魔女》……！）

歌を媒介に能力を拡張する、クインヴェール女学園の序列一位の魔女であり、《^{リンドブルス}王竜星武祭》にてオーフェリアと渡り合った数少ない人物の一人だ。

彼女の能力と実力があれば、これだけ広域に力を散布させることも可能なはずだ。いつかの試合風景で見た、戦闘中における手数の高さとその一つ一つの強さはまだ頭に残っている。

（さっきの男をやったのもそうなのか……？）

都市部には到底及ばないが、ここらでは一番高さのあるビルを見上げる。既に消えているが、能力に作用していた万^マ応^ナ素^ナの量から、そこに《戦律の魔女》がいるのだろう。

だがそれは目的じゃない。つい優先順位を間違えてしまったが、本来はフローラという子の捜索が目的であり、現在音信不通の綾斗を探

しているのもその成り行きでしかない。

それにもう朝を迎えてしまった。綾斗には悪いが、もはや一刻の猶予もない。シリウズドームに戻ったと割り切つて、もう一度フロアに視点を移すほかない。

行人の端末に通知が来たのは、その考えに至つてすぐだった。

私が生まれたのは、北海道の地域の町だった。アスタリスクにあるような高層ビルなんてものはなく、むしろ開発が遅れている場所だ。

コンビニや個人経営の駄菓子屋が子供たちの憩いの場で、大人たちは近所で井戸端会議をしているのが常だった。

学校は二クラスで人数は合計三十から四十人ほど。今にしてみれば、過疎化がより進行している地域の町にしてはまあまあだったのだろう。

その分町の繋がりなんてものは薄っぺらかったのか、はたまたそんな地域だったからこそなのか知らないが、ジェネステラ星脈世代への差別意識も強かった。

自分が他とは違うと感じ始めたのは、大体小学生になった頃だったか。だがその時はまだ、普通より力持ちみたいな風に深刻には考えていなかった。

その問題――私が自分を星脈世代であることに危機感を持ったのは、入学から二年後のことだ。

クラスメイトの一人が、私が星脈世代だということを盛大にバラしたのだ。そして彼はこう言った。

『こいつは人間じゃない！ こいつは化け物だ！』

小学生にしてはあまりに強すぎる私の身体を根拠に、まだ出来上がったばかりのクラスだったがゆえに、それは周知の事実になってしまった。

結果、イジメが始まった。彼らは私が迂闊に手を出せないことを逆手にとり、靴隠しや落書きに始まって殴る蹴るの暴力だってお構い無し。

一部は傍観を徹底していたが、イジメに加担してなかったとしても私から見れば同類だった。私が痛みと孤独に苛まれているとき、みんなは学校で漫画やアイドルの会話をしていた。

先生だって休み時間は机に座っているだけで、眼鏡をかけているくせに私に対して何の反応も示さなかった。あれが親と同じかそれより上だと聞いたときは、それはもう幻滅した。

それでもまだ救いだったのは、自分を人として認めてくれる者が少なからずいたことだ。両親に、駄菓子屋のおばあちゃん、そして一人たった一人の友達。

私はそのお陰で、あの荒んだ時期を耐え抜くことが出来たのだと思う。特に彼女が聞かせてくれたシルヴィア・リユーネハイムの歌は、

私の心に活力を与えてくれた。

それに家に帰れば、家族がいた。冬には決まってテーブルを囲んで、家族団欒で鍋を食べるのか楽しかった。

駄菓子屋に行けば、おばあちゃんがいる。親が家にいないときは、よくそこに入り浸って昔の話を聞いていた。

帰るとき隣にいるのは、いつも彼女だった。イヤホンを二人で分け合いながら、どの曲が好きか話し合った記憶が懐かしい。

どれもこれも、私を保たせていた大切な思い出だ。

そしてある日、私の家に火が放たれた。一緒に遊んでいた彼女は崩れてきた材木に遮られ、家から逃げ遅れてしまった。

こんなド田舎にすぐ消防士が来るわけなどなかった。だが星脈世代である私であれば、その力を使って助け出すことが出来たのかもしれないのに、私は一目散に逃げてしまった。

焼け死にたくない一心だった。背中には容赦のない猛火が迫り、空気がストーブの何十倍の温度となって肺の中を焼き付ける。家を一瞬で焦がした炎の光が、未だに頭の中をよぎっている。

そしてその行動が、後に私の心を深く傷つけることになってしまった。

閉幕

ここから犯人は見えない。柱の奥に寄りかかっているのは少しだけ見えていたが、今は完全に見えなくなってしまった。

なんにせよ死角に入ったということは、奴の意識はこちらに向いてないのだろう。今がチャンスだと判断し、利奈は指に装着している煌式武装ルークスの発動体を起動する。

利奈が行人から渡された武器には、いくつかの種類があった。そのうちの 하나가、彼が試作的に開発した超小型煌式武装の指輪型発動体だ。

少量の星辰力プラーナですぐ起動できるこれは、ホルダーから取り出す手間もなければ咄嗟の事態にも対応しやすくなるという経緯から生まれらしい。

小さな宝石サイズのマナダイトに武器の構造を凝縮するのが大変だったと、渡されてから何度も聞かされたのを覚えている。

生憎試合では機会に恵まれなかったが、指輪という形状からマナダイトもただの宝石にしか見えないことが幸いしたのか、犯人にも取り上げられずにすんでいた。

指輪のサイズの割に大きいナイフの刃を縄に当て、押し引きを繰り返して切ろうとする。これがあっているかわからないが、今は早くこの戒めを解きたい。

「——ッ！」

突如、痛みと共に握っていた右手に力が入らなくなり、利奈はナイ

フを落とす。

(なん……で……ッ)

利奈が右手に意識を向けると、その手首には細く鋭い棘が深々と刺さっていた。

「……まさか俺が、ただ柱の裏にいただけだと本当に思っていたのか？」

男はそう言っていたのだろうが、利奈は口に嵌められた猿轡を噛み締めるので精一杯だ。痛みで疼く右手を抑えたくとも、唯一空いている左手は縄のせいで動かない。

「ほう、盲点だったな。指輪に偽造した煌式武装とは」

拾い上げたナイフを弄びながら男は呟いている。痛みを熱さとする感じ、キャパシティを振り切りいつそ冷静にすらなった脳が一つの案を告げる。

もし、この棘を逆に利用できないかと。

(こんつのおおオオオッ！)

「……ッ！」

心の叫びで悲鳴を掻き消しながら、手首に棘を貫通させて縄にまで達させる。骨すら貫いたそれはいとも容易く縄の固まった部分に穴を空け、利奈の手の拘束を解く。

ジエネステラの腕力を持つてすれば、裂けかけた縄など無いも同然

だ。

さっそく自由になった左手で男が腰にしまっていた拳銃の発動体を掴み、それを起動しがむしゃらに引き金を引く。

「——な、に……ッ？」

背中か、腹か、それとも足か、どこに命中したかはわからない。だが確実に言えるのは、それによって右手首に刺さっていた棘が消えたこと。そして男に驚愕の声がうっすらとでも聞こえたことだ。

だがまだ逃がさない。自分から離れられないよう、右腕を男の身体に巻き付ける。

「ッ、舐めるな……！」

が、流石にそう事は上手く運ばなかった。腕は簡単にはらわれてしまい、左手をしつかり固定され首を押し潰されていく。

利奈の右手は棘から解放されたとはいえ、元々男の星脈世代ジエネステラを拘束できるほどの力はない。傷を負った状態なら尚更だ。

「逃げられるとでも、思っていたのか？」

男がそう言うと、利奈の首を押さえている左腕から黒塗りの剣が出ていた。その腕を引くだけで、利奈は頸動脈を切られて死ぬだろう。いや、間違いなく死ぬ。

しかし、利奈の眼中にはその事実が写ってすらいなかった。今頭の中にあるのは、痛みでも恐怖でもない。目の前の男を倒すという、殺意と言っていいほどの敵意だ。

(それなら……！)

利奈は拳銃に星辰力プライナを込める。残っている分全て注ぎ込むくらい、ありつたけにだ。

そして手首のスナップを使い、互いの眼前に投げ込む。

マナダイトは星辰力に反応して出力を増す。過励万応現象、煌式武装ルークスにおいて流星闘技流星闘技メテオアーツ(メテオアーツ)

正式には過励万応現象。星辰力とマナダイトを反応させ、一時的に出力を底上げる技術。暴発の可能性もあるが、者によっては初めて持った煌式武装でも扱える。と呼ばれている場合、それはあくまで戦闘技術の一つだ。

一朝一夕では成し得ないが、一定以上のレベルで勝つには必須事項ともなる。

使用されているマナダイトの限界を把握し、いかなる時もそれをはみ出さないように星辰力を注ぐ。まさに熟練者になるための一歩と言えるだろう。もしそれが出来なければ、持っている武器を失う。

今までの常識だったそれに一つのメリットを浮かばせたのが、天霧綾斗と刀藤綺凜の決闘だった。

「ぐっ……！」

要領を越える星辰力を注がれたマナダイトは小規模な爆発を起こす。外傷を伴うものではないが、隙を作るだけの衝撃が利奈と男を襲う。

(くう……ぬあつ、ああツ……!)

同時に利奈は動き出していた。自分を押さええている腕を顎で支えにし、縛られたままの足で男の腹を思い切り蹴り飛ばす。

男は向かいの柱まで吹っ飛ばされ、支えを失った利奈は床に尻から落下する。衝撃が骨まで響いてくるが、それは既に気にならなくなっていた。

「ぐうツ……!」

男の明確な苦悶の声が、この瞬間初めて聞こえてきたのだ。これほどのチャンスは今だけだと、そう認識した頭は痛みという感覚など削ぎ落としていた。

息をするのも忘れて柱を背に立ち上がり、地面に転がっていたナイフを握りしめる。そして、

(これで……止め、だアツ!!)

不恰好に倒れ込みながら、男の身体目掛けてそれを突き立てる。

(やった……の?)

それから数十秒、放心していた利奈は死んだように動かなくなっていた身体に気付く。その事実を認識した途端、今まで感じていなかったことがどつと流れ込んでくる。

まず息が苦しい。酸欠で倒れそうな身体を刺したままのナイフで支える。すると今まで感じたことのない、肉を貫く感触が手に伝わってくる。

刺した瞬間には感じなかったのに、今になってそれを実感している。銃を撃っているときはわからなかった感覚だ。

白兵戦をしている人はこんなものを毎回感じているのか疑いたくなるが、それよりもあの女の子だ。

「大丈夫、だからね……」

自分の猿轡を取ってそう言い、血塗れになったナイフを抜き取ろうとするが、想像より奥まで刺さっているのか思うように抜けない。

仕方なく発動体に戻してからまた起動することで、変則的に抜き取る。これで新品同然だ。

「……ごめんね？ 怖がらせちゃって……でも大丈夫、私がやっつけたから」

女の子は震えている。当然だ。あんなことが目の前で起きて、恐怖を感じないわけがない。

それに自分で言うのもあれだが、今の自分は酷い顔付きだ。それこそ憧れのヒーローなんかとはかけ離れた、犯罪者とか復讐者のような感じの。

「——！！」

もうこれが証拠だろう。完全にパニック状態だ。これでは縄を解くにも彼女を傷付けてしまう。

「お、落ち着いて？ あいつはもう大丈夫だから——」

その瞬間、激痛が走った。

「ツ、ああああアアアツ!?」

このとき、利奈は初めて声を上げた。異物感のある脚は縛られたままでもどうすることも出来ず、夕暮れ時のように薄暗いこの部屋に甲高い悲鳴が響き渡る。

「——よくも、やってくれたな……」

それを意にも介さず、利奈よりボロボロのはずの男は変わらぬ冷たい声色で呻く。

何故だ。何故そこまで動けるのかわからない。今自分の脚を貫いているであろう棘も、意識を集中させて発現させる《魔術師^{ダンテ}》の技だ。

……
そんな血塗れの身体で、そんなことが出来るはずがない。なのに

「……終わりにしてやる」

「——終わるの間違いだろ？」

扉を蹴り破ると同時に、行人はあらかじめ起動しておいた拳銃型煌式武装ルークスの方で黒ずくめを撃ち抜く。

「……永見行人だな？」

(……タフだな。任務に忠実だとしても度を越えてるぞ)

だがその男はすんでのところで耐え、上で見たのと同系統の黒い棘を捕まっている二人に向ける。

こういう類いの輩とは何度も戦ってきたが、これだけ傷を負いながら体を保ち、尚且つ《魔術師ダント》の能力を使える者は中々いない。

痛みを含む全ての感情を切り捨てているようで、まさに心有らずと行ったところか。

「近づくな。お前が一步でも動いた場合、この女どもの命はない」

「それでお前の命が無くなるとしてもか？」

「俺がどうなるかなど俺には関係ないし、お前がそれを考える必要もない。さあ、武器を捨てろ」

利奈が踏みつけられ、棘がこちらを覆うように生えてきたところで、行人は渋々持っていた剣と銃をゆっくり床に置く。

正直想像はついていた。だからこそ先の一撃で仕留めたかったのだが……如何せん敵が頑丈すぎる。星辰力プラナーナによる防御星辰力プラナーナによる防御

星脈世代にとつて基礎とも言える技術。あくまでダメージを軽減させるだけだが、これによつて彼らは炎や銃撃にも耐えることが出来る。も上手いと見るべきか。

「下手な時間稼ぎをしても結果は変わらないぞ？ それにその身体じゃ出血多量で捕まるのがオチだ」

「俺には関係ない。……そう言ったはずだが？」

「……はあ、黒猫機関つて聞いてたのに、中身はとんだ犬ところだな」

行人の言動はどんどん過激さを増していく。やつは衝動に駆られている訳じゃない。

目的が綾斗や《黒炉セル＝ベレスタの魔剣》の足止めなら、そう易々と人質に手を下すことはない。ならば適当な言葉で時間を稼ぎ、注意をこつちに引く。

「——その犬にすらなれん者が何を言う」

「はあ？」

「従う者すら定まらん人間が何を為せる。ただのうのうと生きているだけで、何の覚悟もない者などたかが知れる。違うか？ 元序列七位、永見行人」

その冷え切った目とは裏腹に、どこか熱のこもった声で男は告げ

る。

まあ落ちぶれた者としては耳の痛い話だが、それは相手も知ったことだろう。時間を稼ぐという目的は元々あちらも同じだった。

「貴様は何も出来ず、何もわからなくなつて……その果てに自滅する」

「そうかい、そりやお氣遣いどうもツ！」

こちらも意趣返しにわざとらしく身体を右に引く。それを合図に全てが動き出す。そう、全てがだ。

「——どどーん」

行人の背後から青い閃光が迸り、黒い影はそれによって跡形もなく消える。

「ツ！」

続いて男の肩にまた新たな傷口が出来る。今までの攻撃の中で一番浅い切り傷。しかし男は限界が来たかのようによろめき、地面に膝を着いてしまう。

「ナイスお前ら！」

そして行人は走り出す。さっき体勢を整えたおかげでスムーズに近づく。飛ばされていた実剣を手に取り、屈んだ状態から戻る動きで剣を振り上げた。

「……逃げられた？」

「らしいな。逃げ足だけは猫並だわアイツ」

全てが終わった静寂で、最初に声を上げたのは紗夜と行人だった。綺凜は投げた千羽切を回収しに行き、自分も起動していたウォルフラを発動体に戻し戦闘態勢を解除する。

「……これは？」

紗夜が部屋に入ると、捕まっている二人の傍に落ちていた特殊な形状のナイフ型煌式武装ルックスが目についた。

刃は普通程度だが、持ち手には人差し指くらいの輪が付いている。これがあの犯人を刺した凶器だろう。

自分達が駆けつけた時点で犯人はもう傷だらけの状態で、特に腹に出来ていた傷がサイト越しで見えたもので一番大きかった。

「おい、興味深々って顔だが今はこつちだ。その解説なら後でしてやる」

「ん、わかった」

どうやらこれは行人が作った物らしいが、確かに今はウォルフラたちが先だ。だが一つ、一つだけ気になることがある。

「……綺凜、さっき投げた刀、手応えはあった？」

小さな声で呟く。嘴食み（はしばみ）。刀藤流の分家によって生み出されたという異端の投擲術。当然だが武器である刀を投げるため、本当の意味で最終手段。

ウォルフドローラと同時に攻撃するための苦肉の策だったそれは、紗夜にも垣間見えた程度だが、投げられた時点での千羽切にはまだ血が付いていなかった。

「——いいえ、紗夜さん」

しかし綺凜はノーと答えた。つまり、犯人は当たってもないはずの刃に狼狽していたということだ。

「……そうか」

ならば何故犯人はよろめいた。出血で意識朦朧とするのはわかるが……いや、あの身体で能力をも使える輩がその程度で倒れるとは思えない。星辰力プラナーナによる防御で見た目ほどではないと考えれば

それに止血なら、自分や捕まえている彼女らの衣服を使うとかで可能はず。まだ時間が経っていないなら、原因は怪我ではない可能性も考え得る。

（だとするとどうやって……？）

見たことのない煌式武装といい、あの得体の知れぬ純星煌式武装オーガルクスといい、腑に落ちない疑問がしばらく紗夜の頭を巡り回っていた。

前夜祭

「ふむ……こんなところか」

夜景が一望できるオフィスで、マディアスはコンソールの画面を閉じコーヒを一服する。

この時期の《フェスタ星武祭》は既に幕を閉じたが、運営委員会の仕事が途絶えることはない。

事後処理に次回の規格の擦り合わせ、放映権の販売などやることは他にもまだある。

それに次の《グ獅鷲リ星武祭》は取り払われた傭兵制についても考え直す必要が出てくるだろう。問題は山積みだ。

まあ十年以上続けてきた身としては慣れたものだ。仕事量についてもマディアスはこれといって趣味があるわけでもない。それなりの睡眠と飲み物さえあれば休みすらいらないだろう。

だが油断は禁物だ。この調子ならもしかすると、コン大会談コルがこのアスタリスクで開かれるかもしれないのだから。それをここで無為にするわけにはいかない。

「こんなことなら、あの時点で彼を止めればよかったかな」

ソファに腰掛けているマディアスの頭に浮かんでいるのは、画面の奥で変わらず眉間にシワを寄せている青年だ。

思いのほか事が大きくなったせいで、余計な仕事が増えてしまったのは事実だ。それが原因でスケジュールに差し支えるのはあまりよ

ろしくない。

ただ、諜報機関を使って収穫も無しとなればレヴォルフも無視はできない。しばらくの間は彼も大人しくしているだろう。

「……そういえば、当の使い手については何もわかってなかったか」

次に思い浮かんだのは、その青年の事件に巻き込まれた一人の少年だ。

永見行人。あの《ナイアーラトテップ数多の偽り》の保有者だが、肝心の使い手本人はそこまで実力者ではない人物。

マディアス個人としては遙の弟の方が興味をそそのめるのだが、今後の展開を考えるなら彼自身についても知っておくべきかもしれない。

さっそく閉じたはずの画面をもう一度開き、《フェニクス鳳凰星武祭》の出場選手一覧、それと銀河で保管されている人物データを拝見する。

統合企業財体は純星煌式オーガルクス武装を貸し出す人物について事細かく調べている。あくまでセキュリティ上の処置だが、マディアスならこれを覗くことも可能だ。

所詮肩書きだけの役職でしかないが、人生何が役立つかわからないとつくづく思う。

「——ほうっ。」

が、調べていくうちにその違和感に気付く。永見行人という人物のデータには、いくつかの妙な点が見受けられたのだ。

経歴の偽装にも見えるが、どちらかといえばこれは今までの経歴を消されたような様子だ。故郷や通ってきた学校、親族までもが実在した情報にしては不自然なほど虫食いになっている。

それは彼女がこの世界から消え去った証であり、マディアスの決意をより一層強めることとなったものと、ひどく似ている気がした。

「……これは骨が折れそうだ」

また一つ増えた楽しみに、マディアスはニヤリと笑みを浮かべていた。

『あれから彼女はどうですか？』

「先生が言うには、容態は安定してるらしい。精神面も特に問題はなさそうだった。手足も神経をやられていたようだが、あと一週間もすれば退院出来るとのことだ」

生徒会室で実務に追われているであろうクローディアに、今は治療院にいる利奈について淡々と連絡する。

「といっても、後遺症の類がないってだけだ。本人は結構落ち込んでる。まあそこら辺はこっちで面倒見るし、気にしないでくれ」

『……初対面のとくに比べると随分気にかけてますね』

「は？」

『ああいえ、以前の永見先輩だとあまり考えられなかったことでしたから。つい』

そこまで無愛想に見られていたのなら流石に傷付いてしまう。そもそも証拠だって……、

(——思い当たる節しかないのが悔やまれるな)

とはいえ過去の話だ。それくらい水に流してもバチは当たらない。

「んじゃ、また何かあれば連絡する」

『了解です。それでは』

一段落したので通話を切り、再び真っ白な病室へと入る。そこには明らかに項垂れた様子の利奈が、夕焼けを見ながら物思いに耽っていた。

「……まーだ思い詰めてんのか」

ベッド近くの椅子に腰掛ける。

「いい加減立ち直ったらどうだ？ あの子だって感謝してたら。別に
お前のせいじゃない」

あれはレヴォルフの生徒会長が仕組んだことだ。学園の機関が動き出していたのだから、一生徒がどうこう出来る相手ではない。

「それ、その生徒のあなたが言いますか？」

皮肉った声で利奈が答えた。まだ包帯も取れてない右腕を掲げ、なおも続ける。

「私は不意打ちであの人を倒しました。……倒した、というには語弊がありますけど、普通なら痛みで動けないくらいには出来たはずですよ」

「かもな」

「でも動いてました。背中に銃弾を受けて腹にナイフを突き刺したのに……あの人は任務のために動いてました」

「……………」

「私は金を稼ぐために……あわよくば、《星武祭》^{フェスタ}で願いを叶えるためにここに来ました。なのに……勝てる気がしませんよ、あんな……」

どんどん声小さくなり、利奈は身体を震わせている。それが恐怖のフラッシュバックか、何も出来なかった悔しさかはわからない。

ただ、彼女は唯一動く左手で自分を抑え酷く身震いしている。

——とても、既視感を感じた。

「私だって、同じです。願いのために戦うと決めました。……願いに殉じなくてあれなら、他の人たちになんか……」

「——願いも思いも、強さには関係ない」

「…………え？」

わかるとも。自分の願いがちっぽけに見えて、何も出来ないと考え
てしまう。その感覚を自分は知っている。願いなんてもので全てを
掲げる愚かしさも、忘れたことはない。

「流れ星に願いを伝えたところで、本当に叶うわけがない。いくら思
いを形にしたところで、当の土台が貧弱なら何も起きない」

心で勝つことが出来ても、心だけで勝つことは出来ない。何かをす
る時に成否を決めるのはあくまで能力、技量、経験、そして運だ。

憎らしいことに、人間にとって最大の特徴である感情や熱意は、そ
こに含まれない。

「俺たちは願いを掲げてここに来るが、願いで出来ることは何一つな
い。——いいか？ 何かをしたいと思うなら、まず何をすればいいか
を考えろ。出来ないなら、どうすれば出来るようになるかを考えろ。
……俺はそれを全力でサポートしてやる」

「……………」

利奈は口を閉じるのも忘れて呆然としていたが、しばらくして恐る
恐るといった様子で質問してくる。

「一つ、いいですか？」

「なんだ」

「……………なんでそこまでしてくれるんですか？ 《フェニックス鳳凰星武祭》の最中な
らともかく、それが終わった今は別に手伝う義理もないはずですけ

ど」

「好奇心旺盛なのは結構だが、それはお前の願いが叶ったら教えてやるよ。ほれ、またやらなきやならん理由が出来たぞ。そのためにも休んどけ」

立ち上がる拍子にその話題を切り上げ、無造作に手を振りその場から去る。

「——やはりここにいたか」

そして扉を出て廊下に差し掛かったところで、見慣れた薔薇色の少女が顔を出してきた。

「……ユリスか、何故ここに？」

「私も怪我人だからな。定期診察というやつだ」

そう言つてユリスは左の脇腹を手でさする。位置的にはあばらの辺りだろう。一悶着あつた後だが、問題なく傷は癒えているようだ。

「少し、話に付き合ってもらえるか？」

「わかった」

「……相変わらずブラックなのだな」

近くの自販機で買ってきたコーヒーを、ユリスはやれやれといった様子で見ている。

「眠気にはカフェインってな。苦味もそういう意味じゃ丁度いい」

「だからと言って飲み過ぎは毒だろうに。お前がコーヒー以外の飲み物を持っているのを見たことがないぞ」

「激辛カレーよりかマシだろ」

その単語を聞くと、ユリスはギョツとしている。

「……まさか、あれを見ていたのか？」

「券売機前で暴れてりや嫌でも目につくだろうよ常識的に考えて」

それから数秒の沈黙が起こり、答えなど決まっている質問をわざわざさしてきた。

「矢吹にはもちろん……」

「伝えた」

「くそっ！」

呆れたり驚いたり悔しがったりと騒がしいやつだ。なんというか、見れば見るほど一国のお姫様には見えなくなる。いや、見えなくなっただが正しいか。

「……あの棘まみれだったお前が、こんだけ丸くなるとはなあ」

しみじみと思う。入学当初のユリスはそれはもうツンツンどころじゃなかった。いくら故郷やオーフェリアを想っていてもあれじゃ耐えられなかったはずだし、この進歩は大きい。

「それはお互い様だろう。お前こそ、今までまともな交友すらなかったらうに。一体どういう風の吹き回しだ？」

「何が？」

「勿論、あの後輩のことだ。もしやクローディアに押し付けられたのか？」

話というのは十中八九この件についてだろう。

行人も人との交流は皆無に等しかったのだから、それがいきなりタッグ戦の《鳳凰星武祭》に出たのはかなり不思議なはずだ。

「……半分正解だな」

行人がクローディアに色々やらされていることをユリスは知っている。これもその一種のため半分どころかほぼ正解だが、あえてそれは黙っておく。

別に不都合とかじゃない。これは、単なる意地だ。後付けの理由を正当化するための。

「そうだな……綾斗が何故お前と戦っているか言ってみろ」

「私の力になるため……だな。何故お前が知っているかはあえて聞か

んが」

「それと同じだよ。——力になってやりたいと思った。それだけだ」

「……やはり気にしているのか」

その言葉を境に、ジト目だったユリスの表情は一変する。

「否定は出来ないな。あいつをどうにも出来なかったのは、俺が原因でもある」

「それは違う！ 元はと言えば《大博士》^{マグナム・オーパス}があんな実験などしたから——」

「俺はどうすることも出来なかったッ！ それが事実なんだ、ユリス」

ここが治療院だということも忘れて互いに声を荒げた後に、行人の俯いた声が自分で自分の心を抉る。

当時の孤児院の状況を聞くに、オーフェアが連れられるのは避けられなかったはずだ。それをあいつに例えて運命と言うならば、俺とあいつの時間は分岐点だ。

目の前から消えるまでの約三年間。心の傷を癒すことは十分可能だった。だがそんなことも知らずに俺は……

「人間にとって一番やるせないのは、自分が無力だと思い知らされる時だ。お前だって……それは知ってるだろ？」

行人とユリス、共通しているのは、自らの友人を救えなかったことだ。同じ友人を想っているからこそ、二人は蜘蛛の糸ほどでも面識を

保っていた。

——当然、引き止められなかったあの日の出来事も共有している。

「……ああ、知っているとも。手も足も出なかったあの日も、その前も、嫌ほど辛酸を舐めさせられた」

雪も降っていないのに手が悴むほど、とても寒い日だった。そしてそこに佇んでいた少女も、同じかそれ以上に冷えきった目をしていった。

「俺は利奈に力を授ける。無力を嘆く声は二度と御免だし、あいつはまだ間に合う」

行人は自分にも言い聞かせるように宣言する。何も救えず、何も出ず、何にもなれず、そうやって死んでいく姿はもう見たくない。

それにもしかすれば……

「——わかった。そういうことならば、私も力を貸してやる。あわよくば綾斗や紗夜、綺凜にも頼んでみよう」

「それはありがたい。とても助かる」

「礼などいらんさ。後の星武祭フエスタを考えれば、良い鍛練になるしな」

そうして長い時間座っていた椅子からユリスは立ち上がり、階段の方へと向かっていく。

「必要があればその都度連絡してくれ。なるべく力になってやる」

「了解、それじゃあな」

「ああ」

そう言い残してユリスは治療院を後にする。俺は何故かそれを引き留めるわけでもないのに、ただ見つめていた。

深い深い暗闇を、それは歩き続ける。文明が栄えたはずの世界で、松明にすら劣る小さな灯火を頼りに、辛うじて見える足場を進む。

本来なら進む必要のない道を……先の見えぬ道と言えるかもわからないその先へ、たった一人で進むその姿には底知れぬ執念を感じるだろう。

もしくは、苦痛を感じぬ人形のような印象を受けるだろう。或いは、ただの大馬鹿者としか思わないだろう。

しかし決まって言えるのは、いつの時代もそれを乗り越えた時こそ人は一番輝くということだ。

——それを信じ続けた少年の目には、既にそんな希望など存在していなかった。

人物紹介：壱

永見行人

身長：170cm

血液型：O型

誕生日：9月17日

所属：星導館学園高等部2年

序列：元星導館学園7位

武装：複合型純星煌式武装《数多の偽り（ナイアールトテップ）》、劍型煌式武装、拳銃型煌式武装、etc……

二つ名：なし

好きなもの：麺類、観察

嫌いなもの：寝起き、日本地理、宗教

今作の主人公。星脈世代にしては珍しく黒髪。基本寝不足に苛まれており、顔も疲れ気味。昼間は寝ないように、いつもインスタントや缶のコーヒーを飲んでいる。

アスタリスクには中等部一年からおり、落星工学研究会にも所属している。主に戦闘面での歴が長い。一時期は単位が足りなくなるほど訓練や決闘に明け暮れていた。そのため周り（特に当時を知っている生徒）から孤立しており、友人関係は皆無。

全体的に冷めた性格で無表情なことが多いが、ノリが悪いわけではなく、笑みを浮かべてからかったりすることもある。その時はヘラヘラしているので、ウザさには拍車がかかっている。

戦闘では変幻自在な《数多の偽り》を用い、盾や銃などのサブアームと相まって高い汎用性を誇る。本人も多芸で様々な武器を扱えるが、リンドヴァル隊長仕込みの体術が一番得意。

ちなみに矢吹曰く「ガチギレしたら相当ヤバイ」らしい。

白江利奈

身長：157cm

血液型：A型

誕生日：2月6日

所属：星導館学園中等部2年

序列：序列外

武装：突撃銃型煌式武装、拳銃型煌式武装、ナイフ型煌式武装

二つ名：なし

好きなもの：シルヴィアの曲、雪

嫌いなもの：火、人が傷つくようなこと

セミロングの紫髪を持つ地味な少女。クラスでも目立たないが素材は良いため、単純にオシャレへの意識が薄い。シルヴィアのファンで、ワイヤレスイヤホンを常備しており、CDも厳重に保管している。アスタリスクには一年前に来た。《鳳凰星武祭》の3ヶ月ほど前から失踪していたが、後に生徒会側の手によって保護、行人の管理下に置かれる。例に漏れず友達はいないに等しい。

真面目な性格で実務をこなす会計タイプだが、ボケがあまり通じず素で答えることが多い。過去のトラウマが根強く残っており、当時何も出来なかったことから、意思の強さと行動することに強く執着している。

戦闘では小銃と大盾を使い、守り重視の中衛として戦う。接近戦は苦手だが、運動音痴ではないため訓練すれば出来なくもない。元々は《魔女》だったため、能力によっては《冒頭の十二人》入りも可能と行人は考えている。

誕生日ケーキのろうそくを見たのは三年前が最後。

ラディーナ

身長：165cm

血液型：AB型

誕生日：8月14日

所属：レヴォルフ黒学院

序列：序列外

武装：直剣型煌式武装、左手のガントレット(?)

二つ名：なし

好きなもの：甘いもの、味が濃いもの

嫌いなもの：自分への危険

青の長髪と白い肌、そして尖った目付きが特徴的な少女。整った顔立ちのため特に目が強調されている。

アスタリスク歴はそれなり。ただし連れてきたのがデイルクのため学園生活は荒れ気味（主に勉学面）。普段はゴロツキからカツアゲしたり、裏で稼いだ金でカツプ麺などを食べて過ごしている。

いつもは余裕のある口調で皮肉を込めるニヒルな人柄を持つ。

戦闘では直剣を使ったオーソドックスな近距離タイプ。剣術というより体術に組み込んでいる形なので単純な剣の腕は中の下（具体的には直線的過ぎる）。魔女でもあり獣になる力を持つが、使うのは稀。

寮の隣部屋が言うには、たまに部屋からヒステリックな声？が聞こえるらしい。

第四幕 雪花枯朽 秋季休暇

《冒頭ページ・ワッの十二人》のみが所有するトレーニングルームにて、赤蓮の証を持つ二人の生徒が対峙する。

刀藤流という抜刀状態によってこそ真価を発揮する武術に関わらず、鞘に納めた刀の柄に手をかけ、眉一つ動かさず身を屈めているのが、《疾風刃雷》こと元序列一位、刀藤綺凜。

そして対するは、発動体を手に持ちながらも、その武装を未だ起動せずに見据えている、《数多ナイアールラトテツの偽り》の保有者、永見行人。

数人はいるはずのギャラリーも息を呑み、完全なる静寂の中で互いに隙を伺う。綺凜は受けの構えで、行人は攻めの構えで。

この場合、不利なのは行人の方だ。何せ今まで披露したことのない技で綺凜は行人を待ち構えている。駆け引きの上で、未知の技を使えるというのはとてつもないアドバンテージだ。

ただ、行人にも打開の余地がないわけではない。これは憶測だが、あれは刀藤流の攻めが効きにくい相手への対策として生まれたものだろう。

聞いた話では、相手の動きや思考に技を合わせるのが刀藤流のとことだ。思考の駆け引きが一回なら、そこに意識を集中させられる。

末恐ろしいことだが、幸い《数多の偽り》は武器としての種類を変える特性上、想定するのは剣に槍に斧に鎌に……それこそ無数にある。そしてそこを駆け引きの場として使える。

だがそれを踏まえても、勝率的には不利と言わざるを得ない。その理由はなんといいっても、相手があの刀藤綺凜だからだ。

現序列一位をも上回る剣の腕は伊達ではない。ただ武器の種類や間合いを変えるだけでは簡単に対応してくる。

それに一対一は刀藤流のホームグラウンドだ。自分じゃ想像もつかない技を使ってくるでも不思議じゃない。となると……

(ま、そうなるよな)

行人は発動体を剣の形に起動する。悩みに悩んだ挙げ句剣を選んだわけだが、一番オーソドックスだろう。

《あれだね？ オーケー》

流石、話が早くて助かる。

右半身を引いて剣先を向け、こちらも身を屈めて脚にタメを作る。そしてその姿勢を維持したまま、綺凜に急接近。狙うは一点、胸の校章だ。

「……………」

綺凜の表情は尚も動かない。まだ十三歳だというのに、少女の動きはその道の達人のように洗練されており、構えの時点でそれがヒシヒシと伝わってくる。

気迫というやつだろうか。幾度か感じたことはあるが、まさか小動物のような見た目の女の子から受けることになるとは。

だとしてもそれで止まることはない。気迫は気迫だ。見かけ倒しなら何の意味もない。それに、

(乗せる剣が届かなきゃ意味もない！)

行人はリーチの先端を意識し、武器を突き出す。だがその距離実は一メートル以上、剣では届かない。

……しかし槍ならば届く間合いだ。

「ッ！」

初めて、綺凜の顔に感情が浮き出る。その名前は驚愕だ。

どれほどの実力者でも、剣の間合いが槍に変化するという事態には驚きを隠せないらしい。

(手始めにその技をぶっ壊す！)

——そして行人は、その考えが甘いことを思い知ることになった。

「……刀藤流抜刀術——折おり羽は」

「——永見行人、バッジブローケン校章破損」

「……いやはや凄いな。正直ナメてたわ武道」

完璧に真つ二つとなった校章だったものを拾い上げ、真正面から受けた刀藤流に感嘆する。

「下手すりゃ俺がこうなつてたつて考えるとゾツとするよ。マジで」

「い、いえ、実は私も実戦で成功させられたことはなくて……」

「それでもこれなら十分だろ。こんな強い技があるならそれだけで保険になる」

打てる手は多ければ多いほどいい。成功率が低くても、それがあつたのとなつたのでは話はかなり変わってくる。

「お疲れ、綺凜ちゃん。先輩もお疲れ様です」

「おう、ありがとな天霧」

綾斗が持つて来てくれたタオルを使い、ありがたく額の汗を拭う。

「しつかしどうしたもんかなあ。俺一応最年長なのに、後輩に負けてばっかだよ」

「訓練を始めた日で見れば、ほぼ互角……いや、寧ろお前が後輩だと思つうがな」

「そ、そんなことはないです……!」

ユリスの発言に反応した綺凜は体を縮こまらせてしまう。元々気

弱な子だし、その事実には遠慮してのことだろうが、悔しいことにそれが正論だ。

行人は師がいても一年程度の師事だけで、そこからはもっぱら我流。対して他のメンバーといえ、幼い頃から修行を重ねてきた者ばかり。比べるのは無理がある。

ただし、

「それ言ったら、俺より肩身狭いやついるぞ?」

「……こつち見て言わないでくれませんか?」

最近板に着いてきた利奈のジト目はとりあえずスルーしておく。だってこれも事実だし。というか、そもそもそれを解消したいから来たのだが。

「それにしてもすごいね、綺凜ちゃんの抜刀術は。本当に虚像の剣閃が見えるなんて」

「……! ありがとうございます……!」

「続けてで悪いけど、俺も一戦お願いしていいかな?」

「はい!」

武術家たちの盛り上がりが増すうちに、いつの間にか二人とも武器をとってそれぞれの待機地点に向かっていった。

こういうのに目がないのはなんとなくわかっていたが、想像以上の食い付きだ。あの世界には入れそうにない。

「で、そっちは？　なんか糸口掴めそうか？」

「いや、まだ難しいな。星辰力の扱いはともかく、やはりイメージの構築が上手くいかないのかもしれないかもしれん」

行人と綺凜が戦っている間、ユリスにはある試みをしてもらっていた。それは利奈が持っているはずの能力を、今一度発現させることだ。

「そうか……ユリスならとも思っただが、そういうわけでもなかったか」

「ああ、私は能力の鍛え方ならともかく、能力を発現させる方法までは知らん。私自身は子供の頃から使っていたし、周りにも後から使えるようになったやつはいないからな」

「だが《魔女》ストレガとして登録されてたんだ。つまり素質はあるんだろう？」

「確かにそうだ……だが事はそう簡単にはいかんのだ」

これでもかという程に頭を悩ませた様子で、何度も念を押してくるユリス。

「私たちの能力はイメージによって生まれる力だ。詳しいメカニズムは解明されてはないが、表立った者は幼少から使えたことが多い。もちろん、後天的に使えるようになることもあるしその例もあるが、それを現象として発現させるには相応のイメージが必要となる。それこそ脳裏に焼き付くほどのな」

「例えばどんなだ？」

「そうだな……私であれば、子供の頃から火をよく見ていた。リーゼルトニアは山国で温暖とは言い難いからな。他にも暖房とか、とにかく暖かくなれるものを見る機会は多かった。そして……」

「その記憶の象徴が火、だからお前の能力は炎を操るものになったってわけか」

そしてオーフェリアらとの関わりを得てそこに花が加わり、出来上がったのが《グリユーエンローゼ華焰の魔女》なのだろう。

「断定は出来ないが、イメージを構築出来る理由の一つはそれだと私は考えている。力を発現出来ない理由にイメージの構築が弱いことは挙げられているしな」

「……で？　つまり何が言いたいんだ？」

「白江が魔女として登録されているということは、最低でも一回は力を使ったということだ。つまりお前が言ったように素質はある。ならば原因はイメージによるもので、それを思い出せばいいと考えていた」

ユリスの前置きを踏まえ、それまで黙っていた利奈が大元の理由を明かしてきた。

「——よく覚えてないんです、自分がどんな力を使っていたのか。多分、友達を助けるときに使ったと思うんですけど、それがどんなものだったかはあまり……」

つまり無我夢中だった、そういうことだろう。

利奈の目的から察するに、その友人には何か災難が降りかかったに違いない。それが理由で願いを叶えに来たのなら、おそらく後遺症が残るようなものだったのだろう。

実際、利奈も例のトラウマがまだ根付いており、幾分かマシだがユリスの炎にもまだ反応している。

「その記憶が何であれ、わからないことには手の打ちようがなくてな」

「……すいません」

「ああいや、気にするな。別に無理をしてどうこうなるものでもないしな」

利奈としては不服だろうが、この問題はすぐ解決出来るものではないし、今回はユリスの意見が正しい。

物事というのは、メインの事象以外はあまり記憶に残らない。今の利奈は、映画でいうクライマックスの凄さはわかっているが、そこで何をしていったかを思い出せないようなものだ。

見返せない以上、それを少しずつ思い出すのが一番の近道だろう。

「さて、あいつらしばらく終わんなそうだし、俺はコーヒーでも買ってくるかね」

「——の、前になんかやることあんじゃねーか永見？」

そんなドスの効いたハスキーボイスが聞こえた瞬間、行人の思考は一気に凍りついた。

「……どうしたんですか釘バツト先生。今は秋季休暇中ですよ?」

顔をひきつらせ、ただし覺られないよう首は振り向かず、特に仕事もないはずの教師が背後にいる理由を聞いてみる。それと同時に、わざわざ呼ばれた理由を考察する。

テスト関係の件ならば、補習が入る点数はなかったはずだ。落星工学ならいざ知らず、それ以外だって赤点は見かけなかった。

(つつてもかなりギリギリだがな……)

「その呼び方は喧嘩売ってん……あーいやめんどくせえ、とりあえず要件だけ伝えるぞ。落星工学研究会の部室に來い。なんか用事あったよ」

「え、先生顧問でもないのに? ……まさかまた生徒指導室連れ込む気ですか?」

「なんなら今すぐにもぶちこんでやろうか?」

「ハイワカリマシタスグイキマス」

威圧感をさらに強められ、行人もたじたじになる。また実力行使で拘束されるのはさすがに嫌だ。それに今あの釘を使われたら対応できな気がしない。

不良教師の脅威から逃げるように、行人はトレーニングルームを後にした。

「あんな人でも、部活はちゃんとしてるんですね」

「ん？ ああ永見か。あいつはそんなことないぞ。研究会も自分で煌式武装ルークスを弄りやすいからいるだけだ」

部屋に戦闘側と休憩側で二人ずつとなったが、ふと言葉を漏らした利奈にユリスは答える。

「……期待を裏切らなくて逆に安心しました」

「私が言うのも何だが、あいつにはかなり辛辣だな」

「そうですか？ ……ああでも、先輩が会長やリースフェルト先輩とかだったらとはたまに考えますね」

「そこまでか……そういえば、お前たちはどう出会ったの？」

ここまでできて今更だが、二人がタッグとなって出場した経緯は知らなかった。ユリスも出会いは散々だったこともあり、そこには俄然興味がある。

「そうですね——路地裏をさまよっていた私を会長が見つけて、そこであの人と出会いました。印象は……あまり良くなかったですね」

「やはりそうか。あいつは胡散臭いところがあるし、その気持ちはわかるな」

「その後は訓練がかなり荒療治で……ある意味死にかけましたよ、あのときは本当に」

……口には出さないが、何故だろう。その様子を頭に浮かべると妙にしっくりくる。これも日頃の行いのせいか。

「そういうリースフェルト先輩はどこで天霧先輩と？ 結構前だったりするんですか？」

「いや、出会ったのはちょうど今年の夏だ。タッグの結成も《星武祭》^{フェスタ}まで一ヶ月半あったかないかぐらいだったかな」

「そんなにギリギリだったんですか……!?!」

「ああ、いかに綾斗が《黒炉の魔剣》^{セルベレスタ}に選ばれたとはいえ、ほぼ即席のペアだ。負ける気などなかったとはいえ、よくもまあ勝てたものだ。……ちなみに初対面の印象は——覗き魔だ」

「のぞっ……!?!」

さつきから利奈は隠す余地もないほどに驚きの連続だ。

「とてもそうは見えません……」

「だろう？ 私も今ではそう思う。だが出会いは最悪だった」

大切なハンカチを落として、それをすぐに見つけて拾ってくれた……結果は見過ごせるものでなくとも、その優しさに偽りはなかった。

そして接していくうちにそれが徐々にわかってきて、絢斗とは互い

に信頼できるパートナーになれた。私はそう思っている。

「……………」

「あの、リースフェルト先輩？ どうしました？」

「ッ！ い、いや、なんでもない！ ——とにかく、初めの印象だけで判断しない方がいい。人というのは、意外と自分の知らないことだらけなものだ」

ユリスの実体験を元にした言葉に、利奈はさらに深く頭を悩ませているようだった。

——知らないことだらけ。自然と口に出た言葉だったが、それが再び浮かんできたからだろうか。

ユリスもまた気づかぬうちに、利奈に負けないほどに思い悩んだ表情を募らせていた。

考え事

「さて？ 人生四度目となる航空機だが、申請にあんだけ手間取られるとはビックリだよなあ。お前もそう思うだろ？」

『そうだね、アスタリスクからの外出はめんどくさいんだってよくわかるよ』

「……何か言うことは？」

『お疲れ様』

「ぶん投げていいか？」

行人はホルダーの上から発動体を叩き、凶々しく収まっている純星煌式武装オーガルクラスを小声で詰る。

アスタリスクから出る際は飛行機やビザの他に、必ず申請許可が必要になる。そこから煌式武装を持ち出すならさらに別のプロセスがいり、純星煌式武装はそれがもつと厳しい。

そこには危険物である以上に、純星煌式武装を失いたくないという財体の意思が色濃く出ている。旅行先で襲撃を受けて持ち去られたり、使い手に借りパクでもされたら大損害だ。

それ故の処置なのは経験してるし理解もしているつもりだ。だが、

(天霧と同じくらいだったとは思わなかったぞ……)

全ての純星煌式武装が同じ扱いなのか、それとも《ナイアラトテツブ数多の偽り》と《セルベレスタ黒炉の魔剣》が同じ扱いなのか。真偽は不明だが、どちらも同じ期間

がかかったのは事実だ。

この流れのままこいつを地面に投げつけ有言実行といきたいところだが、今行人がいるのは本来王族が使う航空機の中だ。

金の盾に赤い薔薇の花と王冠を被った鷲を載せた機体側面の紋章は、誰が見てもわかる由緒ある王家の証(詳細はよくわからない)で、内部も普通の座席の他にソファや冷蔵庫完備の個室。

まさにVIP——いや王族専用な雰囲気醸し出されている。

そんなところで武器を投げるのは流石に気が引ける。なので行人に出来るのは、座席の端でシートベルトをして恨み言を呟き、窓から雲を見つめることだけだ。

「——永見先輩は、私たちのいる個室に来られないのですか？」

ふと、綾斗たちというはずのクローディアが声をかけてきた。

「シートの居心地がよくてな。やっぱ王族の飛行機は一般席も最高級らしい」

「そうですね。確かにここのシートも心地良いかもしれません。横にもなれますし、居眠りにもうってつけでしょうね」

「ああ、居眠りでしか寝れない身としてはこれ以上ないくらいだ」

「……やはりメンタルケアの支援を受けた方がよろしいのではないですか？」

話の突発さに反して、クローディアの声色はとても真剣味を帯びて

いる。

「は？ 急に何言ってるんだお前」

「あまり眠れてないのでしょう？ 旅行前で緊張する人でもありませんし、やはり日頃から……」

「寝れてはいるさ」

ただあの日から、自分から眠りに着くのが怖いだけだ。

「というか、巻き込んだのはそっちのはずだが？」

「今ならまだ引き返せます。これはあくまで私のわがままな願いであって、あなたが無理に関わるようなものではないのですから」

「何を今さら。俺をチームに引き入れて話をしたのも、あいつをわがざ見つけてきたのも、全部そのわがままな願いのためだろうが」

矛盾している。手遅れかどうか気にするなら、何故自分や利奈を見つけた。

何故チームメンバーの中で、唯一俺だけに願いを手伝えと言った。

何故なんの関わりのない利奈を、わがざ探してその上生徒会に聞かせているのか。

何故そうまでしておいて、今さらここで話を降りるか聞いてきたのか。

その答えは簡単だ。

「――迷ってんだろ？ 多分だけど」

クローディアがいつから計画を進めていたのかは知らない。そもそも不明な点が多いのだが、明らかになっていくことはたった一つ。

クローディアが死ぬ、それだけだ。自分が死ぬただけに計画を練るのだから、手の込んだ自殺以上の何かがあるはずだ。少なくとも自分はそのように見ている。

だが問題になったのはその後だ。クローディアが死んで、残された四人はどうなるか。それを見守らせるために、クローディアは余計な二人を呼び寄せた。

一人は全てを知る協力者として、もう一人を何も知らぬ同情者として。

……そんなクローディアでも、やはり人間だ。荒唐無稽な夢のために全てを欺き犠牲に出来る腹黒でも、根底にあるのは一人の人間の願いなのだ。

だが人間というのは例え夢のためだとしても、同じ道を走り続けていると色々わからなくなる。

自らの行動が正しいのか、これで合っているのか、間違いは本当ではないのか、他に出来ることはないか、着々と夢に近づいているのか……不安になる要素は数えきれない。

クローディアの場合は……おそらく負い目だろう。身勝手な夢という自覚が、これから仲間になる綾斗たち、関係ないはずの自分や利奈、それに親や友人にも大きな迷惑をかけるという懸念に拍車をかけ

ているのだろう。

「迷うなってわけじゃない。でも迷って夢を取り逃すくらいなら、理屈とか抜きで掴みに行け」

実行されるのは次の秋——つまり《獅鷲星武祭》^{グェリッブス}の開催期間中だ。そう遠くないうちに、開幕の火蓋は切られる。

「……激励か、それとも悪魔の囁きか、まるでわからない言葉ですね」「それなら俺は悪魔か？　だがお前だって、願いのためなら悪魔に魂を売るようなやつだ。とてもじゃないが、激励なんか似合わない」

「ひどい物言いですね……ですが、その通りです」

そうだ、いつだって俺の目の前にいたのは、如何なるときも笑みを崩さずに頭の中で打算を企てる、星導館学園の腹黒な生徒会長だ。

願いを打ち明けられたときに垣間見えた、たった一つの願いを望む少女など、俺は知らない。

結論として、旅行は順調に進んでいた。一旦沙々宮家の実家にて和食を堪能し、その後日リーゼルタニアに到着した。

途中、何らかの動物が侵入したり紗夜が夜這いをけしかけたり、凱

旋パレードに巻き込まれたりもしたが、特別支障となる出来事もない。

現在もスーツやセットで身だしなみを整えられ、綾斗と共に女性陣の支度を待っている最中だ。

……ちなみに待ち時間は一時間を優に越えたが、終わる気配はない。

「暇だな……眠くなってきた」

「もうちよつと我慢してください。多分もうそろそろですよ」

「よくなんとも思わずいられるな。ここ眠くなる暖かさなのに」

部屋の温度は外の寒気に比例してとても暖かい。メラメラとした炎を映し出す暖炉型の暖房は、城の景観に合わせたものだろう。

偽物だとしても本当に火に当たっているようで、ほんのりとした熱はこちらを眠りへと誘ってくる。この感じだと、ユリスが言っていたのもあながち間違いじゃないのかもしれない。

「身だしなみは確かに大事だけどなあ、あんな時間かけてやるのもよくわからん」

「女性の準備は大変ってよく言いますからね。しょうがないですよ」

「まあそうか……その点、男に生まれてよかったと思うわ」

今まで考えたことがないが、一々準備に時間がかかるのはやはり面倒だ。それに比べて、礼服に軽く髪型を整えるだけでいいのは楽だ。

「あとはワックスだな……どうも慣れん」

「そこは同感です……髪型もどうも変な感じというか」

「こんなにオールバックが似合わないと思ったのは、お前が初めてな気がする」

綾斗は困った表情で同調するが、それが懸念でないのは一目瞭然だろう。

何せ基本髪を下げてるやつがいきなりオールバックになった。初めてならともかく、普段を知る身としては違和感の塊でしかない。

「そういう先輩は、中々似合ってるんじゃないですか？」

「誉めてくれるのはありがたいが、正直嬉しくないな。こんな動きにくい服着てても仕方ない」

綾斗がそう言うのは、多分髪をあまり弄ってないのが大きいだろう。それに元々、星導館の制服自体似合ってたなかった。

要は相対的に似合って見えるのだろう。だが自分の生活ではこういう服を着る必要がない。というか、必要になりたくもない。

「はあ……出たくねえなあ、息が詰まりそうだ」

「いや、そんなこと言われたってどうにもなりませんよ……」

悪態を隠しもしない態度を乾いた笑いと共に対応され、行人は不貞腐れて部屋のソファに踏ん反る。だってしょうがないだろ、ああいう

の好きじゃないし。

「——なあ天霧、お前実家に帰んなくて良かったのか？　まだ実感ないかもしれないが、アスタリスクに住むやつが外に出られるのは貴重なんだぞ？」

これ以上愚痴っても仕方ないと、行人は話を切り替える。

「それはわかってるつもりです。でも、今の俺は実家に……父に会う気はないんです」

「そうか。——来年には絶対会うことを俺は勧めておく」

……………。

(やべえ話題が無くなっちゃったわ……どうしよ)

折角切り替えた話題が一分と持たずに終わってしまったことで、行人は少し焦り始める。

やはり家庭の問題となると各々の感覚が第一だし、そこに自分が茶々を入れるわけにもいかないし、何を話題にしてるんだ自分は。

「じゃあ先輩はどうなんですか？」

「え？」

「ユリスがみんなに話してるときも、先輩は即決でしたよね？　だからどうなんだろうって思ったんですよ」

「ああ……」

確かにそうだったかもしれない。食堂でこの件を話されたとき、リーゼルタニアに行くときだけ伝えてすぐ出ていったのだったか。

「そうだな……よし、出来るだけ他言無用で頼むぞ」

天霧の問いに答えるべく、行人は少し回りに注意してから話し始める。

「実はな、日本にいたときちよつとやらかしたことがあるんだよ」

「やらかしたこと……？」

「ああ。^{ジエネステラ}星脈世代への風当たりを考えたら、あまり戻らないほうが色々良さそうだからな。だから、ここに来ない理由もなかった」

罪を犯したのが星脈世代の場合、常人の倍以上の罪を問われるなんてことはザラだ。

「それに……最近の日本は、星脈世代に対する警戒が強化されてるらしいしな。知ってるか？ 前に起きたあの事件」

「えつと、確か……」

「八薙草家虐殺事件だ。ニュースでやってたぞ。付近の跡とか、襲われた死体のやられ方が常人によるものじゃなかったらしい。何でも犯人は、色んな凶器を持ち込んで試したって噂だ」

当時言われてた犯人の人物像は、八薙草家に復讐心を燃やす人間か、もしくはビッグネームを狙った快楽犯だそう。前者は八薙草家が星脈世代を禁忌としており、それが襲われる理由になり得るからだ

とか。

後者もわからなくはない。確か名家であつたはずの八薙草家なら、標的の人数、襲い易さ、周囲の反応、初出にはこれ以上ない相手だ。

殺し方は前者なら過激な復讐心、後者は承認欲求の表れと考えればどちらとも言えよう。それに包丁やナイフより楽に持ち運べる煌式武装ルークスが普及した現代なら、ポケットやかばんに数を詰め込んで片っ端から試すのだからってわけない。

何にせよ犯人は未だ見つかつてないため、詳細はわからないらしい。ただ政府や財体が気にしなければならぬのは、おそらくこれが前者の場合の時だろう。

「で、これはクローディア筋の情報なんだが……最近と言っても、実際この件を調べてるのは統合企業財体が主導で、結構内密に行われてることだ。そして俺がいた地域と、その事件の搜索範囲がバツチリ被ってるらしい」

これまでの財体なら、こういった事件は寧ろ公にするはずだとクローディアは言っていた。そうしない理由は図りかねるが、迂闊に近づかないのが身のためだろう。

ちなみにこれは憶測だが、《翡翠の黄昏》の再来が起きかねないと民衆に知られたら、真っ先に危険視されるのがアスタリスクだからと行人は考えている。

日本は銀河のお膝元だ。また銀河が事の発端となってしまうえば、責任の追及は免れない。

「そうだったんですか……」

「さつきも言ったが、これは」

「他言無用ですね。了解です」

聞き分けがよくて助かる。そうして二人はまた、元の位置で同じように女性陣の支度を待ち始める。

ただその間、綾斗のあまり見たことがない真剣な表情が気になった。

街並み

開かれたパーティーは、これまで一般市民として暮らしてきたメンバーの度肝を抜くには十分すぎる光景だった。

招かれているのはこれまたどこかの富豪や財体の役員やらで、どこを見てもスーツやドレスを着た上層階級たちが窺える。

飛行機とは比べられない豪華な内装は、正直見ているだけで目が痛くなる。もはや美しいとか鮮やかななんて感想は出てこなかった。

「……この城はどれだけの金を吸いとってるのやら」

このリーゼルトニアという国は、統合企業財体に手綱を握られている典型的な傀儡国家だ。他ならぬユリスの兄がそれを証明していた。

あの人の本音はともかく、財体の主導する国作りとはすなわち社会的弱者の奴隷化と言えよう。

孤児も失業者もお構い無しで、権力や経済力が上へ上へと集結する無限ループ。救済もなく、反乱も許さず、彼らはただ淘汰されていく存在でしかない。

凱旋パレードで垣間見た市民たちの表情は明るかったが、それはユリスが星武祭で勝ったからであり、一時的な火付けでしかない。

昔の状況を察するに、普段の景気に加え王家に星脈世代ジェネステラが生まれるという非常事態。国の雰囲気は最悪だったろうに。

……オーフェリアも、そうでなければ何もされなかったのだろうか。あんな悲惨な運命を背負わされることも、なかったのだろうか。

(……………)

そう考えていると、グラスを持っていた手に力が入っていることに遅れて気付く。

それはそんな事態を容認していたこの国に対してか。実験を許したアルルカント、もといフラウエンロップに対してか。それともそんな状況を黙認している世界に対してか。

……いや違う。それはただの責任転嫁だ。国も財体も世界も自分の裁量でどうにか出来るものではないし、どれも元からそうだったことだ。同じ仕打ちを受けた者など数えきれないはず。

本当に憎いのは他の何でもない。三年も共に時を過ごしたにも関わらず、何もしてやれなかった——他ならぬ俺自身だろう。

「——そんな辛気臭い顔して、どうしたんですか？」

沈んだ気分で明後日の方向を見ていた行人に声をかけたのは、他の女性陣と同様にドレス姿となった利奈だ。

シックで落ち着きのある黒のワンピースは、色が同じ綺麗な衣装と比べても全く違う印象で年齢以上の大人っぽさがある。

ただ他と違って色気を感じないのは、やはりややフォーマルで露出が少なめだからか、それとも普段の姿を見慣れてしまったからか。

恐らく後者だと個人的には思っている。

「別に？ スーツ疲れるから早く終わらないかってだけだ」

「そうですか？ わりと似合ってると思いますけど」

「……天霧にも同じこと言われたな。でもお前の場合皮肉られてる気がする」

「ひどっ、折角の誉め言葉をなんだと思ってるんですか」

「冷やかし」

「殴りますよ？」

「やれるもんならやってみろ」

せつかくこんな大層なところに来たというのに、いつもと変わらな
い減らず口を叩き会うのも忍びないとは思いますが、誰も寄ってこないの
だしまあ仕方ないことだろう。

別にこちらから接しても問題なさそうだが、生憎庶民生まれなもの
でそういった振る舞い方もよくわからない。

ユリスやクローディアらへんはともかく、他のメンバーも似たよう
な感じだ。こういったゴージャスな社交界は初めてのようで、学生と
いうだけでもアレなのに、不馴れなせいでより目立って見える。

まあそんなものだろうなと、頭の中では勝手に納得する。社交パー
ティーに参加するなんて普通の生活じゃあまりないことだ。

しかも初デビューで誰かの付き添いとかでなく、主賓として扱われ
るというのだから、綾斗たちには同情する。

その点、こっちは招待された面々とも顔を会わせなくて済むのだから楽な方だろう。そんな必要はないという心の声が丸見えなのは少し癪だが、仮面舞踏会に付き合う趣味はない。

(……………ん?)

そんな良くも悪くも今のご時世らしい会場を何気無く見渡していると、警備員が話しているのが目に写った。

様子こそあわただしきは感じなかったが、周りに聞こえないようにしているようで少なくとも雑談ではないだろう。何かあったのだろうか。

「ほんと、すごいですよね……………ここにいる人たちがみんな富豪や統合企業財体の人なんて」

行人がこのパーティの顔ぶれに感嘆していると思ったのか、それに同調するようにまた利奈が声をかけてきた。

「……………ここにいる奴らをそんな目で見れなくなる日が、いつか必ず来るだろうよ」

「はい?」

その直後、バルコニーの方面から何か巨大なものが落ちたような音が聞こえてくる。

「うおっ!」

「な、何ですか、これは!?!」

「知るか！とにかく行くしかって、ちょっ！」

確認のためにも現場に近付きたいところだが、雪崩のように避難していく賓客たちに流され、二人ともそれどころではない。

辛うじて様子は見えなくてもないが……巨大なライオンかヤギか、シルエットが定まらないがとにかく頭が二個あるような気がする。

とりあえずわかるのは、それが三メートルはありそうな巨体をしていること。そして綾斗たちが応戦しているらしきことだ。

「この状態であつち向かってもしようがないな……加勢できないのは辛い、俺らも外に出るぞ」

「……了解です」

利奈は苦虫を噛み潰したような表情だが、武器もなしには寧ろ足手まといになりかねない。それにまだまだ出来ることはある。

（あんな現実離れの怪物が森から現れたなんて、無茶苦茶な作り話にもほどがある。確実に人為的な事件だろうな……）

となると、犯人はまたフラウエンロープだろうか。バイ〇ハザード的な化け物を産み出せそうな所といえばそこしか思い付かない。

だが待て、どこの刺客か判断出来る材料は今のところない。なのに先入観を持つのも考え物だ。

（……………）

とにかく、怪しい人物がいればそれをマーク、これを徹底する。

……この人混みではそれほど効果が期待できるとも思えないが、やるだけやっておいた方がいいだろう。

(まあ、そりゃわかるわけないよな……)

パーティーの翌日、事の次第や対応に関する話をさつきヨルベルトから聞いたわけだが、それによれば犯人の名はギユスターヴ・マルローというらしい。

元アルルカントの所謂アウトローで、主に金銭目的で裏社会に身を置いている者のようだ。

今は慣れない冬の寒さに凍えながらも、リーゼルトニアの首都ストレルを見て回っているのだが、どこもかしこもそのギユスターヴの潜伏場所に見えてしまうのが本音だ。

観光向けの施設が栄えてるわけでもなく、この国を経済的な扱いをさせるような工場や研究所も見当たらない。

景観を度外視した——それこそ王宮よりも目立つかもしれない高層ビルが中心部に集まっており、その下はがらんどどうで人の気配はほとんどない。

権力者が裏取引で誰かを雇い、法外な仕事をやらせるのは身をもって知っていることだ。それが起きてそうな建物が、ここらでは至ると

ころに乱立している。

いや、建造物の問題ではないか。雰囲気だ。この国の醸し出す、財体の根本的な雰囲気、それを起こさせるといふ考えを浮上させてくるのだろうか。

……だめだ、思い付くのは恨み言ばかり、どうにもネガティブになって仕方がない。ひとまず別の事を考えよう。

「……そういや、ギユスターブは財体役員のライセンスで紛れてたんだよな」

昨日の怪物——綾斗曰くキマイラのことを思い出す。警備の報告によれば、あれを出すまでに何かしていたというわけでもないらしい。

その証拠に、彼が見かけられたのはパーティー会場の入り口のみで、何か工作の跡が見つかったわけでもないようだった。

……だとすれば、会場で話していた警備員たちはなんだったのだろうか。もしかして、先に感じていたのだろうか。

(……お手上げだなこりゃ。あいつら顔見えなかったし、問いたただすことも出来んな)

結局わからず仕舞いだったが、少しは気分転換になっただろうか。行人は深呼吸と共に大きく背伸びをし、この重苦しい街並みからも移動する。

せつかくの機会だし、この国の風景を目に焼き付けておきたい。次は郊外の方だ。

「——おお……！」

行人は生まれて初めてとやっていいほどに目を見開いて、たまらず声すら漏らしていた。

残念なことに、郊外も都心部と変わらず統合企業財体の空気がかかっていたが、ここだけはその重圧を感じない。

ここら一帯からは、深海のような深みを伴った湖が一望できる。件の街並みも少なからず見えてしまうが、それ以上に広大で自由な自然を感じる。

そして周囲には雪にまみれた木々、空には日の光を通さない重厚な白い雲……悪くない。

決して明るい景色ではない。むしろ薄気味悪くて、普通なら不安を煽られるだろう。だがその暗い景色が、今の行人にはとても心地の良いものを感じられた。

普段からアスタリスクにいるからか、こんな体験はめったにしない。憑き物が取れるような解放感で、何もかも忘れてしまいうだ。

「——オーフェリア」

心が落ち着いてきたところで飛び出したのは、またその名前だ。彼女も、こういう景色を眺めながら育ったのだろうか。

「……あなた、オーフェリアを知ってるの？」

「ッ!？」

聞いたことのない声に彼女の名前を呼ばれ、思わず行人は急反応してしまう。ホルダーの煌式^{ルックス}武装にまで手を出して、完全に戦闘態勢だ。

「ま、待って！… ちよつと聞きたいことがあるだけなの!」

目の前にいるのは、同年代程度で雰囲気も身のこなしも普通な、ただの一般人のシスターだ。なのに警戒を解くのに時間がかかったのが、不思議でしようがない。

「急に声をかけてごめんさい。でもあなたからオーフェリアって聞こえた気がして……」

「……！ オーフェリアを知ってるのか!？」

だがそんな考えもすぐに消え去った。オーフェリアを知っているかもしれない者が、今目の前にいる。

そう考える瞬間、自分でも感じるほど鬼気迫る勢いで、そのシスターに詰め寄る。

「ッ……！ ……すまない」

「大丈夫。それより聞いてもいい？ オーフェリアのこと、知ってるなら出来るだけ教えてほしいの。あの子が今どんなことになってるか」

「……ああ」

「――教会……にしても子供が多いな」

「ええ、ここは孤児院も兼ねてるの。ここら辺じゃ、身寄りのない子供たちも多くてね」

行人がシスターに連れられて来たこの教会は、かなり年代物の建物だった。宗教関係には疎いためよくわからないが、郊外の汚れたアパートともまた違った古さを感じる。

だがそんなこと知ってか知らずか、庭の子供たちは元気そうに雪合戦やかまくら作りを楽しんでいるようだ。

所々で聞こえてくる無邪気な声からは、微笑ましさが溢れている。ただ……

「孤児院ってことは、食事とかも賄ってるのか？　言っちゃ悪いが、とても養いきれるとは思えないな……」

統合企業財体が最も関与しない事業は福祉系だ。孤児院に金が支給されるはずもない。だがこんな数十人規模の金を一気に稼げる仕事もない。

一体どんな物好きが経営してるのだろう。

「まあね、最近は大きなお金が入ってきたけど、懐が厳しいなんて

しよつちゆうよ」

「……………」

「今いいでしょうか？ シスター・テレーゼ」

シスターが古びた扉を開けると、そこには外の子供たちを眺めている老年のシスターが椅子に佇んでいた。

「…………どうしたの？ あら、その人は？」

「突然すいません。彼、オーフェリアのこと何か知ってるみたいだったので」

「——それは本当なのかしら？」

「テレーゼ……………さん？ 俺はアスタリスクからここに来ました。なので俺から話せるのは、そこにいた頃の彼女だけです」

ああそうだ。俺が知っているのは、あそこであったオーフェリアだけだ。逆に言えば、それ以外のオーフェリアのことを俺は知らなすぎた。だから……………

「…………俺にも教えてくれませんか？ ここにいた頃のオーフェリアのことを」

孤児院

「——これが、昔のオーフェリアたちよ」

「え？」

差し出された写真には、孤児院の子供たちが写っている。この薔薇色の髪の子が……ユリスだろうか。

オーフェリアとユリスは親友なのだから、同じ写真に写るのはおかしい。だが肝心のオーフェリアが、これには見当たらない。

「……すみません、どの子がオーフェリアですか？」

「この、栗色の髪の子ね」

「……………」

言葉が出なかった。いつそのこと赤の他人とか、全く関係のないエルネスタの親族なんて言われた方がまだ納得できる。

自分の目が視覚障害とかでなければ、彼女の髪色は雪のような白だったはずだ。

それだけではない。春のような陽気な笑顔も、そこから滲み出てくる明るい性格も、あの心の底から凍り付いた魔女とは何一つ一致しなかった。

「彼女は虫一匹も殺せないくらい、とても優しい子だったわ。いつもあの温室でずっと花を愛でて、友達と一緒に植物を育てるのをすごく

楽しみにしてて……」

「……ユリスのことですか」

「……驚いたわ、まさかユリスともお友達だったなんて。ということ
は、あなたもフローラを助けてくれた方の一人なのかしら？」

「あなたも？」

「ええ、あの子から全部聞いてるわ。——本当に、ありがとうごさいま
した」

テレゼは申し訳なさ全開で席を立ち、深く頭を下げてくる。

「申し訳ないですが、俺はほとんど何もしてません。ですから、そんな
深く頭を下げないでください」

せつかく丁寧にお礼を言われたというのに、こんな無礼な対応をし
てしまって失礼だとは思う。

だが事実だ。実際、彼女のために奮闘したのは利奈であって行人で
はない。自分はただ、瀕死だった犯人に止めを刺したただけだ。

結局のところ、自分は何も出来てないのだ。そういう無力さだけ
は、忌々しいほど昔から変わってない。

「そう言わないで。私たちも、そしてフローラも、あなた方に感謝して
いるのは変わらないのだから」

「そう、ですか……」

念を押しただけなのだろうが、どうにも自分の僻みを見抜かれた気がしてならない。

「——話を戻すわね。ある日、オーフェリアはとある研究所に連れられていかれることになったの。悔しいけど、当時の孤児院はそれこそゴミを買うお金もなかったから……」

そこまで言っつて、テレーゼは一瞬言葉を詰まらせる。薄々気づいていたが、この施設は昔から支援もされてなければ、金持ちに運営されてるわけでもないようだ。

子供一人を養うだけでも出費は嵩むというのに、この写真のような何十人分の費用なんて考えたくもない。むしろそういう非合法な手を使ってないのが不思議に思えてくる。

「それで選ばれたのがオーフェリア……ということですか」

「そういうことね。選ばれたというより、名乗り出たの方が合ってるかもしれないけど」

「……名乗り出た？」

「ええ、孤児院のお金が逼迫してることを、あの子は知ってたみたいだね。……あの子にあんな辛い決断をさせてしまって、不甲斐ないばかりよ」

そう言うテレーゼの悔しさと虚しさの混じった表情を見て、行人は確信する。

オーフェリアは平穏な暮らしの中で、大切に育てられていたのだ。それこそ、肉親などいなくとも家族の暖かみを知れるほどに。

本来なら、あんな暗くて自暴自棄な性格になんてならないほどに。

「……それからのことは何も知らないわ。アスタリスクで活躍して
るって話はたまに聞くけど、あの子からの連絡はないし、ユリスから
も特に話はなかったから……」

「……そうですか。じゃあ次は俺の番ですね」

アスタリスクに来てから半年も経ってない頃、自分はひたすら戦い
に明け暮れていた。

学園の中ではランク戦、放課後は星^{シヤーナ}警備隊の下で訓練か独学で武
器の調整、夜は再開発エリアで辻斬り決闘。後者に至ってはもはや日
課だった気がする。

日が沈むまで休むことはなく、門限を過ぎるのもかなりの頻度。ま
ともに受けていた授業は体育という名の戦闘訓練くらいで、他はほと
んどを戦術やイメトレに費やした。

「はあ、はあ……」

この時も、自分はそのらのチンピラ十人抜きを果たし、その内の一
人の首を締め上げながら肩で呼吸をしていた。

もちろん決闘なんて面倒な手続きはしてない。適当なグループを強襲し、そこから雑魚を相手取る簡単な作業。

……もつとも、そんなことすらまともにこなせない日々だったが。

「な、何なんだよ……」

切り傷と打撲だらけのモヒカンが、潰れた喉から声を絞り出す。それを合図に、そいつを壁にめり込ませる勢いで叩き付け、鳩尾に^{ブラーナ}星辰力を込めた拳で追い討ちをかける。

口から唾が吹き出たが、そんなこと関係なかった。呻きすらなくなるまで、腹だけでなく腕や脚も攻撃し、徹底的に起きられなくなるまで叩きのめす。

今思えば、これは八つ当たりだったのだと思う。序列戦で三十位くらいを上下するだけだった当時の、唯一のストレス発散方法。

一向に強くなれない自分への苛立ちは、日に日に強くなる一方だった。

多額の金が必要で、その金は《冒頭の十二人》にさえなればなんとか間に合うのに、その下で停滞していた当時は、謂わば一番ピリピリしている時期だった。

それから胸の内が晴れるわけでもなく、何事もなかったかのように寮へ帰る最中のことだ。

その日は珍しく、闇に覆われた路地裏に光が差ししていた。太陽のキラキラとした光ではなく、淡く澄んでいる月の光が、二人の人影を写し出していた。

「……ッ！」

灰がかったレヴォルフの制服に身を包み、死人のように白く長い髪、そして宝玉のような赤い双眸は、同じ人間なのかすら疑ってしまう。

目の前の人物が悪魔と契約したとか、不老不死だと言われたとしたら、自分は簡単にそれを信じただろう。そう思えるほど、神秘的な何かを纏っているように感じていた。

それこそが、後に《孤毒の魔女》エレンシユキィガルと呼ばれた、アスタリスク最強の魔女。

「……誰？」

……オーフェリア・ランドルーフェンだった。

「……俺がオーフェリアと会ったのは、ちょうど四年くらい前のことです。といっても、いつもの道を通ると大体いたから、暇潰しに少し話す程度でした」

最初は変なやつとしか思ってなかった。初対面で感じた雰囲気割に、どんよりしたことを言うわいきなり運命なんて言い始めるわ、狂ってるのかとも思った。

そんなオーフェリアの印象が変わり始めたのは、行人が倒していたチンピラの残党を軽々と一蹴した頃からだ。

「ある日、十人くらいの不良グループが囲んで襲ってきたんです。当然俺はそいつらと戦おうとしました。その時です。——全部オーフェリアに吹き飛ばされたんです」

悪夢だった。解き放たれたオーフェリアの能力が、誰彼問わず全て蹂躪したのだ。

「今まで見てきたどんな《魔女》^{ストレガ}や《魔術師》^{ダント}とも違う、禍々しいくらいの力を感じました。それから俺は気絶して、起きたのは地べたの上でした」

狭い路地裏になど収まりきれない何本もの毒の腕が、自分を含める全てに襲いかかってきて……そこには何一つ残っていないかった。

「それが例の実験によるものだとは知らなかった俺は、それが本物だっ
て感じたんです。才能のある中でもさらに一握りの、所謂天才だっ
て」

剣術家でも拳士でもなかった行人にとって、《魔術師》^{ダント}のような能力はコンプレックスの一つだった。

何で自分じゃないんだ。何故必死で勝たなきゃいけない自分じゃなくて、ただ逃げてきただけのあいづらが、そんな大層なモノを持つてるんだ。それさえあれば、自分だってもっと戦えたのに。

……それが初めて、自分と同じ歳の少女に覆された。文字通り圧倒的な力で、そんな小細工なんて意味がないと心に刻み込まれた。

その時頭に浮かんでいた感想は、当時にしてみたらとても考え付かないくらい無邪気で子供染みたものだった。

「俺にはそれが、とてもかつこよく見えたんです。まるで本の中の英雄が目の前に現れたみたいで……もつと知りたいと思った。仲良くなり始めたのはそれからです」

それからというものの、行人は毎日その路地裏に向かった。故に親しくなるまで——その関係を親しいと言えるかは微妙だが、それほど時間はかからなかった。

「一緒に出掛けたり、肉弾戦の練習したり、休憩がてら意味もなく路地裏に居続けたり……あつちがどう思ってたのかはわからないけど、その時は……とても楽しかった」

今でも鮮明に思い出せる。外に出た時は、結構日の光に弱かったみたいで結局どこにも回らなかったことも。

能力の時点で既に桁違いのくせに、身体の動かし方もこつちより全然上手くて勝手にげんなりしたことも。

話しかけても同じような答えばかりなのがつまらなくて、でも一緒にいるだけで妙に心地よかったことも。

自分が死にたくなるような思いでそれをぶちまけても、うざがらずに受け入れてくれたことも。

その全てが嬉しくて、無表情なくせに優しくして、いつの間にかとても辛くて、自分からは何もしてやれなくて……

「——そして三年後、あいつは姿を消したんです」

「……すみません、途中から独り言みたいになってしまつて」

「いえいえ、アスタリスクでもあの子に友達がいたなら、私はそれだけで嬉しい限りだわ」

みつともない独白と化してしまつたにも関わらず、許してくれるテレーゼはきつと女神か何かなのだらう。口も挟まずに全部聞いてくれたことに感謝してもしきれない。

「今日はありがとうございました。オーフェアアのこと、何かわかつたら連絡しますから」

「ええ、お願いね」

深く一礼をしてから、行人は孤児院を後にする。

初めての経験だった。オーフェアアのことをあんなに話すなんて。そんな機会、一生来ないと思つてたのに。

(……だからさ、いい気分のまま帰らせてくれ名も知らぬ少年少女たちよ……)

まあ、うん、気持ちはわかる。そりゃあ、ほとんど黒づくめの知ら

ない男が自分が住んでるところに出入りしてたら、疑うのも当然だろう。

「だけど頼む。後生だから、その不審者を見るような刺々しい視線を向けないでくれ。いやほんとマジで。」

（――よし、ここまですればもう大丈夫だな）

学園でも似たようなことがあったが、相手が子供だとそれ以上に濃い疲労感だ。無邪気なだけに余計タチが悪い。

ともあれ用事は済んだ。結構暇も潰せだし、思い残すことだってない。ギユスターブだけは気がかりだが、腐ってもここは財体のお膝元。真っ昼間から事件なんてそう起きないだろう。

「……クローディア？　もしもし、急にどうした――おいクローディア、今どこにい……」

そんな常識が通用しないのが、この世界だ。

思索

仕事中以外は割とフリーな行人にとって、急な連絡というのはよくあることだ。

依頼が来るにも前触れなんてないから慣れっこだし、睡眠バランスが壊滅的な自分でも、なんなら端末の通知にだけは咄嗟に反応できる自負がある。

流石にいつも事件が起きるなんて心構えをしているわけではないが……要するに、クローディアが珍しく焦っていても、その時の自分は案外落ち着いていた。

だがその後日、回復したユリスから事の発端を聞いていくうちに、心の平穩は簡単に崩れていった。

「——それで、お前が見たのは本当にオーフェリアなのか？」

「ああ、見間違えるはずがない……正真正銘、オーフェリアはあそこにいた……」

意識が目覚めたとはいえ、普段の勝ち気でツンデレくさい口調も見られず、ユリスはまるで本調子じゃない。形容するならば、まさしく萎れた薔薇だ。

らしくない、とはあまり思わない。ユリスは自分なんかよりずっと大切に、オーフェリアのことを想っていた。ならきつと、疑問も困惑もどどん沸き上がっているに違いない。

ならばこそ、ここで自分まで滅入るわけにはいかないだろう。

「わかった。とにかく今は養生に専念しとけ。天霧が起きた時のためにもな」

「ああ……そうだ、その、一つだけいいか……？」

「なんだ」

「——あいつのこと、ありがとうな」

「……………」

ユリスの言葉に振り返ってから、そそくさと寝室から出ていく。他の部位は正常に動くのに、その喉だけは何故か震えてくれなかった。

「……………」

廊下まで来てさらに数秒後。遅れて出てきた声も、同時に閉まったドアに掻き消されて聞こえない。

この調子だとどうせ聞こえないだろうに、何故自分はまだ声を紡ごうとしているのか。

「……………はあ」

ナーバスというかセンチメンタルというか、情けないことだと一人で自虐する。師匠にも言われたが、自分はある時から過去に囚われたままだ。

わかっている、このまま塞ぎ混んでいても何の意味もない。だがそれが、何の理由になるうか。

罪の精算もままならず、その意識だけを払拭するなど、夢物語にもほどがある。死人の墓に花を添えるのとは訳が違うのだ。

……
彼らは例外無く自分の前から姿を消していき、ましてその原因は

「——ッ、ハア……ハア……！」

そう考えている内に、どうしようもない吐き気が行人を襲う。喉は灼けるように熱く、生理的な嫌悪を伴う苦味が口を引き締める。

もしかすると、またコーヒーの飲み過ぎかもしれない。浮いた金でコーヒーメーカーを買ってからというもの、飲む頻度も増えたとし気を付けているつもりだが……いや、癖付いた時点で今更か。

少なくとも、これは罪悪感とかによるものではないだろう。何故なら込み上げてきたのは胃液だけで、嗚咽などではないからだ。

そうして思考に意識を逸らしながら、廊下の端にある窓へと向かう。遠くの景色でも見て、胃を落ち着かせるためだ。

(あれは……)

しかしその先には、景色よりも先に目に留まるものがいた。利奈だ。どうやら下の中庭で綺凜と戦っているようだが……

「あ、永見」

「……沙々宮、お前また敬——」

その様子を眺める行人の背後からジロ目で現れたのは、冬物のパー

カーに身を包んだ紗夜だ。格好から見るに、丁度外から帰ってきたの
だろう。

「……まあいいか、ここ学園じゃないし。で？　起きて早々、あいつの
訓練に付き合ってくれてるのか？」

意識を失った綾斗に昨日から付きつきりだった紗夜が、まさかお土
産に目が眩んだわけでもあるまい。

それに紗夜のパーカーは、至る所が若干湿っていた。転んだとかで
なければ、利奈との訓練で出来たものに見える。

「そんなとこ。先輩がまだ起きないからって付き合わされた」

「それは……あー、すまん」

少し反応しかけたが、胃液によって減退した行人の気力ではそれも
難しく、深く考えず素直に平謝りする。

「？」

「いや、なんでもない。あれに付き合ってくれたなら頼みがあるんだ
が、よければ戦ってみての感想を教えてくださいか」

あの時から利奈を預かっている身として、色々してやれるよう努力
しているつもりだが、やはり自分では力不足が否めない。

始めは一定の向上が序列入りという形で表れたが、それ以来利奈の
能力はかなり伸び悩んでいた。

もちろん戦闘に関する教諭にも教えを乞っているが、どこまでも実

力社会なのがこの都市、見込みが感じられない生徒は後回しにされて
いるのが現状だ。

そういうわけで、糸口が掴めるなら猫の手も借りたいくらいなの
だ。銃器のエキスパートであり、尚且つ実際に組み手をした紗夜の意
見なら百人力だろう。

「——ならそもそも話、あれは自分の戦い方に追い付けてない気が
する」

「追い付けてない？」

「そう。なまじスタイルが出来てるから、その分それに振り回されて
る。私と戦ったときは盾に意識がいつて反撃がまったくこなかっ
たし、今だって削られるだけ」

ああ、なるほど。つまり利奈は、近づかれた場合盾による防御を主
軸としている分、それに拘りすぎて攻勢に移れないのだろう。

今の利奈と綺凜は、連鶴による猛攻を受けている利奈の劣勢だ。大
盾は剣同士のような駆け引きはそこまでないにしろ、その連続攻撃は
未だ健在だ。

故に無理矢理にでも反撃しなければ、一生勝機が回ってこないとい
う嫌らしさを備えている。

それに間接的に聞いた話だが、綺凜は連鶴だけなら半日以上は余裕
で続けられるらしい。それはつまり、体力面でも利奈は負けているこ
とになる。

「こう、もう少し何か必要だと思う。確かにあれなら負けないけど、逆

「言えば勝つことも出来ない」

「……なんで俺を見ながら？」

「あれくらいスタイルが決まってるなら、装備や工夫で補うか伸ばした方がいい。それを考えるのが永見の役目」

まあ確かに、紗夜の言うことは理に叶っているし、言われてみれば至極当然のことだ。

考えてみれば、利奈を強くするという名目を掲げておきながら、地力ばかりに気を取られて肝心の方向性を見据えていなかったのだから。

「仮にも技術者なら、創意工夫で乗り越えてみるべき。そこが永見の、先輩としての腕の見せ所」

「……わかった、ありがとな。——ちなみに、それであいつを序列二十位くらいまで押し上げれたらちゃんと先輩って」

「私なんですか？」

「うおっ!？」

本日二度目の背後霊枠として表れた利奈の掛け声に、行人も思わず声を上げてしまう。

「ちよ、なんですかその反応、酷くないですか」

「そりやまあ、無表情だし怖いし……」

「はい？　あなたに言われたくないですよそれ」

「は？　どういう意味だ、これでも昔よりかマシになった方だわ」

「うるさい……」

「あ、あはは……」

この痴話喧嘩はしばらく続いたが、後にユリスの様子を見に来たフローラの存在によって休戦となったとか。

一日の訓練を終えた夜、疲れきった身体の割に襲ってきた眠気の微弱さによって、利奈は深夜になっても寝付くことが出来ていなかった。

「……はあ」

一体何故だろうか。北の国が故郷の自分に限って、まさか寒さに慣れないからなんてあるまいし、部屋の豪華さに緊張してるとしても、ここまで寝られないことはなかった。

「……………」

深夜にしては冴えた手つきでベッドから起きて、賓客用のスリッパを履き、朝行人が覗いていたのと同じ窓へと向かってみる。

日本育ちの利奈としては、部屋でも靴を履く外国の慣習に抵抗もあつたが、いざこうして夜更けに佇んでみると、それがむしろ恋しくなってくる寒さだと実感してしまう。

何しろ足はスリッパ一枚。裸足よりマシにしても、ベッドに戻る頃には冷え症になってしまいそう。

(こういう時は……)

こんなこともあろうかと、常備しているイヤホンセットを取り出し、端末と耳を繋いで曲を流す。流すのはもちろんシルヴィアの曲だ。

『In my eye and in my way……』

そう、これだ。このフレーズだ。曲が流れると同時に、身体中の緊張が和らいでいくのを感じる。まるで全身が淡い光で包まれていくようだ。

深海から覗く一筋の光を、はたまた夜空をカーテンの如く覆う光の軌跡を連想させる曲調と、その静寂の世界に波紋のように透き通った声を響かせる歌姫の姿(MVより)。

自分の中ではまさにシルヴィアを象徴するかのような曲だ。平たく言ってしまうと、めっちゃすこでまじやばでもう浄化されそうなのだ。

これさえあれば無人島でも十年は生きていけるだろう。

聴覚以外の全てを忘れ、イヤホンから流れ出る音に意識を傾倒させ

る。そしてそのままの気持ちで寝付こうと、部屋の方に振り返った途端、

「やあ」

初めて、その少女がいたことに気付いた。

「っ……!？」

「しー、叫んだらみんな起きちゃうよ?」

自分が驚く原因だとは蚊程も意に介さないのか、少女はニヤついた笑みを含んだ顔に人差し指を唇に当てて、こちらを制そうとしている。

「……はあ、驚かせないでくださいよ……」

利奈は喉に詰まって呑めなくなった息を吐いてから、わざわざ出てきたからには話があるのだろうとイヤホンを耳から外す。

「というか、誰が起動したんですか? こんな時間じゃみんな寝てますし……」

「ああ、あれ、本当は必要ないんだよね」

「はい?」

「何て言うか、演出ってやつ? テレビとかでよくやってるんですよ、こういうの」

それはアニメ限定の話ではないだろうか……。普段も起きてるな

ら、この不思議さんな武器は一体何を見ているのやら。

UMAを見るような気持ちでそう考えていたが、それは次の質問によってさらに深まることになった。

「寒くは……ないんですか」

「寒い？ ……ああ、別に？ ……というか、わたし熱は感じないからね」

「あなたの体……身体？ ……まあよくわかりませんが、どうなってるんですか」

「さあ？ ……どうなってるんだろうね？」

(なんだそれ……)

会話は終始こんな調子だ。《フェニックス鳳凰星武祭》で会ったときもそうだったが、この少女のような何かはこのニヤつきを絶やさない。

厚手の服でもなければ普通は凍えるであろう今もお、身体一つ震わす素振りもない。着ているものといえば、ショートパンツに合わせるようなパーカーとか夏物の服ぐらいなのに。

《ナイアールトテップ数多の偽り》なんて大層な名前のくせに、これじゃあまるでただの悪戯っ子だ。四色の魔剣みたいなお有名な純星煌式オーガルクス武装も中身はこんななどと思うと、妙にげんなりしてくる。

「で、早速本題だけど、前にわたしが言ったこと覚えてる？」

「一応は。あの人に付いていく、でしょう？」

「うん、それでどうかな？ 印象は変わった？」

「……どうでしょうね、あまり変わってない気がします」

はつきりとは断言できない。確かに、時間が経つにつれて、出会った当初のような不気味さは薄れていった。

だがそれは、長く共にいることで徐々に慣れてきた故の印象に思えるのだ。そのフィルターを外してみれば、その本質的な不気味さはまた姿を表す。

「そもそも、私とあの人の契約は《鳳凰星武祭》^{フェニクス}まででした。……立場のくせに申し訳ないですが、これ以上関わり合う必要自体はもうないんです」

こんな自分にわざわざ時間を割いてくれることは、感謝してもしきれない。

しかし何故だ。何故自分を育てようとする。時間も手間も掛かるのに、今まで名前も知らなかったのに、何故そんなやつにリソースを費やせるのか。

「……邪魔者はぶっ飛ばす的スタンスなあの人が、まさかお人好しだからなんてことありませんよね？」

以前、自分がシルヴィアについてマシンガントークをしてしまったて、気持ち悪くないか気にした時も似たようなことを言っていた。

「そうだね……まあ絶対にないね。邪魔者なら女子供も普通に殺れるだろうし」

「……すいません、今なんて言いました？」

「女子供も殺れる……あ、殺れる、じゃなくて、殺った、かな」

「……冗談にしては悪趣味すぎじゃないですか？」

おそらく、倫理観が根本的に違う……というか、もしくは存在してないのだと利奈は思った。

彼女の的にはブラックジョークの一つなのかもしれないが、フローラの一件で死の恐怖を体験した者としては、あまり感心出来ない話題だ。

だが、

「——私はよく彼に質問をするんだ。これでいいの？ 本当にこれだよかったの？ ってね」

利奈はまだ知らなかった。

「そういうとき、昔の彼の口癖はね……」

彼女は人間でないが故に、

「手段を選んでいられない、だよ」

人間以上に狡猾であることを。

反発

雲行きの怪しいどんよりとした空の下、首都圏とはうって変わった住宅街を、行人と利奈は歩いていった。そこは首都という言葉が思い浮かべるより過疎気味で、印象としてはスラムとか廃墟のようなものだ。

観光で来るにはやや悪趣味な場所だが、今回城から出てきたのは理由がある。ついこのこの間の孤児院に利奈も誘おうと思ったからだ。

といっても特別な意図はない。ただ単純に、鍛練漬けになっていた利奈に、少しでも羽を休めてもらいたいと思ったからだ。

「——ここら辺だったかな……駄目だ、湖に近いってのはわかるんだが」

「いや、なんで誘っておいてどこにあるか忘れてるんですか。というか」

利奈の口には気まずそうな唸りがやや混じるが、微塵も悩む様子も見せずに容赦なく疑問を告げられた。

「ここ多分郊外からさらに外ですよね？」

……………。

「あの、地図とかないんですか？ ていうか道忘れるの早すぎませんか普通に。うろ覚えにも程がありません？」

「だああやかましいなあ！ 目印とかないからわっかんねえんだよ！」

「本当にどこ連れてくつもりだったんですか……」

意気消沈、穴があつたら埋まりたい。いや、埋まりたくはないが入りたい。

言葉にしたくないがお手上げだ。慣れ親しんだ環境でないところも方向音痴になろうとは。件の孤児院は魔女の家とか秘密基地などでは、みたいな支離滅裂な考えすら浮かんでくる。

「……一旦戻るか」

「懸命ですね」

「これ以上可愛げのない後輩に追い打ちかけられたくない」

「誉め言葉として受け取っておきますね」

もうやだこいつ。《フェニックス鳳凰星武祭》の時はまだ耐えたのに、付き合いが長くなるにつれて徐々に心を抉ってきやがる。

これじゃ夜吹の方が可愛く見え……ないか、いや、ないだろう。もし見えたら別の意味で抉れそうだ。主に心が。

「帰る方向わかります?」

「俺沙々宮ほど方向音痴酷くないつもりだったんだけど」

「……えつと?」

「あー……来た道戻るくらいは出来るってことだ」

悲しきかな。紗夜の方向音痴が深刻だった例の事件において、利奈は囚われの身だったわけで、その場にいなかったのにそんなこと知るわけもないわけで。

その上、本格的にグループの輪に入れてからというもの、それが話題になったりトラブルになることも無かった。なので利奈には想像も出来ないだろう。

（話の振り方も気を付けるべきか？ ……いや、そこまで気にしないか）

「……まあ、沙々宮先輩のキャラが想像以上に濃いのはわかりました」

それでいいのか。間違っていないけどその解釈でいいのか。

というかあれが先輩呼びなのに、一つ上の自分は他人行儀なあなた呼びなのかと思わなくもないのだが……そもそも先輩として出会っていないため悲しいわけではないにせよ、複雑な心持ちになる。

「でもそれとこれとは違いますよね？ いつも準備準備って私に言うてるくらいならこういう時もですね……」

「はいはいわかったから、しつこすぎて耳鳴りするからやめてくれよう。……おわっ」

話に集中しすぎたようで、何かにぶつかってしまったらしい。感触的におそらく誰かとぶつかってしまったのだろう。

「っと、すみません。ぶつかってしまって……」

返事はない。その理由は気づかれなかったからだ。何故なら目の前にいたのは一人二人などではない。大勢の、何十人も群衆が路地からの出口を塞いでいた。

「……なんでしょう、この集まり」

「さあ。ただ、こういうスラムでの集団は嫌な予感しかしない」

それはいつぞやの記憶然り、微かに聞こえてくる熱狂的な声然り。何にせよ特売セールのおぼちゃんのような歓声ではない。関わらない方が身のためだろう。

(さて、どうしたものかな……あ)

別の道から迂回してもいいが、それよりもっといい方法がある。

「……跳ぶか」

「え?」

「屋根まで昇るぞ。抜き打ちテストの準備はいいか?」

「昇る? 抜き打ちって何です——って、ちよっ!」

屈んだ脚に溜めた星辰力を解放して跳躍。そのままだと少し足りなかつたので、壁に備え付けられた窓枠の僅かな窪みを使って再び跳躍、余裕をもって屋根上に着地する。

実際屋根に乗ってみるとまあまあ高さの筈なのに、それまでさほど高く感じないのは、あの都市に毒されているのが原因なのだろうか。

「……ちよ、っと、何でそんなこなれてるんですか……」

「……お前よく一回でよじ登ろうと思ったな」

「普通は、やりま、せんよ……こんなの！」

息切れがひどい利奈は放置として、かなり見晴らしがよくなった立ち位置から下の喧騒を覗き込んでみる。すると行人には、その理由をすぐに察することが出来た。

「……なんだ」

ことスラムに限らず、《星脈世代》^{ジュエネステラ}が外で受ける仕打ちは大抵決まっている。避けられるか、叩かれるか、場合によっては売られるかだ。

何度でも繰り返されることだが、常人にとって《星脈世代》は人の形をした化け物であって、人ではない。力を振るわれる前に存在を消せれば上々、振るわれそうならば逃げる。

違う反応をしてくれたのは、精々母と弟ぐらいしか見たことがない。人によつては、それをする人すらも禁忌される対象らしいが。

とにかくそんな劣悪な環境下なので、こちら側が取る手段も三つに絞られる。従うか、逃げるか、戦うかだ。

そして一番最後を選んだ行人だからこそ、この光景はとても見覚えがあった。いくら数の有利があっても、《星脈世代》に対して常人の力は遠く及ばない。

それにも関わらずリンチなぞしようものなら、その結果は一目瞭

然、集団いじめられに早変わりだ。現に一人の《星脈世代》に野次馬を含む何十もの人々が群がっては吹っ飛んでいる。

「確認するまでもなかったな。このまま屋根伝って帰るぞ」

呼び掛けてみるも返事が返ってこない。まだバテているにしても声ぐらい聞こえるはずだが。

「……………うおっ!？」

振り返ってみようと身体を九十度ほどまで回したところで、いつか聞いたのか利奈がすぐ横で例の喧騒を見つめていた。

「こんなことが……………なんで……………」

「……………ほら、行くぞ」

「っ……………子供もいるんですよ!？」

いつになく大声の利奈に少し驚くが、どうにか表情だけは隠し通す。たまの憤激で手応えを感じさせたくない。

「らしいな。それも多分《ジェネステラ星脈世代》の。大方、差別主義者が弱い者いじめのために群がったんだろうな」

利奈は信じられないといった様子で狼狽えている。わからなくはない。迫害が起きているのが周知の事実で、本人がその被害者だとしても、それをまた目の前で見るのは堪えるものだ。

だが、その程度で心に傷を負ってはいては生きていけない。多少の痛みは無視できるようでなければ、普通の人はずぐに潰れてしまう。

「で？ あの子を助けたら？ 何か理由をつけてまた誰かを襲うぞ。それを理由にしてもっと酷くな。……あんなどこでもあるようなことに構うな。一々気にしてたらキリがなくなるぞ」

「……………」

今日はよく驚かされる。利奈の顔は、まさに苦虫を噛み潰したような表情で、それがずっと張り付いている。噛み潰して尚磨り潰し足りないようだ。

そして潰し終わった歪んだ口が、この日において最後であつてほしい驚きを行人に運んでくる。

「……………嫌です！」

その時、俺は愚直なまでの理不尽に対する怒りを、利奈の中に垣間見た気がした。

気づいた時には身体が動いていた。幼い頃友達から借りた本で見た言葉だが、なるほど、確かに自分になるとどうにも出来ないものらしい。

恐怖で自棄になった時とも違う、トリガーとなるものを認知した瞬間に身体を動かす、言うなれば反射運動のそれだ。

現に私は、この建物を昇る時は驚愕と不安で満ちていたのに、降りる今ではそんな感情が一切湧いてこない。その感覚に気づいたならば、さらに小気味良さすら感じると思う自分がある。

それは彼女を救えなかった弱い自分との決別だ。たかが炎に身を強張らせ、たった一人の友人にすら手を伸ばせなかった、弱くて意気地無しな自分との。

それが出来なければ、私が顔向け出来ない。自分が標的にされるにも関わらず、人の括りに私を入れてくれた彼女にも。私を夢中にさせてくれて、そして勇気を与えてくれたシルヴィアにも。

私をどん底から見つけてくれて、尚且つチャンスすらくれた生徒会長にも。ずぶの素人だった私に戦い方を教えてくれて、《フェニックス鳳凰星武祭》が終わって尚もまだ付き合ってくれているあの人にも。

全てはこんな自分を許せない私の、自己中心的な願いの現れなのだろう。そういうことを人は多分、傲慢とか偽善と呼ぶのだと思う。自分のために行う身勝手に不相应な行為。

例えばいじめを止めに入ったら、結局何も出来なくて加害者にも被害者にも疎まれるような。そんなことになれば何を言われても仕方がない。

でも、それでも救いたい人がいる。理不尽な痛みを受けることが、絶対に正しいはずがないのだから。

「——はあー！」

昇る時に行人がやっていたように、壁の窪みに脚をかけて速度を殺

しながら、ぎこちないながらも建物を降りていく。

「な、なんだよおめえは！」

「……大丈夫だからね」

着地から少ししてから、集団のうちの一人であろう男が飛び出たよ
うな声をあげるが名乗るわけもなく、男の子とその子を守っていた
……フードでわからないが声的に女性なのだろうその人に耳打ちす
る。

「助太刀します」

「……感謝するよ」

驚いていたのかはたまた警戒していたのか、返答まで間が置かれ
る。

さあ、かかってこい。この子の痛みを跳ね返してやる。

「邪魔すんなガキが！」

声から察するに、後ろから一人が殴りかかってきているらしい。即
座に振り向いてその手を掴み取り、慣性と共に受け流す。

「おわっ!？」

「このヤロウ！」

今度は二人……いや、また後ろから来たやつを加えると三人か。だ
としても、いつものしごきに比べたら痛くも痒くもないけれど。

「死ねよ！」

ヤクザのように蹴りかかってきた脚を逆に掴み返し、そいつを振り回して近くの二人を撃退、おまけで人が集まっている場所にも投げしておく。

「この化け物どもが……！」

「てめえらのせいなんだから……！　魔法の仲間には責任とって死ねよ！」

（魔法の仲間……？）

魔法という単語が利奈の耳をつつく。確かにストレガは《魔法》ストレガだけど、思っていた決まり文句と違ったのが少し気になる。

「にしてもしつこいな、ここまでなのは久々だよ」

「よくあることなんですか？」

「さあ、でもトラブルには事欠かない場所だからさ、ここ」

「はあ」

パツとしないが答えだが、今気にすることでもない。目の前に意識を戻す利奈だが、その心構えは徒労に終わることとなった。

「お、おい、あれ見ろよ……」

「は？　……やべえやべえやべえ！　叢雲だ！　逃げろオ！」

その叫びを合図に、我先にと仲間を踏み潰しながらも、どんどんスラムの闇へと消えていく。

「叢雲？」

(おかしいな……天霧先輩はまだ寝込んでるはずだけど)

「ハローおてんばガール。推定五十人以上の人に囲まれた基部はどうだ？」

逆に闇から出てきたのは、黒ずくめコートを羽織った姿と相まって不審者味が増している行人だ。正直フードは被ったまままでいてほしかった。仕方がないとはいえ詰られると考えたら顔を合わせにくい。

「控えめに言って……最悪、ですね」

「そりゃよかった、またこんなことしようと思われちゃ困る」

「……というか、どうやって追い払いました？ 天霧先輩なんてここにはいないですし」

出来るだけ自然に、いや気になったのも本当だけど行人に質問する。完全に自業自得なのはわかるけどバツが悪すぎるので、早く別の話になってほしかった。

「これなーんだ」

見せられたのは、行人が持ち得るはずのない、名前と反比例した純白の大剣。

「……
《セル＝ベレスタ黒炉の魔劍》？」

「つばい偽物。刀身に色つけるぐらい分けないんでな」

「——悪いけど、こつちを置いてけぼりにしないでほしいな」

そう言われて二人して振り返った先には、見覚えのある深い群青色の髪と、左腕全体を覆い尽くす如何にも不釣り合いな籠手を晒け出した女性。

「あんたは……」

「この子を預けたらお礼をさせてほしい。——永見くんと白江さん？」

獣たち

「——ありがとうー！ お姉ちゃん！」

犬も歩けば棒に当たるといふかなんというか。今自分は当初の目的地だった孤児院にてあの子供のお礼を聞いているわけで。

それまでの過程で自分の進んだ道が見当違いだったことから、自らの方向感覚に自分ですら疑いを覚えているわけで。

ついでにその事実から約一名の後輩から氷点下を更に下回るほどの視線をじわじわと浴び続けているわけで。

この調子だといつか物理的な威力を持ってコートに穴が開きそう
だ。

「あのー利奈さん？ もうそろそろやめてくださいませんかでしょうか？」

「……………」

「そうタジタジになられると自信を失くしそうになるよ。これに負けたのかって」

「俺もしかしていじめられてる？ 二対一でリンチされてる？」

なんか優しくしてくれる人が何処にもいない気がする。嗚呼、天霧、刀藤、お前の誠実さが身に染みる気がするよ……。同時にこんなことで気付きたくなかったけど。

「まあそこはスルーさせていただくよ。うん、触らぬ神にんややら

と言うし。——さて、本題なんだけど、助けてくれたお礼をしたいんだ」

「お礼なんてとんでもないです。私は途中で乱入しちゃっただけですし、この人に至っては事後到着ですし……」

「そういうわけにもいかないな。私は助けられたんだ。それに対する礼をしないと、自分に示しがつかない。……そうだな、時間も時間だし、昼ご飯でも奢らせてほしいな」

そうして会話が弾むうちに、見覚えのある郊外へと出た。所々で道通りのうんちくやらを語っていたが、その口ぶりからしてかなり造詣が深いと見える。

「さて、一応都心部についたけど、何が食べたい？ ……と言っても、ここは観光都市じゃないし露店も少ないんだけど」

「……すごいな、ファストフード店すらほとんど見当たらん」

言われた通り、リーゼルトニアをまあまあ歩き回ったところだが、スラムはもとより都心部でさえ庶民が手を出しやすいような出店が見当たらない。

それに高層ビルの多さから近代的な雰囲気は感じ取れるが、やはり人の気配は微塵も感じない。凱旋パレードの時はあれほどの人がいたというのに、今はもぬけの殻だ。

「なんだか不思議な気分になりますね……」

おそらく同じことを考えていたのだろう。利奈もそう呟く。

「その感覚わかるよ。私もここは静かすぎて、逆に怖くなる」

「えっと、ラディーナ………さん？　はここが故郷なんですか？」

「そんなところ。まあ訳あつてアスタリスクの方が馴染みはあるんだけど、生まれた地つて意味ではこの国。——それと、ラディーナつていうのは実は偽名みたいなものでね」

表情は見えないが、妙に哀愁漂う声音でラディーナはその本来の名前とやらを口にした。

「ベスティア、そう読んでほしい。それが私の本当の名前なんだ」

結局、本格的に腹が膨れる店が見つからなかったし、その地ならではの食べ物みたいなものも見つけれず、最初で最後になるであろうリーゼルタニア飲食ツアーは、そのひもじさを体感するだけで終わった。

さて、そんなわけで、今日の夕食はフィッシュアンドチップス——所謂白身魚のフライとポテトフライ——とスコーンだ。

初めて食べた感想だが、まあ悪くない。イギリス料理は不味いなんて言われているらしいが、白身魚の淡白な味はわりと好みだし、ポテトとスコーンは片手でつまみやすいのが良い。特にスコーンはコーヒーのお供にも良さそうだ。

一つ問題があるとすれば盛り付けが妙に雑なところだろうか。まあ露店もないような国の社内食堂だ。質より量が優先されるのは仕方ないことだが。

「……随分少ないんだね。そんなので腹が膨れるのかい？」

「俺は元々そんなに量食わんし、それ以上にこんな場所でいつも通りの食用出せるほど凶太くない」

「というか、その量はベスティアさんが多いだけかと……」

一つのテーブルを三人で囲んでいるが、その内の一人の枠が非常に大きいと個人的に考えている。

それもそのはず、ベスティアの前にはパーティーで使われるような大皿が二枚並んでいる。もちろんその上には山盛りの料理だ。

「食べれるときに……食べなきゃ、いつひもじい思いするかわからないからね」

「戦場かよ……ていうか食うか喋るかどっちかにしろよ」

「食べてから……喋ってるよ」

量は倍以上なのに、減るスピードがこっちと同じなのが不思議すぎる。常人のカロリー摂取量は軽く越えているのではなからうか。星導館一の巨漢であるレスターでもそこまで食べないぞ。

「にしても凄いですね。あの殺風景な街からビルの中に入ったからこれです。どこからこんなお金が動いてるんでしょう」

目の前のブラックホールから目をそらすためであろう、利奈は少し露骨に話題を変えてくる。が、選ぶ話題が悪かった。それは俺には手に余るものだ。

「……ん、お金なら十分余ってるんじゃないかな。この口じゃ一昔前にとつても価値の高い……ベルテイス隕石だっけ？ それ落ちてきて、そしてその恩恵を受けられるのは一部の——つまりこういうところの人だから」

「……なんでお前はそんなところのパスがあるんだ？」

「馴染みがあるとしたか……いや、そうだね。じゃあ説明しよう。身の上話になるけどいいかい？」

避けようとしていたのに一転、二人とも素直に頷く。その仄めかしようは、中高生の好奇心を刺激するのに十分すぎるものだった。

私は生まれて間もなく両親を失った。死んだのか蒸発したのか、とにかく貧しい家庭でね。私が生まれた時にはもう食い扶持の宛もなかったみたいだった。そこを助けてくれたのが、あの孤児院だったんだ。

ただ何の悪戯か、私は不意にとある話を聞いてしまったんだ。その孤児院で行われようとしていた人身売買についてね。

……先に話しておくけど、孤児院のシスターたちは何も悪くないよ。この国……他の国もだろうけど、貧困層はとてつもなく多い。そんなだから、それを生き残るための手段やコミュニケーションが必要なのさ。

その一つが人身売買だっただけ。ケースはそれぞれだと思うけど、うちのはその中でも割と良い方だったんじゃないかって思う。

でも当時の私からしてみればとんでもないことだった。身の危険を感じて教会を飛び出してきた私は、運良く物資搬送用の列車に乗れて、孤児院どころかこの国から抜け出すことができた。

まあ、後で結局捕まっちゃったんだけど。それから少年兵として各地を転々とさせられたよ。星脈世代は子供でも兵器としては十分だから。

あの頃が一番辛かったなあ……慣れない暑さ、飛び交う光弾、砂と煙混じりの風、恐ろしい害虫、患ったら最後の風土病……苦痛でしかなかったよ。怪我だってしたし一回遭難もしかけたし。

そんなある日のこと、ある反政府組織で戦っていた私たちは、突如として奇襲を受けたんだ。今までこっちの手がかりも掴めてなかった政府側から、突然ね。

その正体はPMC、傭兵生制度にも使われるあのPMCさ。彼らの主導で、政府は私たちの掃討作戦に出たんだ。

私たちはゲリラ戦をするのには慣れてても、されるのは初めてのことだった。結果、組織は要人だけ連れてトンズラ。私たちはまんまと囮に使われた。

でもそれを救ってくれたのも、他ならぬそのPMCだった。その名前は、HRMS。あのリベリオさんが手綱を握る、とても有名なPMCだよ。

「少年兵……ですか」

まず口を開けたのは、あまり聞き慣れていなくともその事態の重さはわかるのであろう利奈だ。

「正確には少女兵だった……ていうかまだ少女だけど、とにかく運が良かったって言葉に尽きるよ。初めて自分が星脈世代ジュエネステラだったことに感謝したね」

「……………」

否定など出来なかった。その恩恵は誰もは与っているもので、そのお陰で助かる命も助かってしまう命もある。

「その、リベリオさんってあれか？ 《王竜星武祭》リンドフルスを制覇したあの……」

流石にそのまま続けるのはまずいと思って、行人も行人で少し強引にだが話題を変えに行く。

懐かしげに思い出にふけていたのだろうその目は、今の一言でさ

らに見開かれ、そして電球が光るように納得していた。

「ああ、確かにそっちの方が分かりやすかったかもね。そうだよ、その人」

驚いた。意外な名前が出てきたものだ。それにHRMSといえば、幾つかの《星武祭》^{フェスタ}において傭兵生制度にも度々選ばれるような大手のPMCだ。

「話を戻すけど、実はその頃のコネがこちら辺の……支部？　にあるんだ。で、その一つがここ」

「なるほど。確かに、仕事には困らなそうだなこの国は」

これは予想だが、昔のリーゼルタニアは今より治安も悪かったのだろう。さっきの事件から見ても、王国の姫が《星武祭》で優勝する前は国も今より大いに荒れていたのだと思う。

そんな時に財体にとって役立つのがPMCだ。警備やテロの防止、要人の護衛から戦闘訓練まで業務内容は様々。

財体が直接兵力を出すわけではないため、責任を丸投げする事例も確か聞いたことがある。

「そうそう。それにうちは優秀だったから？　こうして美味しいご飯にもありつけたのさ」

妙に自慢気な口調がとてもうぎったいが、それも事実なのだろう。

「……まあそこら辺は、私が根回しした訳じゃないんだけど」

「というところ？ 他のメンバーの方とかですか？」

「うん、私より先に入ってた人で、さっき言ってた作戦の指揮もその人がしてたんだ。その人も元々少年兵だったみたいで、でもそんなの信じられないくらい凄い人だったよ」

「へえ、文字通り恩人ってわけか。そんなに凄い人なら、一度会ってみたいもんだな」

傭兵なら戦い方にも詳しいだろうし、なによりその人を本当に尊敬しているのだろう。話題が変わってからというものの、その熱意がひしひしと伝わってくる。

行人としては公私どちらをとっても会ってみたい人物だ。

「……悪いね。残念だけど、あの人はかなり前にHRMSを辞めちゃったし、その後の行方も知らないんだ。アスタリスクにいったつてことだけはわかるんだけど」

と思っていたのも束の間、というかまたそういう話に繋がるのか。いくらなんでも厄介事詰め込みすぎじゃないのかあの都市。

「……その人の書類や顔写真とか、何か情報が残ってれば少し手伝えるかもしれない。色んな情報に敏感なやつを知ってる」

「……本当かい？ それは助かるよ。……あー、流石に今は持ってないから、後から名前と写真だけ渡して詳しいのは後でいいかな」

「ああ、ただし条件として、そっちしか持ち得ない情報が必要になったらすぐに答えて貰う。……拒否権は使わないでくれると助かる」

その人を捜す上で最低限の条件を提示して、するとベスティアは少し呆気にとられたようにまた目を見開いて、してやられたとでも言うように大袈裟に仰け反った。

「まさか、ここでそんな風に交渉してくるなんてね……フフツ、はははっ。……いいよ、わかった。じゃあこれ、連絡先」

渡された端末からこっちの端末に連絡先を写す。これで登録完了だ。

「さて、早速教えてくれ。その人について」

「ああ、ちよつと待ってね……あつた。名前はレイラ、レイラ・マーティン、見た目はそこまで変わってないと思う。あの人に限らずみんなファツションには疎かったし。それで——」

しかしその言葉は、食堂の喧騒に気付いたベスティア自身によって遮られてしまう。

「一体何かな、こんな時間に」

「——大変です、永見さん！ ベスティアさん！ 外に何か変なものか、うわあッ!?!」

「せいッ!」

高層ビルの窓を突き破ってきたそのなにかを、ベスティアは居合のような素早さで一刀両断する。

「なんなのさこいつは……大丈夫かい、永見くん？」

「……………ああ」

「皆さん落ち着いて！ 焦らないで階段から避難してください！」

警備員が発するけたたましい声で、ようやく何が起きたか頭に入り込んでくる。

出入口の方は我こそは押し寄せると多数の人に覆われていて、しばらく待たないと通ることはできないだろう。

食堂内に窓を割ってきた例のなにかの姿がないのが不思議だが、どうやら外にはまだわんさかいるようだ。量には困らないだろう。

「……………行こう、この騒動を調べなきゃならん」

人混みと警備員の目を掻き分けて、三人はビルの屋上へと向かった。

呼応

「さて、どう呼んだもんかなあれ」

「それ今必要ですか？」

「ペットには些か不細工が過ぎるんじゃないかな」

三人の見上げる夜空には、街を我が物顔で飛び回る大きいコウモリのような生物。かつこよく言えばプテラノドンに見えなくもないが、あんな姿じゃ子供も幻滅してしまいそうだ。

「……襲ってはこないみたいですけど」

「なあベスティア、お前仮にも魔女ストレガなんだからこいつらは能力で作れるかとかわからないか？」

「無茶言わないでくれないかな？　魔女がみんな能力がプライナ星辰力がナくって考えてると思わないでほしいよ」

さて、どうしようか。降りてこないのでは、遠距離持ちがない自分達には少し手に余る。

それにこれが能力によるものだとして、攻撃を受けたらその都度やり返してくるのなら数も多すぎる。

「……？　ちよつと待て」

『——もしもし、永見？　今どこにいる？』

いつそ撃ち落としてみるよう指示を出そうとした時、紗夜からの通

信がそれに待ったをかけてきた。

「沙々宮か、今はビルの屋上にいるが」

『そうか、なら話は早い。そこで街中の空飛ぶトカゲどもを見張って』

「ちよつと待て、こっちは何が起きてるかわからん。せめてあのトカゲもどきとお前らが何するかだけでも教えろ。こっちでも判断したい」

『……十中八九例のギユスターブが仕掛けてきた。あいつの目的はわたし達の《星武祭》^{フェスタ}進出阻止。こっちの目的はそれの阻止。ユリスの見立てだとフロラの孤児院が人質に取られるかもしれないらしい』

ふむ、原因はそれだったのか。どうやらギユスターブは《獅鷲星武祭》^{グリップ}出場の妨害のようだ。となると、予想が正しければ本当にクローディアの言っていた時期が近くなってきているらしい。

「了解。そうだな……ギユスターブ本人の搜索とかはどうなってる？ こっちはあのトカゲもどきを撃ち落とす銃もないし、人数もよくて数人、迎撃や防衛どころか監視にすら人が足らん。なんなら全員固まってるしな」

暗にその提案は賛同しかねると伝えてから数秒、紗夜は少し唸りながらもすぐさまプランBを考案してくれた。

『むう……じゃあ作戦変更、綺凜がギユスターブを探してるからそっちを手伝って。座標はこっちから送る。大体の目星はついてるからすぐ見つかるはず』

「了解した、切るぞ。——聞いた通りだ。ベスティア、大元は孤児院を守るためでもあるし利害も一致してるはずだ。協力してくれるな？」

念のためベスティアには聞いておく。こちらはユリスたちが動く以上全力でそれをサポートするが、ベスティアだけは違う。

彼女にしてみれば里帰りしたら事件に巻き込まれただけであって、そこに害がなければ無視して去ることだって不可能ではないのだ。

だが人手はいくらあっても困ることはないだろう。ならば心が痛むところだが、無理矢理にでも巻き込む

「……わかってるって。だからそんな風にこつちを睨まないでよ。そうだ利奈ちゃん、はい、これあげるよ」

「え？　ありがとうござい……煌式武装？　こんなのどこで……」

「上ってくる途中に少しくすねてきたんだ。財体の銃だから少し扱いくいかもだけど、質は悪くないはずだよ」

利奈がその発動体を起動すると、それまでの小銃とは異なり曲線の部分が多い近未来的なデザインの銃が握られていた。

そして利奈の方も、あの頃なら想像もできないほどスムーズに銃の具合を確かめていた。

「……軽いですね……ちよつと怖いくらいです。あと少しサイトが狙いにくいですけど、これなら多分慣れれば大丈夫です」

「……永見くん、彼女本当に中等部かい？」

「なんとビックリ、あいつ銃握ったの三ヶ月前くらいからなんだぜ」

「君も罪なことをする男だね……」

やめろ、俺をそんな目で見るな。そもそも必要としたのあいつだし、あんな風になったのはあいつの才能のせいです。俺は悪くねえ。

「さて、移動についてだけど、実は降りるより良い考えがあるんだ。――振り落とされないですよ？」

『暇だなあ……』

暇だ。退屈だ。つまらない。別の言葉で置き換えるならアンニユイだ。とにかくとにかく暇で、《ナイアーラトテップ数多の偽り》はうんざりしていた。

如何に純星煌式武装といっても、何十年も生きている……いや分類上無機物の風上にも置けない自分に生命の概念はないのだが、人間と同等の思考があつて……まあつまりは暇なのだ。暇。

暇は人間が死こそ救済などという思想を持つ理由の根底なのではないかと思う。人生に飽き飽きした人々がその苦しみから永遠に解放されるのだから。

まあ自分に見れば、そんな理由だけで本当に死んでるのがいるなら信じられないが。

『最近は面白いバトルもB級な事件も起きないし、今起きてるのも行人や利奈ちゃんは脇役っぽいし』

その点、この間の夏の事件はまあまあだった。久々にあんな風に動く行人が見れたのだから、着々といつかのように磨かれ直しているように感じた。

この頃は行人自身あんな調子だから、腕も鈍ってるし何かを起こす気配もない。なんなら発破をかけてもああ言えばこう言う始末だ。

生徒会長さんとの約束の日まであと一年足らず、早くあの頃の刺々しさが戻ってほしいものだ。

『キミの記憶はもう見飽きたんだ。早く次の記憶を見せておくれよ、永見行人』

自分が形取る魔王のような姿の少女の記憶を見据えながら、これから起こることをそれは待ち望んでいた。

「——わかりました、沙々宮先輩。……どうやら終わっちゃったみたいです、ベスティアさん」

山々を探している背後で起きた爆発を合図に、利奈の端末から着信音が鳴る。宝探しゲームの勝者はやはり綺凜だったようだ。

「あーそっか、悪いね、役に立ててなくて」

「いえ、元はと言えばこちらで起きた事件ですから。巻き込んでしまつてむしろ申し訳ないです」

「優しいね君は……君みたいな人がアスタリスクにいて、何なら彼みたいな人の後輩なんて少し信じられないよ」

後ろ姿のまままでベスティアはさりげなく利奈を褒めてくれた。

……というか、同時にあの人のこともデイスつてきたなこの人。

「まあ後半は同感ですけど、別に優しくなんてないですよ。私は……私がしなきゃいけないことから逃げたくないだけですから」

「大袈裟だなあ。真面目なのは良いけど、もっと肩の力は抜いた方が良いよ絶対」

「かもしれません。けど、こうでもない怖いんです。……また勝手に逃げてしまうんじゃないかって」

そうだ。私は一度だけでも、この戦いの舞台から逃げ出してしまった。助けるつて約束したのに、それを無視して、楽になろうとした。

だから、これは必要な戒めなのだ。

「言っておくけど、自分で自分を痛めつけるなんて普通はどうかしてるんだ。一人が背負い込むことで救われることなんてたかが知れてる」

「そんなことは……」

「白江ちゃん、どれだけ強くたくましくても人は人でしかないんだ。どんな人だって、自分以上を背負うことなんて出来ない。……もし君が誰かの命と引き換えに彼のような人を救わなくちゃならないなら、その時は迷わず、そして気負わずに、だよ。いいね？」

「……………」

ベスティアは返事も待たずに去ってしまったが、もし時間があつたとしても、利奈には応えることが出来なかつただろう。

湖を一望出来る小ぶりの山を越えた先に広がる森の中、空から見下ろせばクレーターのように見えるだろう痩せこけた地面の、腐臭を漂わせる土を行人は握り締めていた。

腐臭といつても自然界に本来あるような臭いではない。いくら肉や卵や木を腐らせたとしてこの臭いを放つことはないだろう。

それは言うなれば、存在するはずのない謎の物質によって強引に腐らされたような異様な臭いだ。

「……………」

この土が出来たのはおそらく五く六年は前のことだ。誰かに聞いたわけではないが、間違いないはずだ。

そしてこれが正しければ、その力はその時点でここら一带の森と、そこに秘匿されていたのだろうこの大規模な施設をも一瞬で崩壊させたのだ。

「……痛いな」

行人は今手袋をしていない。どうやらこの土の毒は、数年以上たった今でもその働きを止めていないらしい。もしくはあまりの寒さに手が悲鳴を上げたか。

どちらにせよ、こんな痛みなど大したものじゃない。この施設で起きたことを鑑みれば些細なものだ。

「……なあオーフェリア、ユリスはここでお前を見たって言うたよ。酷いやつだよなあお前、あんな手痛い挨拶したくせに俺には声すらかけてくれないとか」

誰もいない、野生の動植物も寄り付かない、正真正銘自分以外の全てが存在しないこの暗闇で、行人の声だけが消えていく。

「本当にいたのかって最初は思ったけど、今はもう疑ってない。その証拠に天霧……お前が名前まで覚えてるかわかんないけど、あいつはお前の毒にやられてた。星脈世代のお前とはユリスより長い俺が言うんだ、間違いない」

声は死人に語りかけるかのようにか細く、そして哀愁に満ちていた。オーフェリアはまだ生きているのに、こんな喋り方をここでしてしまうのかは行人自身にもわからない。

行人にわかることは、こうして喋っていると幾分か心の重しが軽く感じる。そしてそんな自分がどうにも浅ましい人間に思えてしまうことだ。

「……オーフェリア、ユリスの傍にいた頃のお前はよく笑ってたんだろうな。お前は花が好きだったんだろ？ あの孤児院の古い温室でさ、ユリスと一緒に花を育てたり、たまにうんちくとか語ってたりとか。見てみたかったよ、微笑ましい光景だったろうな……」

だがいくらそう思っても、一度溢れ出してしまった有り得たかもしれない可能性への想いは止まらない。

「俺はそういうの出来てないし、適当なプレゼントだって何も贈ってなかったから……誕生日すら知らなかったし。アスタリスクにだって花屋くらいあったのにな。俺もせめて何か渡せばよかったよ、ユリスは毒のせいで花に近づくことすら出来ないって言ってたから、造花とか……いや、それより通話とかリモートでも花を育てれた方が良かったかもな」

この口は何を今更なことをのたまっているのか。本当は気付けたくせに、なのに何もしなかつたくせに。

「——もう、やり直せないのかな……もう、戻ってきてくれないのかな……！ 頼むよ……たった一度だけでいいから、今度は……今度はもっと、うまくやるから……ッ！ もう二度と……いや一度足りとも……間違えない……から……！ お前を……今度こそ、救ってみせるから……ッ！ う、うう……ああ、ああ……！」

一匹狼のような悲しい遠吠えだけが、この暗い森の中で木霊した。

事件も解決してから冬休みも過ぎ、再びアスタリスクに戻っていた一行だが、そのうち行人だけは宿題に追われていた。

「……あー寒い、しかも寝起きは悪いし早速霧は出るし課題も終わんねえし、新年早々憂鬱だわー。つかなーんで落星工学で歴史の授業とかせにやならんのか、いや必要な理由はわかるけど……あーやりたくねえ……」

既に麺が伸びかけのかけそばを啜りながら、今一つ残ったままの課題を終わらせていく。

ちなみに紗夜の方は、いつものグループの勉強会とやらに参加して終わらせたらしい。奴も同じタイプだと信じてたのに、許せん。

「行儀悪いですよ。ていうか何で先に終わらせなかつたんですか」

「逆に何でお前はそんなに余裕あるんだ……余暇のほぼ全て訓練や序列戦に回してんだろ……?」

「冬休み入った時点でとつくに終わらせてましたよ私は。じやなきやあんなに出来るわけないじゃないですか」

お茶を飲み終えた利奈が、またここぞとばかりに痛いところをついてくる。課題に成績に実力に、今の利奈は一丁前に二つ名を持つ若き優秀なランカーだ。

だが確かに、その過程で有効打を常に考える癖を付けろと言ったりしたが、そういう使い方をしろとは教えてない。

単に真面目か不真面目かの違いとも言うが。

「お前大人になったら絶対ワーカホリックなるタイプだろ」

「失礼ですね。そのほぼ全ての時間外の少しだけで十分なだけです
よ」

「——失礼、少し話をいいだろうか」

と、いつもの応酬にどこか見覚えがある厳格そうな青年が突如割り込んできた。背丈も行人より高く、そして大人びて見える。

「というか、妙に食堂がざわついてる気がする。何か有名人でも来ているのだろうか。」

「取り込み中であれば非礼を詫びる。何分学部の違いであまりお目にかかれないのでな」

「学部……ああなるほど、大学部の。それで、高等と中等の端くれにどんなご用ですか？」

「……《氷屑の魔術師》」

「えっ？」

「覚えてくれているとは光栄だ、《銃横無尽》。——改めて、自分はネストル・フアンダーリン。皆からは《氷屑の魔術師》の二つ名を授かつ

ている」

最近、自分は驚かされることが増えてきたと感じていたが、今回もその例に漏れないらしい。また序列上位、それも冒頭ペーシの十二人ワシだ。

正直もうこいつらとの繋がりは欲しくない。一々起きる問題が大きすぎて、これ以上何か起きるのでは……

(いや、やることはもうないか。しばらくは身を引いていって話だし)

「あー、どうも、先に自己紹介ありがとうございます。んで、序列四位様が、俺らに一体何の用で？」

「ああ、単刀直入に言わせてもらう。君をスカウトしに来た、永見行人。いや、元序列七位《千変万化》」

見え方

「何をしてんねんこのど阿呆お！」

(うるさっ!?)

お前が何をしてんだと突っ込みたくなるうるさきで、どこかの方
言っばい言葉遣いの少女がひよいと出てきてネストルに叫び散ら
かす。

「何をしてる、とは？」

「なんでそんなズバッていく!? もっとこう、言い方あるやろ！ 身
構えさせてどーすんねん！」

「いや、前置きなどあつてもくどいだけだろう。どちらにせよ誘うの
は確定だ」

「だーかーらー端的過ぎるんやって！ 話したこともないやつにあん
な勧誘されても応じるわけないやろが！」

……なんだろう、痴話喧嘩するのやめてもらっていいですか？

とういか人の席の前でそんな大喧嘩し始める方も大概ではなから
うか。主にその見た目に合わずテンション爆アゲのポニテ方言少
女。

「えーつと、ゴホン。見苦しい所見せてすまんなあ二人とも。如何せ
んこいつは遠慮ないところがあるもんやさかい。——ところで、あた
しのこと覚えてる永見さん？」

「え、知り合いなんですか？」

そう言われて、行人はこの少女が何者だったか考える。黒髪の短いポニテで、関西弁、そして顔は整っていて……あとは八重歯というやつだろうか。

さて、ここまでの特徴に当てはまる人物は……

「——誰だ？」

「なんでやねん！」

思考約五秒余り、帽解説からも聞いたことがない典型的な漫才のツッコミが行人に炸裂した。この言葉を聞いたのは誇張抜きで何十年ぶりだと思う。

とか言って自分、まだ高校生だが。

「……え、ほんまに？　ほんまに覚えとらん？」

「マジで誰？　え、身に覚え無い因縁つけられてないよな？　ヤバい助けて白江もん、俺屋上呼び出されちやう」

「熱烈なアタックでいいんじゃないですか？　じゃ、私はこれで」

「おいさりげなくフェードアウトしようとするなこのヤロウ。愛しの先輩に恩を返すなら今だから早くしろや」

「別に愛しくないし恩と一緒に仇も貰ってるんで」

「……話が進まないのだが、いい加減本題に戻っていいだろうか」

「あ、はい、すんません」

徐々に怒りを募らせているネストルの声色に、行人は縮こまってしてしまふ。

とうるか、逃げる白江を追いかけないように逃げ出すという完璧な作戦が今のでパーになってしまった。何故反応したんだ俺。

「あー、まあええわ。えっと、あたしは遠野百舌妃^{とおのもずき}。二つ名は……今は別にええか。で、永見さん、今回声をかけさせてもらったんは、他でもないあんたにしか頼めないからや」

「話が読めないんだが……今時期でスカウトつていうと星武祭辺りか？もしそうなら、何で元二つ名持ちでも今や無名の俺に白羽の矢が立ったんだ？去年の大会でも目も当てられない醜態晒してんのに」

知つての通り、行人は去年の星武祭でボロボロに負けた。元々優勝を目指せるような出来ではなかったとはいえ、特にあの擬形体との戦いは酷いものだった。

当時の俺の思考がどれだけ腐り切っていたのか考えたくもないが、

次があるなら二度と負けるつもりもないが、それはそれだ。大会メンバーに抜擢されるような腕は持ってないと行人は自分を評価していた。

「如何にも自分たちの目的は星武祭だが、理由は二つある。一つは今自分たちにとって必要なのは前衛と中衛、要するに遊撃を担えるメンバーということだ」

「余計に俺である必要が見当たらないんだが。俺以上にそこがうまいやつは探せば他にもいそうなもんだけど」

最たる例を挙げるならば、序列三位の《クエレブレ輪蛇王》だろうか。

性格や得物の《蛇剣オロロムント》は中々に曲者だが、前衛も中衛もこなせる蛇腹剣の射程と本人の技量は噛み合えば強豪チームにだって対抗出来るようになるはずだ。

「まあ聞いてくれや永見さん。あたしたちが必要としてんのはな、あの程度の前衛か中衛を任せれて、尚且つ後衛並みの視野で全体を把握出来る人物なんや」

「前衛は自分が一人だとしてもこなすからともかく、問題は中衛だ。後衛を務めるのは遠野なのだが、彼女の純星煌式武装である《ロングシャンクス那由他の魔弓》はその戦法上、味方をカバーする役割に出来ない。故に一人を護衛に付けているが、そうなると攻め手が今一つだ」

「そりやまた無茶苦茶だな……」

無茶苦茶というのは、スカウトの基準もそうだがようやく思い出した百舌妃のことだ。

現序列七位、遠野百舌妃こと《雷鳴》。協力的な矢を何本でも放てる《ロングシャンクス那由他の魔弓》を操る、事実上の遠距離最強。

起動時間から加速度的に重くなる欠点があるとはいえ、瞬間火力はドーム一つ吹き飛ばすのも容易なほど高い。まさに切り札だ。

そしてその経線能力のなさは、今回のようなチーム戦ならばある程度カバー出来る。が、カバー前提であるなら当然人手もいる。

その結果がこの要求スペックの高さだろう。確かにあの薬中には任せられない。ハイになって暴走でもしたら大混乱だ。

「それでもう一つ、永見さんは《獅鷲^グ星武祭^ブ》に出たことあるやろ？

——そして、あのチーム・ランスロットとも戦ってたはずや」

「我々の目的はチーム・ランスロットの打倒、そして優勝だ。そのためには彼らへの対策は言うまでもなく必須だ。故に旧チーム・エンフィールドの経験を借りたいのだが……生憎《千見^{バルカ・モルタ}の盟主》は別チーム、メンバーだった《月触の狩人》も《阿修羅》もこの世にはいない。……あとはわかるだろう？」

「……………」

「《千変万化》、いや永見、君は知りたくないか。彼らはあれから三ヶ月と経たぬうちに一斉に消えていった。偶然ではないだろう。彼らが死んで、君だけが生き残った理由を」

「あたしらが永見さんを誘う理由は二つ。そしてこれは、永見さんがあたしらと戦うのに出せる理由や」

「選んでくれ。明日、その気があるのであればまたここで話そう。その気があるのであれば、当然我々も最善を尽くす」

——余計なお世話だ。

その話に触れられた時点で、既に行人の話を聞くだけの理性は途切れかかっていた。何より危ういのは、口より先に手が出かけていたところだ。

「なるほど、俺を引き入れようとする上で随分細かく調べてきたようで。結構、相手を攻略するには欠かせないことだ」

今すぐにも殴りたい衝動をどうにか抑え込んで、その怒りを口上から吐き出すことで耐える。

許せるわけがなかった。何も知らないお前たちが、澄ました顔で、わかったような口でそれに触れることが。

お前が思うほど、崇高な理由でも大した理由でもないのだから。それはもつと醜くて、どうしようもないものだから、触れられたくなかった。

「でも悪いな。悪気なくても地雷踏まれてまでお前らのチームに入る気はないし、そもそもそのカードは俺の理由にならない」

有無を言わさぬように念を押して、暗にそれには触れるなど警告する。

「そうか、それは残念だ……邪魔をしたな」

目的のものは得られないことがわかったようで、ネストルたちは頭を下げるなりして、早々に踵を返してこの席から立ち去っていく。

「」

(今日のあの人、何かすごかったな……)

本日最後の授業を受けながらも、利奈はそれとは別に今日の昼休みのことを考えていた。授業は真面目に受ける利奈にとってこれは珍しいことだ。

(もっと飄々してるイメージだったけど、あんな表情もするんだな……)

利奈の目にとって、永見行人という人物はあまり良い印象がなかった。いきなり火炎を投げられたり、妙にいい加減だったり、何かしても褒められることもない。

そして一番気になるのは、彼には熱が感じられないことだ。人が持っているはずの情が感じられず、かといって機械のような無機質さとも何かが違う。

言うならば冷めていて無関心、冷酷と言っても差し支えないだろう。リーゼルタニアで子供を見捨てようとした時など、はつきり言って幻滅した。

だが今回のあの表情は、そんな人物像にちよつとしたヒビを入れた。仲間がいたのも驚きだが、それに対しての初めて目にした行人の感情。

ますます彼という人物がわからなくなってしまった。

「うーん……」

「利奈ちゃん？ どうしたの？」

あまりにも露骨が過ぎたのか、最近仲良くなった女の子が心配そうに話しかけてくる。

勉強は苦手だけど明るくて、最初は敬遠してたけどシルヴィア好きを知って少し話を通じ合った、ちよつとしたオタ友みたいな感じだ。

「え？ あーいや、なんでもないよ」

「そうは見えなかったけど……あ、もしかして利奈ちゃんでも解けない問題とか……!?!」

「いや、違うよ。ただ考え事してただけで……」

「そっか、良かったあ……利奈ちゃんダメだったらわたしじゃもう無理だし」

「そこは自分で頑張ろうよ、ほら、これとか簡単だよ」

「証明が必要ってだけで……もう無理ほ……」

「わかんなかったら教えてあげるから」

今にも泣きそうな彼女をなんとか宥めて、スクリーンに映っている問題をやらせる。この一問目なら少しコツを教えればすぐに解ける

し、そこまで苦勞もしないはずだ。

「……そういえばね」

「話逸らそうとしてない？」

「いや、違うよ!? 実は利奈ちゃんに聞きたいことがあるんだ。これ終わったらでいいから、ね？」

仕方ない。これだけ必死に頼まれては断るのも憚られるし、話だけでも聞いてみることにしよう。

「……その前にこれを終わらせてからね」

「ありがとう！」

救世主でも現れたかのように彼女は目を光らせる。ペンも止まってるし、よほど嬉しいのだろう。

ただ出来ることなら、そんなきらびやかにかにこちらを直視しないほしい。眩しくて丸焦げになってしまいそうだ。

「ここでこの定理を使ったら、こことここが平行だから」

「ほんとだ。あ、片方の角度わかってたらいけるんだ、なるほど……」

「もう授業も終わるし、話は後だね」

そう言い終わるや否や、チャイムと教科担の挨拶が学校の終わりを伝えてくる。クラスは背伸びをしたりそのまま寝てる人もいるが、みんな授業が終わることを喜んでいるのは変わらない。

そんな空気を察してくれたのか、担任もホームルームは手早く済ませてくれた。

「それで？　話って何なの？」

「えっとね、わたし次の《星武祭》に出るって言うってたでしよ？」

「《獅鷲星武祭》のこと？」

「うん。でね、今日メンバーの先輩と一緒に色んな人に声をかけてみたんだけど、あと一人がどうしても見つからなくて。利奈ちゃんなら《鳳凰星武祭》にも出てたし、誰か強そうな人知らないかなって思ったの」

ちよつと隙がないくらい一気に話されたが、まあ事情はよくわかった。授業終わりの後に話してもらって正解だったかもしれない。

「本当は利奈ちゃんを誘えたら一番いいかもだけど、《鳳凰星武祭》の少し前に復学したばかりでしょ？　だからお願い！　知ってたらでいいから！」

「わ、わかったから顔上げて。別に私は大丈夫だから……！」

そのまま土下座でもする勢いで頭を下げられて、思わず悲鳴を上げそうになってしまう。こんな風に頼み込まれたのは初めてだ。

いや、しかし考えてみれば、これはチャンスなのかもしれない。
《獅子星武祭》はここの一番でのどんでん返しがもつとも成立しやすい
《星武祭》だ。

もちろん波の努力では足りないだろうが、参加するチームによつては……。

「じゃあまずだけど、どんな人たちか見てみたいな。大会前だし出来るだけ早く」

「ありがとう！　なら今日中にでも案内するね。こっち、ついてきて！」

「あつ、ちよつと！」

彼女に手を引っ張られ、利奈は廊下を駆け抜けていく。その時の利奈にはもはや、あの頃の気弱さは無くなっていた。